

新しい風俗文献誌

1964・10



10月号

昭和三十九年九月二十日印刷 昭和三十九年十月一日発行 十月号(第十八巻第十号)毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日通鉄大局特別扱承認雑誌第二二二号



奇譚文二



10月号



縛られた美女ばかりの超豪華アルバム

美しき縛しめ

第三集

頒価 一〇〇〇円、(送共) 略号一美3

美人モデルの素晴らしい緊縛姿態が、春色に匂う花のように爛漫と咲き競って、皆様のお求めを心から、お待ちしております。両面特アート紙にギツシリと満載された緊縛美女オンパレードは、本誌ならではの素晴らしい企画です。写真はいずれも今迄一回も発表されたことのない、とっておきの秘藏品ばかりです。

一般書店売りは一切いたしません。直接お申込み下さい

緊縛女体百二十態
△本誌優秀モデル総登場▽

21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

樹間にさらされる
豆しばりの猿ぐつわ
縄目と裸身の羞らい
後手首に喰込む縄目
荷造り縛り人形
バンド着用しばり
替ゴム猿ぐつわ虐め
ゴム布に包まれて
椅子利用エビ縛り
厳しき胴絞り
輝く白肌をさらして
荒縄黒皮フンドシ
野性的な緊縛模様
全裸のいましめ
白晒六尺フンドシ
百C浣腸器責め
荒縄のトゲに喘ぐ
両手吊りさらし
M女性の本領発揮
足錠をつけられる
美貌を踏みつける

絹四梨桜大大遠愛絹大関絹東梨東遠大梨長絹絹
川方花井塚塚藤川川塚谷川浦花浦藤塚花野川川

424140393837363534333231302928272625242322

悦虐の關にさまよう
若肌の襲う白ロ一フ
蚊群の襲うにまかせ
きびしき縄目に喘ぐ
麗しき裸身の縄目
猿ぐつわ黒フン縛り
あえぐゴム布嵌口
美しい顔をなぶる
飛び出す双丘と後手
首繩縛り股間縛り
被虐に耐えた表情
生首フオト
祭壇のさげもの
パンプス開股し縛り
越中フンドシ緊縛
飛びだした双丘縛
塩水を無理に飲ます
胸部と脐窩の魅力
脐窩を狙う蛇の舌
顔枷の装着中
鼻孔ゼムピン責め

絹四梨遠大加大大大新水絹長梨大愛絹加絹若水
川方花藤塚茂塚塚塚宮本川野花塚川川茂川原本

828180797877767574737271706968676666564636261605958575655545352515049484746454443

鼻孔から藥液注入
豊體にまつわる黒繩
ピンクカバート豆絞
斬首処刑フオート
両手首吊りさらし
後手足首逆エビ縛り
丈なす黒髪
貴衣からのぞく乳房
美貌放心の表情
後手強烈しばかり
從順なるマゾの発散
手錠足錠首くさり
白晒六尺フンドシ
ガンジガラメの繩目
首繩胸絞め股間縛
引き回される裸身
豊胸を彩る茶の繩
捕われの女学生
被虐のマゾ女性
大きな猿ぐつわ
可愛ない足首
黒髪ないふり
喰い込む柔肌に繩
裸身に投げたタオル
緊縛の優美ポーズ
くわえた赤い花
エビしばり正面縛
美貌美身の緊縛
首を締めるくさり
手吊りのけざり
乳首に咬みつき蛇
後手縛りと臀部
ピンクの腰巻さらし
重圧に耐える表情
強烈なグーしり
ボリウムの誇り
鏡にうつす裸しり
惜しみなく晒し
ゴム帽子に苦しま
首絞めに苦しむ

大梨大 山桜 絹大 東絹大 桜絹大 梨絹 絹加 大絹竹 東竹大 絹桜 絹大 四竹 梨梨大 大梨大 新絹若大
塚花 塚路井 川塚浦 川塚井 川塚花 川川茂 塚塚川 野浦花 塚川井 川塚力 野花花 塚塚花 塚宮 川原塚

120119 118117 116115 114113 112111 110109 108107 106105 104103 102101 100 9998 979695949392919089888786858483

麗身をもだえさす
猿ぐつわの苦悶
黒繩にもだえて
全裸の手吊り責め
ゴムの猿ぐつわ
汚れた繩と輝く白肌
手首足首椅子しばり
あえぐ夫人の表情
首吊りのブレイ
後手縛り猿ぐつわ
電光に肌は映えて
囁まされる猿轡
柔肌高小手
後手背高しばり
高小手股間縛り
柱後手縛りにて
下げられたズロース
十文字しばり
木洩れ陽に白き肌
叫ぶ捕われの乙女
汗まみれの被虐
洋服タンスに吊る
全裸にてもだえる
黒繩地獄
るせつの裸身
セーラー服を縛る
首繩から膝繩まで
高々と上った後手
くびれた胸と腹部
カクテルドレスの女
淫陽責め
首のくさりに悶える
黒のズロース
破られたズボン
正面立姿全身縛り
くさりに捕捉される
獣甲型股間しばり
長襦袢と腰巻

[illegible]

四馬孝画廊

大中判(13種×18種) 印画紙極鮮明、全面焼付。お好みのものを先ず貴方のコレクションに追加して下さい。四馬孝画廊を煩して、特に分譲用として、口絵には見られない迫真性のあるものを、マニヤの方々のコレクション用として描いて頂きました。従来比較的成績のよかった「切腹」「浣腸」「女体責め」を主といたしました。

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しせ」

一、姫君切腹

美しき姫君、豊満な上半身をくつろげて、短刀をしたたかに下腹に刺す。鮮血あふれる膝の上。

二、介錯寸前

覚悟の切腹。白裳束の娘くつろげた前をきりと九寸五分にて斬る。ふり上げた大刀まさに首筋へ

三、娘子軍切腹

城を目前にして、力及ばざるを殿にお詫びして、いさぎよく腹を切る娘子軍の娘二人。

四、早まるな

屏風をめぐらした一室で白衣の胸もあらわに腹を切る若妻。帰宅した夫の止めるのもきかず。

五、恋人の介錯

さあ早くお討ち下さい。と下腹をかき切った娘は、首さしのべて恋人の刃を待つのであった。

浣腸責め図譜

△強制浣腸五態▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しき」

一、片足吊り浣腸

片足を高々と吊られて、逆さ吊りの女の臀部に対してイルリガートルの嘴管が非情に迫ってくる。

二、いちじくの恐怖

革紐で身動きもできない女を抱えあげて、露出した尻へイチジクの軽便浣腸が挿し込まれる。

三、高圧浣腸

後手に縛られてタイルの上にころがされた女体の口には、高圧ポンプのゴム管が挿入されている。

四、五十CC硝子ポンプ

カウンターに麻縄で縛られたホステスの盛り上った双丘に狙いをつけガラス浣腸器のあくどさ。

五、大量浣腸

医局のテーブルに手足を縛られた看護婦が医師の手でイルリガートルから浣腸を施されている。

浣腸責め図譜

△浣腸緊縛五態▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しえ」

一、踊子の浣腸

両手と片足を天井から吊られて奇妙な恰好のままイルリガートルから浣腸される踊子。

二、ヒマシ油

足をバタつかせても縛られた上にヒマシ油を無理に飲まされて、このあとに来るものが恐ろしい。

三、進める浣腸液

ガラスポンプからグリセリンの原液が腸内へ送り込まれると、激しい便意が身をさいなむ。

四、浣腸用責衣

お尻のところだけが、ぼっかりと口の開いた奇妙な責衣。液を流しつつゴムが尻に近づく。

五、両足吊り浣腸

このポーズだったら、イルリガートルの液は、もういくらでも体内に流れ込むだろう。

羞恥責め絵巻

△異色責めの五態▽

五枚一組 一〇〇〇円

略号「しい」

一、人工妊婦

女の腹はもう臨月に近いくらい膨れ上っているが、まだ水はどんどん送られてゆく。ああ。

二、浴槽の女神

後手を括った皮は、湯を吸って喰いちぎれるように痛い。男は荒縄タワシで柔肌をさいなむのだ。

三、三角木馬の責

荒縄で乳房の上下を縛られた女が三角木馬に跨がらされて、呻めきながらムチ打たれている。

四、全裸の柱抱き

真白な豊満な背中から臀部にかけて、むごたらしいミミズ脹れが女に対する激しい責を物語る。

五、女体洗滌

二つ折りの奇妙な形に縛られた女体に、汚れを洗う水が手荒く注ぎかけられる。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



10月号

¥300

定価三〇〇円

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。
モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということがいえます。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にち)

産み月のお腹は、只でさえ動くのにも苦しいのに、後手高小手に縛りあげられて、その裸身をカメラの前に晒した可憐な初産婦。

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付

四枚一組 五〇〇円
略号 (にし)

もっとも普通の状態の臨月腹を、ごらんになりたいという方々のために、べんべんと膨れ上がったお腹を衣服をめぐって突き出したところを、いろいろなポーズでもってお目にかけます。オーソドックスな妊婦の生態写真。

臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付

四枚一組 五〇〇円
略号 (にり)

臨月の大きなお腹を大いばりでぐいと突き出して、皆さまの目の前に、その全貌をあらわさまに、ごらんになれるフォト。

臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にす)

張り切ったお腹の中央に、むくれ上ったお臍が、出産を目前にした腹部の膨大さを物語っているのです。立ち上った妊婦のお腹だけが異様に目立ちます。いろいろの角度からごらん下さい。

柱縛りの妊婦

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号 (にや)

これは珍しい、床柱に後手の縄を縛りつけられたフォトです。妊婦嗜好ばかりでなく、女体緊縛マニヤの方々にも、一見をおすすめしたいコレクションです。

臨月のヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にわ)

妊娠は女性を最も動物的な姿態に変えさせるといいます。着衣の上から見てさえ、異常に大きな腹部には、何か奇異な連想を起させるのですが、ここに全裸ヌードのフォトによって、妊婦の神秘のベールを剥いてみせます。

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号 (にた)

神々しいばかりに美しい臨月妊婦の裸身。初めて妊娠した二十二才の女性の身体的変化は、ヌードの立像によって、ごらんになる皆様の目の前に、かくすところなく提供されるのです。はちきれんばかりの若さが、健康的な妊婦の特徴を内包して、輝くような美しさを發揮しています。

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号 (にる)

臨月腹をつき出して、後手に縛られた妊婦。両手の自由がきかないので、膨れた腹部がこれみよがしにさらけ出され、一片の布さえ纏わしてもらえぬ裸身が、美しい妊婦のベールを、しみじみと醸しだしている。

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にお)

このように若々しい臨月腹を手にとるように、近々と眺めることが出来るだろうか。妊婦線もあざやかな西瓜のような腹部が、触つて下さいといわんばかりに、鮮鋭なレンズの目によって、はっきりとキャッチされています。

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にぬ)

自由にのびのびと、自然のままのポーズで腰をおろした妊婦のヌードが、気どらない普通の状態でカメラに全身を晒しています。愛らしい妊婦の表情です。

突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号 (にい)

出産を旬日に控えて、もうこれ以上は大きくならないという位、突き出た腹部をもて余して、中腰になつて、休息したところをシャッター・チャンスと狙ってキャッチしました。

○提供者の御希望により、口絵には発表しませんから、直接お申込みの方にはのみお分けします。
○お申込みは略号にて、お願ひいたします。勝手ながら一枚宛の分割はいたしかねます。



奇譚クラブ 10月号 目次

縄による女体美のアルバム 塚本鉄三・構成

貴写真に囲まれて フォトによるポーズの研究 大塚啓子

ムードを愉しむ美女の表情 梨花悠紀

首絞めのプレイ 梨花悠紀

柱に晒された麗軀 絹川文子

赤いビニール・カバーを穿く女 大塚啓子

悶えのポーズ八態 大塚啓子

優美な緊縛姿 絹川文子

椅子を背負って 大塚啓子

髪吊りエビしばり 大塚啓子

破られたストラップス 木村洋子

猫のような目をした女 絹川文子

強靱さを誇る女体 梨花悠紀

アイデア画 お灸責め 四馬孝・画

四馬孝画集 黒光りする革衣 自動給水装置 四馬孝・画

娘相撲熱戦譜 「双差し」 「切返し」 雪崎京人・提供

習作M画 「犬男とグラマー」 春川ナミオ画

女体切腹 舟の上の切腹 四馬孝・画

屠所に曳かれる婦人 大塚啓子

庭園の変った風景 絹川文子

「そっちへ行くのは、いや」 梨花悠紀

顔龐と痴呆の表情 加茂良子

碁盤の上の縛り人形 大塚啓子

血紅使用の女体切腹 哀婉美 梨花悠紀

第二グラビヤ		巻頭口絵		第一グラビヤ	
処刑火炙りの構想	大塚啓子	娘相撲熱戦譜	雪崎京人・提供	縄による女体美のアルバム	塚本鉄三・構成
コールド縛りと諦観の態	大塚啓子	「双差し」		貴写真に囲まれて	大塚啓子
		「切返し」		フォトによるポーズの研究	大塚啓子
誇らかな肢体美の点綴	大塚啓子	習作M画「犬男とグラマー」	春川ナミオ画	ムードを愉しむ美女の表情	梨花悠紀
美貌を汚すもの	大塚啓子	女体切腹	四馬孝・画	首絞めのプレイ	梨花悠紀
美紅使用の女体切腹	大塚啓子	舟の上の切腹	四馬孝・画	柱に晒された麗軀	絹川文子
哀婉美	梨花悠紀			赤いビニール・カバーを穿く女	大塚啓子
				悶えのポーズ八態	大塚啓子
				優美な緊縛姿	絹川文子
				椅子を背負って	大塚啓子
				髪吊りエビしばり	大塚啓子
				破られたストラップス	木村洋子
				猫のような目をした女	絹川文子
				強靱さを誇る女体	梨花悠紀
				アイデア画 お灸責め	四馬孝・画
				四馬孝画集 黒光りする革衣	四馬孝・画
				自動給水装置	四馬孝・画



◆奇クサロン◆

編集部編 (49)

○高校生の惨劇犯罪……編集子(49) ○「女の生首」通信……水野弘(50) 写真
真に於ける平凡なアイデアと特異なアイデア……松山省吾(51) ○「日曜」作室
中田明(52) ○女体切腹「落城の女」……飯森潔(53) ○「フエチ」・「フアン」の願
い……P・Q生(54) ○「口絵解説」娘相撲熱戦譜……雪崎京人(54) ○「変天」古
林「最近の桃色映画」……(55) ○「映画通信」未公開作品「人間の絆」……
の女……山姐正一(56) ○「読者代表」……(57) ○「女の生首」……
高橋信(57) ○新宮明夫(59) ○「浅香マミ」という女ハジュース一杯(58) ○「
ブレイ」……(60) ○「マニヤ通信」……高野原美(62) ○「編集室だより」……
登光(62) ○「人体解剖異聞」……(61) ○「夫婦のS M プレイ」……(63) ○「
通信」絹川さんと大塚さんへ……植田実(64)

罪 愛読者のみなさまへおねがい

(随筆) 鬼六談義 花と蛇

団 鬼六 (65)

▲告白▲ 浣腸失敗の記

栗瀬 長 (72)

女体緊縛写真考察

中谷 正夫 (76)

贋作・悩ましのサディズム

芳野 冒美 (80)

▲森山美歌夫人に関する小品▲

女相撲小説 娘相撲勝抜戦

田中 一生 (88)

心の十字架—マソヒズムと貞淑と

近藤 一 (92)

湖畔月影抄 (後編)

瀬川 泰子 (96)

—アブ小説— 甘い屈従 (第二部)

伊帆 保胆 (110)

長篇S M小説 宇宙のどこかで

佐治 麻造 (124)

きもの閑話 和装の女のお腹

牧 高志 (144)

妖異女斗美八景

佐藤 健児 (146)

「奴隷を求む」

三原 寛 (152)

M男の独白

文津部 三郎 (154)

女装の夫と男装の妻

西村 憲一 (158)

クロチルド最後の挨拶

佐出 須登 (172)

浣腸フエチ・マニヤの告白 僕の白日夢

葉柿 真一 (176)

切腹研究夜話 創作「殉国」前後

中康 弘通 (180)

讃「鼻」「花」

湯谷 照夫 (186)

正常と異常の接点

佐仲 晴成 (190)

読者通信

(202)

最新Mフोटシリーズ決定版分譲

読者通信をはじめとして、投稿原稿や編集部に対する通信などによつて、Mフोट分譲について熱心な要望がありました。もとよりSフोटとは違い、注文の多きは期待してはおりませんが、少数とはいへ、Mフोटを要望されるフアンのために、ここに最新撮影の分譲品を発表いたします。

太男の訓練風景

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みら)

M嗜好の畜化のなかでも、馬化と犬化は、その代表的なもので、男が首輪をつけれ、くさりをつなぐと、女御主人様への奉仕をなす。この連続フोटでは、一人の犬とどおり、女御主人様への奉仕をなす。果ては、Mフアンの中にも美しい顔がはつきりと写っています。

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みむ)

晒のフンドシ一丁という薄々しい白の短刀を片手に、今や一人の男を刺し殺そうとしている。哀れな男は、麻縄で後手高小手に厳重に括られて、自由

な足をばたばたさせるだけで何の抵抗を示すこともできない。捕えた鼠を弄ぶ猫のように惨忍な女は男をいたぶり尽した上で、短刀でなぶり殺しにするのだ。非情な女が美しいが、身動きならぬ哀れな男が幸せなのか……。

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みう)

女の逞ましくも情満な臀部に敷かれて蹂躪されるという事は、果ては夢の夢であらう。それがこの連続フोटの中では、貴方がさまたまな姿で、女の大きな尻によつて、パンティも脱いだじかのお尻で踏みこまれる。この連続フोटのMフアンである。十枚の中の一つ一枚を抜きだしてみても、フアンは胸の鼓動を高めずにはおかないでしょう。

足下にうごめく顔

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みれ)

男の一枚看板である顔、その大切な顔が若い女の足で踏みこまれ、べったりと脂足の裏が顔面をばい押しつけられる。塩から

い足の裏の汁が舌にふれる。両足が顔の上にのっかり、お尻をまるだしにした女が顔の上にかかち。鼻も口も押しつぶされて、息もできな。窒息寸前の充足感が男の全身を電流のように走る。

汚物を受ける男

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みわ)

若くて美しい女性の唾液、嘔吐、うがい水などの汚物なら、この上ない珍味として頂戴する。この汚物愛好の青年が、口を大きく開き、ばいに開いて、御主人さまの服用を確んでお受けする人間排水。

男を馬にする女性

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みか)

男を馬にして乗りまわす快味は、女上位時代の貴婦人の常識である。が、反面馬化狂の男の夢でもあるわけだ。首の上に乗せた女の言われるままに手綱一本で自由に操られる男と得意気に男を尻の下に顔で使う女とのコントラスト。

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みお)

うやうやしく女御主人の人間椅子として長時間御奉仕したことへの御褒美として、今度は女御主人の

美しい素足をベロベロと心ゆくまで十分舐めさせて頂けた。

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(みた)

飼犬に餌を与えるのは、素足の指の間で食物を挟んでやるのが、丁度好い。早く方である。しかし、飼犬を飼主の早く方なつかせるのは、一度口の中へ唾液を混ぜて噛みくだいてやった方がよい。

浣腸器で弄ぶ女

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みつ)

馬乗りになつて押さえた男の顔を、浣腸器で吸い上げた汚水を注ぐ女。その汚水は何?

股に絞められる首

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みね)

御向けになつて椅子の上に長々と仰つた男の首根っこに、どどと跨つて堂々と股で締め、男の目を白黒させた顔を見下す。

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(みな)

馬乗りに跨つて、尻を鼻の上に据えれば、芳香はいやでも男の全身にしみわたる。ここで放屁一発すれば男は頓死してしまう。

































お灸責め

四馬孝・画



黒光りする革衣

四馬孝・画





自動給水装置

娘相撲熱戦譜

双差し

雪崎京人提供





娘相撲熱戦譜

切返し

雪崎京人提供



大男とグラマー

春川ナミオ・画



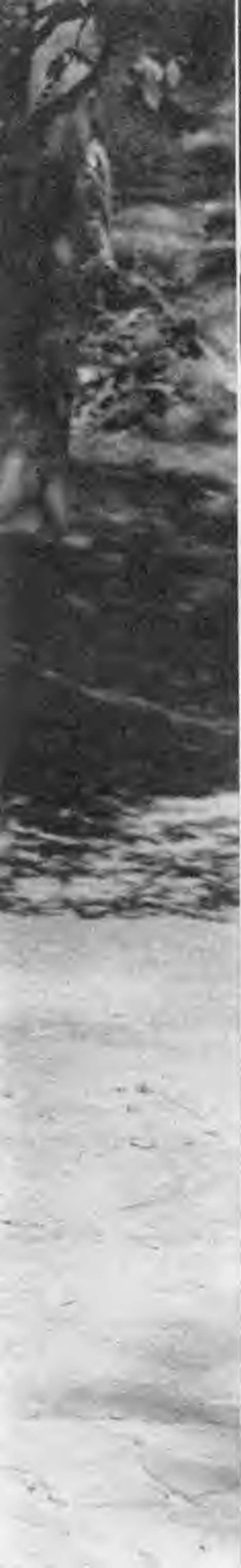
ペーパー・ナイフ

舟の上の切腹

四馬孝・画



































「女の生首」通信

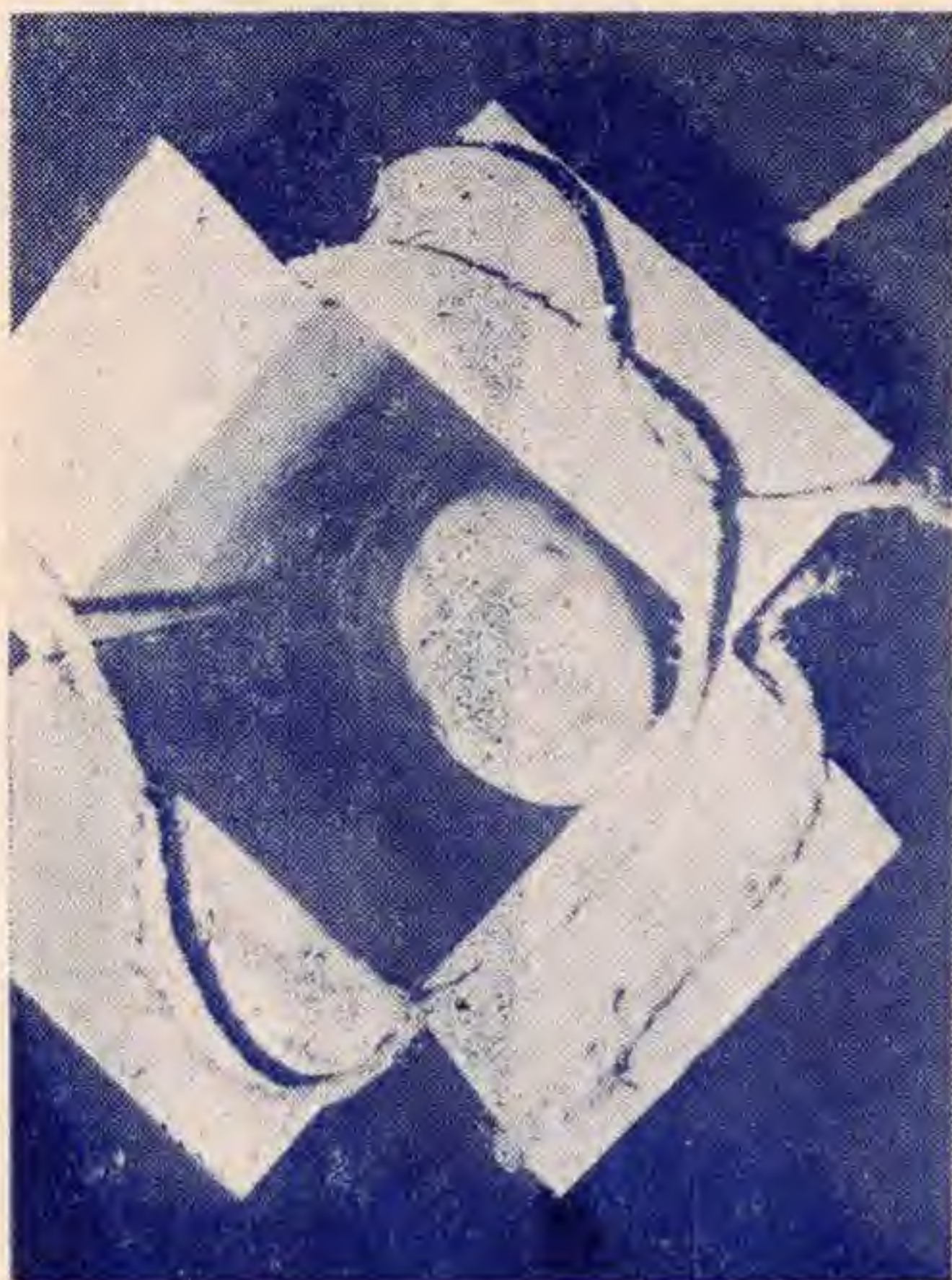
水野 弘

奇譚クラブ八月号をお送り戴き誠に有難う御座居ました。何時も乍ら拙い私の作品掲載され喜んで居ります。

八月号はグラビヤ写真も仲々迫力のある作品ぞろいであり又、奇クサロンもバラエティーに富み、新宮明夫氏の「串刺しの首」前川氏

の作品等、そして黒田寿氏の「小説に現われた処刑場面」。辻村隆氏の「三十九夜物語」中の男女の姦通晒し場面、記事も面白く読みましたが、プレー写真も充分マニアを楽しませるものでした。

七月号のサロン掲載の私の作品（ぶらさげた生首）のモデルの表



情が良いとか、素人では無いとかお賞めの言葉を戴きました。モデルは私の妻であり決して演技に経験のあるものでもありません。平凡な家庭の主婦ですが、最近貴誌が一般書店より影をひそめた事により、妻が非常に積極的に撮影にあたり、協力的になってきました。投稿フォトもあまり気にしなくなり、二人で奇クの写真を批評しあえるようになってきて、私にとっては、一般書店に出され無くなった事が幸となりました。天星社には申し訳ありませんが……。

今回も生首フォト一枚同封しました。宜敷かったらサロンに掲載して下さい。投稿フォトが生首フォトばかりですが、生首ものばかり撮影している訳では無く、首無し胴体縛り、責め、浣腸、処刑等コレクションして居りますが、生首フォトを、もう少し続けて投稿させて戴きます。

新宮氏、黒田氏、辻村さん諸氏と近くに住んで居れば、相語り又協同プレー等出来ますのにと思っ居りますが、遠く離れて居るため、それも不可能、せめて奇クを通じての御交際に満足するより仕方ありません。先般分譲写真にとの話がありました。短期間なら

私の作品で宜敷かったらネガをお貸しします。あまり長期間なら、どうかとも思っております。只今新宮氏の御好意により文通、作品の交換を続け、そして手紙の上ではあっても、百年の旧友の如く親しみを以って御交際させて戴いて居り喜んで居ります。

これも貴誌編集長の御骨折りの賜と改めて御礼申し上げます。仕事の寸暇をさいての走り書きにて、これにて失礼申し上げます。貴誌の御発展と編集長の御自愛の程御祈り致します。

六月二十三日

水野 弘

箕田編集長殿

尚、投稿フォトのテーマ、次の様に願います。

夫婦SMプレー

「ダンボール箱の生首」

罪を犯し斬首刑となりギロチン台の露と消えた妻の生首が、ダンボール箱に入れられて夫の許へ送られて来た。首を切断された胴体は、野外に全裸にされ逆さ吊りになり、白い肉体を晒し、遂に夫の許へは帰らなかった。



大学教授を父に持ち、女検事を母に持つ高校生が、こともあろうに自分の実弟を惨殺するという、まことにむごたらしい事件が起きて我々を驚かせた。

『井戸のパイプにひっかかっていた手斧には、被害者の血液のほか肉片までついていて』とか、『十数度にわたって手斧で頸部をめった打ちにした』という新聞記事を読んだときは、思わずぞっとして肌粟を生じたものだ。

二月程前には、大阪の某有名高校の生徒が二度に亘って自動車強盗をはたらき、遂に二回目には、運転手を惨殺し、その屍体をトラックに押し込んで運搬し団地前に車ごと遺棄するという事件が起きた。新聞紙上には、地図入りでタクシーに乗車した場所から殺害場所、屍体遺棄場所などが、詳細に

書きたてられてあったが、深夜の山道で恨みも罪もない運転手を惨殺するという殺人行為もさることながら、血だらけの屍体を運転席から運び出し、トラックに押し込めた上、屍体入りの車を運転して暗夜の峠道を越えて再び市中へ戻ってくるということは、普通の神経の持主では、到底考えられないことだ。

注目すべきことは、以上の二つの惨虐きわまりない犯罪を演じた者が、いずれも未成年者であり、しかも激烈な入試競争をパスしなければ入学できない名門高校の生徒だったということである。

高校生の惨虐犯罪

編集子

彼等が犯罪を犯した原因を、或は学校教育殊に入試偏重教育の弊害にきいたり、或は家庭の放任主義の罪にしたり、社会制度やその風潮に転嫁したり、或はマスコミの影響をその主因としたりしているが、果してどうだろうか。

弟殺しの高校生は、下山事件のような完全犯罪の迷宮入りを狙ったといっているが、手口は不完全きわまりない幼稚なものである。

毎日の新聞紙上では、未成年者や高校生の犯罪は、もう目新しくも珍しくもなくなっているばかりでなく、その手段が凶悪犯顔負けの惨虐性を帯びてきていることに、殊に関心を持たせられる。それは嘗て、二・二六事件で無抵抗の重臣（老人）に対してピストルを乱射して惨殺した一部青年将校の惨虐行為に一脈相通するものを感じるのである。

東京都青少年健全育成条例が来る十月一日から施行されることになった由だが、その中で図書並に映画に関して、『青少年の残虐性

を助長する』ものについては指定されることになるらしい。

この助長するか、しないかという判定は、全く微妙なところであるが、もともと成人向として製作されたものであっても（指定されれば、当然十八才未満の青少年に売ったり観覧させたりできない）指定されないような内容にするための努力を怠ったてはならない。

惨虐な犯罪と直接何らの結びつきがなかったとしても、一旦条例が制定された以上は、これが憲法違反などにより破棄されない限り条例制定の主旨にそって、指定されないよう努力しなければならぬ。我々は関係十社によって『雑誌倫理研究会』なるものを結成し編集面での自粛徹底をはかっていたが、これからは、更に一層の低姿勢の態度を堅持しなければならぬ。

こういうことを書くと、又々読者諸氏からお叱りを蒙りそうだが「裏窓」「風奇」「本誌」の三誌共同の声明文で読者の皆さまにお願いした通り、自粛の線が今後益々徹底されるということをお承知頂いて、建設的なご意見をお寄せ下さるようお願いする。

写真に於ける

平凡なアイデア

.....と.....

特異なアイデア

松 山 省 吾

一、後手

後手縛りを背後から写したものを好むのは、多くの方々の趣向の通り、それも両手首が肩先に接するくらい、思いきり高々と吊り上げ縛り上げたものであることは、小生も同様である。

手首（小手）ばかりでなく二の腕（高手）を縛ったものは所謂高小手と呼ばれるものであるが、この際、小手が水平よりも上になるよう高々と吊り上げるためにはどうしても首縄も必要である。

縄（又は黒ひも）のかけ方は、手首を背後で十文字に交叉さして縛り、更に手首の下を押さえるようにして腕にかけて回し二の腕をきっちり縛り、かえした縄で手首を首縄にして吊り上げる。

二、太腿

モデルの条件としては、なるべく柔かくてふとった腿の持主であること。縛る位置は腿の付根から五センチ乃至十五センチ位の間をきびしく縛る。写すときは必ず内腿の柔かい肌に縄目がグツと喰い込んでいるのが、はっきりわかるように、その部分を接写する。

足は必ず曲げさせた方がよい。なお曲げた足は、外の方へ開くようにして曲げると内腿の肉がふくらんで縄目が一そきびしく肌に喰い込む。

三、顔いじめ

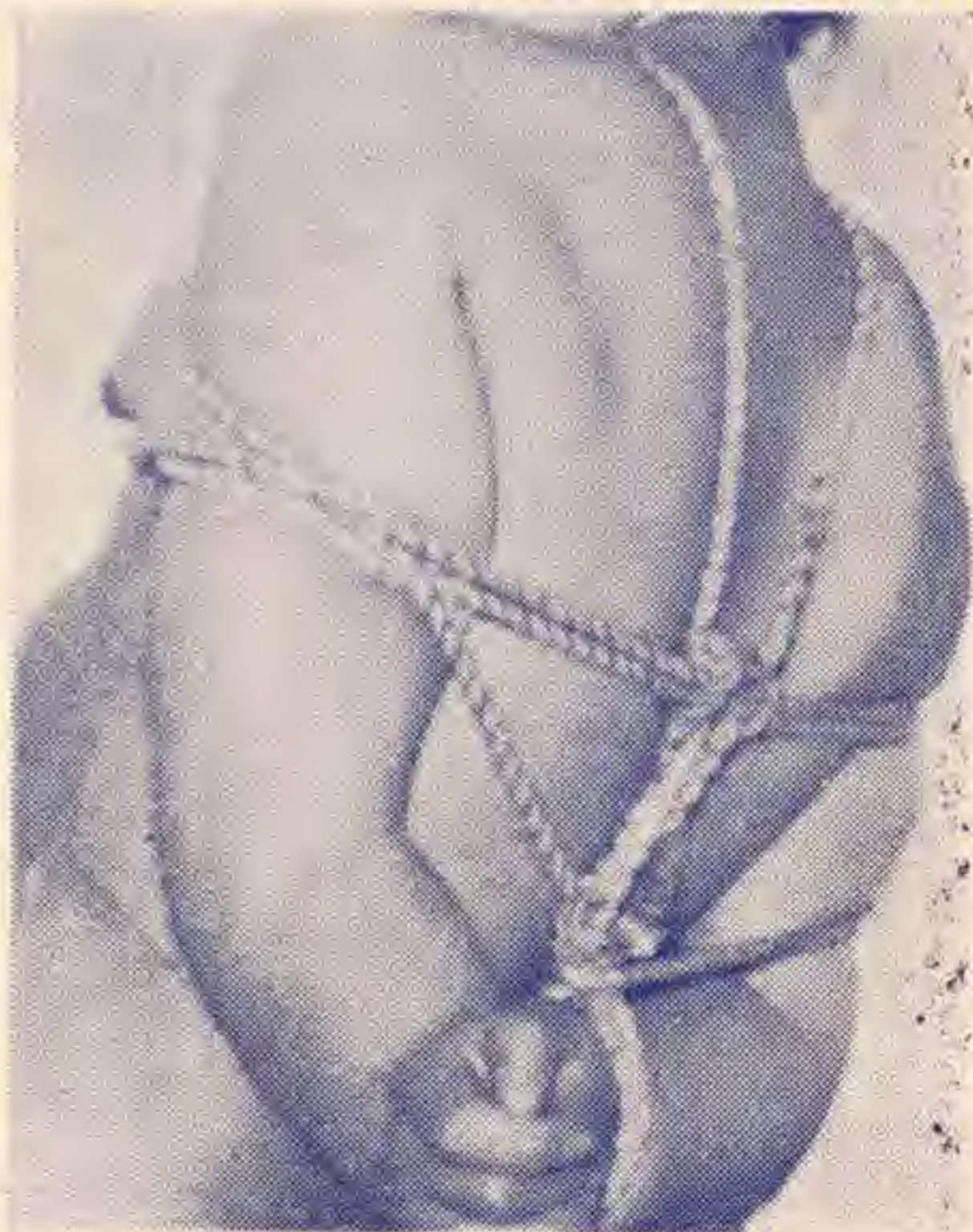
これはモデルの条件として顔が丸くて豊かであること。特に顔の下側の肌がふくらと柔かで肉づきのよいこと。以上が絶対かかせない条件である。

この条件にかなったモデルの顔

の下側の肌を指先、（又は細い棒等）

でグツと突いたり、つまんだり、ひっぱったり、しゃくり上げたりして、その肌の変化（凹凸）を色々と接写したもの。又、顔を横に傾けさせて、ふくらとした顔の下側の肌がわかるように下又は斜め下から接写したもの。

次に顔を思いきり後へそらせて顔下部を完全に露出させて真正面から接写する。この場合、顔は全然見えないこと。つまり丸い顔の先が上部に見えるように写す。又



ライトの当て方に気をつけて下顎の骨の形ができるだけ見えないよう工夫する必要がある。

四、受口

これはちょっと変ったアイデアであるが、実は小生、受口（唇だけでなく歯がこのようになっている本当の受口）の口元に非常に魅力を感じるのだが、特にこのような受口をした女の子が泣いたとき、その口形の変化に、たまらない魅力を感じる。

日曜工作室

中田 明

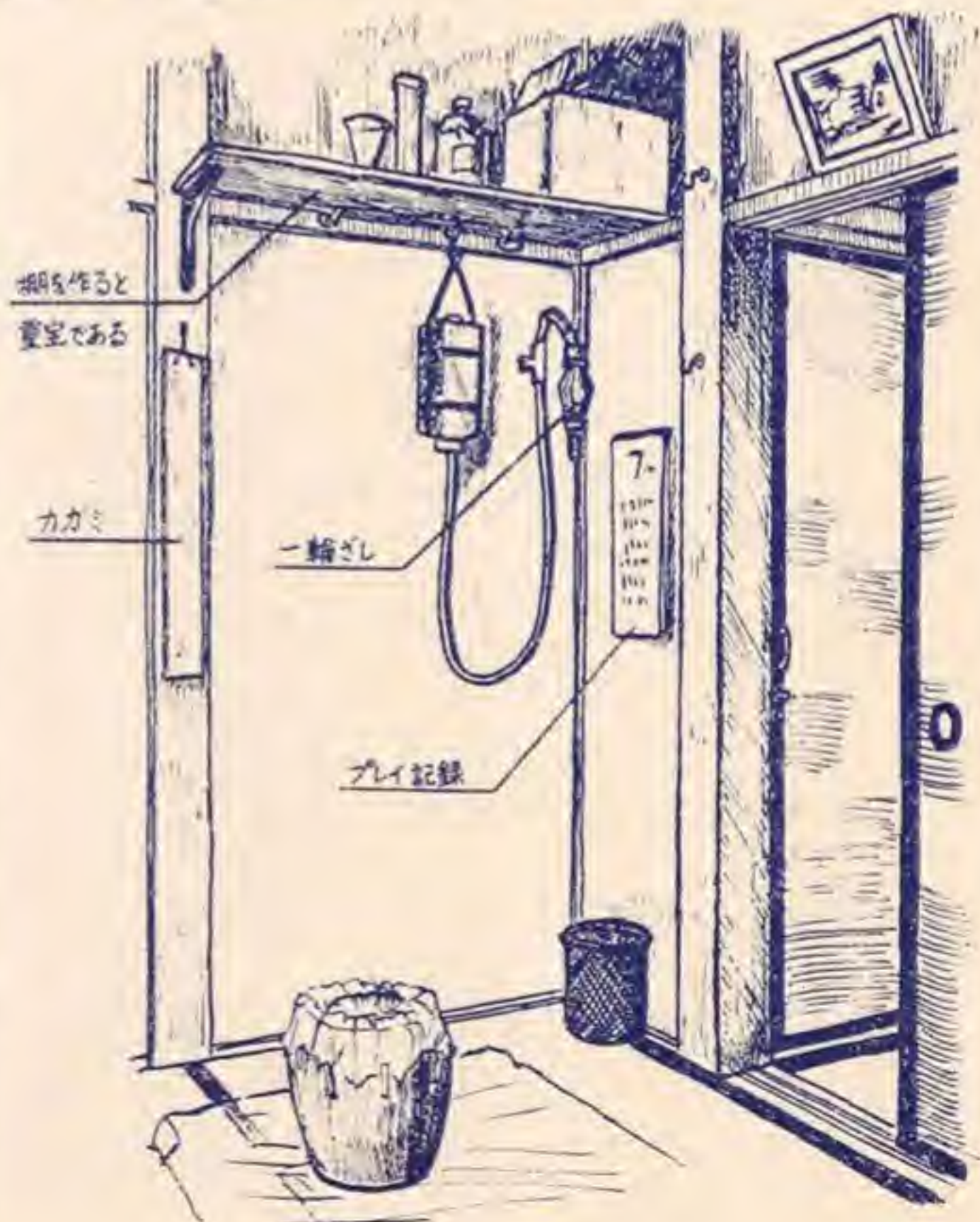
奇クのサロンに、こんな記事があってもいいだろうと考えて綴り出したのが、SMプレイをエンジョイする為に不可欠な小道具作りの手引きです。なるべく実用的に製作が容易な手頃のものを材料にして、しかも、秘密裡に製作や収納可能なものである事を特長とします。

今回は五月号「サロン」最終頁（四十八頁）に「完結の告白」を寄せられておられた完結児氏や、先月号「クリスター・マニア」その後の体験」を発表なさった北沢操さんはじめ多くの蛙腹マニア向きの「器具」を作ってみましょう。子供の玩具のような「イチジク」君さえ赤面して何とも面はゆい思いで買う人も、太いガラス製品まではどうにか入手したがイルリガートルまでは……と垂涎の面持ちのハイクラス・マニアも、必要は

発明の母の例えを思い起して、このアイデアには脱帽するだろうと北沢笑んでいます。

用意するもの①水道ノズル定価三十五円一個②ゴム管（又はビニールホース）細目のもの約二米定価一五〇円位③写真現像液貯蔵瓶（ビニール製）四〇〇円前後④事務用クリップ、その他に吊金具、若しくは針金。尚③の薬液瓶に相当するものとして、他に冷蔵庫用の冷水器、洗剤液容器、サラダオイル等食用油の容器（ビニール、若しくはポリエチレン製）が適当である。

市販の水道ノズルには各種各様あって、それぞれ使用用途の工夫が可能であるが、標準的には私の選んだK印の硬質プラスチック製がよいと思う。蛇腹式自在蛇口も、金属的な感触を好む人や、アクロバットな施術プレイを楽しむ目的



の為には面白いかも知れないが、パートナ―次第では口径の太さで恐怖心を抱きかねないし、粘膜の損傷にも留意せねばなるまい。

製作は、まず薬液入れから始める事にしよう。焼火箸で貯蔵瓶の底に約十耗の穴を出来るだけ円くあける。こうしないと物理的原理に基いて、薬液は注入されない。この穴には、葉（錠剤）の開墾の蓋などに用いられる木蓋（コルク

付）をはめ込む。従って穴の直径は、あらかじめ用意したコルクの大きさを基準にすれば間違いはない。

最近会社の事務機としてよく使われたコピー機の現像、定着液容器のようなものがあり、この手が入手出来るならそれに越した事はないが、入手困難な時は貯蔵瓶の蓋を加工しなければならぬ。使うビニール管乃至ゴム管の

女体切腹

「落城の女」

飯森 潔

城外に転戦の後、
戦利あらずして引き
上げる途中、すでに
城が火に包まれてい
るのを見て、今はこ
れまでと、かねての
覚悟通り声を合せて
雄々しくも、自らの
腹を切る武家の姉妹
二人の健気な姿。



太さにあわせて穴を蓋の天井にあ
け、挿入したビニール管の先端を
切り開くか熱加工して化学接着剤
で接合する。管の一方の端に嘴管
となるノズルをはめれば、本体は
出来上りである。薬液瓶吊下げの
方法としては、最も簡単なのは紙

紐でくくってしまふ方法だが、専
門的なムードを欲するなら、水筒
提げのようなものを皮紐、或いは
ビニールテープで好みのように作
ればよいのである。勿論、黄銅板
で入念にハンダづけしながら作れ
ば、それこそ味い深くなるであろ

う。柱の上方、又は鴨居に吊金具
(一個五円から三十円位)をねじ
込ましておくか、タオル掛けの金
具を鴨居にとめて、多少器具の移
動性を考慮してもよし、とにかく
高圧洗腸の名に恥じぬ薬液瓶の吊
り場所を工夫すると面白い。

以上のように器具製作が一段落
ついた処で器具を完全に消毒す
る。と云っても食器野菜洗いの洗
剤溶液につけてよく洗い、あとは
流水で洗剤のよごれをとればよい
と思うし、湯を使うと器具の材質
がものごものだけに変形するので
日光によく晒らすなどすればよい
だろう。

用意したグリセリン原液、石鹼
水は指定の分量及び好みに合せて
幸いな事に貯蔵瓶についている目
盛を利用して注入、蓋を閉めて吊
具に懸ければよいのである。と云
っても、嘴管の元にはクリップを
挟んでおかなければならぬし、そ
の上で用意が整ったら、瓶の底一
今は逆さに上になった一からコル
クの栓をとれば、プレイに進む段
階である。

ついでに排泄器の工夫もお知ら
せしよう。一般的なものとして、
瀬戸の手あぶりなどがいい。冬の
到来まで不用となる小さな火鉢。

これを夏場も利用すればいいの
だ。中から灰をすっかり出して、
雑物店、デパートの家庭用品売場
から衣服保存ビニール袋(十枚百
円から百三十円位)を購入して来
る。その袋を中に空気を入れない
で火鉢の中に入れ、袋の縁を火鉢
の縁にめくってたらし、ゴム紐か
セロテープでずれ落ちを防ぐよう
にする。刺激的快感を、或いは屈
辱的呻吟のあとは洋式便器恰好の
手あぶりにセットダウンして体内
から飲びを、又は苦しみを排泄す
るがよい。そしてプレイのあとの
ビニール袋は、ゴム紐かセロテー
プのおさえをはずし、縁を束ねて
絞った上にゴム環で固くくくると
そう、丁度ビニール袋入りのイカ
の塩からのような……その大型の
一種異様な観賞物が出来上り、時
間をかけてプレイするゆとりのあ
る人なら、「第一回目」「第二回
目」と荷札に書いて観賞物を並べ
てみるのも興味つきない後戯的愉
悦感を覚える事受け合ひである。
如何でしたか、初めての「日曜
工作室」——さて、次回は名付
けて「Mベルトの作り方、利用の
仕方」を解説しましょう。

(おわり)



＜編集部への注文＞

フェチファンの願い

P・Q 生

○ このごろ浣腸やオシメの写真や絵が沢山作られていて、こととは、とても喜ばしいのですが、そのあつかわれ方が、少しマンネリズムにおちいつているようです。ただ浣腸器やイルリガートルやオシメカバーが描かれたり写されていけばいいというわけではなく、そこにモデルの表情を中心とした緊迫感と感情が表現されていなくては、満足度が少ないと思われまふ。

無理にイルリガートルで石けん水一〇〇〇CCを注入されて苦しんでいる動き、男たちの中で浣腸液グリセリン一五〇CCを注入されてペソをかきながら、もだえてくる表情。大衆の中でしかぶったときの全身で表わす羞恥心。ズロースやオシメカバーの中で、遂に極限に達して便が溢れ出た瞬間の身ぶり。あるいはふとんの上で、尿と便の大洪水でとりみだしているときのお尻の表情など、デリケートな点をもう少し強調して、心理的なマゾヒズムを出していただき

たいと希望します。

○ パンティやオシメカバーの恰好がいつも同じ型のもでは飽きます。黒のふかふかのズロースやブルマー、レースのついたパンティや花模様。オシメカバーもゴムやビニールやいろいろな質の感じを出してほしい。形もホックの工合も工夫してほしい。

○ 最近スカートとブルマーと一緒に着がでています。あれなど、もっと活用して下さい。フェチの私たちはズロースのゴムの一寸した褶の工合で喜んだり、がっかりしたりしているのですから。

○ 最近はときどきみかけられるようになって、この上なく楽しんでいるのですが、女の尻をつつんだコモ（ムシロ？）が濡れているところが描いてあります。どの範囲までが検閲でうるさいのか知りませんが、さきにのべたように表情だけで緊迫感が出にくいのなら、せめて浣腸液や排尿でズロースやブルマーがびしょびしょに濡れているところ、さらに床やフトンの上になで洪水がひろがっているとこ

〔口絵解説〕

娘相撲熱戦譜

雪崎京人

（作品1） 双差し

双差しで激しく寄って出たが先程からの大相撲で、両力士とも渾がすっかりゆるんでしまい二人共解け落ちて、勝負のついた時は、素っ裸になっていた。

職業力士（国技館）は現在殆ど渾の解けた話は聞かぬが、大正年間の記録を見ると、寒玉子という奇妙な四股名の力士が土俵上で解けて醜体を演じたことが出ている。学生相撲などで渾の締め方が完全に行かないと、仕合中、練習中など、解けたのを筆者も目撃したことがある。女子相撲の場合、この如き場合はあり得ることに思い、アイディアとして画いて貰った。

（作品2） 切返し

激斗中で渾がゆるみ、解け落ちた時は、きまり手を以て勝敗を決める。これは社会人女子相撲で三位決定戦の折、土俵際でもつれて切返した選手の渾が解け落ちたが、これを勝ちとしたものに依る。男子の場合は渾が解けた方が負けとなる。



最近の 桃色映画

○大映京都作品「無宿者」で初めて時代劇出演をした滝瑛子は、激しい折檻に絶命するという役を演じている。彼女の役は、安部徹が扮する船問屋の情婦役で、風来坊の市川雷蔵に惚れ、船問屋と縁を

下さい。

フェチファンのために、いろいろな形の下着類が物干に干してあるところを出して下さい。

これも検閲のために出されていないのだからと考えると淋しいのですが（以前には一、二度のこともありましたが）男性が女性の下着をつけたところ（黒の運動用ブルマー、白いズロース、メンス

バンドその他）。またゴムのオシメカパーをはかされたり洩したりしている絵など、是非お願いします。男がズロースを穿いているところは風俗ピンランとかにひっかかるものでしょうか。それにしても、男が浣腸されたり、オシメを当てられるのは、いいと思うのですが……。

どうか、若い男性に、ゾクゾクするような女らしい下着をつけさ

せて下さい。それも多勢の女性がみているところで、軽蔑の目の中で。

以上、このごろ気づいたことを勝手にのべさせてもらいましたがこの願いの一つでもいいですからとり入れて下さることを、編集室の皆さまにお願いします。雑誌で工合がわるければ、代理部の写真でも絵でも結構です。

切りたいと雷蔵の胸の中で泣き伏していたとき、用心棒の一味に踏み込まれ、雷蔵は逃げたものの、彼女は捕って用心棒の激しい折檻に息絶えてしまったといったもの。

「私はマゾヒストじゃないのよ」と断りながら、きびしい折檻に歯を喰いしばって耐えているというのも、変天古林な話だ。

○ノコギリで死体をゴリゴリという残酷シーンを売り物にした宝塚映画の「悪の紋章」。甘美なムードを生命とするSM派には凡そ縁遠い変天古林な映画。こうした、ピントはずれの残酷映画を次々と作っていると、映倫の存在が云々される前に観客から、そっぽをむかれるだろう。しかし、この気味の悪さを敢てシーンに組み入れた

堀川監督の神経に、先ず敬意を表しておこう。

○大映「忍びの者・霧隠才蔵（監督田中徳三）」で磯村みどりが初めて緊縛シーンを見せた。荒縄で縛りあげられて天井から吊られ、徳川の犬どもに才蔵についての情報を吐けと拷問される。嘗てのNHKの秘蔵っ子スター磯村みどりの変天古林の一幕。

○変天古林な映画の雄たるものは大映の「犯罪教室」。いかに桃色映画が受けるからといって、こんなドギツイものをよく撮ったものだ。スチールが陳列禁止になるのも当然のことだ。三条江梨子にさるぐわをかませ、四人がかりで暴行する高校生というのだから、いやはや。

「短信往来」

○女王様に奉仕したいというM男性が非常に多いのに、かんじんのS女性が少ないという需要供給の関係から、最近そういった男性から金銭を詐取するという巧妙な女性が現れてきた。

○大阪の「浅香マミ」という名前を挙げると、私も私も名乗りをあげるM男性。余りガツガツなさらずに、この際落着いて物事を考えないと、細胞ばかりが頭の方へカッカカッときて、いずれ失望することになります。ゾ。もっとも、美しい女性に金を取られることにマゾを感じる御仁なら、大いに活用されてもよろしいですが……。

○このようにトラブルが多いようだったら、読者通信の住所氏名の発表や手紙の転送は、いやでも中止しなくちゃなるまい。

○無料サービスで叱られちゃ、オハに合いませんからね。やはり誌上で公明正大に楽しんだ方が身のためというものです。これからは大いに読者通信誌上で活躍ねがいます。マミ女史のように何万円も金を寄せせとは申しませんから……。

〈私のゆめ〉

煙草責めと女

田畑正一

毎月出る「奇ク」は非常に楽しい。私の好きな「煙草責め」が出ていないか、わくわくさせる。

買う時に目次も中味も見ない。帰るまでの楽しさ、長さは何んとも言えぬものだ。帰宅して一人でそっと見る。「煙草責め」について何もないとがっかりする。しかし、また来月だ。来月を待とう。待つという「ゆめ」が、一月の私を支配する。

この様な「ゆめ」を各々好みによって持ち且つ待っている人も、非常に多い事と思う。私の「煙草責め」も自分の作品が「奇ク」に現れるのも感激だが、それよりも「奇ク」の美女の唇に煙草やパイプが煙をふき上げるのを毎月待っている。

八月号に昨年十月号の梨花女史の「煙草責め」について恋人との

プレイと評していますが、私は全く反対の立場をとりたいと思う。

即ち暴力団に捕えられたティンエイジャーの少女が縛り上げられた上、倉庫に監禁されている。見張りのチンピラ二、三人が少女に手をつけるには親分が恐いし、何か少女をなぶりたいと考え、煙草をくわえさせて喫わせたり、パイプを横ぐわえさせて顔中煙だらけにして苦しむさまを楽しんだりして退屈な一夜を道すといった構想を持っている。

先日お送りしたフォトにしても責め上げられて観念した女のくわえ煙草やくわえ煙草の場面がテーマである。最近行った責め（フォトは出来上ってから送る）は、少女を全裸後手に縛り上げて上向きに転がし（机の上に大の字に縛りつけたのもある）口に太いマドロ

スパイプかハマキを横ぐわえにくわえさせて足で乳房の下を踏みつけて責めている。

足でぐっと踏み込んでから力を抜き、再び力を入れると口、鼻から白い煙がもくもくと吐き出す。七回位くりかえすと、ぐったりとのびてしまった。手早く口のパイプを抜き取り、火のついた方（余り熱くない）を尻の横に押しあてると、悲鳴をあげて縛られた全身をもちえのたうち回る。

ムード派には美女とセーラ服にお下げ、又はBGスタイルにして



後手に縛り上げ、縄尻を持ち右手にバンドを持つ。一方机の上にロースクの火のついたのを一本立て美女に長煙管をしっかりとくわえさせ、キザミ煙草を十分つめ、ローソクの火で煙草を吸いつけさせて責める。一服喫い終わったら灰皿に吸いカスをプツと吹いて出し、新しいのをつめさせる。出来なければ、盛り上った肌にバンドのムチが飛ぶ。といった構想は如何。

四馬先生の美女、最近特に私の好きな女性になってきました。先生、あなたの美女に煙管をどうぞ

くわえさせて下さい。

私の「煙草責め」の画について
一、少女が全裸後手縛りにされて
煙草を吸わされている。鼻に突込
む二本の巻煙草の用意も出来た。
二、柱に縛りつけられた美女、無

理に煙管で煙草を吸わされてお
足もとでは、まだまだ煙の出る捲
間が続くそう。

三、女学生、がんにがらめに縛り
あげられて、くわえさせられた巻
煙草を恥しそうにくわえて、すっ

ている。

四、捕えられてきたばかり少女が
親分のパイプ付の煙草を深くくわ
えさせられて、くったりとしてい
るところ。

五、台に縛りつけられた美女への

煙草責め。

六、縛られ押えつけられて葉巻を
吸わされている美女。

非常に乱文ですが、何卒よろし
く。煙草責めのフォト実現の程を
辻村先生にお願い申し上げます。

〔映画通信〕……………高橋 信

未公開作品 「人間の絆」

と 凄 い 裸

「人の生くるはパンのみに依るに
非ず、神より出づる諸々の言葉に
依る」

とは有名な聖書の一句である
が、幸い平和の保たれている日本
では貧しいながらも、どうにかパ
ンだけなら腹一杯でも喰える。

寧ろ問題は霊と肉のつながりで
ある。此の命題と取組み、解答を
或る程度適確にとらえた映画が米
国M・G・M作品『人間の絆』で
ある。

原作はイギリスの世界的文豪ウ
イリアム・サマセット・モーム

で、それだけでも並の映画とは異
り、含蓄あるせりふをちりばめて
貴い生命の糧を観客に与えるが、
何しろモームが二十四才の時に書
いた自伝的作品で未熟の点も免れ
難い。

そして皮肉にも原作の欠点を補
って余りあるのが、此の映画で始
めて裸になって早くも世界中を悩
殺しているキム・ノバクであって
みれば、火の鳥である女優の円熟
した生の乳房も仲々に捨てたもの
でない。

さてあらすじは発端から流石に

文学的であり、医学生フィリップ
が喫茶店の給仕ミルドレッドに惚
れたのも、友の意向を取りつき断
られて目を開いたのが動機だっ
た。

二人の仲は以後急速に進展し、
甘い口づけも屢々交わされたが、
ミルドレッドは美貌の女に有り勝
な先天的の浮気質で、そのため、
フィリップは相手の男から殴り倒
されもした。

然し恋に真剣なフィリップは挫
けずに、結婚リングに等しい高価
な指環を贈って、誠鮮かに彼女の
ハートを射止め、ミルドレッドは
双方裸のベッドで処女を彼に与え
る。

充分脂の乗ったキム・ノバクの
肌の艶もさる事ながら、風俗的に
面白いのは、東洋は知らず外国で
は愛する時、決って一糸纏わぬ放
恣な姿態をとる点である。

尚裸と云えば、愛する時のそれ

は万人の許容する所であるが、更
に凄惨な裸は美しい女が男の歡心を
買いたい媚でする裸だ。

フィリップを裏切った淫奔なミ
ルドレッドが男性遍歴の果、ロン
ドンは裏町の夜の女に迄落魄し、
挙句再会したフィリップに裸を誇
示して誘惑する演技をキム・ノバ
クは精一杯熟演している。

もっとも結果は時既に遅く、頑
くなにフィリップの心は不動であ
る。彼にも新しい恋人が出来てい
たからだ。

自暴自棄遂に不治の性病におか
された彼女は、それでも「淑女に
ふさわしいお葬式を、」と最後
の願を駆けつけたフィリップに囁
いて死んで行く。

写實的な中に、飽く迄才氣煥発
で明朗さを失わない英国民気質を
代表する傑作と評されよう。



K K 編集 問 答

読者を代表して

○ 覆面子
× 編集子

○ いや、今日は。又大分御無沙汰しましたネ。相変らず雑誌の責を放して恐縮しています。タダの愛読者ってワケで片身の狭い思いをしていますヨ。

× 本当にこちらこそ御無沙汰ばかりで。この前の問答から数えてもう二年ぐらい経ってますかネ。

○ そう、十何年かの間に通算して私の登場も三回か四回というところですかナ、その方でも余り打率がよくなくて恐縮です。しかしお世辞じゃなしに、長い間には、いろいろのことがありましたのによくここまで頑張って続けていられますヨ。只々感心しています。

× いつも貴方に登場して貰うときは、状況のよくない時でして、景気のよいことを喋れないのですが、まあこういった方の専門誌として固まってしまうは、気持次第じゃ永続できるだろうと楽観しています。

○ 話は変わりますが、読者通信というのは、あんなに沢山集まるんですかネ。

× そうです。毎月載せようと予定しているものだけでも、倍以上は残るんです。勿論三行広告の文句のようなものは、最初から没にしているんですがね。

○ ほう、そんな三行広告の文句のようなヤツもありますか？

× 数は多くないですが、無料の広告文というわけですね。もっとも本誌でも今から十年前の昭和二十九年ころは、三行広告をやっていたことがあったんですよ。大分反響がありましたネ。

○ 文通雑誌というヤツですか。

× まあそれに限りませんが、そんなのが多かったですね。いい友達を紹介してもらえた、といって二人でコーヒーセットを御礼に持ってきてくれた読者もありました。その反面トラブルも多かったですよ。

○ その頃は文通雑誌もたしかやっていました？

× そうです。手紙の転送なんかも短大出の家原文子さんが読者係として専門にやってくれました。

○ その頃は、頁数も三百数十頁だし発行部数も今の何倍かありましたから、まあ、余裕はありました。

○ 定価はそれで百四十円。

× 今は倍以上の三百円ですからせめて、奇クサロンと読者通信は今の倍の頁はほしいんです。原稿は十分あるんですから。

○ そうなれば読者としては、よろこびですが、定価据置きで、むつかしいでしょう。

× 発行部数が増えないことにはネ。売れることは売れるんだが、

書店の店頭にはドンドン派手に並べられないかな、その点でも部数の増える見込みはないですね。

○ そういえば、ここ一年くらい店頭では見かけませんネ。私なんかも贈呈してもらわなかったら、失礼ですが廃刊したかと疑っていたでしょうね。新刊ばかりでなしに古本も見かけませんヨ。

× 毎月何百冊と売ってくれていた大きな書店が、テレビに写し出されてからは一冊も売ってくれないんです。手を変え品を変えての嫌がらせが、次第に効をそうして来たんですね。勿論そのテレビ局ではそういう効果を期待したわけでもないでしょうが、結果はそうなったわけです。

○ では増頁は定価値上げにつながるってわけ？

× まあ、そういうことですが、今の定価でグラビヤを減して本文を替りに増頁するという手もあるにはありますが……。

○ グラビヤは読者の期待してるところだから、これを減すのはどうかな。もっとも、このグラビヤ頁には、なんだかんだと風当りはきついでしょうが。

× 読者の側からいえば、安くて面白いのがいいにきまっています。



夫婦のSMプレイ

新宮明夫

でも、今のようない世の中では、大人が自分の楽しみだけで独走しても困る。子供の解釈でできない程度の難解な楽しみ、それだったら理想的なんですね。料理屋やキャバレーで高い金を使っている乱痴気騒ぎや二号を囲ったり妾狂いしたりは禁止されないが、深夜喫茶の禁止、遊廓の廃止がとり挙げられるということ。ここのかねあいをよく考える必要がありますね。

○ とすると、これからは、もう

面白い本はできない……。

× そうですね、今の配本機構だったら無理でしょうね。売ってくれないやお手あげですからね。だから売って貰える範囲の程度のもので、ということになりますから勢い面白くなる。グラビヤのハダカをほしがるお客さんなんかには、特にね。

○ こりやシンラツですな。

× これからは、だんだん固くなってゆく。口絵にグラビヤのハダ

カなんか見たくてもなくなる。今のうちに買っておくべきですナ。

○ 手にとったときの妖しいムード異色の魅力というのですか、これは失ってもらいたくないですね。特異な文献として後生まで残ってほしいという意味からも。

× その方は益々濃厚になるような腕をふるうつもりです。

○ で、読者の人ですが、読者通信の文面から見ても、相当熱心な人が多いようです。この点普通の読者誌や週刊誌に見られるように、読みすてにする読者と大分違うように考えられますが？

× 古本屋や屑屋へは売らないで保存している読者が多いでしょう。これは想像ですが……。読者からの便りも多い。これは出来るだけ誌上にとり上げるといふ本誌の態度にもよるでしょうが、最初の暗中摸索時代には、なんでもかでも、読者の言うことは次の号でとり上げていました。これは一寸人気がありました。

○ これからも、そうしてもらいたいです。制約もありましようね。天下り式の押しつけでなく、読者からの盛りあがり誌面を形づくってゆくといった点に、ファンは期待しているでしょう。

× ごもっともです。とにかくエロ的に逸脱しないこと、惨虐性には走らないということでは十分手綱を引きしめていますから、その範囲内で特殊な異色のムードを持った雑誌として、読者の方々の御期待にこたえてゆきたいと思っています。

○ 最近残酷ものばかりで、映画を筆頭にテレビや週刊紙でも、流行に乗りおくれないうようにと、次々打ち出しているようです。スタントカーなんかも、若い女性のファンが多いというのも、考えさせられますね。

× 映画は「白日夢」の成功で気をよくしているから、ここ当分は亜流が出るんじゃないですか。でも二番煎じは、いつも味はよくないですから、そのうち飽きられるでしょう。

○ はやりすたりなしに一貫して一つのものに狙いを付けてゆくとこに固定読者のファンが安心してついてくる、ということでしょうね。お世辞めきに、この雑誌が一貫して十数年も続いているということが信頼と敬意の念を抱くことができます。どうか、今後一層の御発展を祈ります。

× お忙しいところを色々ありがとうございました。

浅香マミという女

ジュース一杯一万円也

能登 光

某誌39年6月号一九一頁読者サ
ロンに「奴隷を求める、手紙は編
集部より回送（大阪浅香マミ）」
とありましたので手紙を出したと
ころ早速返事が来ました。
住所は大阪市東区南久宝寺町一
一上杉ビル二号室、浅香マミと
ありました。

内容は「マミは若くて美しく実
に魅力的だ。面接したければ六月
十九日十時半、白浜口駅改札口へ
赤いフロシキと週刊誌を持って来
い、会ってやる。併し予約金とし
て一万円を十五日までに送金せ
よ」と書いてありました。

文字は女性型で文章は男性的で
これこそ本当に女性一人で書いた
ものなら、マゾプレイも出来そう
だ、一度会ってみようと考え、一
万円を送金しました。着金が遅れ
たのか、十八日までに二回、早く

送金しろ、こんな一等級の女王マ
ミを一生逃してしまふぞ、と、や
いやい手紙が来ました。

十三日に現金書留にて一万円を
送金しましたが、十八日の
夜になり、男の声でマミさんから
頼まれたと言って電話があり、実
は白浜で会う様になってるが、
急用のため行けないので、後日一
万円は返金しますとの事でした。

併しその後一向に返金して来な
いので、七月四日に小生は商用で
上阪しますから、梅田有料トイレ
待合室の伝言板に会う場所を書い
て貼っておいてくれ、プレイをし
てほしいから残額二万円も当日持
参します、という文面の手紙を書
いて、上杉ビル宛に出しておきま
した。

さて、七月四日に伝言板を見に
行ったところ、「此所で本日五時

半に待て、浅香マミ」と書いた伝
言書がピンで止めてありましたの
で待っていたら、六時頃になって
ボンと肩を叩く女がありました。
小生は初めて見る顔でしたが、
先方は小生の写真を送れというこ
とで送ってあったし、又赤いフロ
シキを持っていたので分ったもの
と思います。

直ぐ連れだ

って構内の喫
茶店でジュ
ースを注文し、
落着いたとこ
ろで二万円を
出せというの
で渡しまし
た。すると、
今日は気分が
すすまないの
で帰るから、
これでも飲ん
でおおき、と
言ってマミは
飲みかけのジ
ュースをその
ままにして、
出てゆきまし
た。



次回ならその時に二万円を払うか
らと、暫く問答をくりかえしな
がら、やっと先程渡した二万円を
とりかえしました。マミは「あ
んたとは、これっきりよ」と言っ
て、待たしてあった黒塗の乗用車
(ナンバー大5、96—12)
で逃走してゆきました。
最初から警戒していたので残額

すぐ私は後
を追っかけて

の二万円の被害を防ぐことができたのですが、小生が要心をしたのは次の理由によるものです。

浅香マミが取次連絡事務所に使っている上杉ビルへ契約に行った時に男の人と一緒にいたということ。そしてその事務所に本人の自宅住所を出鱈目に報告してあったこと。時々マミの代りにその男が手紙を取りにくること。少くとも一週間に二十通の手紙が来ていること。その他色々のことを調べてあったからです。それで、これは自称のサド女性でニセものかもしれない。蔭で男が糸を操っている

のだろうと見たからです。

自宅住所を守口市梅園町、浅香マミ子として事務所へ報告してありましたので、前もって其処を調べてみました。アパートも貸室も全然浅香という姓はありませんでした。この手段で毎月何十万という大金を詐取しているのではな

いかと存じます。小生に呉れた手紙の中にも、マゾ男性が多くて一人一人使うのに競争率が実に高い、お前のようにのんびり構えていては、マミの様な一等級の女王には、一生仕えることは出来ないだろう、とありま

した。

ジュースを飲む間、ほんの二、三分の間しかつき合わなかったのですが、顔も声もきれいでした。やせ型で五尺一、二寸位。浮いたような飛ぶような歩き方をしていました。顔は丸型の方で全然化粧はしていません。毎日、男を相手に同じ事をやっていると、あの様に大の男を手玉にとることが出来るのでしょうか。実に堂にいて板についていました。

ジュース一杯が一万円につきましたが、言葉や態度はサド気が溢れていて、本当のサジスチンのよ

うで、最高のマゾ感を味わうことが出来ました。何故プレイをやってくれなかったか不思議です。

小生は、その男の人と同伴で二人でやってもらっても良いということを書いてあったのに――。

△編集部から▽

浅香マミの件につき、他にも先方の手紙まで送ってくれた方もありましたが、能登氏の告白を代表として掲載しました。

この件につき、思い当たられる方は通信を下さい。



やすふじ
安藤

ひさんど
久人

「奇譚クラブ」という文字は、私にとって実に馴染みの深い名前です。

私のお便りするのには始めてです。私のような者は、愛読者といえるかどうか判りませんが、私が貴誌に親しみだしたのは随分古い話で「読んだ」という意味では読者中

最古参に属することでしょう。

書店で貴誌を見出したのが27年4月。それ以前のものも親しくしている古本屋の主人に探して貰って読みましたから、実際いうと大正時代から知っています。だからもう十五年近くになります。その

間にはまるで世相の一断面を見るかの様に貴誌は変貌してゆきました。大型から普通判。そして内容の充実と共に部厚くなり、豪華となり、発禁となった四月号は確か30年でしたか？ 廃刊と失望落胆した一時期。そして白表紙本の復刊（今になると、あの白表紙さえ懐しい）新装……発展。ムードと

共に盛り上ってきた折に、再び昨年の悪書問題。本当にいろいろな事がありました。数度に亘る困難な中をよくも立派に、そして見事に、此処までこの特殊雑誌を守り

育てて完成された、と貴誌の変遷を密かに見守りながら心から感服しております。

私は現在三十九才、妻と子供一人居ります。（結婚以来四年）

私の青春の哀歓と共に、同じような歩みを続けてきた貴誌に、私は限りない愛著の念を禁じ得ないのです。これから私の人生があるかぎり、貴誌もまた、第二の黄金時代を目差して、生々発展されることを心から祈ります。私はいつまでも、貴誌の愛読者であるでしょう。

夫婦のSMプレイを

山本成友

小生は貴誌の読者通信欄を通じて夫婦SMプレイの得難き相手として、三隅良信殿を御紹介頂いた大阪の山本です。

実際にはまだお互いの夫婦がオープンでSMプレイを楽しむところまでは行っておりませんが、色々と言ひ合つて得るところが多く、いずれは見事なお互いの夫婦のSMプレイを楽しむ事が出来るものと信じております。

且つ三隅氏の進言により現在も極力家内を、その方面に誘導中で、小生は余り酷い痛みを伴う責めは好みませんが、汚辱的な思いきった羞しめ責めで、形だけでなく実際に嫌がり苦しむ責めに興味をそそられます。

小生は中でも猿ぐつわ、それもゴムの臭気の強い粘着性のある汚れた猿ぐつわに最も興味をひかれます。嘗って本紙上に三回ばかり載つたことのある森中雨奇男氏の嗜好と全く同じで、出来れば森中氏にもお目にかかれたらと常々思っています。

同封の写真は森中氏のアイデア

人体解剖異聞

高野原美

女体切腹から進んで奇ク誌上では、女体解剖マニアの手記が出初め女体解剖の花が咲き出したことは喜ばしい現象であると思う。私も切腹及び解剖マニアの一員として解剖の歴史的見聞を述べて、この傾向に対する警告の意義だけでも果したいと思うのである。

歴史に残る解剖の第一号は女性なのです。日本書記十五巻に雄略天皇が皇女栲幡姫の腹を切り裂いた記録が残っている。皇女栲幡姫が連武彦と密通し、その上妊娠しているとの噂が人の口の端にのぼり天皇の耳に入った。短気で武勇に優れた帝は不届者が……と大いに憤怒され、直ちに姫のもとに使者をつかわせられ真疑のほどを確かめられた。皇女は余りにも厳しい詰問に驚かれるとともに、何ら自分自身にやましいところがないので無実の罪がきせられているのに

嘆き哀しまれた。それほど迄に私の身を天皇が疑っておられるのなら死んで身の潔白を証明する以外になかうと覚悟され、ある日身体を清め、薄化粧をされて洞に身を投じられた。それでも姫の潔白を信じられなかった天皇は、姫の亡骸を宮廷に運ばせられ衣類を剥ぎ、その若く美しい裸身を庭の白砂に横たえさせられた。天皇は姫の露わにされた下腹部を凝視されていたが、おもむろに腰の剣を右手に取られると、白く清らかな姫の鳩尾に深々と突き立てられ縦に臍を通過して真直ぐ切り下された。白い皮膚は切り裂かれ黄色の皮下脂肪が割れ、腹膜の下に腸が迂曲して露わにされる。天皇は、自らの手で姫の腹部を切り裂き内部を見ることによつて潔白であったことを確認され、噂の間違ひであることを知り姫の亡骸を手厚く

葬られたという。文字通り日本における帝王切開の最初であるとも云えよう。

又、特志解剖の第一号としては明治二年八月に駒込追分町の彦四郎の娘きみの名が歴史にのこっている。この場合は、生前から女性の身でありながら医学研究のために自分の肉体の解剖をしてくれと遺言しているのであるから、今日の解剖マニアにとつては力強く感じられるものがある。

解剖といへば、江戸時代中期に山脇東洋という蘭学者が京都西郊の刑場で、斬首刑に処せられた囚人の屍体を解剖して以来、杉田玄白の「解体新書」で有名な江戸小塚原での死刑囚の屍体解剖にみられるように、全く死刑囚をゆすり受けて解剖がなされていたのである。その上、解剖に対する理解もなく、まして異性の前に死後とは云え裸で身を横臥えて、女性の肉体を隅々まで曝け出すことは想像もつかない時代であった。それにもかかわらず、きみ女は多くの異性に裸身を示し、そのあげく肉体を切り裂かれ内臓を露出するといふのであるから大変な覚悟がいったものと思われる。

私は、この女性の心の中に現代



を実際に行ってみました。昔婦人用の高い枕に使ったスポンジゴム（非常に臭気の強いもの）を口一杯に詰め込み、その上をゴムのチューブでおさえ、更にその上から小生の古レインシューズで掩いました。このレインシューズは、現在風呂場で洗濯の時、お手伝いさんが穿くもので、それだけ一層家内をみじめで不潔な気分になせ大変嫌がります。

その他エビ責め等、緊縛にも強い興味を持っています。此の写真の現像焼付は、三隅氏に教えられて始めて行ったものです。

の女性の解剖マニアに似た心理が強く作用していたため、女性の羞恥心や肉体を切り裂かれ内部をあばかれる屈辱感に打ち克ち、その女性の神秘性で男性を屈伏し得る誇りとマゾ心理を満喫していたのではないかと思うのです。それではなければ到底当時の女性として解剖に耐え得なかったのではないかと思うのです。

遺体は、解剖が終わったのち小石川戸崎町の念速寺に葬られ、その碑のうらに特志解剖一号としての彼女を記念する文が刻まれているということなのです。

この他、歴史小説やその他によると、女性受難の跡が多く物語ら



○そろそろ「秋の増刊号」の準備に追われる時期になってきた。二人のモデルを駆使して、樹の枝からの逆さ吊りや、岩からの吊りなど酷暑について敢行したが、果し

記されている。

女性の肉体は、男性に取って余りにも美しく神秘的である。そのために男性としては、誰れしもがその肉体を切り裂き内部を探りたい無意識的な欲望に馳られるものである。

歴史が示す様に、解剖と女性は緊密性があり女性のマゾ、男性のサド心理は、女性の解剖という点とで一致点を見出している。今後とも女性解剖が、女性切腹同様、花を咲かせることを望むものである。

それは、とりも直さず男女両性の潜在的な嗜好を満足させるものに外ならないからである。

て、掲載できるかどうか、一寸不安である。使用できなければ、それまで、とにかく揃えておく。

○昨年も七月の終りから製作に着手した「人文」が、完成して発売になったのが、十月の二十日だった。「悪書追放」の嵐の中で陽の目を見れるかどうか、気がかりながら進行させたのだったが……。

○グラフィヤ写真、口絵に気をつかうことも夥しい。何度も組み替えをして、なるべく大人しいものにして、と努力するのだが、みすみ

すオクラになる写真や絵が哀れである。力作の文章も要注意作品は一応掲載を保留して、再検討。十数度読んで訂正した筈の作品も、活字となれば、初校、再校のゲラ刷りで又々朱筆。作者と読者と印刷所に相済めが、真剣勝負のつもりで作品の出来上りに対決する編集子の労を考へ許して戴きたい。

○三誌共同で掲げた「読者へお願い」に、早くも批判の通信が寄せられてきた。いずれ誌上に成果を期したいのだが……。

モデル通信

絹川さんと大塚さんへ

植田 実

愛読者の皆さん、お元気ですか
僕は三年前からの本誌の愛読者で
す。最初、或る古本屋で、何月号
かは忘れましたが、昭和三十二年
発行の本誌を手にとり、すぐに買
ってから以後愛読しています。直
接発行所から買ったものも八冊位
ありますが、殆どは書店や古本屋
で手にして、内容が自分の趣味に
合ったものを買っています。

モデルでは、絹川文代さんと大
塚啓子さんの大ファンです。この
美しい二人のモデルを自由に縛っ
たり責めたり、浣腸責めにしたり
出来る写真撮影班の方々が羨まし

くてなりません。僕も一度でいい
から、そういう写真撮影の場面に
助手としてでも立合わして頂けた
らと、いつも夢に描いて二人の写
真を眺めています。

申すまでもなく、僕はSの方に
興味を持っています。ですからだか
ら絹川さんがズロースを半分さげ
られたまま後手に縛られて片足を
吊り上げられたりしている写真を
見ると「奇ク万才、絹川さん万才
！」と叫びたくなります。

僕は、本誌を読むだけでなく、
映画雑誌や新聞、ウィークリーか
ら興味のある写真や文章を切り抜

き、又自分でも画を描いたり（ち
ゃんと色も塗ります）して、それ
をスクラップ・ブックにはって楽
しんでいます。画の中には、写真
では不可能な幼女、少女に対する
責めが沢山あります。

大塚さん。貴女のある柔軟な肢
体を縄で縛り上げた写真は、僕に
とっては、貴重なものです。女性
の友達を持たない孤独な僕は、貴
女を心の友として、いつも縛り上
げています。そのときときによっ
て、さまざまに変化する貴女の表
情や姿態は、ときには僕を迷惑い
させ、そして、いついつまでも飽
きさせないのです。

絹川さんと大塚さんは、このよ
うに僕のような熱烈なファンがい
ることを、きっと御存じないでし
ょう。本当に紙の裏にも徹する熱
心さで、貴女たちのポーズを眺め
そして、貴女たちに恋い焦れてい
るファンのいることを、忘れない
で下さい。

話は少し変わりますが、僕にはフ
ェチシズムの傾向もあります。と
いっても、本来のフェチストであ
る「女王様のパンティを有難く云
々」というのではなく、女性の下
着にSの相手を求めるとでもいい
ましょうか。そういったS的なフ

ェチとでもいうのでしよう。だか
ら、「バンド縛り」といった種類
のものを好みます。相手を求める
からには、新品では用を為しませ
ん。それは当然です。

絹川さん、大塚さん、貴女のサ
ニタリー・ベルトやパンティ、プ
ラジャー、ストッキングその他を
送って下さいませんか。雑誌のグ
ラビアに載っている写真を撮ると
きに着用していた下着でしたら、
本当に僕は感謝感激です。その雑
誌とその下着は、僕の一生の宝物
となるでしょう。若しお差支えな
ければ、一ファンとしての僕に是
非送って下さい。僕のこの便りに
対してお返事は結構ですから、そ
のかわりに、貴女たちの裸身にじ
かにつけた下着を送って下さるよ
うお願いします。

僕は二十才を僅かばかり過ぎた
薄給のサラリーマン（公務員）で
まだ独身の親がかりの身の上で
すから、充分のお礼はできかねま
す。僕の誠実だけは誰の誰にも負
けないつもりです。僕のこの切な
い願いをかなえて下されば、きっ
とお礼は致します。尚口絵のがな
かったら印画紙に焼付けた写真で
も結構です。

愛読者の
みなさまへ
おねがい

私ども三誌では、この数年間の世情にかんがみ、かねてから編集面の自粛刷新を計ってまいりました。

元来、私どもの雑誌は、けっして単なる性雑誌ではなく、特殊な専門誌を自負して発行してきたのですが、青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく、いっそうの自主規制を、このたび申し合えました。

愛読者の各位におかれましては、いろいろとご不満もございましたが、なにとぞ、事情おくみとりの上、今後ともご愛読のほど、ここに、改めてお願い申し上げます。

「風俗奇譚」発行所 文献資料刊行会
「裏窓」発行所 あまとりあ社
「奇譚クラブ」発行所 天星社

奇譚クラブ

昭和39年10月号



鬼六談義

「随筆」

花と蛇

団 鬼 六

十五回にわたって連載した『花と蛇』も遂に終了、ついで、愛読者と編集部の合意といった形で特集号に全回をまとめて頂き、作者としても嬉しい限りである。愛読者の中にはこの特集号を、くりかえし読んで下さる方もあらうと思う。さすれば、これほど、幸せな読物もあるまい。

この小説『花と蛇』にモデルがあるといえ、読者に笑われるかも知れないが、私の学生時代、まむしのような男につけねられ、遂にその人身御供になってしまった、ある美貌の人妻の記憶が、この小説の展開となったわけである。

その美貌の人妻というのは、ある小さな町工場の社長夫人で、たしかその頃、二十七八歳だったと思うが、和服の似合う、艶麗な美女だった。どことなく人間的な美しささえ感じられる、この人妻のしなやかな両肩に大変な苦勞がのしかかってきたのは、彼女の夫の会社が倒産してからである。不渡りになった手形を強硬に取り立てて来ていたYという半分やくざのような男に、どうにも弁解がつかなくなり（彼女は病気の夫の代りに立ち債権者に応待していた）一時しのぎのために遂にYに身を任せたのである。

妙な縁で、当時、私も、その蛇のように執

念深く夫人をつけ狙っていたYから学費などを借りていた。というのもYは、私の学校の先輩であり、不思議とYは後輩に対しては気前のよい男だった。Yは、機嫌のいい時は私の下宿まで来て、花街やキャバレーなどに誘ってくれ、思えば、ずいぶんと面倒を見てもらったわけである。だが、こと商売に関して（Yは高利貸である）大阪商人の子供である故か一分の隙もない手きびしいものを持っていた。

Yが、S夫人の主人に頼まれて、融通手形の割引を頼まれた時、業績のよくない会社である事を知っていたYは、はつきりと首を横

に振ったそうである。ところが何度も、夫人が、Yの事務所へやって来て、会社が立直るか潰れるかの瀬戸ぎわである事をYに告げ、涙を流して頼む故、Yは、ある計算のもとにみすみす、不渡りになるのを承知で、その融通手形を割引いたのであった。

やはり、手形は不渡りとなり、附随的にその会社は倒産となった。Yは、その責任を夫人の夫よりも、夫人自身に向け、鋭く追求し始めたのである。

以前より、Yは、夫人の美貌に心ひかれ、その豊満な肉体に食指を動かしていた事は私も知っていた。

Yは、強度のサジストで、女性を縛りあげいろいろな方法で虐げる事に異常な興味を持つ男であって、その

点、私の方も、Yほどではないが、当時より消極的なサジスト、つまり、見たり聞いたりする事で満足するタイプ——であったから、Yとは話のうまが合ったものであった。Yが

何かにつけて、私に御馳走してくれたりし、無利息で、金の融通をしてくれるといった好意を示してくれたのも、同じ趣味を持つという親近感ではなからうか。それはとにかく、

Yは酒場などへ私を誘った時に、よく、こんな事をいったものだ。

「ああいう奥さんのようなタイプの女を縛りあげて、無茶苦茶に責めあげてみたい」

そのためには、十万や二十万の金は惜しいとは思わぬ、というのである。

計算して、手形をYが割引いたというのはそこにあったのである。いざという場合、夫人を自己の生贄にすることだったのだ。それを或る程度、前もって、夫人にも納得させていたらしかった。

夫人の夫の会社が倒産してからというものは、Yは何度も夫人に呼び出しをか



け、喫茶店に連れ出して、やかましく借金の請求をし、その都度、私はYに頼まれて、乾分のようにYの横に坐っていたものである。私の人相が夫人をおどかす場合、すこみを盛り上げるための効果があるとYは見たりし

い。

私は、それとは逆に、夫人がYに、なかば恐喝的に貸金の請求を受けて、その弁解の言葉が見つからず、首を垂れてしまつて、今にも、わっと泣き出しそうな情態が不憫で見事に忍びず、そわそわとして、立ったり坐ったりを、くりかえしているという有様であつた。

身を固くして、美しい顔を伏せ、Yのおどしを受けている夫人のそうした状態は、妙に色気を感じさせ、夫人自身、ふと、被虐の倒錯した喜びにひたつてゐるのではないかとも想像出来たが、Yは、調子に乗つたように、夫人の責任を追求し、おどかしだけではなく終りには罵倒し始めるのである。年少多感な私は、段々とこの美貌の人妻が可哀そうでなくなり、笠にかかつて、弱者、しかも、美しい人妻をいじめ抜くYが憎くたらしくならなくなつた。いくら何でも、Yのいう事はえげつなすぎる、俺に金があつたら、この奥さんに貸して、Yの顔にたたきつけさせて

やりたなど、夫人に同情するものであつたが、それは、私の夫人に対する密かな思慕につながる心なのであらう。

この哀れな夫人を救うため、何とか金策に走つてみようと思つた私が本気でそんな事を考え出すようになった或日のこと、Yから連絡があつて、すぐにいつもの喫茶店に来てくれ、との事、とりあえず、出向いてみると、Yは、何時もと違つて、実に機嫌がいい。

「おい、話はついたぞ。あの奥さん、とうとう承知しよつた」

と、Yは開口一番、私にそういつた。

もうあと二日、もうあと三日、と夫人は、何とかYに借金返済の猶予を哀願し、實際、必死になつて金策に走り廻つていたようであるが、遂に、それも徒労におわり、Yの最後の要求を夫人は承認したという。Yが、むきになつて、夫人に貸金の請求をしたのも、つまるところ狙いは、そこにあつたのだからYの機嫌のいいのは当然である。

昨日、電話でそのように話は決着したのだから、夫人は、あと三〇分もすれば、この喫茶店に覚悟をきめて、やつてくる事になつてゐるのだ、とYはえびす顔になつてゐる。そして、ここに間もなく現れる夫人は、Y

に連れられて、どこか怪しげな旅館に行き、Yの情欲を満足させるため、徹底的に責めあげられる事になるのだらう。私は、体中の血がスーと抜けていくような気分になつた。美しい芸術品が、心なき不逞の徒の手で、木っ葉みじんに打ちくだかれるのを見るような思いがして、私は、居ても立ってもおられない気持になつた。

「そう話がきまつたさかいな。すぐにええ旅館を今夜から明日の夜まで予約したんや。その部屋はな。周囲の壁に鏡がはめこんだるのや。鏡張りの間いうてな。おまけに防音装置がしてある。へへへへ」

と、Yはいやらしく口をゆがめて笑うのだった。それだけではなく、Yは、テーブルの下に置いてあつた小さなポストンバッグをとり出し、その中から、特別に作つたらしい紫色の長い縄を取り出して、私に見せるのである。

「久しぶりにこいつが使えると思うと、昨夜はなかなか寝られへんのや」

Yは、そういいながら、更に、ポストンバッグの中をかき廻し、夫人を責める小道具と称するものをニヤニヤしながら、私に見せるのであつた。コケシ人形に似た奇妙な筒状の

ものや、電気アンマ器、ガラス製の浣腸器、その他、得体の知れない代物が次から次と出て来るのである。最後にYはその薬局でさつき買ってきたという、一つは黒、一つは赤の容器に入ったクリームを出し、黒が男性用、赤が女性用だという。つまり、黒は、到達をおくらせるもので、赤は到達を早めるもの、双方、これを使って、戦に入れば、理想的だなどとYはいつて笑うのだ。

私は、そんなクリームが薬局などで売っている事を始めて知ったのであるが、Yの事へのぞんで用意周到さというか、がめつさというか、とにかく、そこまで神経をつかう事を見ておどろいたのである。

「うまい事、写真がとれたら、お前にも一枚やるぜ」

Yは、カメラまで用意して来ており、夫人の緊縛写真を抜け目なくとるつもりらしかった。そうしておけば、後日、また夫人の肉体を要求する場合の有無をいわせぬおどしになるとYの考えている事は、全く狡猾である。

そんな事をYが話している内に、もう三分も過ぎ、約束の時間がきているのだが、夫人はなかなか現われない。Yは、いらいらとして、何度も腕時計を眺め、何にしとんのや

ろ、まさか待ちばけ食わす気やないやろな、と滑稽なくらいに、そわそわと落着かなくなつた。

私は、夫人がこの場所へ現われない事を心から祈つた。好色で、残忍なYのために、あの美しい人妻がズタズタに引裂かれる事を想像すると、たまらなく恐しく、たまらなく切ない。だが——程なくして、夫人は現われたのである。Yは、顔中の紐がゆるんだようにしわだらけになって喜んだ。

夫人は髪セットに行つて、時間がおくれたらしく、艶々した彼女の黒髪は如何にも若奥様向ヘアスタイルといった初々しい髪型に美しく結びあげられている。着物の柄も紫地に白の水車を染めぬいた小粋なものである。女というものは、嫌な男に身を任せなければならぬ破目に至つても、これだけの心をつかうものなのかと、ふと悲しい気持ちになる。

「おそくなって、すみません」

と、夫人は遅刻した事をYに詫び、艶麗な身ごなしで私にも一礼して椅子に坐るのであった。もう一切をあきらめたのだらう。おじ気づいた所はどこにも見当らず、妙にさばさばした明るい表情で、今まで夫人を見てきたうちでは、この日が一番彼女が美しく見えた

のだから不思議なものである。

Yの方がむしろ、うろたえ気味で、私に向かい、

「はな、君は試験勉強もあることやから、もう帰れや」

などと、私の撤退を求め、私ものみこんで腰をあげ、喫茶店を出た。

あのYの持つポストンバッグの中には、女を責める七つ道具が入っていることなど、夫人は知っているわけではない。今夜から、明日の夜まで、何処の宿に行くのか知らないが、Yのいう鏡張りの部屋の中で、脂汗を流して責め抜かれるであろう夫人の事を思うと、私は身内がぶるぶる震えてくるのを感じ、なかなか帰途につけず、近くの電柱のかげに身を寄せて、しばらく喫茶店の中の様子を観察していたが、やがて、店から何か談笑しつつ出て来たYと夫人はタクシーを止め、Yは、ポストンバッグを大事そうに小脇にかかえ、ニヤニヤしながら夫人の肩に手をかけるようにして、車に乗りこんだ。

美しいものが、眼の前で、こなごなに割れてしまったのを見た感じに私は、たまらなく淋しく、悲しい気分に見舞われて、夜空の星を見上げながら、トボトボと——まるで、失

恋して、泣き泣き家路につく中学生みたいであつた。

——Yの顔を見るのが嫌で、それから、私は、Yを敬遠していたが、ある、偶然、銭湯の中で、バッテリーとYに逢い、気になっていたあの夜の事を聞くと、Yは待ってましたとばかり、口元をいやらしく曲げながら、「あんな楽しい思いをしたのは始めてや」という。

「何しろな。手形の恨みがあるさかい一晚中責めあげて、ヒイヒイ泣かしてやった。ま。とにかく、ええ体しとったな。嫌嫌、と駄々こねながら、あの奥さん、あけ方までには、合計、四回も——」

と、Yは、その夜の光景を眼のあたりに浮かべてか、ギラギラした眼つきになって、私に話すのであつた。半分は、私をひがませるつもりでオーバーにいったのかも知れないが私はYの話を聞いているうち、その場にいたたまれない気分になってしまった。

それから、また、しばらくして、Yと逢つた時、Yは、約束やから、これ一枚だけ、お前にやるよ、とあの折Yがとった写真を私は入手した。それは、床の間の柱を背に、あぐら縛りにされている夫人のフォートである。

勿論、生まれたまんまの姿にされた夫人の緊縛フォートであるが、昼間、撮影されたらしく一夜、地獄の責めにあつた身を夫人はYに強制されて、そんなポーズを組まされたのであろう。一切がおわつたという、あきらめと口惜しさの交錯した、妖艶なばかりに美しい夫人の眼を閉じた表情、たくましいばかりに盛りあがった豊満な乳房の上下にかかつている縄のきびしさ、あぐらを組まされている肉づきのいい、すらりとした両肢そして——。

私は、その一枚のフォートに完全に魅了されてしまい、しばらく眼を離す事は出来なかつた。

そういう私にとっては、奇妙な初恋——全く、変質的なものであるが、その切ない思い出が、いきおい『花と蛇』というS小説の形となったのである。数々の責めに合い、ぐつたりとした素肌をあぐら縛りにされ、床の間の柱を背に、観念の眼を閉じてしまっている夫人の緊縛写真を日夜眺めているうち、私の頭にいろいろな妄想がモヤモヤわいてきたのだ。

ま、それはともかくとして——今回、『花と蛇特集号』を読み直してみたが、出来はとにかく、美しく高貴なものが、醜い下等なもの

のによって征服されていく私の意図が出ていたようで、一応、満足した。

さて、この『花と蛇』の続篇を書くにあたり、KK編集部よりいろいろの注文が出たわけであるが、いうまでもなく、当今の出版事情を考えた上の、こまごまとした内容の制約である。つまり、これ以上、えげつなくなつてくれば困るというわけで、小説の中で使う言葉の制限まで受けた。たとえば、淫虐、全裸、羞恥など、その他、セックス、浣腸の描写。そのような制限を受けると、書け、という方が無理で、ハタと行き詰まってしまった。

不思議なもので、私が、わざと描写に手を抜くと、読者通信などで、手を抜いた事の文句をいう恐しく爛眼な読者がいる。もっと、くわしく書け、と読者に文句をつけられる個所は、作者としても、綿密に描写したいところなのであるが、公刊誌の都合上、仕方のない事なのである。

このS小説を書き始めて、編集部に、ずいぶんカットされ、作者としても、途中で、創作意欲をそがれ、投げ出してしまったこともあり、愛読者に申し訳なき事をしたと思つていたのであるが、しかし、今、こうして、花

と蛇特集号を読み返してみると、これほど、赤裸々に、いいたい事を書かせた公刊誌はあ
るまいと、編集部之苦勞を改めて思うのであ
る。ただ、作者としては読者（マニヤ）の希
望が如何なるものか、想像がついているだけ
に、つい、調子に乗ってしまう。

第十五章のラスト——川田の責めにあつて
放心忘我状態になるまでの静子夫人の描写に

本誌予約購読者募集

予約申込者月毎激増中です。

○現在本誌はいろいろの事情で非常に入手
が困難だと思ひますので、確実に毎月御入
手されるためには、是非直接予約お申込み
下さるようお願いいたします。

○予約購読下さるには、天星社宛（大阪阿
倍野局私書箱第十四号）に予約購読料をお
払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社に
て負担いたしますから、誌代のみ御送金下
されば結構です。

○予約購読料は一部三〇〇円、三カ月分三

かなり力を入れたのだが、そこが巧みにカッ
トされている事を慧眼な読者ならお気づきに
なれたことと思う。とにかく、お茶をにこ
したような書き方は、作者としても不本意で
ある。編集部が作者に望む、臆化した話のす
すめ方で読者の空想をうながす、というのが
一番いいのであるが、作者のとぼしい筆力で
は、それだけの技巧を使う事は不可能だと思

冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年
分十二冊三六〇〇円です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印
刷完成と同時に、外部から見えないように
厳重包装の上、お送りいたします。

○予約お申込みの時は、必ず何年何月号か
らとお書き添え願ひます。

○予約金が切れましました節は、封筒の上に、
「本号にて前金切」の判を捺印いたします
から、継続お払込み願ひます。その際でも
何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて、雑誌をお受け取りになられる
方は、毎月二十五日頃、局へお出向き下さ
い。局での留置期間は十日間ですから、そ
の月中においでになれば、いつでもお受け
取りになれます。

う。

しかし、『続花と蛇』を書く編集部と約
束した以上、力及ばずといえども、愛読を願
っているマニヤの方々の期待にこたえるべく
執筆を続けたい思い、出来得る限り、編集部
の意向にそっていきたく思っている。

時々、考えるのであるが——これが、公刊
誌ではなく、他に累を及ぼさず、営利を目的
としない、いわゆるマニヤだけの同人誌、ま
たは回覧誌であつたとしたら——カット・ノ
イローゼ気味である作者としては、一度、そ
ういう何ら制限を受けぬ場所、日頃のうっ
ぶんを晴らす意味で、書きたい放題のことを
書きなぐってみたいという衝動にかられる事
がある。

寂寞とした味気ない日常生活のオアシスと
して、こうした夢の企画を立ててみるのも面
白いではないか。羞恥責めを主眼としたS小
説を書くのに羞恥という言葉を使わぬよう
という注文を受ければ、妙にやりきれなく、こ
んな妄想をしているわけである。

話は、大分、外れたが、さて、続・花と蛇
は、やはり、前篇同様、愛読者の意向、アイ
デアを大いに取りあげて行きたく、読者通信
等にて、作者に教示下さらば幸いである。



告白

栗瀬長

浣腸失敗記

上松駅を降りたのは五時半であった。秋の伊那谷は陽の落ちるのも早い。もう辺りには夕闇が迫っていた。

「山田温泉へゆくバスは何時でしようか。」

駅前で尋ねた答には驚いた。

「山田温泉？ 山田に行かれるかね。バスはもうないよ。あつたって途中までしか行かないね。終点から半道程歩くんだね。」

日頃旅馴れている私は強引な方だ。今日も名古屋から多治見に所用があり、これから松本に出ようという時、都会と歓楽地温泉に馴

れっこになっている私は、伊那谷を通過するに際して、何処か鄙びた山の湯に浸りたかったのである。

中央線は多治見駅前で耳にしたのが、この山田温泉であったのである。

「中央線沿線には湯らしい湯はないね。上諏訪、浅間ってとこかな。」

「いや、諏訪と浅間はよく知ってますよ。伊那谷の山の湯に入りたいんです。」

「そうさなあ、上松から入った所に山田温泉があるがね、わしも行ったことはないが、何

せ山ん中の鉱泉だろ。行ってみなさるかな。」
といった次第だったのである。

バスがなければハイヤーしかない。たった二合しかない駅前のハイヤーに交渉すると、バスの終点より一キロ位は入るが、それより先は道が細くて入れない。十五分程は歩いてくれ。それにしても今時分行く人なんかありやしない。夏、登山者が時に泊る位なもんだとの事。辺りは愈々暗くなるし、聊か心細くなってきたが、急行も止らぬ上松では、次の汽車は木曽福島行が二本あるだけ。といって木材の町上松に泊っても仕方がないので、渋るハイヤーの運転手に若干チップをはずんで乗りこむ。

木曽檜の集散地上松の駅附近は到る所、木材の香が充満している。製材所、木工所、営林署の木材置場を過ぎる頃には陽はトッブリと暮れて、ただ木曽川の流れが巖をかむ音が暗い車窓の下に聞えるだけ。

恐ろしく悪い凸凹道に車は大きくバウンドする。溪流に沿って、人家の明り一つ見えないう杉の覆いかぶさってくる細道を車は喘ぎ喘ぎ登る。もう時計は六時半をまわって、あたりはまるで真夜中を思わせる暗さだ。愈々心細くなってきたが、今更引き返す訳にもゆか

ず、ままよという訳だ。

「旦那、ここまでしか上れません。この道を真直ぐゆけば自然に行っちゃいますよ。ただ一軒だから間違いつこありませんや。」

メーターは二百八十円を指していた。

車から下された私は、仕方なく山道を歩き出した。暗い、兎に角暗い。はるか下の方から聞えてくる谷川のせせらぎと、梢を渡る山風の音を聞きながら、やっと道と判断出来るあたりをたどりたどりゆく。ものの一軒といわれたが長い、それらしき宿は行けども行けども見当らぬ。聊か心細くなった頃、急に行く手の道の凹凸がかすかな光に照らし出された。車だと思ふ瞬間、はるか後方にかすかな爆音。近づいて来たのはドリムであった。「どこへ行くんかね、山田温泉？ そりゃ大変だ、後に乗んなさい、送ったげるわ」

温泉から更に上手にある営林署の飯場の人とか、渡りに舟と乗せてもらう。ホンダドリムの前灯に照らし出される細道、谷、迫ってくる山肌、若しもの事があつたらと、鳥肌の立つ数分、何度か悪路のバウンドに振り落されそうになる頃、行手に灯の见えてきたのが、求める山田温泉であった。

鄭重に礼を言って車を下りる。

温泉とは名ばかりの板葺屋根の粗末な一軒きり、如何にも山の湯の名にふさわしい。温泉といっても、勿論鉱泉、見た眼には只の水としかみえないのだ、一旦沸かすと溶けている鉄分、塩分、カリ分等が、真赤なといったも茶褐色な異様な色を呈す。一度で純白のタオルも、赤くなる程の強い鉱物質を含んでいる。従って、見た眼には薄ぎたなく映るこの湯の、身体の温ること類なく、上ってからも二三分は身体のはてりがとれない程であった。

「はるばる東京からござらしたか、山ん中とて何もありはしませんから、猪鍋でもつついて下されや」

というわけで、客は勿論ただ独り、心ゆくまで山の湯を堪能したわけであった。

前置きはこの位にしてさて本題に入ろう。

接待の女中さんは年の頃二十三四、小太りの大柄な明朗な人で、山の中に似ず、垢ぬけした感じであった。

「私もしばらく東京に居たんですよ」

「へえ、どこに？」

「墨田。看護婦してたんです。東京って空気が悪いでしょ、すっかり身体こわしちゃったもんで、伊那へ帰ったの。そしたら、人手が

ないから、どうしてもここで手伝ってくれていうもんだから、身体もよくなったことだし。」

「道理で、垢抜けしてると思ったよ。」

飲む程に酔う程に一しきり話はずんで、この人、看護婦さんだったら、浣腸の経験もあるだろう、一つ聞かしてもらおうかと、何度考えた事だろう。旅の恥はかき捨てという。しかし、何かの機会に再び、と考える時私は旅先だからといって不都合な行為には及ばぬ方針だけに、つい言い出しそびれてその夜はふけて行ったのであった。

「折があつたら又いらしてね。」

という女中さんの声に送られて、木曽路の朝は快かった。宿からの電話で、途中までハイヤーが迎えに来てくれ、急行の止らない上松をそのまま通り過ぎて、かの有名な木曽の棧を左手に見て、一気に木曽福島に向う。

昨日、車窓から見下した寝覚めの床をゆっくり見る暇のなかったのが、やや心残りであったが。

その後一年が経過した。折にふれて私は木曽路を思い出すのであった。

偶々、日程の関係で、私は長野から名古屋

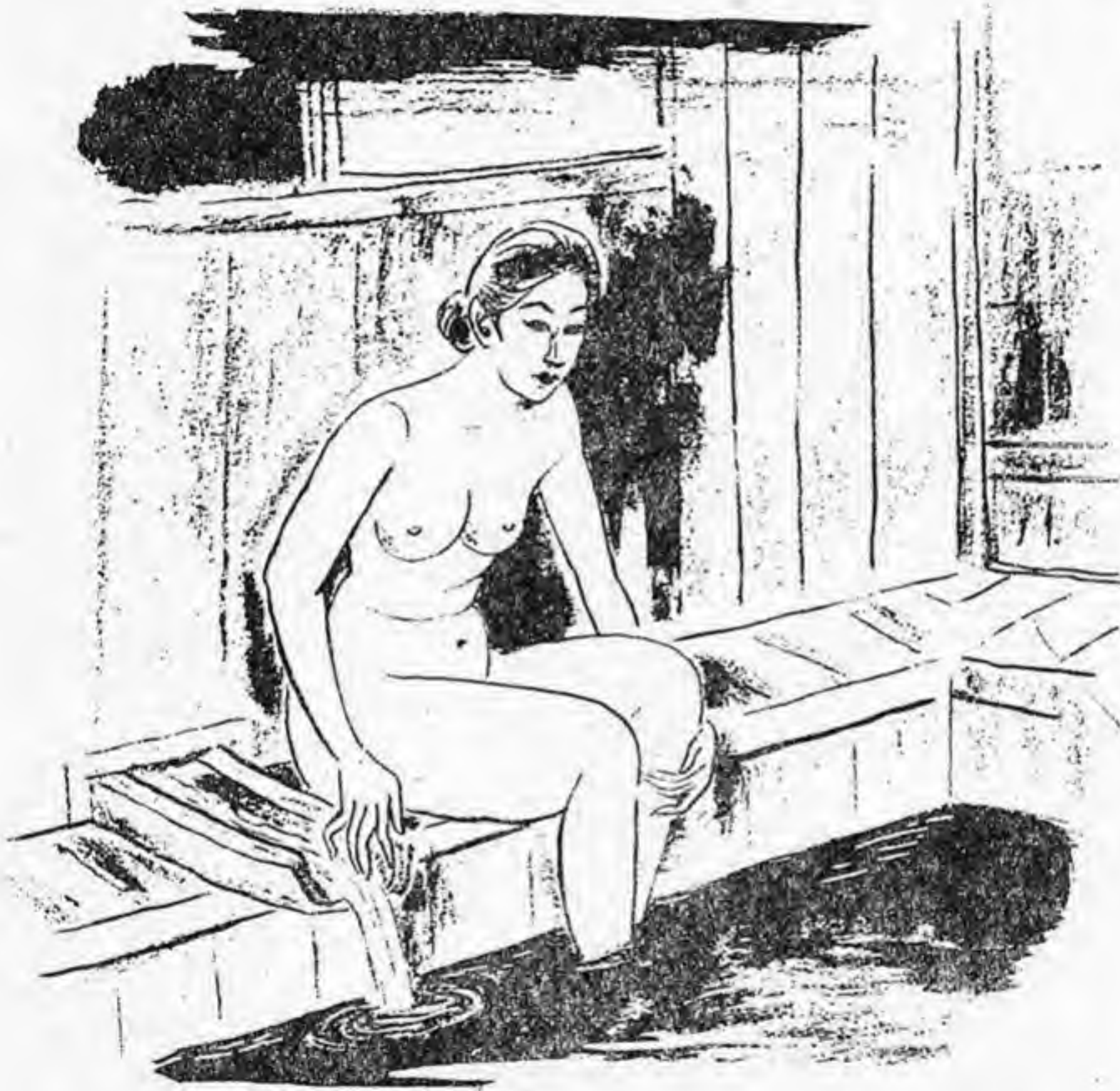
に出る機会が出来たのである。

「そうだ、上松、山田温泉へ寄ろう、そして今度こそは、もしあの女中さんが居たら、浣腸の話も聞いてみよう、そして、あわよくば……」

と怪しからぬ妄想にとりつかれて、私は常時携帯するイチジク浣腸を、更に二個、余計に鞆の底に入れたのであった。

木曾路は相変わらず静かで鄙びていた。日頃都会の喧噪の中に身を置く私にとっては、正に一服の清涼剤といっても過言でない。

山田温泉のたたずまいは一年前と寸分の違いもなかった。女中さんも、相変らずの姿で再び訪れた遠来の客を、前にも増して温かく迎えてくれた。前回同様、季節外れの今は客として私しか居なかった。違った所といえば、猪がとれなくて、猪鍋が豚鍋となった位である。



さて、地酒のお銚子が、四本五本と重なってゆく頃、私は鞆の底のイチジク浣腸が気になりだした。六本、七本。

「お客さん、よくお飲みになりますね、お強

いこと」

「そうでもないさ、君のお酌が上手だからさ」

「ま、お上手ね、ではもう一つ」

何時切り出そうか、もう切り出そうかと思う折には、なかなか酔も廻ってこないものだ。

もう一つ、もう一杯と、杯を重ねる中、さすがの私も、やや理性の限界点に達してきた。酒でまぎらわしては、卑怯であろうか。でもこの聊か恥づかしい性癖を、他人の前に露わにするには、酒の力を借りた蛮勇を必要とするのも、お許し戴きたい。

「君、看護婦してたってね。」

「そう、よく覚えていて下すったわね。」

「墨田区の病院だった？」

「そう外科のね。」

「いつも、患者さんは何人位入院してたの。」

「そうね、十人位かしら、いつも満員よ」

「そうか、じゃ忙しかったろう

ね。」

「忙しいなんてもんじゃないわ、眼が廻るようだったわ。」

「ふーん、じゃ、じゃ、君は——」

「何よ」

「うーん、あの、あの、浣腸なんか、君、よくやったろう？」

「え、カンチョウ？」

「そうさ、ほれ、手術の前なんか、便を排泄させるのに浣腸するだろう。それから、入院中、便秘すると、回復を遅らせるから、浣腸することもある。そうだろう、君もやったことあるだろう。」

「カンチョウ？、ないわ、そんなこと。どうしてそんなこと聞くの？」

私はあわてた。どきまぎするとはこの事だろう。その時の彼女の困惑とも、軽蔑とも、つかぬ、不思議な顔を今でも私は忘れることが出来ない。

「カンチョウって、お尻から、リスリンを入れるのでしょ。あれがどうしたの、面白いの？」

もういけない、平然としてお尻からなんて言っているようでは脈なしである。あわてた私は、何とか理論付けようと必死になる。

「そうさ、お尻からグリセリンを入れるやつさ。いや、あれにさ、快感を覚えるっていう感情があるのさ、特に女の人ね。」

「快感って？ 気持ちいいっていうの、へえ、そんなものかしら、私、カンチョウされたことも、したこともないから分ないけど、だってお尻なんて、いやなものでしょ」

「いや、そうじゃないそうさ。私もよく分らんから、君が、看護婦さんの時、いろんな人に浣腸した経験があったら、その時どんな反応を示したかを聞きたいと思ったんだ。少しむずかしくなるけど、女の人には、元来マゾ的、そう、被虐というか、誰かにいじめられたいという心理が、心のどこかにあるんだねだから、浣腸されるという時にも、男と違った微妙な感情の働きが現われると思うんだ。そうした心理の動きを、経験者の君から聞きたいと思ったんだ。」

もう冷汗ものである。酔にまかせて、どうにでもなれといった所、相手に反応がなければ、小むずかしい話でもしなければ、收拾がつかないではないか。

「そんな、むずかしい事は分ないわ。カンチョウなんて、そんなもんかしらね。私は看護婦といっても見習だったの、ちゃんとした

お姉さん看護婦が一人いてね、大概のことはその人がやったわ。私は、病室のお掃除、食器の配膳、注射器や、ああ、そういえば、浣腸器も洗ったことはあるわ、煮沸消毒ね、注射器と同じようだから、しまう場所同じにしてよく叱られたわ、注射器と浣腸器を同じ棚におくんじゃないって。だから私、浣腸も注射だって一ぺんもしたことないのよ。」

「そうか、そんならいんだよ、ところで、木曾の酒はなかなかいいねえ。」

あわてて私は話題変更という訳であった。幸に、純情な木曾乙女である彼女は、私の性癖には気がつかなかったらしい、心理学者とかなんとかいった、小むずかしいことを言う変な客だ位にしか思わなかっただろう。

それにしても、鞆の底のイチジク浣腸は、脾肉の嘆をかこったことであろう。

もし彼女が、浣腸に関して、言うに言われない反応を示した場合、いや端的に言おう、万万が一、マニア的であったならば、外に客とていない山の湯、一発施行に及ぶのも夢ではないと思つたのであったが——

現実には厳しい。いや、これが当り前の世界であって、空想するのは自由である、しかし夢が現実となるのは、実社会に於ては殆どあ

り得ないということを、私はこの山の湯でも改めて体験したことであった。翌朝、件の女中さんの態度は前回と全く変らなかった。

「夏は涼しくていいですよ、きたない宿ですけど、お子さん連れで避暑にきつというらして下さいな。」

私は、今度はイチジク浣腸を忍ばせないでこの山の湯、山田温泉を訪れたいと思ったことであった。

女体緊縛写真考察

中 谷 正 夫

一、緊縛途中の姿を把握すること

今まで本誌のグラビヤ或は分譲写真などで多くの緊縛写真を見せて頂きましたが、今迄のは、完成した最後図が主で、写真の九五%以上は完成図ですが（偶には例外はあっても女同志のオアソビ図、尤も私は女性同志のものを否定するものではありません。少くとも相手の男性の顔や姿を入れた場合のようなグロウ味や嫌味がないだけ救われる。但し女同志

では迫力がない）、これでは、静的な美しさはあるけれども、読者に力強く訴える動的な力に欠けると思います。

もっと緊縛途中の姿を撮ってもらいたいもの。一寸考えても、モデル嬢は服を脱ぎ（或は脱がされ）、取り押さえられ、後手首に縄をかけられ一巻き二巻き……。それから、胸に、足首に……という風に刻々被縛の動作が積み重ねられてゆくものでしょう。

この途中をカメラで刻明に捉えてゆくと、見る方では、すぐその前後まで連想するし、同じ一葉の写真でも、その奥行きがグッと深くなるのではないだろうか。尤も、この場合、縛り手の方もただ真似事だけではなく、手や足に力をこめてフン縛するという、少くとも恰好をしていただかないことには迫力が出ません。また、この場合、縛者（男）の顔は絶対に写真には出さないこと。どうしても止



むを得ないときは、後ろ頭か或いは覆面して目だけ出す。

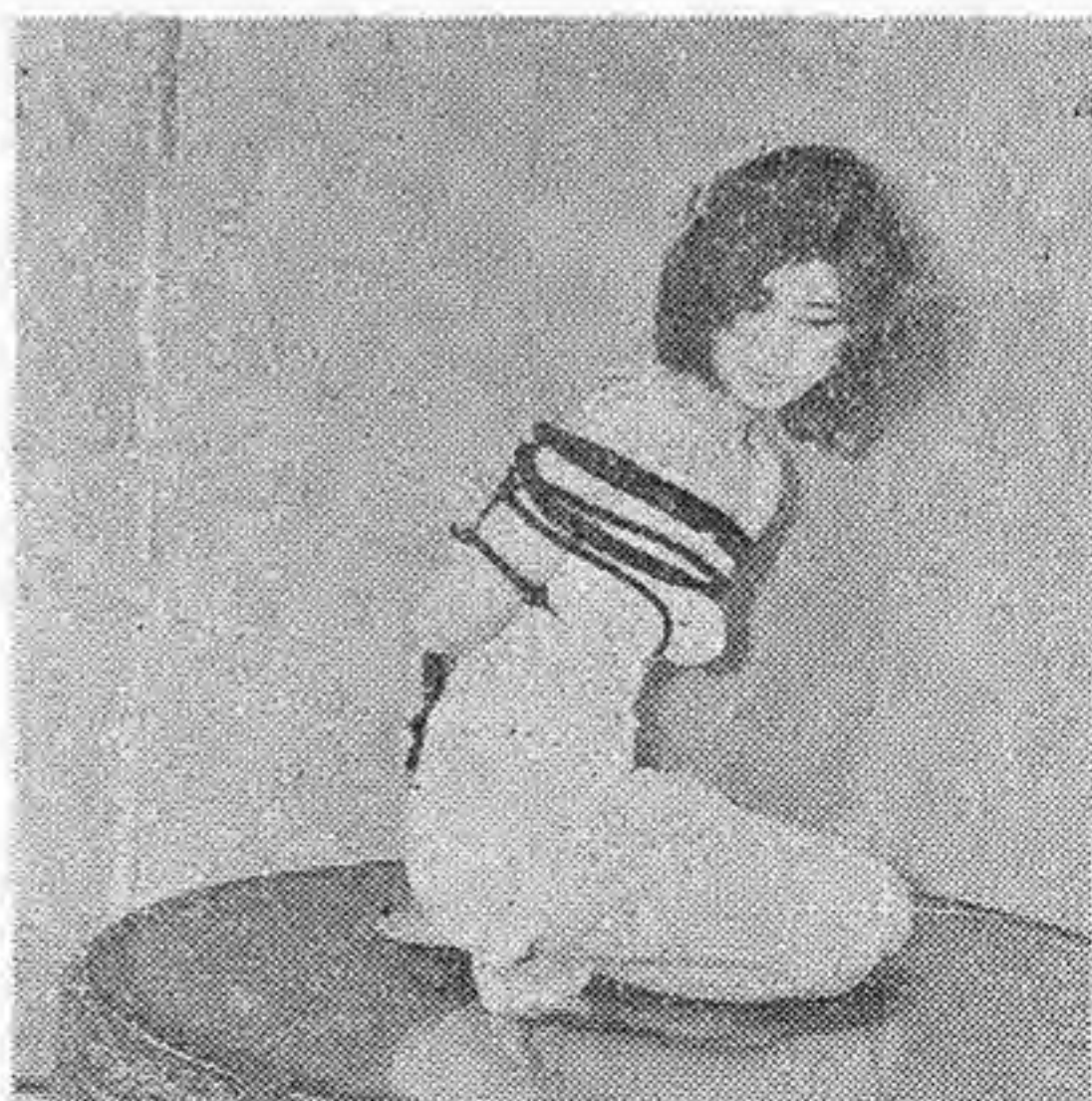
以上、途中を捉えるなどと、口でいうと簡単のようですが、映画と違って、実際にその瞬間瞬間を写真にうまく撮って行くのは、容易でないでしょう。然し、容易でない代りにうまく成功すれば動的迫力において、静的な完成図には見られない優れたものが出来ることは疑いありません。現にいつかの杉美美さんの「女が縛られるまで」が、立派にそのことを証明しています。

二、パークマンの手錠とロロブリジータの足枷責め

身体の部分についても同様です。私はその映画を見落しましたが、映画「ジャンヌ・ダルク」でパークマン（マゾ女優）は、処刑のため引出される時に、刑吏に手錠をはめられる。その両手首に手錠をはめられるところがアップで大きくスクリーンに写し出されたそうです。

また、「ノートルダムのセムシ男」で、ヨーロッパの名花ジーナ・ロロブリジータが、素足に足枷責めの拷問にかけられるシーンは観ものです。ロロブリジータは拷問室の寝台に腰かけさせられ、胸部を大きな革帯で括られる。足枷責具が彼女の足許に運ばれ、拷問吏がしやがみ込んで、スカートをめくりながら、じっと素足を見つめて、思わず「惜しいものだ！」と呟く。次に、彼女は美しい足の指をこの責具に挿入させられる。

彼女が白い脛をまる出しにして、右の足先を真直ぐ下に向けてスーツと足指を責具に差し込むところが、正面から足だけのアップでスクリーンに写される。少々円味を帯びた可愛らしい五本の足指が、責具にしっかりと差し込まれる（さすがに拷問吏も遠慮してか、



スカートはめくるけれども足までは握らず、彼女自身で挿入させてはいるが）。まことに息をのませる光景である。

次に拷問吏は、責具の起重機の柄をとってゆっくりと回し、次第に足枷は締まってゆく。やがて、足指をグググッと締め上げられたロロブリジータは、おそろしい悲鳴をあげて寝台の上に仰向けにのけぞって倒れる。

「どうだ、白状するか？」

「致します致します。助けて下さい。」

それからしばらく、彼女は足枷から抜かれ

た右足をベッドの上に立て膝してうずくまり足指をしきりにさすりながら、「ああ痛かった、息をつかせて」という。

かくして、一切の無実の罪を自白した彼女は、再びハダシのまま、今度はビッコをひきながら法廷に引き戻され、裁判長から厳かに「その方は、かしこくも国王陛下の定めたまう日の正午を期して、素足をもって頸に縄をからげ、囚人護送車に乗せられてノートルダム寺院の大玄関の前に曳き出され……それよりグレーヴの広場に連れ行かれ、絞首の刑に処せられたうえ、晒首に相成る次第である。」と宣告を受けるのであるが、ジャンヌ・

ダルクのバークマンも、矢張り処刑の際は素足にされたようである。

昔、女人を死刑に処する時には、わざわざ宣告文の中にまで謳って、素足にしたのは何かわけがあるものであろうか。(尤も、今の日本でも、女囚の絞首刑は素足で行われるものらしく、ある女囚の絞首台上にのせられてから絶命するまでの足の指の表情を刻明に描写した鋭い観察が、何年前かの奇巧に載ったのを興味深く読んだことがある)

三、絹川さん達の足の撮り方

それはとに角として、先頃、絹川さんや大塚さんの足鎖をつけられた写真がありました

が、何れも足枷を嵌められてしまった完成図で

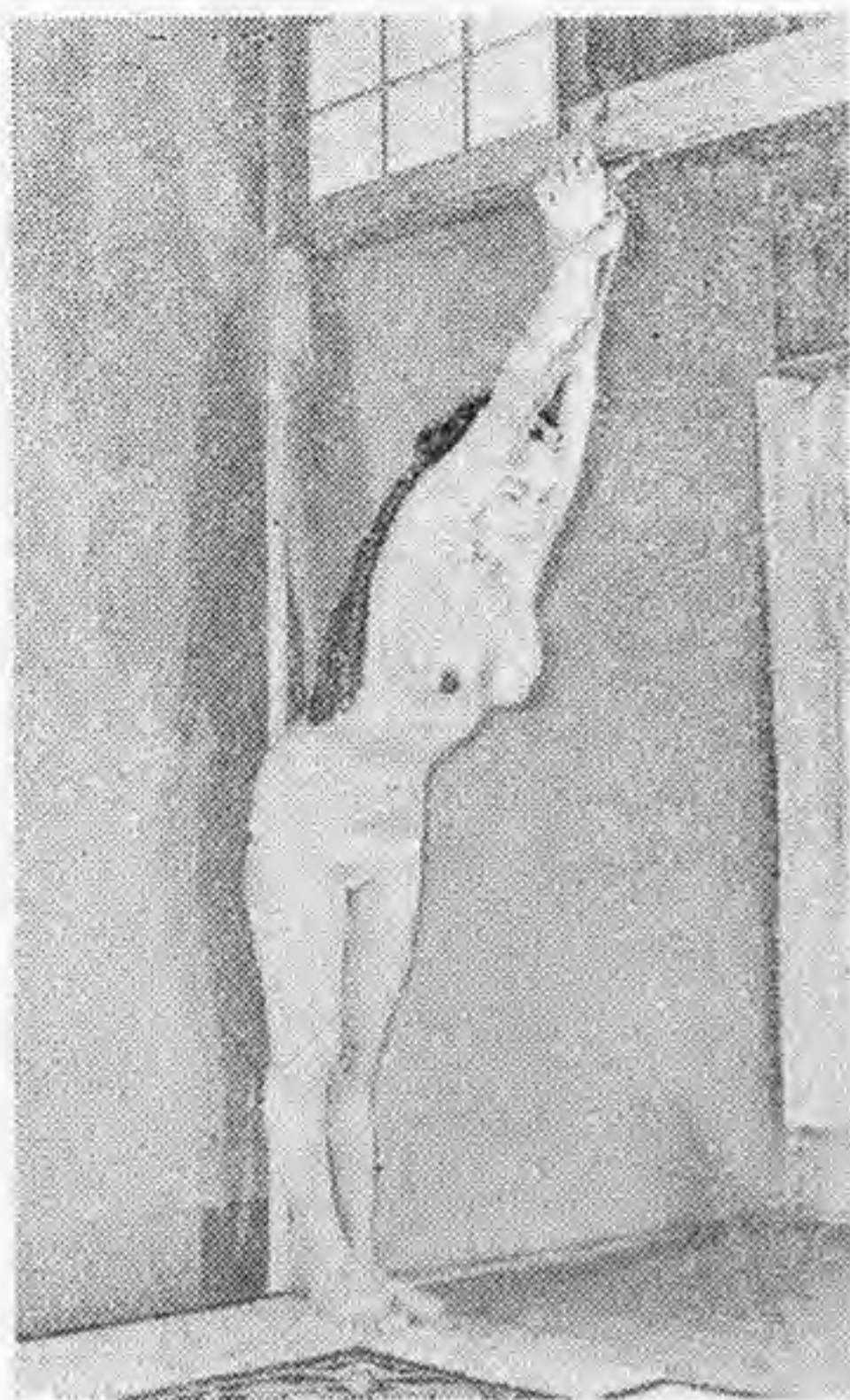
す。これはこれでよいのですが、なおその外に、例えば絹川さんが寝そべって足を投げ出しており男が左手で絹川さんの美しい素足を、足の裏から甲にかけてガツシリ握り、右手で冷たく光る足枷を今や絹川さんの足首に嵌め終り、絹川さんの

足の指はくの字に曲って、はげしい心の抵抗を示している……というところを、全姿とともに、そこだけ更にアップで足指(爪)に正確にピンとを合せて撮ったならば、世の素足ファンを驚喜させるばかりでなく、そこに前人未踏の分野を拓くことになると思います。

恰度これに似たシーンは、一九四七年のミス・イタリアのジアンナ・マリア・カナーレ主演の映画「テオドラ」の中で、マリアが牢屋の中で足枷を嵌められる光景を撮ったものがあります。但しこれはアップではありません。然しそれでも、マリアが両足を投げだして、「痛くしないでね、私の足首は弱いのですから」などと訴えるところは、異常な迫力がありました。

或いは女囚が足枷を嵌められた姿で足の爪を切る。「足の爪を切る女囚」、これなども哀愁の漂ったものが出来ましよう。昔の浮世絵には、女が足の爪を切る艶な図が可成りありますが、この頃では彫刻や人形や映画に偶にある位で、あまり見かけません。いつか、プロマイドで女優の水戸光子さんや飯塚敏子さんのがありました。

女性が足の爪を切る姿は、全体としてもアップで撮っても、多少のエロ味もあり、なか





なか風情のあるものです。そのポーズも単なる立膝だけでなく、さまざまに工夫してみると更によいと思います。これに関連して、あぶな絵式のものもあってよいのではないでしょう。

全裸よりも却って、胸がはだけて乳房がこぼれている風情、裾が乱れて脛や足がチラチラしている方が魅力的の場合の多いことは、誰しも経験するところです。胸のはだけにしても、両方同じにはだけているより、片方の乳房は半分かくれて乳首がわずかにのぞく程度で、片方が全部露わにというような不均衡の美というものがある筈です。いつかの絹

川さんの丹前姿は美しかったが、少し端正に過ぎた。この「はだけ」も矢張り動を現わすもので、その前後のことまで連想させる効果もあります。

単純な緊縛姿や風情（例えば逢瀬のポーズとか、縛りの遊戯といった程度の）あるものも欲しいものです。強盗侵入、死刑執行、拷問を受けるところ（特に海老貴め）……というように。但しむごたらしくならないように。

表情は、その目的の部分にレンズを近付けて思いきりアップで撮って下さい。今迄でも絹川さんの顔、手指、足指には仔細にみると

なかなか良い表情のものがあるのですが、残念ながら何れも小さくて鑑賞出来るものはマレです。虫メガネで拡大してもボヤけているし、どうにも惜しいこと。大胆にカメラを近付けて、小さなホクロや毛穴までも見逃さない位の描写をお願いします。

以上、いろいろと書き

ましたが、実際にやるとなると、前にもいったとおり容易なことではないでしょう。完成図でもロスは出る。まして、その何倍ものロスも出ると思います。良い写真一枚を得るためには、その何倍もの気に入らない写真を撮らなくてはなりません。良い写真が撮れても、発表可能の限度もありましょう。

しかし、それにもかかわらず、そこには前人未踏の花園があるので、何卒御奮発いただきたいものだと思います。例えば、映画にいくらすぐれた画面があっても、それ切りだし、写真のように、いつも手許において好きなときに眺めるわけにも行きません。それから、映画ではそれ程鮮明でない。先程のロブリジータの足の指も、私も何度か画面をカメラに収めてみたが、動いているので、指の輪郭だけは分るが、足の爪の恰好までは無理でした。それで彼女の足については、矢張り外国雑誌に載った全然別の写真の方が、ずっと優れて鑑賞できます。このように微細な美まで探究しようとすれば、どうしても、映画ではムリで、矢張り写真によらなければならぬと思います。

×

×

贗作・悩ましのサディズム

△森山美歌夫人に関する小品▽

芳 野 眉 美

D 土曜日午後七時

△わたくしの胸に秘めた青白い焰は、献身的にわたくしに奉仕するSとMという二匹の雄犬を責めて、土曜日の昼から月曜日の朝まで激しく悩ましく燃え続けるの。

わたくしの性の倫理は、環境や生活の範囲内で本能を最大限に楽しむという事ですの。ひたすら快楽の探求に生きているといったらおおげさかしら。

わたくしの妖しい責めのお遊戯は、それはそれは凄いものなのよ。

わたくしは二匹の雄犬に対して、奔放に君

臨するの。一糸もまとわず、何もかも露出してよ。

わたくしの意志が露骨になればなるほど、雄犬たちは驚きあわてておかしいほど敏感に反応するわ。その反応を見て、わたくし自身も興奮し、狂おしいお遊戯が次々に展開されますの。

わたくしの美容のために、二匹の雄犬を虫けらのようにわたくしの足下にのたうち廻らせて、その精分をすっかり吸い取ってしまうわけね。

男は女をいつまでも美しくするための肥料にすぎないのですもの。古城さんも、わたく

しの肥料になりたくなくて？▽

古城真が受け取った、美歌夫人の手紙の一節である。

美歌夫人が拷問の部屋と呼んでいる、美歌夫人の寝室での遊戯は、土曜日の午後一時から始まっていた。美歌夫人の手紙にあるSとMという二匹の雄犬ではなく、古城真が美歌夫人の肥料にされていた。すでに午後七時を廻っていた。

素肌に薄いネグリジェを羽織っただけの美歌夫人が、犬の首輪をはめられて四つ這いになった真の背中にまたがっていた。美歌夫人のロココ風のゴージャスな黒いネグリジェが

真をすっぱり包んでいる。

手綱は首輪につけた鎖だった。

寝室中を追い廻されながら、真は美歌夫人の柔肌がいつのまにか真の背中に触れているのが気になって仕方がなかった。

美歌夫人の露出した柔肌は、激しい息を吐き、熱を帯び、しっとり濡れていた。

「まだ序の口なのよ」

と美歌夫人が真にいった。

「月曜の朝までもつかしら」

背中の美歌夫人が不意に真の頭上に移動した。

床の上につま先立ちながら、激しく腰をゆさぶる。

真の顔をふくよかな美歌夫人の太腿がはさみつけた。まっ白な太腿は汗で濡れていた。

汗ばかりではなかったかもしれない。

「もたなくても、もたせちゃうわよ」

そのままの恰好で床の間の柱まで美歌夫人は真を歩かせた。

柱を背にして真を坐らせると、首輪の鎖で柱につなぎ、真の首を固定した。

美歌夫人は箆笥から手錠と足枷を取り出した。

「いいこと、どんなことをされても音をあげ

てはだめよ」

真の両手をうしろへ廻し、柱を抱かせて手錠をはめ、真にあぐらをかかせて、両足を革の足枷で拘束した。

「これ、なんだか知っている」

美歌夫人が三面鏡の抽出しから取り出したのは、皮の全頭式マスクだった。

「新品よ、まだ」

目と口と耳の部分が穴になっているだけの皮のマスクは、なんとなく無気味だった。

「わたくし、一度、これを使ってみたかったの」

美歌夫人は皮マスクを真の頭にすっぽりかぶせた。

マスクを止めるバンドが首についている。

「よくお似合いよ」

ひやりとした冷たい皮の感触が真の神経を昂ぶらせた。意外な拘束具に真は狼狽した。

種々なサディスティックな小道具を収めた箆笥の抽出しにしまわずに、三面鏡に別にして

おいたのは、美歌夫人が、それだけ皮の全頭式マスクに愛着を感じているせいかもしれない。

皮マスクの頭部につけられた皮バンドで真の頭を嚴重に柱に固定すると、美歌夫人は

しように、マスクの穴から舌を出すように真に命じた。

そして、真がだした舌の根元を、美歌夫人は紐で結んだ。

「こんなことをして、何をするつもりだと思う？」

と美歌夫人がいった。

真の顔は頭と首で柱に固定され、真の舌は口中にもどることさえ禁じられたのだ。

その時、寝室のドアをノックする音がした。

「誰だろう」

と美歌夫人がいった。

「主人かしら」

哀れな恰好の真を見下しながら美歌夫人は困ったような顔をした。

「主人だったら、どうする」

「――」

「ね、どうする」

「――」

「あら、ごめんなさい。それじゃ、お話も出来ないわね」

ノックの音が激しくなった。

「主人に見つかったら、殺されるかもしれないよ」

黒水晶のように光る美歌夫人の瞳でじっと見つめられると、真はもうどうにでもしてくれ、どうなったってかまわないと観念してしまふから不思議だった。

「ほんとうに困ったわ」

と美歌夫人がいった。

「いいことがある」

脱ぎ捨ててあった緋の長襦袢を真にかぶせた。

「これでいいわ」

真の突き出た舌に触れた美歌夫人の長襦袢は、しっとりと汗で濡れていた。

「主人はとても嫉妬深い。わたくしがよめいていると知ったら、何をしてくすかわからないわ」

E 土曜日午後八時

美歌夫人の寝室のドアを開けたのは、金髪のフランス人形のような美貌の女性だった。ローカットのネックラインから盛り上がる胸の谷間がすばらしい。

「なんだ、アリサか」

と美歌夫人がいった。

「なんだとは、なによ」

部屋を見廻して、

「あいかわらず犬をいじめているのね」とアリサがいった。

「そう、その長襦袢の下に一匹」

「誰」

「アリサの知らない新種」

「新種」

「フフ」

「二匹もいるのに、よくばりね」

「多ければ多いほど面白いわ」

「ますます集団的に、ご発展ね」

「集団に倦いたら、どうしよう」

「わる」

「わるでわるかったわね」

「キスして」

美歌夫人はアリサをやさしく抱擁した。厚い濡れるようなアリサの下唇に、そっと接吻する。アリサの舌が美歌夫人の舌にからまつた。

美歌夫人がたしなめた。

「乱暴ね」

「アリサを忘れちゃいや」

「忘れていないじゃないの」

「二匹でも多いのに、また一匹ふやして。この浮気もの」

「フフ、嫉いてるの」

「嫉いてなんかいない」

「あとで、あさましい犬の姿をゆっくり見せてあげるわよ」

ローカットのソフトなドレスを脱ぐと、アリサは裸になってベッドに横たわった。

透色ナイロンパンティの外は、アリサはドレスの下に何も着ていなかった。前がチュールで美しいレースを配し、かいま見る秘所を美しく飾る小さなパンティだった。

洋酒棚から輸入のオレンジ・キュラソーを取ると、美歌夫人はアリサの豊満な乳房に静かに注ぎかけた。

まっ赤なキュラソーは、まっ白なアリサの肌に濡れ、首に流れた。

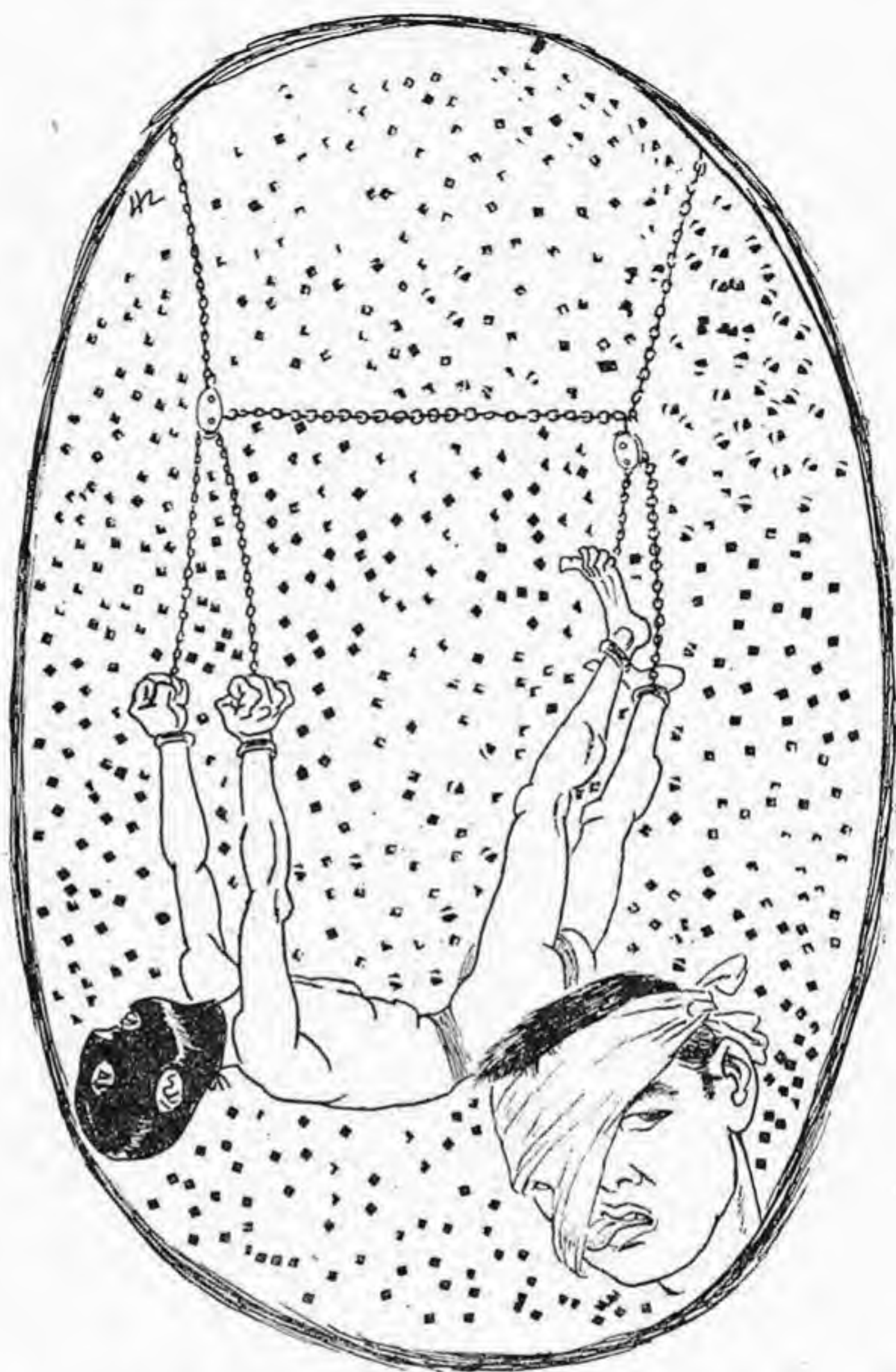
アリサのにじみでる汗とミックスされたオレンジ・キュラソーは、寝室にこの世のものとは思えぬ秘めた芳香を漂わせた。

「アリサのカクテル」

と美歌夫人がいった。その甘い美酒を唇でそっと吸った。

アリサの長い睫毛の影が、閉じた眼にくっきりと浮かんでいる。

美歌夫人の……は、アリサの肌に埋もれた美酒と小さな乳首をひきづりだし、吸いつきまわりついた。



アリサのしなやかな肢体は、美歌夫人の……きにつれて、静かに、また激しく……を続けた。

美しいアリサの肌に、赤いカクテルはうずを巻き、美歌夫人の唇に流れ込んだ。

不思議な熱気と妖気を帯びた美歌夫人の室

は、溶け爛れて悶えるアリサのほっそりした肢体に充ち溢れる。

アリサは……続けた。

やがて、美歌夫人は黒のネグリジェを脱いで、……した。アリサの小さなパンティ

は、いつのまにか美歌夫人の手ではぎ取られ

ていた。

突然、アリサの絶叫が長く尾を引いて寝室をふるわせた。アリサの肩に美歌夫人の歯型が残っていた。

美歌夫人もアリサも、全身にべっとりと汗をかき、その汗は妖しい香気をさえ放っていた。

アリサからはなれた美歌夫人が、床の間の柱に近寄ると、真をかくした長襦袢をめくった。

裸のまま、真の目の前にすくっと立った。

「目を開けなさい」

目をつむる外、顔をそむけようにも、真の顔は柱に固定されて、どうすることも出来ないのだ。

「紹介するわね」

と美歌夫人が真にいった。

「牧アリサ、わたくしのペット」

真の眼が激しいショックでゆがんだ。

「よろしく」

ベッドの上からアリサが真にいった。

「こちら、古城真さん。A大の三年生」

「知っている」

とアリサが叫んだ。

「A大のバスケット部の選手でしょう」

恥知らずの姿を異性の、それも美貌のアリサに見られて、真は絶望した。

「あら、知っていたの」

美歌夫人が疑わしい顔でアリサを見た。

「大学対抗のバスケットの試合で見たことあるもの」

「なんだ、見ただけなの」

「そうよ」

アリサはうそをいっていると真は思った。

アリサはA大学のバスケット部長でもある牧教授の一人娘だった。

牧教授に連れられて、バスケットの練習を見に来ていたアリサを真は知っていた。話をしたこともある。部長教授夫人はフランス人だった。

フランスと日本の混血児であるアリサは、A大バスケット部員の憧れの的であったが、誰も射止めた部員はいなかった。

意外な出会いに、真は忙然自失した。

「アリサは男嫌いだからな、困ったものだ」という牧教授の言葉を真は思い出した。

真はアリサの男嫌いの秘密を覗いたように思った。アリサが美歌夫人とどうして知り合ったのか不思議だった。

「この犬、どこで拾ったの」

とアリサが美歌夫人にいった。

「Mの紹介よ、大学の後輩ですって」

「そう」

「アリサもこの犬を肥料にするといいわ」

「そうしようかしら」

シャワーを浴びてくるというアリサを美歌夫人がとめた。

「そこに舌人形がいるじゃないの」

「舌人形？」

美歌夫人が真に近づいた。

それは異様な光景だった。真は、最早美歌夫人の肥料以外の何ものでもなかった。

容赦ない美歌夫人の凌辱は、サディストであることの権威を象徴するかのように猛威をふるい続けた。

理由の無い嫉妬と羨望がアリサを襲った。

「どいて」

とアリサが叫んだ。

F 土曜日午後十時

古城真の舌の紐を解きながら、

「ちょっと残酷だったかしら」

美歌夫人は静かに微笑した。

とをしてみたくなるの。ごめんなさいね」

浴室で汗を流した美歌夫人は、素肌に緋の長襦袢を軽く羽織っていた。箆の抽出し一つが長襦袢で埋められているのは、美歌夫人の主人の好みなのかもしれない。

「カーテンレールを気にしていたわね」と美歌夫人が真にいった。

「カーテンレールが、どうしたって」

浴室から出て来たアリサが美歌夫人にいった。

「古城さんがね、カーテンを掛けるだけなら

太い鉄の棒はおかしいって」

「あら、まだ知らないの」

「古城さんは、何も知らないの」

「そう」

全頭式皮マスクの小さな穴から、アリサを上目づかいに盗み見て真は驚いた。

裸に太股まである皮の長靴という日本人ばなれのしたスタイルで、アリサは真の前に立っているのである。

美しい金髪をグレコ張りに肩までたらし

アリサは、サディストチックであり魅力的だった。皮長靴はこの日仏の混血児のためにデザインしたようなものだと思っ

均整のとれた豊かなアリサの肢体からは、

妙にねばっこい外国人の女性の肌を感じさせた。

若さのなかにも古風な陰翳のある美歌夫人と、外国人の血を受けた現代女性であるアリサのとりあわせは面白く、それだけ二人の遊戯の秘密も興味をそそらずにはいられない神秘性がただよっていた。

美歌夫人の魅力は、一口に言って、静かな微笑であり、黒水晶のように光る瞳だが、アリサの魅力は、やはり美しい金髪と、均整のとれた見事な肢体がポイントになるだろう。

金髪が日仏混血児に生まれるものが、好みで金髪に染めているのか、それともアリサが本当に牧教授の娘なのかどうか、素朴な疑問がわかないでもなかったが、真にとって、そんなことはどうでもよいことだった。

皮の長靴だけで寝室を彩どるアリサを目の前にして、真が興奮しなかったといったらうそになる。真の性傾向がやはりMだったという証拠を、いやおうなしに真は自分の肉体で再確認させられた。

その証拠に気がついた美歌夫人が、

「あら」

とびっくりしたような声をあげた。

「まだ責めたりないようよ」

「そのようよ」

「あきれた」

「カーテンレールが、どうかして無粋な鉄の棒なのか教えてあげたら」

とアリサが美歌夫人にいった。

「そうね、そうしましょうか」

アリサが箆箆から取り出したのは、滑車と太いロープだった。

「これでわかったでしょう」

とアリサが真にいった。

「これから、古城さんを吊るそうというわけよ」

アリサがカーテンレールの太い鉄の棒に滑車をかけロープを下げた。

「さあて、どうしよう」

とアリサがいった。

「どうしましょう」

と美歌夫人がいった。

「肉体の門でいこうか」

「あとで」

「逆さ吊りは」

「それもまだよ、明日があるわ」

「そうだ、W字型がいい」

「W字型」

美歌夫人が黒水晶のような瞳をきらりと輝

かせた。

「それがいいわ、慣れているし」

カーテンレールの四台の滑車が無気味に真を圧倒した。

「――左右の手首足を別々のロープで縛り、天井の四台の滑車に各々吊り上げますの。V字型が二つ、W字型にぶら下げるのですもの、それはそれは変な恰好ですよ。肌に喰い込むロープ、裂けんばかりに開かれた両股なんという気味でしょう。わたくしの汚れたパンティが口に押し込んであるから、Sは悲鳴もあげられないの。猿ぐつわはわたくしのメンスバンドの替ゴム。Sっておかしなのが好きで困ってしまう。Sを天井にぶら下げたまま、わたくしはSを肴に別の男と戯れたの。こんなこと想像できて。男はあなたの先輩のMよ。Sを吊るしてから、Mをベッドに引き入れてSに紹介しましたの。Sの苦痛と羞恥にゆがんだ顔ってなかったわ。いまでも最高のお遊戯だと思っています。わたくしにどんなことをされても、Sはわたくしの飼犬ですものね」

皮マスクとサポーターだけで、カーテンレールにW字型に吊るされた真は、美歌夫人が真にあてた手紙の一節一節をそのまま実行し

ているのではないかという錯覚にとらわれていた。

「いい気味」

とアリサが叫んだ。

「そこでわたくしたちのお遊戯を見ていらっしゃいな」

アリサが床のまっ赤な絨氈の上に膝をつき上半身をベッドに投げ出した。そのアリサの背中に、美歌夫人はアリサの頭に背を向けてまたがった。

美歌夫人の手にはピンポンのバットが握られていた。美歌夫人はバットでアリサのまっ

白なヒップを打ちすえたのだ。強く、激しく

また、軽く、やわらかく、リズムカルにバツ

トはアリサの豊満な臀部に脈動した。

アリサの泣き声が、低く長く、天井の真の

耳にまで聞こえてきた。

皮長靴だけのアリサと、長襦袢だけの美歌

夫人の奇妙なカップルが少しもおかしくなく

美歌夫人の拷問の部屋に調和して、なんとも

いえない情緒を漂わせているのである。

まっ白なアリサのヒップに赤味が浮かびで

て、美歌夫人の指先とバットの動きは、ます

ます佳境に入っていた。

ふと、美歌夫人が花瓶から一輪の菊の花を

折った。

「アリサの一輪押し」

と美歌夫人がいった。

アリサのふくよかな臀部の谷間で、その大

輪の菊の花は美しく咲いていた。

臨時増刊 花と蛇

《小説、絵画、写真》 特集号

四馬孝画「花と蛇」各章クライマックス・シーン巻頭口絵十六葉

グラビヤ・フォト「花と蛇」各場面描写特別撮影写真三十六頁

長篇サディズム小説「花と蛇」第十五回完結まで一挙登載

オフセット印刷緊縛写真八縛られた女体オンパレード

愈々堂々完成 (乞直接お申込) 定価一部 五〇〇円 略号(花)

満天下Sファンの血を沸かせた団鬼六作の傑作サディズム長篇小説「花と蛇」は、皆様の声援により、ここに全篇一挙掲載の特集号として、堂々完成いたしました。冒頭に掲げました巻頭口絵、グラビヤ写真の外に、豊富

なオフセット写真を加えて、文字通りS派垂涎の特集号をお贈りします。未見の方は一刻も早く直接お申込みを——。

内 容

第一グラビヤ

【花と蛇】幻想 新作写真集

本誌写真部 特 写

柱に縛られた美体……………玉田美佐子

厳しき縛しめに喘ぐ……………玉田美佐子

浣腸器による責めの幻想……………大塚 啓子

美貌醜弄(鼻責めの幻想)……………大塚 啓子

裸女緊縛の幻想……………大塚 啓子

両手首くさり吊りの美女の幻想……………大塚 啓子

美女手吊り晒し悶々の幻想……………大塚 啓子

ガラスシリンドラーと裸女責め幻想……………玉田美佐子

柔肌と麻縄の織りなす幻想……………玉田美佐子

《花と蛇》画集 四馬孝・画

一、静子夫人捕わる

二、静子夫人と桂子の対面

三、静子夫人に迫る魔手

四、川田の悪どい企らみ

- 五、桂子と静子夫人のオシメ責め
六、令夫人に対する浣腸の洗礼
七、深窓の美女夫人の晒しもの
八、あぐら縛りの特別席
九、カメラに向けられる苦悶する美貌
十、京子探偵への惨忍な報復
十一、田代と森田にいたぶられる静子夫人
十二、美人探偵京子頑張る
十三、静子と京子の後手吊り
十四、捕われた美津子の姿
十五、京子と妹の美津子
十六、受難の静子令夫人

私のアルバム

私の緊縛フォト・コレクション

- 私の可愛いペット……………梨花悠紀子
明眸のいましめ……………大井小夜子
美女の柱しばり……………絹川 文代
二女連縛 美しき羞らい……………大塚 啓子
着衣剝奪と緊縛シーン……………竹野ひろ子
算盤責めのお仕置……………大塚 啓子
乱れ裾緊縛絵模様……………愛川 悦子
荒縄と竹竿の責め……………絹川 文代
扉 淫蛇に襲われる美女 四馬孝・画

団鬼六作、四馬孝画

長篇「花と蛇」

第一章 発

端……静子令夫人―誘拐
された令夫人―送られた着衣―ズ

ベ公の本拠

第二章

陥 昇……二度目の嫌がらせ
―運転手の正体―地獄の結婚式

第三章

美人探偵……落花紛々―美人探
偵京子―浣腸地獄図

第四章

浣 腸 図……浣腸強制―屈伏

第五章

救 援 者……羞恥地獄―観念の
座―京子の活躍

第六章

救援の失敗……逆転―颯りもの

第七章

好 餌……京子の屈伏―淫獣
の餌

第八章

悪魔の哄笑……毒牙は迫る―新鮮
な生贄―悪魔の笑い―遂に美津子

第九章

地下室……悪鬼の饗宴―美津
子のおとり

第十章

翻 弄……屈辱と羞恥―身代
りに立つ夫人

第十一章

蛇の執念……裸踊り―おしめを
使う夫人―屈辱の挨拶

第十二章

姉妹危し……屈辱の狼ぐつわ―
浣腸競演

第十三章

調 教 師……遂に京子も―土牢
の中―調教師来る

第十四章

美津子受難……二人の美女―調教
師―狂乱の美津子

第十五章

結 末……美津子の屈伏―二
つの肉塊―絶対絶命―美しい童女
―スター誕生

第二グラビヤ

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

- 責めに悶える女体の幻想……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖につかれた幻想……………大塚 啓子
玉簾越しの女体非情の幻想……………玉田美佐子
両手首両足首連縛の幻想……………玉田美佐子
苛められ尽した女体の幻想……………大塚 啓子
羞恥さらし責めの幻想……………大塚 啓子
柔肌に喰い込む縄の幻想……………大塚 啓子
着衣剝奪と浣腸に悶える幻想……………大塚 啓子
光と影による浣腸器の幻想……………大塚 啓子
渾美といましめに泣く幻想……………大塚 啓子
怨嗟と愁嘆、苦痛と忍耐……………大塚 啓子
足吊りに至る過程の幻想……………大塚 啓子

女体緊縛アルバム

- 美女姉妹仲よく縛られる……………絹川 文代
手吊にもだえる八態……………桜井 葉子
美しき捕われの餌物……………絹川 文代
雨中泥まみれの折檻……………大塚 啓子
伸びやかな四肢と縄目……………絹川 文代
緊縛女体の優美ポーズ……………熱海 容子
柱しばり女体悦虐模様……………絹川 文代
縄に憑かれた陶酔境……………梨花悠紀子
ショート・パンツ哀感……………絹川 文代
カメラに全身を晒して……………絹川 文代
レインコートのかがやき……………絹川 文代
紺色の囚衣をまとい……………？
予告いたしました通り臨時増刊号「花と蛇」
特集号は、五月中旬発売いたしました未
入手の方は売切れにならないうち、お申込み
下さい。略号「花」とお書き下されば、折返
えしお送りいたします。

女相撲小説

娘相撲勝拔戦

田 中 一 生

野に山に緑が綾なす五月晴れの或る日。同じ課に勤務している白川綾子嬢と、間近に迫った大相撲夏場所の話に花を咲かせていた。

活潑な綾子嬢は、私同様の大ファンである。いつも最良力士について舌戦を斗かわしている間柄である。今日も例により相撲の取口から最良力士の星勘定と話が進んでいた時、一段声を落した綾子嬢が、秘かに打ち明けた。

「私達、お相撲の稽古をしているのよ」

私は驚くと共に、一度見学させて呉れと頼み込んだ。

「私達だけの秘密だから絶対に駄目よ」

と軽く拒否された。だが執拗な私の頼みに抗し切れず。

「それでは、一度みんなに相談して見るわ」と言う事になった。

そして翌日、絶対秘密厳守することと秋の慰安旅行に、女相撲部に金一封を寄附する事を条件として見学させると言ってきた。内心の喜びを隠して、私も一つ条件があると切り出した。

「勿論秘密は厳守する。そのかわり女子相撲部の相談役として、いつでも稽古を見学させる事。そして金一万円也を寄附しよう」

綾子嬢は少し考えていたが、

「いいわ。私達のお相撲のコーチもして下さるのね。」

私が高校時代相撲部の選手だった事を知っ

ている同嬢の言葉に一も二もなく賛成した。そしてこの次の日曜日。神有電車神戸駅に一時に落ち合う事になった。

当日所用の為二十分程遅刻して、待っていた白川綾子に詫びを言いながら電車に乗り込んだ。十五分乗った頃鈴蘭台駅についた。

改札口を出て西北に向って歩いた。

「ここから相当遠いの？」

私の問いに、

「三十分位かしら」

「何日頃から始めているの？」

「そうね、昨年の九月頃からよ。皆んな同じ庶務課の人よ」

「何人位いるの？」

「そうね、今のところ七人よ。でも用事のある人もあって、全部の人が揃う事は、余りないけれど」

私は内心驚いた。七人といえば同課の女性全部ではないか。それが昨年の九月からと

は、全然そんな素振りも見えなかったからである。

「もっとも冬の間は、お休みよ」

だんだん辺地に行くにしたがって人家もまばら。ほとんど農家である。

「この辺は空気がいいでしょう」

まったくだ。田舎といっても、市内にこんな所があったのかと感心した。薫風が顔をなせ爽々しい。

やがて一軒の農家の前に来た。綾子嬢は中に向って声をかけた。

「おバアちゃん、又来ましたよ」

中から六十歳位の老婆が出て来た。そして私の顔を見て一寸驚いた様な顔をしたがすぐ綾子嬢の方に向き

「もう、お友達は来ているよ」

と言って内に入って行った。

私は綾子嬢に従って少し離れた納家の中に入って行った。納家の中は農具等は片隅に片付けられて真中に大きく円が描かれていた。その横に麦ワラが少し重ねて置かれていた。その上に山本成子嬢が座っていた。

「今日は、三人だけ？」

綾子嬢の問いに、成子嬢は私の方を見て恥かしそうに微笑んでから。

「ええ、岡田さんと小山さんは、用事らしいわ。それに山下さんも急用が出来たんだって」

私は少し残念であったが、綾子嬢を含め



て四人の娘の相撲振りが見学できるので胸は高鳴るのを禁じ得なかった。

綾子嬢が、ちょっと廻しを締めてくれると成子嬢をうながし裏手へ廻ったのを機会に土俵に目をやる。土俵上の二人は恥かしそうに一寸私に会釈した。片や身長一米六十三糎、山田紀代子嬢である。やや痩身で二十四歳である。長い頭髪をアップにしている。

少し古い朱色の帯を、禪代りに締込んでいる。対して北井美恵嬢、昨年高校を卒業入社したばかりの若手十九歳で、身長は一米五十二糎位で稍短身ハチ切れんばかりの若さがある。矢張り黒い博多織の帯を締込んでいる。頭髪は短かくカットしている。顔に若さのシンボルニキビが少し吹き出ている。

躊躇のかまえから仕切りに入る。両者エイと掛声勇ましく立上る。美恵が、若さに物言わせドッと双差しグイグイと寄った。紀代子立遅れ一気に寄られて上俵際辛くも残さんとするを、美恵ぐいと腰を落し長身の紀代子を吊り上げた。紀代子は美恵の腹の上で踊る様に足をばたつかせたが、美恵かまわず吊り出す。残念そうに紀代子が、もう一度と声をかけた。

今度も美恵が双差し一気に寄るのを紀代子

右腕で美恵の左腕を捲くや小手投げ。勢いのついていた美恵は耐え切れず、投げ飛ばされた。

私は感嘆した。会社では日頃つましやかな彼女達が素裸に禪一つの姿で、こんなにも激しく斗うとは想像も出来なかったからである。やがて綾子嬢と成子嬢が入って来た。

綾子嬢はスポーツ万能でバレーボール、バスケ、トボールは得意中の得意である。

一米六十五糎、五十五キロ、二十一歳の若さとハチ切れんばかりの肉体美。短くカットした頭髪に黒い禪を締込んでいるのが良く似合う。

成子嬢は中肉中背といったところである。

長い頭髪を無造作に後に束ねている。矢張り帯を禪代りにキリキリと締め上げているので腹部が一寸突出され白い裸身が紺の禪の色にマッチして美しい。大きく股を開き足を上げて四股を踏む姿はまるで絵の様である。特に四股を踏む時の下腹部から内股にかけて筋肉の躍動は艶めかしい。互いに稽古をし一息入れた所で、私の提案によりトーナメント式勝抜優勝決定戦を行う事になった。優勝者には資生堂のヘリオトロップ香水を贈呈する事になった。

抽選の結果、先ず紀代子と成子が対戦する事になった。両者は同課で一二を競う美貌であるだけに相手を意識しあっている。

先程の稽古相撲でも、力量は互格であったが、特に今日は男性の見学者もあり、共に負けられぬ一戦と互いに口元をキッと引きしめてのニラミ合いの末、双声を上げて二つの女体はぶつかり合った。ムンズとばかり互いに組付いて右四つ。成子がグイグイとあふる様に寄る。紀代子廻り込む。成子再び寄る。紀代子も寄り返す。互いに上手まわし下手まわしを引付け合っている。

成子、今度は腰を落して吊り上げる。紀代子、懸命に足をバタつかせ耐える。成子なおも吊り上げんとするも、紀代子のまわしがズルズルと延び吊り切れず。紀代子残すや、逆に吊り上げんとする。成子外掛けに防ぐ。両者渾身の力を込めての攻防に全身汗が吹き出ている。女腹と女腹は、互いに大きく波打ちぶつかり合っている。乳房と乳房は互いに相手の乳房を押込まんとするかの様に揉み合っている。両者の白い女体は桃色に色づきことを先途の攻防である。土俵中央、一呼吸二呼吸。成子が紀代子のまわしをグイとばかり引きつけるや寄る。丁度、私の目前に背を向け

腰を落してガブル様な寄りである。

紀代子ズルズルと追い込まれる。紀代子土俵際弓なりに反り返る。成子、のしかかる様に浴びせる。寄り倒したかと思った瞬間、スローモーション映画の様に二つの女体はパツと二つに割れた。

成子の白い裸身が空に舞った。二つの女体は、仰向けにドウと崩れ落ちた。見事な打棄り。紀代子の勝である。破れた成子は唇をグツと咬みしめ無念そうな表情で立ち上る。

次は綾子と美恵である。勝負は簡単に決まった。美恵、立ち上りざまガンと飛び込むのを綾子ガッチリ受けとめるや一気に寄る。美恵、必死に寄り返す出鼻を上手投げ。小柄の美恵、耐え切れず頭から投げ倒される。

いよいよ決戦である。先程の大相撲でゆるんだ揮を締め直し紀代子が土俵に上った。少し遅れて綾子も土俵に上る。両者上背はほぼ同じであるが、重量では紀代子の四十七キロに対し、綾子は五十五キロで、相当上廻っている。

両者蹲踞のかまえから腰を落して仕切りに入る。白い裸身に朱色のまわしの紀代子。少し日灼けた肌に黒いまわしの綾子。一廻り綾子の方が大きい様である。両者エイと声を

上げて立ち上る。互いに相手の体に自分の体を叩きつける。バシと音を発し組み付いた綾子。素早く双差し、紀代子の前まわしを引きつけた。そして紀代子の体を引きずるや一気に寄る。紀代子、棒立ちの態勢で懸命に耐える。綾子、今度は紀代子を吊り上げる。紀代子、足をばたつかせて残さんとする。

まわしがズルズルと延び、前ダレが延びダレと下っている。紀代子のまわしは、綾子に引付けられ胸乳迄延びている。吊り切れずと見た綾子、再び双差しから前まわしを二重三重と充分に取るや強引に引き付けた。紀代子も腰を落して耐えんとする。紀代子の朱色のまわしが、グイと延び、その下に腹部が大きく波打ち、脇が息づいている。綾子、再び吊り上げる。紀代子のまわしは引き付けられ股間に喰込んで痛そうである。

紀代子、今度は綾子の内股に足をからませて懸命に残す。素早く右を捲き替え右四つ必死に寄る。綾子土俵際廻り込むや逆に寄り返えし。土俵中央両者汗にまみれ、大きく肩で息をしている女腹と女腹は大きく波打ち、綾子の黒いまわしと紀代子の朱色のまわしは、共に乱れ、互いに競い合っている。

一呼吸後、体力に勝る綾子が左からの上手

投げ、紀代子の体勢崩れ、危ふかったが辛うじて残す。綾子さればとばかり、グツと腰を落すや、紀代子の下腹部に腹部をガッキと当て、一気にガブリ寄る。紀代子、棒立ちの態勢で頭を左に右に振りながら懸命に耐える。綾子、休まず寄り立てる。土俵際、紀代子、満面に朱を注いで必死に打棄らんと齒を喰いしばり股を大きくふんばり死力をつくして頑張ったが、綾子のまわしがズルズルと肩口まで延びて力が入らず。綾子、左上から立揮をつかみ紀子を抱え込む様に引付け右手で紀代子の首を押えつける。そしてのしかかる様に浴びせる。紀代子、必死の形相で耐えていたが、顔面が泣出す様に歪んだかと思えた瞬間、朽木が倒れる様にドウと崩れ折れた。

その勢いで綾子の腹部が仰向けに倒れた紀代子の顔面を強打、下敷きに組み敷いた。

紀代子、ウーンとうなって立ち上れない。軽い脳震盪を起したのだろう。少しボンヤリしていたがやがて気がつき。まわしの乱れに目をやり恥かしそうに裏手に走って入った。

私は両者の力斗熱戦に心から拍手を送ると共に、良くここ迄稽古を積んだものと感心した次第である。

心の十字架

マゾヒズムと貞淑と

近 藤

一

マゾヒスティンである人妻は姦通し易いということは何かで読んだことがあった。またマゾヒスティンは貞淑な人妻に多いということとを、私は最近のKK誌上で読んだ記憶がある。心に十字架を背負うために進んで罪を求めることは充分あり得ることだが、同時に後者の主張の現実性も、私自身の経験から、かなり高いと思われる。

私の妻は、結婚後に初めて被虐性を現わしたものでなく、悦虐の性向によって私との交

際を深め、その結果結婚に至った者であるが今日まで極めて貞淑な人妻ぶりである。妻となったことを転機として、独身時代とは違った悦虐表現を示すようになって来たが、マゾヒスティンは貞淑な人妻に多いことを、私は実感をもって推測することができる。

貞淑な妻は、夫の歡びを歡びとする筈だ。愛する夫のために、「昼は淑女、夜は娼婦」になりきる努力をいとわない筈だ。どのような淫らな辱しめも、それが愛する夫の意思に



よる限り、最上の贈り物として受容れることができるだろうし、愛する者の膚の感覚が淫らがましさを完全に美化してしまうのだ。

貞淑な妻は激しい情熱の持主でなければならぬ。冷えきった不感症は貞淑とは無縁なのだ。激情の炎に女体を燃え上らせながら、しかもそれを美しい悶え、しっとりとした潤いの中で表現し、ひたすら愛する男のみ、惜しみなく捧げ尽すことこそ、貞淑の極致ではなからうか。

貞淑な妻は忍耐強くなければならない。いかなる中傷や疑惑にもまげず、愛する男の信頼を裏切るまいと、一筋に男の戻りを待ち詫びる中に、女の幸福を感じ取るのが貞淑な妻の姿であつてみれば、その強靱な愛の心は柔軟な鋼よりも丈夫の筈だ。まして心の痛みに比べれば女心を傷つけることの少ない肉の痛みに耐えられない筈はない。

貞淑な妻は、愛する夫から加えられる嗜虐を、たとえそれを烈しい愛戯と受止めなかつたとしても、愛するがゆえの折檻、自分という女にふさわしいお仕置として抗らうことなく受忍するだろう。貞淑な妻は夫へのゆるぎない信頼を持ち、夫に対する従順と忍耐と満足とを併せ持つ結果、夫が望むならば容易に

“悦虐の女”に成長する筈である。マゾヒスティンは、それが高度のマゾヒズムに支えられる限り、独裁的支配者への隷属を憧憬する結果、女としての心身を捧げつくし、もし彼女にふさわしい嗜虐性向の夫と結ばれたならば必然的に貞淑な妻になるであろう。唯、私の言うマゾヒズムは被虐の心理面を多分に尊重する。縛られ、突かれ、裂かれること、物理力により苦痛や傷つくことの生理感覚のみが愉しいという向には縁が遠い。そういう暴虐の中に屈辱を感じ、切なく烈しい被虐の哀歎に身をもだえるために縛りや折檻を受け、さらに心理的に完全な被支配を求めて女囚・女奴隷・女体家畜・雌獣となりきろうとするような、そんなマゾヒズムを指すのである。マミこと松本富美子が語っていた話を終りに記しておこう。

× × × × ×

私の知っている人に、変った男の人がいます。色魔というのかしら、女蕩しのテクニクは独特のものがあるんだと思います。それも狙うのは人妻ばかり。処女などには見向きもしません。男を知らない女なんか、面倒なばかりで、愉しみが薄いというのです。といってフラッパーもいけません。唯一人の男に

身も心も捧げつくしている女が最も情緒豊かな存在だそうです。ですから志操堅固な、貞淑な人妻が、本当の女の色気を持っている、食指が猛烈に動く対象者だというのは、この人を、仮にS氏としましょうか。

人妻、それも結婚して二、三年を経過したような人妻ばかりをS氏は狙い、誘惑し、思いのままにムシってしまうのです。しかも今まで一度もトラブルを起したことがなく、却って恋慕われているのです。

女の肉体の歓びを知り初めた貞淑な人妻ほど魅惑的なものはありますまい。すべてに上昇気運にあるとき、例えば、主婦の座が確立され、肉体の成熟と精神の安定が調和し、生活に落着きとゆとりが生まれ、夫の社会的地位も経済力も順調に伸びているとき、そんなときに貞淑な人妻には思わぬ危険が近寄っているのです。

何となく物足りない気持、静かな水面に石を投げたくなるような危険な気持があるので、魔がさすというのでしょうか。映画やテレビやラジオのドラマとか、小説の世界ばかりによろめきがあるのではありません。現実、貴女の胸の中にだってあるのです。お金持ちの有閑夫人に限りません。平凡で単調で

安全極まりない生活をしていたら、誰だってその恩恵を割引いてしまふのです。

心に空虚を感じた人妻ほど淫らがましいものもありますまい、肉体の結合に対する観念は、人妻と処女は完全に違ふのです。処女には肉欲を忌む潔癖感や未知の性行為への恐怖や処女膜の価値評価が極めて強固にあるのですが、女の肉体の欲びを覚えた人妻には、心と体の矛盾があるのです。肉の誘惑は余りにも大きいのです。社会的地位の向上について夫が必然的に仕事に没頭することが不満の種となり、そして自らを不幸とも思いがちなのです、そこに精神的なマソヒズムの芽生えがあるのです。

幸か不幸か、人妻の肉体はアバンチュールにぴったりのです。夫を訝しく思わせる処女膜の異状はありません。万一妊娠しても、人妻の懐胎は、法律さえ容認してくれるのです。バレさえしなければ、却って飲ばれるかも知れません。だから病気を感染させられなければ、そして妊娠することさえ無ければ、それは適当な刺激かも知れないのです。自らの名誉、安定した妻の座が守られさえすれば、災難として諦めることも、冒険として愉しむことも、夫に内緒でできるのです。

夫以外の男を求めることが、どれ程大きな罪悪なのか充分に判っています。自分の心もそれを嫌っているのです。それなのに、自分の肉体は夫が優しければ優しいだけ、変った荒々しい愛撫を求めてしまふのです。そしてやがて女の心の中に妖しい魔性の部分を確立させてしまふのです。

S氏は気さくな紳士というタイプです。女に対して見えすいたお世辞を云いません。話題が豊富で誠実味のおふれる言動が、女の口を自然にはころばせるのです。S氏は女を直接褒めません。蔭で褒めるのです。でも、蔭口は割によく本人に伝わるものです。S氏は狙った女と面と向かったら、女の夫や子供や家庭を褒めるのです。女は自分が褒められたように錯覚します。S氏は女を食事に誘いません。女を警戒させないためでしょうか、女をお茶に誘って、その場の成行きで食事に進ませてしまふのです。

女を愉しくさせている最中に、S氏は女を送ると云うのです。女はS氏を信頼し、しかも離れ難くなるのです。そしてS氏と女を乗せた車はS氏の秘密のアジトへ直行します。女はもうかなり酔っています。人妻のアバンチュールに陶醉しています。両手を括り上げ

るのは訳ないこと、アルコールが人妻の虚飾を消し去り、人妻の淫らがましが露呈されるのです。女は脱ぎたくなっているのです。パンティだけを残せば女は安心して裸に剥かれます。

汚辱に耐えかねて降伏した女は幾らでもいたぶりが加えられます。そしてカメラとテープレコーダーが活躍するのです。貞淑な人妻が淫らな喘ぎの間に屈辱極まりない誓いや哀願を強制されるのです。

「私は、世にも浅間しい牝の豚、ボテ」でございます。私は、昨日まで、野原郁子と名乗りが、二十七歳の人妻を装って生きて参りましたが、本日S様のお情によりまして、私の本来の姿に立帰らせて頂きました。大学教育を終るまでの私は、思いついた愚かな娘でございましたけれども、結婚によりまして私は男の方の貴さを身にしみて教えて頂き、人間を捨てて牝の白豚として生きることこそ私の幸福なのだと思わせて頂きました。それ以来一切の運動を差控え、栄養を充分にとり、全身にたっぷり脂肪が蓄えられるよう励んで参りました。お蔭様で、学生のころスポーツで鍛えたスマートな肢体は面影もなく消え去り、ボテボテと脂の厚い膚の白い、牝豚の体

になることができました。私の御主人様も飲んで下さると思います。私も心から飲んでおります。でも、私には、まだ魂がございません。牝豚として一生を貫くための魂を入れて頂いておりません。S様、お願いでございます。S様のお情で、ボテの下腹にたっぷりとしと牝の白豚にふさわしい命の素を頂かせて下さいませ。」

「私は恥知らずな人妻、藤島泰子、二十四歳でございます。私は男の方に飲んで頂ける体になり、始終痺れている自分の姿を夢に見て参りました。私はお化粧に努め全身の美容を繰返し、膚を白く美しくする努力を続けまし

△読者への伝言板▽

○電話にてのお問合せや照会、並に直接のご訪問は一切お断りいたします。ご連絡はすべて書面にてお願いいたします。面識のある方以外は、電話と訪問はどなたからも受付けていませんからご諒承下さい。

○住所氏名年令職業用件などをご明記の上事前に書面にてご連絡下さった方には、時間に余裕のある限り、つとめてお逢いするようしておりますから、ご遠慮なくお便り

た。私のヒップは遅くなり下半身はぐっと反り返って烈しくふるえることができます。でも、でも、私の乳首はまだ昔のままの色です。私はもっと黒ずんだ色にしたいのです。御主人様も、それを望んでいらつしやいます。S様、泰子の乳首を黒ずんだ色にして下さい。泰子の乳房はこんなに柔らかく弾んでいます。泰子のお腹に縦の筋をくっきりつけて下さい。お願い致します。」

「私、池沢和子は、不注意にも、自分が大きな過ちを犯していることに気づきませんでした。私は只今から、その償いを一生懸命にさせて頂きます。私はブルジョア娘として虚栄

下さい。何事に拘らず読者の方との電話応待はいたしております。

○切手を貼らずに投函されました当社宛郵便物は『受取拒絶』することがありますから、ご留意願います。

○読者通信や連絡文など、必ずタテ書きにお願いします。原稿や読者通信のヨコ書きは、すべて採用いたしかねます。

○本誌では通信文の交換文通の斡旋読者の紹介など一切いたしております。

心を育てて参りました。自分では何も出来ない能なしの癖に労働者を軽蔑し、せいたくを重ねて来ました。男の方が生産なものを、女の癖に、当り前の顔をして消費して、大勢の男の方を苦しめていたのです。私は三十四歳の姥様でございますが、せいたくのせいか若く見られます。もし、私のような者でも鬨り者にしてやろうとおっしゃるお情深い男の方がございますならば、私は、すぐにもとんで行って、その方の足許にひれ伏します。S様、私の父や夫が持っております会社の労働者の皆様に代って、能なし女の私が犯しました罪の償いに、存分のお仕置をなさって下さいませ。」

そして、更にもう一人。

「私は大勢の男の方をお慰めすべき女の身でありながら、その勤めを怠っております。その罰として、私は夫を喪いました。今は、私は、本来の姿に戻りました。私は女です！私は娼婦です男の方の玩具なのです！一人でも多くの男の方の御満足を得るために、私は肉体の総てを捧げてお仕えます。お願いです。私を弄んで下さい。私は娼婦、未亡人という名の娼婦、松本富美子です。」

私、マミも浅間しく悶えたのです。

湖
畔
月
影
抄

(後編)

瀨川泰子

夜雨

猪苗代盛国は、帰城早々に新之丞の一件を耳にした。

こわつば
△小童め！▽

と舌打ちし、奥の間に通つて、雪江の手から薄茶の碗を受けとりながら、じつと雪江の面を凝視した。

抜けるように白い肌、薄紅を散らした頬、真紅にくっきりと浮かぶ唇、濡れたような黒瞳——盛国は、見ているうちに、ひきこまれ、
そんな情感に突きあげられた。

へこの女を、命をかけて慕った若者がいた。Vとすることで、盛国の情感は、奇妙に

屈折し、あおられた——嫉妬ともいえる。や
みくもの欲情ともいえる。命をかけるに値い
する女を、わがものとしてゐる疚うずくような喜
びともいえる。離れていた十日前後の空白が
いっそう自分を駆りたててゐるのだと、盛国
は、夜の来るのが待ちわびられる思いだった。

黄昏頃から雨あめになった。

帰城してからずっと。盛国は、それとなく雪江を観察していた。隣室まで忍び寄った新之丞が、及ばぬ想いを秘めて腹をかつさばいたという一件は、どんなに雪江を驚かせたことであろう。その恐ろしい一夜の体験が、雪江の中にどんな変化を来たしているか。何事もなかったように装ってはいるが、何かしな

心の傷手を受けなかつたはずはない。それが
どんな形で現われるか。――盛国は、妻の心
を垣間見る思いで、さりげなく、じっと目を
つけていた。

細められた燭台の灯りが、適度に闇を照ら
 していた。室内にくりわたる薰香の香りが心
 なしか今宵は妖しく五体を包みこむような気
 がする。

ふかぶかと褥しとねに横たわった時、雪江はせつなげに盛国の胸に顔を埋めた。

「大殿さま。……もはや妾を独りぼっちにな
されますな。お離しなされてはなりませんぬ」

息の下から洩れるような熱い囁きが、訴えるように雪江の唇にのびた。それだけで、

もう盛国の中で、何かが燃え、たぎり、泡だつた。かたく抱きしめた盛国の腕の中で、雪江のからだは小刻みにふるえているような気がした。いとおしさが、咽喉もとにこみあげた。

「離しはせぬ。……もう何所へも行きはせぬぞ」

盛国は、解きすべらかして被打っている雪江の黒髪の中に、五本の指を突きたてると、ぐいと引いた。雪江の顔が、思わず盛国の胸板を離れて上向きになった。あふれるような艶やかさが、その瞳の中にあつた。

「雪江。わしはこうしてそなたの側におる。こうしてしっかり抱いておる。恐ろしいことは何もないのじゃ。愚かしきことは、一切忘れるがよい。痴者の所行など、忘れ去るのじや」

△精いっぱいに縋りついているこの女の可憐さは、どうだ！すべてを投げ出して、しがみついているこの女体のかくわしきは、どうだ！……△——盛国は、いきなり雪江の胸もとを押しはだけると、あらあらしく、そのふくよかな肌におもて面を伏せた。

遠くで雨の音がしていた。堰を切ったような、猛暴な男の行為に身を任せながら、雪江

は、その雨の音を聞いた。盛国のうめくような囁きが、耳もとで雨の音を消した。あらあらしい息づかいが、はじめて新之丞のからだを知った夜のあの若者の新鮮な印象を、不意にからだの隅々に蘇らせた。雪江は、思わず盛国の背を強く抱いた。……雪江の中で、盛国と新之丞は一つに溶けた。目をつぶれば、暎の裏に、若く、たくましく、ういういしい新之丞が、あざやかに生きていた。渾身の力をこめて、われとわが腹を裂いたあの鮮烈な姿態が、あふれ出る血の真紅とともに、異常な昂ぶりとなって雪江をゆさぶった。

盛国は、このようにみずから燃える雪江をはじめて見た。——遂げられぬ想いに死んだ人間さえいる。それなのに、このわしは、……このわしは、この女のすべてを、思うがままにできるのだ。どんなことでも許される。……しかも、雪江は、このように燃え、没入し喜悅しているではないか！……△

逆巻く怒濤が、いちどきに退き去った後のような、底知れぬ虎脱感の中で、二人は横たわっていた。——雨の音が、静かに、再び雪江の耳に伝わって来た。

人間が、それぞれに一つの個体として存在することの悲しさを、一挙にとび起えて融け

合おうとする営みが、男女の有り様なのであろうか。しかし、どれだけ強く抱き合い、触れ合ってみたところで、所詮一つに融け合うことなどできるはずがない。融け合ったと思う錯覚の中で、たがいに愛を確かめ合い、信じられると自分にいい聞かせ、痴呆のように深い眠りにおちて行く人間——愚かなことを繰り返しながら生きる道程の中で、最もむなしい愚行なのかもしれない。△妾は、大殿を瞞しおおせた△と思った瞬間、雪江の胸に、ふと、そんな感懐がよぎって消えた。誰も、他人の心の奥を見きわめることはできないのだと思うと、張りつめていた不安が、他愛もなく崩れて行くような気がした。

「わしはな、温泉で、伊達の密使に逢うて来た」

盛国は、深い疲れから自分を取り戻すように、天井を見たまま、ぼろりと口を切った。

「……」

雪江は、盛国の横顔を見た。まだ汗が薄く小鼻のあたりに残っていた。

「わしはやるぞ。会津領半国と引き換えに伊達への内応を約しておいた。……だが、軽々しくは起たぬ。戦国の世の習いじゃ、勝機の見きわめがつくまで、じつくりと時を稼がね

防は一進一退して、戦局は膠着し、一か月はむなしく流れた。

芦名義広は、側近數十騎に守られて、いったん黒川城（会津若松）に戻った。新たに戦略をととのえるためである。

猪苗代盛胤は、手兵の半ばを引き連れて、御機嫌伺いのため黒川に発った。——七月十四日のことであつた。

湖畔の松並木のかげに消えて行つたこの一団を、楼上から見送つた盛国は、ひそかにほくそ笑んだ。

側近筆頭広瀬藤内が、盛国の居室に呼ばれたのは、それから間もなくであつた。暫時の密談の後、居室を出て来た広瀬藤内の面は、異状な緊張にこわばつていた。何とはなきあわただしさが、隠居所への侍臣の動きの中におのずと醸し出された。しかし、これが何であるのか、確かなことはわからない。波のように伝わる動揺が、目に見えぬ不安をそそつた。

翌十五日辰の刻（午前八時）——盛国は、広瀬藤内、矢内八郎左衛門以下屈強の侍臣を従えて本丸に乗りこんだ。曾って自分が坐り、今は盛胤の座所となつてゐる大広間の正面に、盛国は傲然と坐を占めた。

「本日以後、猪苗代城の率領は、予が手にある。思えば、退隠以来一年有半、予息盛胤の行状を傍見するに、戦国武將として、誠に寒心に堪えざるの状歴々として算することが出来る。特にこの度、義広公、伊達勢と対陣されるに当たり、戦場は当地より幾程も遠ざからず、御命なくとも、率先して陣に赴くべきはずなるに、兵を動かす気配さえなく、いたずらに黒川城に参入して御機嫌伺いとは、猪苗代家一門の面目よりして、遺憾千万。かくの如きの根性にては、この乱世に処しがたしと見限り、当家本来の一分を相立てるため再び予の手に采配をとるものである。盛胤において、もし不服を唱うるならば、わが子なりとも相許さぬ。骨肉相食む一戦をも辞せぬ覚悟である。一同の者、異議ありや否や」

盛国は、吹っ切れそうな瞋をすえて、はつたと睨んだ。顔見合わせ、囁きかわす余裕さえ与えぬひた押しの宣言だった。八お家が真つ二つの割れた！Vという思いは、晴天の霹靂のように一同を打ったが、不信と動揺の思いは、ただ胸から胸へとひそかに伝播しただけだ。

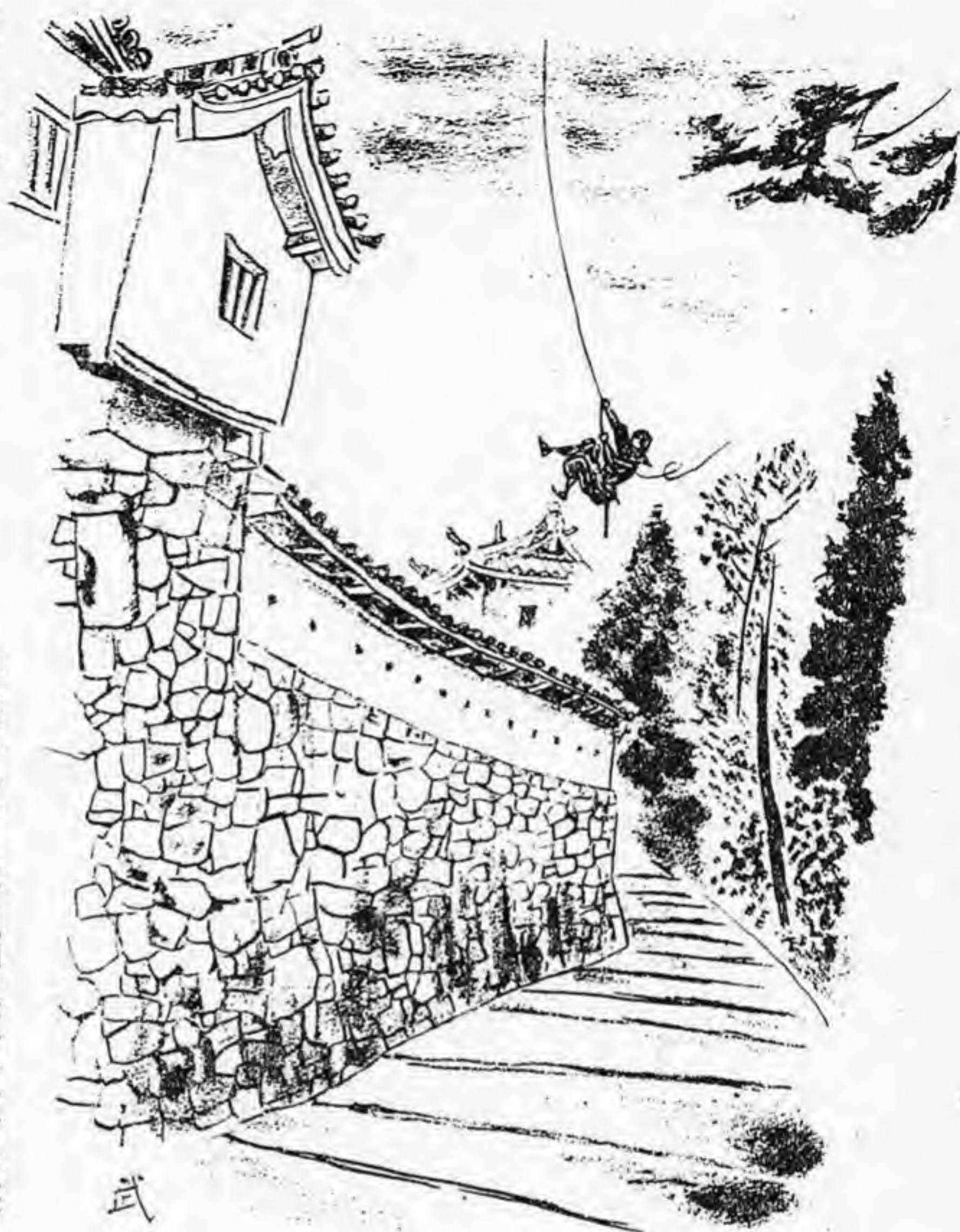
盛国は、自分の中に残つてゐたこの威力に満足だった。若冠盛胤如きの持ち得ぬおのず

からなる武徳がわしにはある、と思うことで盛国は、すでに事の半ばは成功したと確信できた。八これらの者は、わしの手足となつて働く奴じゃV——盛国は、やわらいだ表情で改めて一座を見渡した。

実は盛国は、前夜のうちに、密使を政宗の陣に放つてゐた。書面には、「かねて内応の密約を相果たすべく、第一段の挙に出すべく候。まず以て、当城の実権を手中に納むるため、嫡子黒川城伺候の際に乗じて功をおさめ、他日の好機をうかがうべく候間、期してお待ち下されたく候。但し、このたびの御陣、御武運強くいらせられ、芦名勢いかほど大勢これ有り候とも、何程のことか候べき。されど会津領内の構えは、決して薄からず、このまま一押しにお攻め遊ばさるるは危殆この事に御座候。よき程にてお手打ちなされ、他日を期せらるるこそ上策と愚考仕り候」とあつた。——盛国の遠謀深慮は、見事に両面策戦に功を奏したといえる。

奔馬

盛国は、城門を閉ざして、家臣一同の下城を禁じ、盛胤の妻女伊都子の身辺には、それとなく監視をたてた。盛胤への通報を懼れた



武 主

からである。

八ツ半刻どき（午前三時）、北門近くの城壁に
 そつて、小柄な黒い影が動いた。猪苗代城は
 突兀とつこつと聳そびえる小丘の上の山城やましるである。天然
 の要害をたのんで、城壁はさして高くはない

六尺棒をかいこんだ見廻りが行きすぎた後、
 人影は、大木のかげから更に東に動いた。あ
 たりは、皓々たる満月の光にぬれてあらわで
 ある。黒ずくめの軽装で、一見忍者とも思わ
 れるその影は、松の枝から塀に乗り移り、さ

つと身を躍らすと、そのまま土壇の急傾斜
 を滑り落ちた。からだは石垣に支えられる
 や、素早くあたりを見廻し、石垣に吸いつ
 くようにして平地に降り立った。馬場の柵
 について身をひるがえしながら、侍屋敷の
 一角に取りつくと、あとは、塀沿いに一散
 走りだった。

坂部保馬の屋敷の潜り戸に消えた影は、
 音を忍んで雨戸を叩いた。

「父上様。……父上様」

声を殺して、二言三言するうちに、雨戸
 が細目に開けられた。灯りを背にして、寝
 衣のままだが、老人の左手には大刀があっ
 た。

「早苗でございます」

「何と……何といたした」

月光に透し見た異様に風態のわが娘に、
 老人の目が怪訝けげんに光った。

「入れて下さいませ」

いうなり早苗は、身軽に隙間から滑り入
 った。老人は、用心ぶかく外に気を配ると静
 かに雨戸を閉じた。

「大殿様としたことが、何たる御所行じゃ。」

……して、藤馬は何といたした」

「御家中衆と御一緒に、御城中におられます」

「腑甲斐なき奴じゃのう。何とでもして、忍び出る工夫はつかぬのか」

「御無理でございます。叶わねばこそ、女の妾が奥方様の使者にたちました。奥方様は、心が落着かぬほどに、茶をたててたもれと御せられて、妾をお側に引きつける口実を作られ、御前で一服さし上げました折に、何ぞ手だてを講じて、このことを、一刻も早う黒川なるお殿様へ注進してたもらぬかと訴えられました。虎口を遁れる思いで、やっとたどり着きました次第でございます」

「あっぱれじゃ。ようやった。だが、これらが大儀じゃぞ。……この門前より馬をとばしては、人々の眠りを破る。逸早く露顯いたすは必定じゃ。町外れまでは馬をひいて行くがよい。蹄に草鞋を食わせれば音はせぬ。町外れまで行ったら、そこから一気に鞭をくれるのじゃ。……よいが」

「はい」

老人は、熱い湯茶を飲ませてやるがよい、と老妻を振り返って立ちあがったが、

「待て、早苗。わしも共に行こう。もし追手がかかった時、二人別々の道をとれば、いずれか一人は無事に着ける。天運幸いすれば、二人ともども、殿にお目通りも叶おうが、時

と場合によつては、わしか、そちか……。奥方様のお言葉とあれば、必ず御注進いたさねばならぬ。……覚悟はよいな」

と、妻と娘を半々に見ながら、固い決意に老人の拳に力がこもった。

やがて、二頭の馬は、月明りの中を裏門からひき出された。

「母上様。行って参じます」

早苗は馬の口を取り、父の後から歩み出したが、もう振り返らなかった。塀と沿い、木立の間を縫い、道標のかげを通り、二人がようやく町筋を離れようとする頃、はるか後方から、迫って来るような馬蹄の音を耳にした。父はビクッと歩を止めた。——たしかに入り乱れる音が刻々と近づく。

「早苗。追われておるぞ。乗れ。わしは、この先からすぐ左に切れて、湖南福良まわりで黒川を目指す。そちは、右に折れて、湖北から戸ノ口をよぎって急げ。むざむざ命を落すでないぞ。……行け」

二人は、同時に鞭をあげた。数丁先の別れ路で、

「父上様っ」

と叫んだ早苗の声をきっかけに、疾風のよな二つの影は、さっと左右に別れた。老い

たりとはいえ、手練の術は争われない。父の影は、人馬一体となって、見る見る月光のかなたに吸われて行った。

追手は三騎——二股道に行き当たってググッと手綱をひかえると、右と左に遠目をきかせ、耳をすました。馬蹄のひびきは、深夜のしじまを破ってはつきりと聞える。しかしそれは、湖に向かつて、東からも西からも聞かれるような気がした。木魂であろうか——音は刻々に遠のきながら、なお湖北を西に向かう方からの音が、一段と冴えている。

「あれだ。満月がもっけの幸い。見えたぞ」
一人が、勢いこんで西の彼方を指しながら馬腹を蹴った。

早苗は、たてがみにしがみつかんばかりに身を伏せて、奔馬の疾走に一途の悲願をかけた。腰が鞍上に躍り、吐き気を催すほどに、五臓六腑は上下に揺り動かされる。八是が非でも走りぬけねば……Vと思いつめながら、背後に迫る急迫の手が、今にもガクッと項のあたりに襲いかかって来そうなおぞましさに身内がしまった。

行けども行けども、果てしない無限の道なのではあるまいか。風より速く突っ走りながら、黒川の城は、幻のように月天の奥に吸い

こまれて行きつつあるのではなからうか。不安と焦躁が胸に渦巻いた。

何十騎とも知れぬ追手が迫っているのかもしれない。咽喉がむやみに乾き、息が切れた奥方の憂わしげな面ざしが眼前に浮かび、とりすがるような深い瞳が、物の怪のようにつきまとった、

△近づいていることは確かなのだ！△と、思いきり鞭を当てた瞬間、岩を噛むようなすさまじい音がガガッと背後に起り、一騎は早苗の側をすれすれに通りぬけた。

「止まれっ」

怒号が、早苗の耳を劈き、馬は棒立ちになって停止した。危く落ちかかり、手綱をしぼってようやく堪えた早苗の両側に、二騎がびったりと寄り添った。あらあらしい息が、四人の口から一斉に洩れた。△捕われた！△という衝撃の一瞬にも、早苗は不思議に「死」を思わなかった。「むざむざ命を捨てるでないぞ」といい残してくれた父のことばが、早苗を支えたのかもしれない。

むんずと覆まれた覆面が剥ぎのけられた時「やや、早苗殿ではないか」

と、驚きの叫びをあげたのは、兄藤馬の親友佐々木甚内だった。覆面の中に巻きこんで

いた髪が、ばらりと、肩先からかけてこぼれた。汗の浮いた早苗の面は、ぼっと朱をおび、強い眸が、美しく凜々しかった。

「大殿の御命にて、われら三名追手に差し向けられました。神妙に御同道下されい」

甚内は、きびしい語調の中にいたわりをこめていうと、早苗の刀を没収した。

△こうなった以上、しなければならぬ何かを待っている。……思いもかけぬことが……△Vと思い、女々しくあつてはならぬと、自分にいい聞かせた。馬首を返した四騎は、早苗の中に取り囲み、速歩で猪苗代城を目指した。

長 恨

「何、坂部保馬の娘？よし、予じきじきに取り調べる。苑庭に引き据えろ」

盛国は、広瀬藤内の報告を聞きおわると、つと座を立った。△伊都子の差し金にちがいない。嚴重な監視の中を、よくも脱出しおつた！△Vと思うと、裏をかかれたことが、無性に腹立たしかった。

月の明りだけでも十分なところへ、篝火が焚かれて、庭のあたり一面見通しがきく。早苗は、縁に近く、無雑作に束ねた髪形で地面

に端坐していた。縄は打たれていない。

つかつかと縁を渡って来た盛国は、円座にどっかと腰を下すと、早苗の面を凝視した。

憎悪に燃えた目だった。早苗は、その目を直視し、悪びれた様子もなく、ふかぶかと両手をついた。

「面を上げい。……その方は、誰に頼まれて出すぎた仕儀に出たのか。有り態に申せ」

「誰からも指図は受けませぬ。お家の大事と存じ、一存を以て参りました」

「虚言もほどほどにせい。奥附きのその方がきびしい監視をくぐって脱出したからには、誰の指図と見当はつく。……して、その方単身の所行か。馬は何といたして手に入れた」

早苗は、△どうせ知れることだ△という諦めはついていた。

「わが家の馬を引き出しましてございます。父も、共にと申し、別途黒川に向かいました」

「何と！」

「大殿様。他意はございません。ただ、黒川において遊ばした殿様へ、事の次第を御注進申し、お家御安泰のため、恙なく御帰城遊ばされますよう、前以て御勘考たまわりたく思ひ定めてのことでございます」

「申すな。盛胤の気性を、その方達もかねが

ね存じておろう。あつぱれ一城の城主気取りで、この戦国の世に処する道を知らず、親を蔑ろにして、しかも力量不足。加えてあの剛情振りじゃ。何も知らずに帰城したところを有無をいわず従^{したが}わせねば、わが猪苗代家を思う予の深謀は水泡に帰する。その方父子の浅慮は、血を以て報われること必定じゃ。許しがたき所行、以ての外の小細工じゃぞ。……牢に引け」

少しの動揺もなく、盛国の叱責をあびている早苗の中に、盛国は、こみ上げて来る憎しみを感じた。その小賢^{こさか}しい面に、思いきり拳の雨を降らせてやりたい。高手小手に縛りあげて、黒衣に包まれた柔肌に、鞭の音をひびかせてみたい。……盛国はしかし、その激情にようやく堪えた。——坂部保馬が、黒川に奔^{はし}ったとすれば、早晚盛胤は何等かの動きを見せるにちがいない。事態はどう展開するか見当もつかぬのだ。今ここで、この小娘を責め折檻し、そのために思いつめて舌でも噛み切られては事面倒、いずれこの娘を十分に活用し得る場面があるであろう。その時まで、この怒りは鎮めておくべきだと考えた。

早苗は、その場から地下牢に引き立てられた。一方坂部家に走った捕り方は、その母を引

っ捕え、兄藤馬もまた入牢を申しつけられた。

盛胤が、急拠黒川を発ったのは、まる一日後の早朝だった。坂部保馬に注進によれば、芦名家に對する謀叛でもなく、伊達方に内応したという大それた所行でもなさそうだ。しかし、それは表面上のこと——策士である父の性格を誰よりもよく知りつくしている盛胤にとつては、これは、大きな陰謀の第一段階であると、すぐ察しがついた。八実権を父に奪われてはならぬ。猪苗代に残して来た半数の家土達を、没義^{もぎどう}道の渦中におとし入れてはならぬ！——盛胤は、芦名義広の前に、内輪もめの恥を忍びながら、心あわただしく暇を乞うたのである。

盛胤は、滝沢峠を越え、赤井、馬渡を経て福良に達し、更に湖畔の東南横沢村に入った。ここから猪苗代に引返すためには、金曲^{かねまがり}の壘を通らなければならない。ここには、大堀土佐、秋屋半右衛門の両名が、守将として常駐しているはずだ。守兵の数はどれほどでもないが、或は増兵^{あふり}の処置がとられているかもしれない。偵察を放ってみると、案の定、東西三十六間、南北三十七間の柵構^{さんかま}えの中には人数が溢れているという。実はその日の朝のうちに、盛国は、広瀬藤内に人数を預けて、

金曲まで出張らせていたのである。

盛胤は夜を待った。——舟を仕立てて、湖上から金曲の壘に迫る計略だ。暮れるとすぐ手勢を分けて小舟に乗せ、一気に北上した。一手は壘下に上陸し、残る一手は、やや西方長瀬川の河口に上った。金曲を三角形の頂点に据え、その底辺の両端から攻める戦術だった。月はすでに昇ったが、地に伏しながら音を殺して迫る隠密の運びに、守兵は少しも気づかなかつた。

「ワ—ッ」と喊声^{かんせい}を放って一斉に攻めかけた盛胤麾下^{きか}の兵は、たちまち東西二面の柵を破り、白刃をかざして乱入した。虚をつかれた守兵は、周章狼狽、算を乱して北走する。

盛胤は、大堀、秋屋の両守将を追い落とすと追撃を禁じて、いったん柵内に兵をまとめ、使いを馳せて、横沢村まで取って返させた。ここには、数名の馬番を立てて、乗馬をすべてひきまとめておいたのである。湖上を舟行するには、馬は邪魔物だったからだ。しかし金曲の壘を陥れた後は再び馬を必要とした。

父が子を糺弾し、子が父に矢を向けるという血で血を洗う争いの醜さは、盛胤といえども胸痛む思いだ。だが、この際なすべきことは、気弱な躊躇逡巡ではなかつた。すでに第

一矢を放った以上、最後の勝ちをおさめねばならぬ。最後の戦いは、おそらく、猪苗代城、金曲間わずか二里一町の平坦地で行われるはずだ。城は、すぐ目の前になる。……しかし、その城中には、愛妻伊都子が残っているのだ。子の留守を狙って蹶起した父のあくどさを考えると、劣勢を盛り返すために、父は伊都子をどのように扱うであろうか。陣容を整えながら、盛胤の胸中には、この不安が雲のように湧き起った。

一方、墨を追われた大堀土佐は、長瀬川の屈曲線を越えると、西館のあたりに兵をまとめ、川を隔てて盛胤の追撃に備えながら、城中に急使をたてた。昼間であれば、この一戦は、城楼からも望見されたにちがいない。そんな目と鼻の先で



武
重

演じられた失敗劇に、大堀土佐等は度を失っていた。しかし、盛胤は追撃の様子を見せない。曉方に、盛胤は、みずから城兵の大半を率いて、西館の対峙線に到着した。この一団の中には、後手に縛られて縹色の囚衣をまとった早苗の姿があった。

盛胤の陣に向けて矢文が飛んだ。

「人倫に悖り、弓箭を以て雌雄を決せんとする所行、許しがたし。分を弁えて、速かに降すべし。もし敵対致すに於ては、城中人質として、汝が妻女の生命保しがたし。よくよく勘考の事」

盛胤の面上に苦渋の色が走った。妻の命と引き換えに実権を奪取しようという卑劣さはいかにも父らしい遣り口だった。こうしている間にも、城中では、あの淫靡な嗜虐癖の雪江から、どんな仕打ちを受けているかもしれないのだ。不運なめぐり合わせに痛めつけられている年若

い妻の面影が、まざまざと浮んだ。——盛胤は、眼前に展開する城兵を見つめながら、進撃の下知を下す氣力を削がれた形になった。ずるずると時間がたった。盛胤は意を決し、芦名義広の助力を得て、父子和解の拳に出る。ほか道なしと、黒川城に向けて急使を派遣した。

盛国は、じっと盛胤の出方を注視しながら第二の策をめぐらしていた。盛胤の方から討ちかけて来ないのは、「人質」の一条がたえていことは明らかだ。手出しをしかねている盛胤の苦衷が、手に取るようにわかる。しかし、すぐにも降を申入れて来ないところを見ると、時間を稼ぎながら、別の手を打とうとしているのかもしれない。或はまた、「人質」の生命を保証しないと送り送ったところで、まさか父が、息子の嫁を手にかけることはあるまいと、多寡をくくって待っているのかもしれない。何れにしても、こちらとしては、「人質」の決め手で責めるほか道はないのだ。時間がたてばたつほど、相手に不測の血路を見出させることになる。刃向かえば伊都子を死地に追いやるのだという確かな証しを見せつけるに如くはない。——盛国は、早苗を呼び寄せた。

盛胤の面前で、早苗の命を奪ってくれようという腹は、城を出る時から盛国の中にあつた。いかに効果的に殺すかは、その場の成り行きにかかっている。

引き据えられた早苗は、すでに、自分の上にのしかかっている宿命を見ぬいていた。それが、どのような形であろうとも、十八才の生涯が、この湖畔で終わりを遂げることは覚悟しなければならなかった。血の氣がひき、むしろ清爽な色とさえ見える面を見た時、盛国は、この小娘の心の中にあるであろう無言の非難と反抗に、むらむらと腹が燃えた。斬りきさんでもあきたらぬ激情が止めどもなく噴きあげ、何としてくれようVと歯ざしりする思いが彼を突きあげた。——雪江の顔が、その時、ふと浮んだ。伊都子の侍女早苗を捉えた雪江に洩した時、眉を逆立てて、

「斬っておしまいなされ」

と口走った雪江の氣持の中には、盛胤への日頃の鬱憤が、強くこめられていたにちがいない。今こそ、雪江のこの執念をも遂げさせてやりたい。いまわしい囚衣のかけに、若い女の肉体が息づいている。その無垢の肌に、苦悶の軌跡を思ふさま印してくれるぞ。……

盛国の目は、血走った。

「その方に死を申付ける。昨夜来の一戦において、双方すでに数十名の死傷を出した。もとをただせば、すべてその方に責めがある。これ以上敵対するに於ては、人質として城中に取りこめある盛胤の妻女を、その方同然自害せしめることは、先刻矢文を以て申入れている。両陣隔たることは十町じゃ。中程に位置して自害せよ。盛胤の目に、とくと最期の様を見せてやるのじゃ。城中の家土、誰一人として為し得ざりし男まさりのその方の所行ゆえ、女々しい最期は笑止の程じゃぞ。鉄砲組両三名、その方の背後より監視させる遣れる術はない。……行けっ」

「畏りましてございます。……男まさりの所行と仰せあった御一言は、今生の思い出にございます。折角の思召しをお受けいたし、武士の作法に従い、切腹いたします。遙かにお見届け下さいませ」

「よし。わが意に叶うた。急げ」

△切腹Vと聞いた瞬間、盛国の頭に新之丞の名が浮んだ。△苦しめ、苦しめ。存分にのたうつがいい。小賢しげに、氣丈げに、大口たたいたとて、小娘の非力で立派に腹が切れると思うか。介錯もなしに……狂いまわることがよい。その姿を、そのまま伊都子の姿と受

け取った時、盛胤めの心の乱れ様が思いやられる。今までのこの小娘を生かしておいた甲斐があつたわ！

「大殿。この者の最期、拙者が見届け役にたちとう存じます。何卒お許しの程を……」

と平伏したのは、佐々木甚内だった。日頃親しい藤馬の妹早苗、しかも、わが手でそれを捕えなければならなかった痛ましいめぐり合わせ——今、けなげにも、八切腹をVと申出たこの女人のために、何かの力になってやりたい一途な思いが甚内をそうさせた。

「許す。十分に見届けて参れ。……これを」

盛内は、白鞘の短刀を甚内に渡した。

両陣間十町あまりは、見晴らしの原だ。丸めた薙一枚を左脇に抱え、右手に短刀を握った甚内が先に立ち、すぐ後に早苗がつづき、やや離れて三名の鉄砲組と弓矢を持った一人が、この原を南に歩み出た。この異様な一団に、盛胤の陣は、怪訝の目を見張った。

中程まで来ると、甚内は歩を止め、薙をひろげた。

「早苗殿。これへ」

いわれるままに、早苗は、その上に端坐した。甚内は、片膝たててにじり寄り、短刀に懷紙を添えて早苗の前に置いた。後に大きく

磐梯山がそびえ、なだらかな山腰から原にかけて団々の森が見渡される。近くの本から残り蟬の音が聞えた。一見おだやかな初秋の七ツ半刻（午後五時）だった。右手には、やや遠く湖面の碧瑠璃色も見すかされた。かなたに煙るのは、会津の山々だ。

「早苗殿。主持つ身の悲しさにて、そなたとこのような別れをせねばならぬ羽目に相成った。猪苗代家の行末も思いやられる。われらとて、いつ何時、心なき死に見舞われるか計り知れぬ今日この頃、無念であろうが、奥方様の身替りと思うて、潔う果てて下され。父御も見てござるにちがいない。……見事な切腹は、武士とても容易ではござらぬ。お覚悟もあろう、作法もとくと御存じではあろうが、くれぐれも深腹を召されるなよ。……止めは、乳下か、水月か、臍からかけ乳下へか三つに一つをお選びなされ。……心乱さず存分にな。……早苗殿。さらばしや」

「かたじけのうございます。立派に仕遂げて御覧に入れます。お見届け下さいませ」

見かわす目に哀痛の思いがこもった。甚内は十歩ほど斜前方の本蔭に、さっと身を隠して右手を上げた。それを合図に、後方十間あまりの所に停止していた弓矢の一人が、小走

りに前方に駆け抜け、十分にひきしぼった弓弦から矢文を放った。矢は、盛胤の陣の前に落ちた。

「坂部保馬の娘早苗、通報のため脱出を計りし罪により自害せしむる者也。更に敵対の拳あるに於ては、汝の妻女もまた、同じ態に自害申付くる者也。念のため一書を呈す——初秋の野に、一人端坐している女の姿が、早苗であるとはじめてわかった。」

「坂部。そちの娘じゃ。当内紛の犠牲となつて、死を賜わったというのじゃ。むごい！……さればと申して、このまま父上に降すれば当家の行末が案じられる。黒川の殿の御裁断にて、父も予も、対等の和議に漕ぎつけねば相成らぬのじゃ。おつけ御使者も到着されよう。予は、それを待っておる。待ちくたびれておる。……坂部、娘を助ける手だてはないか」

「是非もございませぬ。娘も某も、猪苗代を発ちました時より、死は覚悟いたしておりました。このままのめめと、大殿の前に旗を巻かれては、娘の志も無に帰します。何卒お心安う思召し下さいますよう」

坂部保馬の面は、悲痛な思いにゆがんだ。早苗は、極度の緊張に膝がふるえた。ずっ

と前方、土壇の罫の中に、陽に光る鎧武者の姿がびっしりと見える。旗差物はたさしものが風になびいてもいた。その中に、父上が……と思い、八人命をむざむざ捨てるでないぞと呼びかけてくれたあの夜の声が、なまなましく、なつかしく蘇った。

八父上様。早苗は坂部家の娘でございます。お名を穢けがしはいたしませぬ！——早苗は、落着きを取り戻した。ただ、最期の姿が、単袋一枚に巻帯の囚衣をまとっていることが悲しかった。

早苗は、深く息を吸うと同時に、帯をぐっと引き下げた。次いで襟に両手をかけ、静かに左右に押しひろげた。盛りあがった乳房が白い咽喉もとからかけてあらわになった。襟先は更に割れて、お腰にきっちり覆おおわれた腹まで見せた。布の上から引き廻しては、刃先が鈍ることを知っている。介錯なしの自腹なら、素肌を切り裂くよりはかはないのだ。八醜い跡を残さぬよう、立派に切らねばならぬ！——早苗は、お腰の紐を解き、下腹までぐっと現して、その位置で改めて結び直した。腰まで引き下げられた巻帯に交えられて腹部は、ふくらみを増しているように見える。胸の二つの隆起から、なだらかに盛りあが

って行く腹のあたり、早苗は、いとおしむように見つめた。初秋の傾いた陽の光を吸ってそれは白々と充実していた。われとわが身をこんな愛憐をこめて見つめたことが曾ってあったろうか。この胸の奥に、その時々、いとしいと思った人の面影が、淡くよぎっては消えたことが、何度あったことであろう。それは、どれ一つとして、恋といえるものではなかった。ほのかに、ひそかに、乙女の心をときめかせた幻のような影にすぎなかった。このみずみずしい乳房は、十八年の生涯の間いったい誰を求め、誰に向かって息づいていたのであろうか。——われながら、いじらしく切ない思いが、水月のあたりから駆けあがって来るような思いがした。

早苗は、静かに短刀の鞘を払い、膝の上で懷紙を巻いた。幾百の熱っぽい目が、遠巻きに、いま自分の上に注がれていることよりもいわば身近かに見つめてくれる佐々木甚内の目が、早苗の全身に、きびしいはげましとなって注がれていることの方が強く意識された。

早苗は、切尖一寸あまりを出して巻いた懷紙の部分きつさきを、固く右手に握り、左手で下腹をゆっくり撫でた。動悸がはげしく打ちはじめ

たような気がした。八何でもなし。それは、おそろく一瞬のうちに済むことだ。臆してはならぬ！——早苗は、波打っている胸から腹を、改めて見下した。白く豊かな丘陵の起伏をしめくくるように、深い膂窩せいかに陰翳が宿っていた。

不思議なことに、いま早苗の胸には、甚内の目に肌をさらしていることに対する羞恥の思いは少しもなかった。八立派に……美しくありたいと念ずる最期への祈願が、羞恥をはるに越えていたからだ。

早苗は、左の掌たなこころいっぱい左脇腹をおさえ、その指先あたりに切尖を擬して一呼吸喉を閉じ、腰を浮かせ気味に、ハタと息を止めた瞬間、プツリと刃を立てた。大した痛みではない。八浅すぎたか？と気づき、早苗は目をあけて深さを確かめた。切尖は、わずかにその尖端せんたんを没しているにすぎなかった。右手にグッと力が入った。切尖は、吸いこまれるように皮肉を破った。この時、はじめて痛みがそこからひろがった。唇を噛み、早苗は右に引き廻した。切尖は、ともすれば、浮きあがりそうに押し戻された。痛みが横にひろがり、切り口から滴った血を追うように、サーッと真紅の血が更にあふれた。痛みは激

痛に変わり、臍下一寸あまりのところで、思わず呻きが洩れた。

「ウッ……ウッ……」

切り口は、わずかに上下に開き、黄白色の脂肪層がちらりと見えたかと思うと、あとからあとから血がそれを隠した。

「切れる！V」という自信が早苗を支えた。

左手を持ち添え、臍下から一気に、右の脇壺まで切り裂いた。咽喉がからからに乾いて熱い息が、波のようにうねりのぼった。

早苗は短刀を抜き取ると、ふるえる手で、臍窩を求めて切先を移した。下腹は、一面血に色どられ、お腰の上端は真紅に染まった。

この腹の奥にこそ、女の命が秘められているはずだ。△そこを、この手で……V——早苗は、左手を柄頭^{つかがしら}に当てる、深く、丸い陰翳を目掛けて、思いきり刺しこんだ。

「ウッ……ウッ……」

堪えられぬほどの衝撃が、下腹一面の激痛とは別に、五体の中心を奥深く貫き、搔き廻し引き裂くような兇暴な嵐が、そこから全身にひろがった。早苗は、倒れかかる体を、ようやく左手に支えた。前傾してくびれた臍の奥から、血が刀身を濡してほとばしった。

「早苗殿ッ。乳下を……乳下に止めを」

甚内の叱咤するような声が走った。右手から急激に力が抜けて行くのが、自分でもわかった。切尖は、深く臍窩に食いこんでいる。

ハッ、ハッと肩が波打ち、血の気のひいた顔に脂がにじんだ。渾身の力をこめて引き抜いた切尖を、肋の下にかいこみ、かすみかけた目に最後の光を点じたかと思うと、早苗はその刀の上に、崩れるようにひれ伏した。

黒川城から両陣に特使が到着したのは、それから一刻^{ひととき}（二時間）後だった。

「伊達と一戦を交じえつつある危急の場合に父子争鬭するとは許しがたい仕儀である。盛国が再隠居いたすまで、盛胤は、暫時横沢村において機を待つがよい」

という意味の調停だった。事実上、実権は父の手に奪われた形になる。翌朝、伊都子は城を出て夫の許に還った。

芦名義広も、盛胤に分のあることはわかっていて。しかし、郡山に向けて再出馬しなければならぬ忽卒^{きつそつ}の時に、猪苗代家の内輪もめに、深入りしている隙がなかったのだ。——これが、後に、芦名家滅亡を早める原因になるうとは考えも及ばなかった。

郡山の対陣は、八月に入って遂に和議が成立し、双方軍を退いたが、翌天正十七年六月

伊達政宗は、猪苗代盛国の手引きで、高国城から保成峠^{ほなりとうげ}を打ち越えて猪苗代城に入り、磐梯山下磨上原^{すりあげはら}の決戦で、宿敵芦名を敗滅せしめたのである。

この決戦で、盛胤は、伊達方に斬って入り重傷を負って横沢村に隠退し、後、黒川城主として蒲生氏郷が入部した折にもこれに仕えず、やがて内野村に移って生涯を終ったことは「会津風土記」に見える。（終）

〔告知板〕

○「奇譚三十九夜」物語の最終回、第三十九夜（第九十話、第九十一話、第九十二話、第九十三話）は、今月号に掲載の予定でしたが原稿が間に合いませんでしたので、次号十一月号に発表いたします。尚、「奇譚三十九夜」物語が完結しましたら、辻村隆の「辻村隆緊縛フォト撮影秘譚」（仮題）と題した毎月読切りのシリーズを掲載する予定です。これには辻村隆のとおきおきの緊縛写真を豊富に提供、第一話からマニヤの皆様の胸にグッとくること請合いの素晴らしい秘話を公開すると張切っています。何卒、御期待下さい。

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歎 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	臍そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外的後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外的逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビに反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ (東浦)

— アブ小説 —

△ 甘い屈従 ∇

(第二部)

— 緑川良夫の独白 —

△ 伊 帆 保 胎 ∇

10

梨子は私のために同情をしてくれた。梨子との約束通り、十数葉のAのあの女の写真を撮って来たのだが、暫くはそれだけは私を苦しい思いにさせた。奇妙な夫婦とはいえ梨子がそれを見て複雑な気持であることは当然と思われたし、それだけは余り日の眼を見ない蒐集物となってしまう。それでも時々私はあの女が歌うような方言の言葉で男の部下を叱りつけている光景を思い出して、私好みのマゾ的心境にひたっていることがあった。

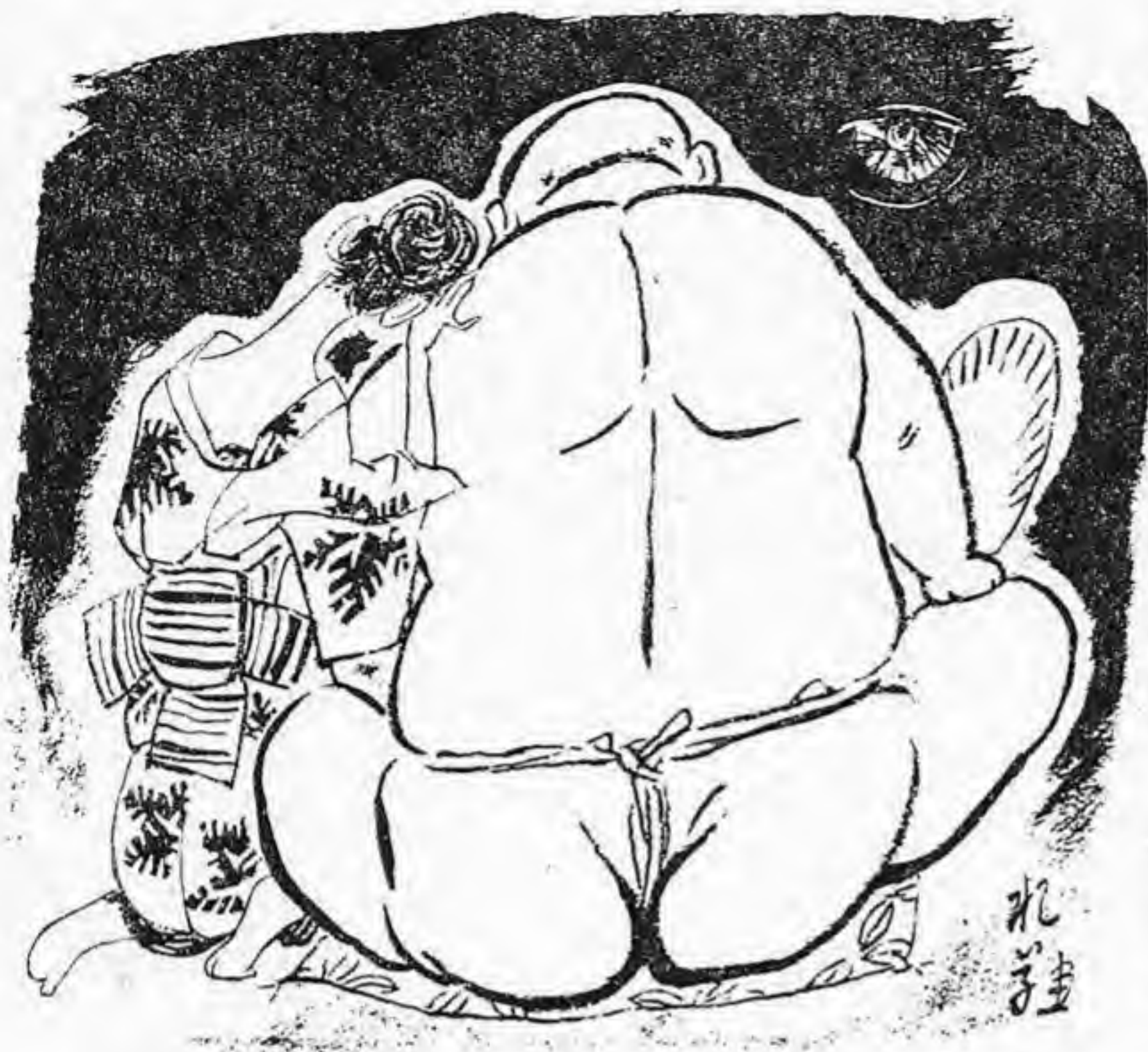
私達は再び以前の珍妙な遊びを毎夜楽しむことにした。私達特に空想力に富む梨子は、

私達だけのための私の奇怪な創作に色々なシチュエーションをつけ足してくれるのが嬉しかったし、むつかしいと思われる肥満体を見事に画にしてくれ、特に河馬のもつ表現しにくいポリウムやユーモアや力強さや、見るからに厚つぽたいふてぶてしい皮膚を上手に描いてくれるのには感激した。彼女の画く肥満した男の顔が彼女の父親に似ているのもその特徴であった。Aの女への心の痛手もあって私は、—いや梨子も、—幾分の諦めも生じて、そのままの生活を以前程疑いはしないようになっていた。お互いのすべてを知ってしまった理解ある不幸が、そこから脱れ来るこ

と、本当は尚も期待をよせている癖に、何となくこわくもさせていたのである。梨子も思慕をよせた父親を失った悲しみからヒステリックになることも少なくなっていた。彼女の父親の死から既に一年余もたっていたのだ。所が、こんな梨子が何時の間にか愛人を作っていたのだ。ああ、これから後の梨子と男と私との上に生じた出来事こそ、奇妙な彩りに満ちた、そして到底誰もが理解してくれそうもない出来事なのであった。

11

朝、冷蔵庫からソーセージと果物を取り出してクラッカーと共に即席スープで胃袋に流



しこむという味気ない食事をすませようとしたら電話のベルが鳴り出した。梨子が私の許を去ってからの毎朝というものは、こんなにも佗しいものだったのかと、今更のように私は感じた。だがその朝の電話はいつものよう

に会社からではなく、何と梨子であったのだ。
「あなた、お元気？」

「うん。まあね、珍しいじゃないか」

「ええ、ホホホ、あなた今晚遅いかしら？」

「今日は早いつもりだよ、一体何だい？」

「今夜の七時にここへ来ないこと？」

「うん、でも大丈夫かい？」

「ええ、今日はあの人来ない日よ、それに番人を、うまい具合に使用に出しておくから、是非」

「うん。そろそろ君の顔を見たいと思っていた頃だよ。」

「うまいことおっしゃって、オ、ホ、ホ」

その日は奇妙な感じが私の頭を去来してばかりいた。いくら梨子との合意により別れたとはいえ、梨子の得た男の別荘に住む彼女が

ら誘われて、有無もなく梨子を訪ねることに同意した自分の情なさ、しみじみと思われろのだ。でも私は梨子に、梨子は私に大して未練もあるわけではない。どちらともなく会うのを避けたり遠慮したりすれば、もう一生赤の他人として朽ちはてるかも知れない位だった。もっとも私達はまだ正式に離婚をしてるわけではないし、奇妙な同じ性癖をもつ友人として話し合いたい衝動を時として持ち得るだろうことは考えられた。おそらくそんな衝動が梨子には案外早くやって来たのかも知れなかった。

古い町の有名な川べりの高級住宅地の一つが、梨子の新しい男の別荘だった。私は春の宵の七時がまだばんやりとした薄暮であることを今更のように思いながら、而も何となく恥かしく周囲をそっと見廻していた。だが倉田寓と書かれた門札のその瀟洒な邸の前道には一人の人間の姿もなくひっそりとしていた。そして小さな門札にかかれた男の姓がはじめて私に淡い屈辱感を湧きたたせた。ブザーを押すとすぐに梨子が出て来て、あたりを気づかいながら、私を中に入れ鍵をかけた。そんな梨子の様子が一寸ばかりいまいました。そしてそんな気分が抬頭したのが、や

はり自分は尚も梨子を自分の女房だと思つて
いる証拠だと思つたりもした。清い川の流れ
が夕暮れの中にはんやり見える二階の居間で
私は梨子と相對していた。彼女のすすめる座
布団に坐ると、それがおそらく倉田という男
の坐つたことのあるものに違ひないと思われ
てへんな氣持がした。

おそらく、その六畳の和室で今迄何回とな
く倉田が彼女を抱いて寝たものと思えば、前
に坐つて茶をたてている梨子の不潔にも感ず
るのだ。でも梨子は一体何のために私を呼ん
だのだろう。そう云えば一体何のために自分
は、こんな所に居るのだろうと不思議な感じ
がした。

男の別邸に男には内緒にそうしていること
が実に奇妙だった。これが一体逢ひ引きの中
に入るのだろうか、と思つた。とてもそう
は云えないと思つた。だから幾分馬鹿々々し
くもなつた。余り感興もない、而も既に倉田
の事実上の持物になつてしまつた梨子と、ど
うして自分達はきつぱりと離婚してしまわな
いのだろうかと思つた。ことわつておくが
私は梨子の持つ亡父の遺産をめあてになど考
へたことはない。いやそれをするには私達は
余りにもお互いを知りすぎているからだと言

い聞かせはしたが、それでもやはりへんだつ
た。又一体倉田とはどんな男なのだ。肥満体
であることは梨子の変つた趣向から容易に
想像出来るとしても、一体どんな性格の男で
あろうかと思つた。梨子がいくら彼女の性癖
にうえているとはいえ、相手は妻子のある男
で、彼女が二号の地位に満足している程立派
な男なんだろうか？ 私はあの堂々たる梨子の
亡父を思い出した。彼が生きていたら、二号
になつて喜んでゐる愛娘をどんなに叱り且つ
嘆くことかと思つて、あの亡父に何となく
濟まないような氣がして來た。

Uの相當な資産家であつた彼女の亡父のこ
とだから、娘がこんな生活をしていることの
世間体を、どんなに氣にしたことだろうと思
えば、梨子という變つた女が私は何となく淺
ましくも思えた。久し振りのことで、何とな
く二人は氣まずさを確かに感じていた。

「私心配したわ、あなたが來てくれないかと
思つて」

彼女はこう云つて、そつと私を見た。

「そりゃあ、本当は、どうしようかと思つた
よ。でも折角來いって云われたんだし、少し
は君がどんな風な生活をしているか興味もあ
つたし、——考てみればこんなことがなかつ

たら、永遠に他人になつてしまふかも知れな
いからね」

「ホ、ホ、そうね」

「で君、野暮な質問かも知れないけど幸福？」

「まあね。」

彼女は珍しくはに cand 云つたが、ふと私
は梨子に以前には見られなかつた色氣が生じ
たことを知り、倉田に、淡い嫉妬を感じもし
た。梨子をこのように變化させたのは倉田で
あるからだ。

梨子は思慕していた父親によく似た男を物
色したに違ひない。梨子も私に似てよくよく
小兒性の強い人間だからである。その男はこ
んな別荘を持つからには生活力にあふれた実
業家で而も相當年輩の男に違ひない。といつ
ても彼女は若さより円熟を好む女だし、世の
中には押金のために太つた所謂重役タイプで
なくてはという女も沢山あるだろうが、梨子
のように肥満した男を先天的に好む女も珍し
いだろう。だから倉田という太っちは梨子
のような變つた女の存在することには、よく
よく感謝せねばなるまい。金ほしさでないこ
とは彼女が少くない遺産を手に入れ、一生食
うに困らない筈だからだ。

「君も變つてるよ。困らない金を持つてゐるの

に、好きこのんで二号のような生活をするんだから」

と私は少々残酷な云い方をしてみたが、彼女は、一向に困惑した様子もなく、

「ホ、ホ、仕方ないわ。生れつきよ。きっとそれに倉山の奥さん、病気で長くはないらしいのよ。そうすればこんな困い者の生活にはおさらばだわ」

こんな浅ましい事を平気で云ってのける梨子には少々あきれた。梨子という女はこんなに低級な女だったのだろうかとも思った。いやこれがこの女の本心だったのかも知れぬ。

「あなたどうしたの、怒ってらっしゃるの」「いや、怒りゃしないさ。でも一体僕はここへ何をしに来たんだらう？」

「ホ、ホ、私達約束したじゃない。いい相手を見つけたら報告することをよ、そうそう、あの人の写真を見せるわ」

それは如何にも脂ぎった五十過ぎらしい男だった。

「すばらしいでしょ。私の人」
「うん」

「あなた好みじゃないこと。倉田は一寸したプラスチック会社経営してるの。職工上りでも生活力旺盛なの、少し粗野だけど、根

はやさしそうよ、だって私には夢中なんですよ。会社では『河馬社長』ってかげであだ名つけられてるそうよ。ホ、ホ、あなた好みじゃない」

「そんなに太ってるのかい？」

「そりゃ河馬にそっくりに見える時あるわ。

脂ぎってて顔なんか如何にも皮が厚そうだし足も少し短い感じだし、胸やお腹なんかK関を思わせる程よ」

「フーン。精力も逞しいだらうね？」

「そりゃもう。太ってる人は強くないなんて嘘ね」

倉田への嫉妬がいつしか消え、私はこの上なく彼に興味を抱きはじめていた。河馬というあだ名ときけば尚更である。そして普通醜悪と感じられて然るべき河馬のような太っちょへの強いフェチズムもさることながら心からの愛情を抱き、幸福を感じているらしい梨子を今更のように変った女だと思って微笑まずにはいられなかった。梨子は果実の皮をむきながら、倉田のことや少女時代のことや私との生活、一特に変わった性向をお互いに告白した時のことなどを、楽しそうに喋っていた。そんな時ブザーの音がして梨子は下へ下りて行った。暫くして私は下で太い男の声が

するのを聞いて耳を澄した。倉田ではないかと直感したが、名案も浮ばず座布団の上につっ立っているばかりだった。すると梨子が上って来て

「あなた。倉田が来たのよ」

ささやいた。私はときどきしながら、

「どうしよう？」

その時「梨子」と太い声がして、梨子は慌てて「ハイ」と叫んで階段の所へ走ったが、もう男は階段に重い足音をいくつも残していた。梨子は私にめくばせして押入れを指さした。私は生きた心地もなく押入れにもぐりこんだ。少しの隙間をあけて押入れの戸をそっと閉める手がぶるぶる震え、心臓は早鐘をうつばかりである。

若し見つかったら？ 倉田の尊大なイメージを考えると私にふりかかるかも知れない災難は恐ろしいというより他なかった。

「梨子、今夜はお前どうかしたのかね。そわそわしとるようじゃが。いつもはわしがブザーを押すと、とんで来て犬ころみみたいに甘えるのに、…」

「ごめんなさい。でもそんなにこわい顔しないでよ。私あなたのその頼しいお姿夢にまで見えますわよ。私、…今この通りお化粧し

てたんだから。あなたに少しでもきれいな女だと思われないんです。ねえ、あなたァ」
「フッフッフ。そうか、わしが悪かったよ。お前そんなにわしが頼しいかね？」

年甲斐もない、男の甘ったるい調子に私は少々閉口した。でもそれよりも暗い押入れの中で物音をたてまいと身体をこわばらせているのは難行だと思った。

「そりゃもう。私あなたのためなら死んでもいい位よ。あなたの太ったお身体のおそばにいただけで、私もう嬉しくって、……あなたァ。私をいつまでもかわいがって下さる？」
「フッフッフ。かわいい奴じゃ。よしよし。」

私はそっと、押入れの隙間からのぞいてみた。梨子は男の巨体にしなだれかかって甘えているし、倉田はつき出た腹をだぶだぶと揺っているかにも満足そうだった。

「ご立派なお身体。私みたいなやせた女は、きつと肉感的でないって本当はお好きでないでしょ？」

「わしゃ太った女は好かんよ。わしだけでおちゃんは沢山じゃ。ハッハッハ」

「うれしいわ。今の言葉忘れちゃいやよ」

「フッフッフ。忘れやせんよ。お前の顔、今夜は特別きれいじゃよ。」

後は到底聞くに耐えない甘い会話だった。

倉田の巨体は全くすばらしかった。ヌードにしたらさぞ便々としているだろうと思って残念だったが、二重顎や首まわりはふ厚くでぶでぶといくつにもくくれて、まるで河馬の首筋と背や胸との間のものすごいひだを連想させる程だった。梨子の亡父に比べるとずっと野卑で、一層ふてぶてしく傲然と肥満している。それは一段とこの男の旺盛な生活力を思わせ、脂ぎった顔の精力的な所と共に正に貫録十分の怪物だった。梨子の注ぐビールのジョッキを倉田は何杯も豪快に飲み、

「うまい。お前とのむビールが、この世で一番うまいわい。ハッハッハ」

と巨体を揺って哄笑するのである。その内もう帰っていたと見えて、呼ばれた別荘番兼下男の孝市が二人の前に、はいつくばっていた。

「孝市、わしに呼ばれたら、もっと早よう来るんじゃ」

叱られて孝市は「へい」と云って哀願するように倉田を見上げた。

「全く気の利かん奴じゃ。わしゃトイレへ行く。孝市、お伴せい」

倉田が太い声でどなると、孝市は小腰をか

がめて倉田の尻に従った。私はこれを見てあやしい亢奮をどうすることも出来なかった。

倉田は超肥満のため廁の伴を必要とする男だったのだ。孝市という下僕はやせた初老の男で、そんな屈辱的な命令を甘受するにふさわしい奴隷的な顔付きをしていると思った。が或いは昔はよい暮らしをしていたのではないかと感じさせる所もないではない。でもどっち道情ない男であることには変りはない。私は又そんな孝市を見て梨子の顔が残忍そうに微笑んだのを忘れられなかった。私は息苦しさや忘れて、この邸が思ったより面白い所だったと嬉しくなった。だから梨子がそっと押入れの戸をあけたことを忘れていた。

「ちようどいいチャンスよ。逃げて」
私はハッとして緊張した梨子の顔をみつめた。

こんなことがあってからというもの、その別邸は私好みの魅力に富んだものになった。倉田の実物が想像以上の豪快な太っちゃぶりであるのを見たからだ。それに音をたてまいと苦労することも忘れて、もう一度押入れに入って、あわよくば倉田の裸体でも見れたらと念願するようになっていた。そう云えば同じ

性向の梨子が思いきりあの素晴らしい倉田の河馬のような肥満体を眼のあたり眺めたり、触れられたり出来ることに嫉しさを感じてならなかった。そんな風なことを梨子への手紙に書いて送ったものだ。

返事がなかなか来なかったので私は又色々心配になった。若しかして私のことを倉田が知ったのではないか。又梨子は倉田に夢中で私のことなど少しも頭に浮ばなくなったのであろうか？

が、一月もたって彼女から電話がかかって来た。

「ああ、梨子、」

「ええ、返事遅れてごめんなさいね」

「うん。君はもう僕なんか全然忘れたのかと思った。」

「ごめんなさい。毎日何てお返事しようかと思ってたのよ。だってあなたの願いをかなえてあげたいし、といってこの間みたいにいっもうまく行くか自信ないし」

「なる程、でも大丈夫だろう？」

「あんなこと云って。：ホ、ホ、ホ、この間はぶるぶるふるえてた癖に。」

ざっとこんな風で、私は喜んだものだ。

別邸に入ると改めて私は自分のへんな行為

が少しばかり恥しくなった。

「君、僕を怪べつしたくなるだろうね？」

「ホ、ホ、自分で云ってれば世話はなくってよ。今更おかしいわよ。ホ、ホ、どうせ私達はこのへんちくりんな人種ですもの。―あな。いつもお一人で大変でしょう？食事なんか」

「外ですることが多いから、大丈夫だよ」

「そうオ、女中さんでも雇ってはどうか？」

「いいよ、そんな無理しなくても」

「お金なら心配ないわよ。」

「うん。全く俺も情ない男だよ。毎月君から小遣貰ってるんだもの」

「いいじゃない、そんなこと。あなたはあなたらしく生きて悪いことなんかないわ。私こんなこと考えてんのよ。」

梨子の考えは私を驚かせた。と共に私を忘れずにいてくれることがとても嬉しかった。私がその別邸に住むように倉田に交渉してみようと思っていると云うのだ。でも、

「そんなことが出来ると思ってるのかい？それとも僕をからかっているのかね」

「倉田って、とても面白い性格なのよ。あなたを理解してくれるかも知れないわ」

「冗談じゃないよ。あんな河馬みたいな身体

でふみ殺されたくはないよ。きつと怒るに決ってる」

「そうかしら。あなた、倉田のいい弟になれると思うけどな。」

「君、倉田と君は今事実上の夫婦なんだよ。僕は一体何なんだ。倉田だって君だけと楽しみたいだろうし、倉田は毎晩来るわけじゃない。倉田の来ない日には、きつと君と僕が何してるか疑うに決ってるじゃないか」

「大丈夫よ、私に名案があるの。納得させる自信あるわ」

「君、もういいよ。馬鹿々々しい。君は本当に子供みたいだ。そんなことが倉田に判るはずがないじゃないか。それに失礼だけど君は二号だよ。せっかくものにした倉田から嫌われたらどうするんだ」

「そしたらふられても仕方ないわ。一人で住んで暮せるし、又あなたの所へ行ってもいいわ。ホ、ホ、ホ、それに私、倉田のような男は私みたいなきれいで素性のいい女には参るってこと知ってるのよ。そりゃ倉田のお金目あての女は、いくらでも居るでしょうけど、私みたいな女はいないわよ。それに私以外の女から本当に愛されたことあるかしら。あんな気味悪い位太っちゃなんですよ」

「随分しょってるね。フ、フ、フ、太っちよの所が君の好む所じゃないか」

「そうね。ホ、ホ、ホ。それから倉田って随分尊大ですけど気の毒な人よ。考えようによっちゃあ、奥さん運に恵まれないし、今の人も病身でずっとねたきりなのよ。金で買える女は沢山あっても、きっと淋しいの。私に夢中なの判るでしょう？」

「うん。そうらしいね」

「私の願ひなら何でも聞くわよ。」

梨子が途方もないことを別に悪びれずに云うので、私もつられてつい、「そりゃ面白いな」と呟いてしまったが、気がついて慌てて「そんな馬鹿なことが……」と赤くなって否定した。その時ブザが鳴ったので、梨子は私を見て押入れを指さし、慌てて下へ降りて行った。押入れの古臭い匂いの中に再び私はもぐりこんだ。でも誰も二階へは昇って来ないので、そっと又外へ出て煙草を喫った。今の内にと考えたのだ。すると足音がしたので慌てて再び暗闇で身をひそめた。でもそれは梨子だった。

「あなた」

と声をひそめて云うので、

「うん、どうしたの」と私は梨子のうすら笑

いする顔を見つめた。

「今お風呂に入ってるわ」

そう云えば梨子は、ビールや夕飯の皿などを二階に運んでいる所であった。

「君はどうして彼の背を流さないんだい？」

「シッ、もっと小さな声で云ってよ。今夜は孝市の番よ。三日に一遍は孝市に流させるわ」

「君は孝市がねたましくない？」

「フフ、そりゃね、でもいいわよ。私、女で力がないんですもの。あの凄く肥満した尻や股を洗うのいい気持ですけど、確かに疲れるわ。……上ったらしいわ」

慌てて彼女は下へ行った。私は又押入れの中に戻った。その時押入れのふすまの所に穴が開いているのを見つけた。梨子が気をきかせて、わざわざ開けたらしいと判って微笑した。本当に気のきいた女だ。押入れと柱の間からのぞくのは苦心がいるし、相当隙間を作っておく必要があったから、この穴に私は感激した。足音がして穴の中にパンツ一枚の真赤な怪物が迫って来て、やがて巨体をどっかりと床の間に据えた。そこへビールのつまみものなどを持って梨子が入って、それを置くと又下へ行こうとする。

「オイ梨子、早うここに坐って酌をせい」

「はい、一寸待って下さいな。もう二本ビールとって来ますから」

「孝市を呼べ、孝市！」

太い声でどなっているが、余りご機嫌よくないらしい。

孝市が慌てて室の入口にかしこまると、「馬鹿ッ、貴様、気の利かん奴じゃ、奥さんが一人で何度も運んどるのに貴様手伝わんかッ」

「へい、申し訳ございません」

「このやせ犬め、お慈悲で使うてやっとなるじゃ、旦那様のお情も知らんと、貴様、もっとこっちへ来てみい」

孝市は哀れにも、「どうかお許しを」とペコペコ必死になって哀願している。だがそれが益々癪にさわったのか、倉田満蔵は孝市の首筋をつまむようにして畳にすりつけると、太い片膝をのっけていじめている。孝市は苦しそうにもがくことも出来ず哀願し、遂にヒィヒィ泣き出した。私は哀れな爺を叱るにこんなにまでしていじめなくともと、少々いやな気分になったが、むき出しの便々たる太鼓腹が息をする度にものすごく揺れるのに見えていた。孝市はやっと許されペコペコ倉田のつき出た腹におじぎをして退居した。

これを見て私は倉田満蔵という男が相当なサディストであろうと十分想像出来た。体型の他に梨子が熱中する理由は、こんな所にもあるのかも知れない。

「あなたァ、お寒くないこと。」

梨子はソツと着物をぶ厚い倉田の肩にかけてやり、脂ぎった頬やてかてかしたくくれた首筋に自分の頬をくっつけた。私はたまらな

いと思った。私の一番好きだった頬から顎にかけての曲線が肥え太った倉田の顎にくっついてほんとに悩ましくもあり、始めて倉田に嫉妬を感じていた。倉田の機嫌はこれで大分好転しはじめたらしかった。

「あなた。お仕事でお疲れでしたでしょ。」

「うん。少しくさくさしたことがあってな。」

「あら、でも、もうおよろしいんでしょ？」

「うん、わしに困ることなどありませんよ」
「頼もしい方、そりゃ随分人をお使いなさるんですもの、私もビール頂こうかしら」

「注いでやるかな。」

「あら、済みません。あなたに注いで頂くなんて、勿体ないわ」

本当に嬉しそうである。ふと私は梨子が私に見せつけようとしているのじゃないかと、ひがんでもみた位だった。

「いい飲みっぷりじゃよ、ハッハッハ」

「あら、あんなことをおっしゃって。…私もビールがぶがぶ飲もうかしら。ねえいいこと」
「ハッハッハ、わしにきくことはないよ」

「フ、フ、でも私そうしたら少しは太るかも知れなくてよ、駄目かしら。やっぱり」
「太ってくれちゃ困るよ。」

「ほんとうですの、嬉しいわ。こんなやせっぽちで、あなたに愛想つかされるの、こわいんですもの。」

「ハッハッハ、面白いことを云う奴じゃの。そんなに太りたかったら、わしの小便でも飲むんじゃない」

「あら、嬉しいわ、本当に下さるの？」

「馬鹿を云え、ハッハッハ、うい奴じゃ、こうしてやろう」



倉田は梨子をかるがると抱き上げ、まるで猫を扱うように仰向けにすると、梨子の美しい顔を太い腿ではさみつけ、如何にも上機嫌になった。

「どうじゃな、又しばって貰いたいかな？」

「どうでもご自由に、私は本当はあなたのその太った身体で、ふみ潰して貰った方がいいのよ」

「ハッハッハ、ふみ潰したら死んじまう、わしはいやじゃよ、そんなのはな」

何杯もビールをひっかけたためか、倉田の便々たる肥軀は真赤になり、

「あつい、あつい」

と云って又々パンツ一枚になった。

「あなた、ひどい汗ねえ」

「フッフッフ、こんなに太つとると、すぐこうじゃよ。」

倉田はつき出した太鼓腹や胸に滲む汗を梨子にふかせた。

「あなた、ご立派ですわ」

梨子は今度は、大きな尻や太腿をタオルで拭いている。

「私嬉しいわ、太った人大好きなの。死んだ父もよく太ってて大好きだったわ。あなたったら父よりも太ってらして、ご立派なんかも

の。私も嬉しくって、私みたいな女をかわいがって下さる方がいるなんて、こんな幸福ありますかしら。」

「フッフッフ。かわいいこと、云うてくれるわい」

「ねえ、あなたア、いつまでもかわいがって下さる？」

「当り前じゃよ。こうしてかわいがっとるわい」

倉田は太い声を甘くして云うと、ぎゅっと梨子を太鼓腹で抱きしめる。梨子は赤ん坊みたいに倉田の乳房を吸っていたが、やがて「ホ、ホ、ホ」と笑いながら、つき出てあたりをいへげいしている雄大なお腹のお臍のまわりをなめ廻しはじめた。

「コラ、おかしな女じゃよ、お前も、ハハハ、ハ、ハ。」

「私あなたをねぶりたい程好きなの。このお腹見てるとたまらないのよ。ねえ、あなた」

「フッフッフ。こそばゆいぞ、コラッ」

倉田は梨子をつまみ上げるようにして、宙にあげ、梨子の顔に自分の脂ぎった顔をおしつけ、そのままどさりと畳の上におしつけた。梨子は苦しそうにもがいている。

「どうじゃ、云う通りにするか」

「ごめんなさい、苦しいわ、たすけて、フッフッフ。もうくすぐらないわよ。」

「うい奴じゃ、ハッハッハ、そんなにねぶりたかったら尻でもねぶるがええぞ。ハッハッハ」

「ホ、ホ、ホ。」

「どうじゃ、わしの尻っぺたを、ねぶりたい程わしが好きかな？」

「いいわ、勿論よ。やりますわよ」

私はため息が出た。

「太っちゃが大好きとは、面白いことを云う女だよ。」

「だって本当ですもの。太って威張ってらっしゃるのがうれしいわ。やせっぽち達を沢山平伏させて。」

「すると、お前の亭主だった男も、太つとったのかね」

「いいえ、やせっぽちなよ。」

「フッフッフ。それで満足がいかなので、わしに囲われたのじゃな」

「ええ、私の夫だった男、情ない身体つきだけど、とても人が良くて、それから面白いことに私の趣味ととても似てるのよ」

「太っちゃが好きなのかい？」

「ええ、ホ、ホ、ホ、私とその男との生活は

奇妙だったわ。」

私はじっと身をひそめたまま大変面映い気分になった。梨子だけが知っている例の私の奇妙な性癖を倉田も知ったことを思えば恥しくてならなかった。倉田は時々太鼓腹をゆさゆさと揺って哄笑し梨子の話を聞いていた。

「ねえ、あなた。私にはまだ夫があるのよ。あなたおやきになる？」

梨子がこんな大胆なことをぬけぬけと云うのを聞いて私はあきれ、一体倉田がどんな表情をするか注目せずにはいらなかった。でも意外にも倉田は、

「なる程、かわいそうな男じゃな。お前を精神的にしか愛せないとは、まだ若いのに。とって前と共通した秘密の話だっただけだ。うし、—お前の方はわしにかわいがられて幸福じゃが、その男はAの女とうまく行かんかったのじゃし。…うむ。」

「ええ、なかなか素直な性質でおとなしいんですよ。すぐ赤面するような。私の口から云うのも変ですけど一寸ハンサムな青年紳士よ。私達きっぱり正式に離婚出来ませんの、共通の二人だけの秘密があるでしょ。私達何もかも全部喋ってしまったし、…」

「なる程、離婚せんでもええよ」

「なんですって？。私は早く倉田満蔵の正妻になりたくてうずうずしてますのよ。あなた私がおきらいになったんですの？」

「馬鹿、いつきらいと云うた。お前が好きじゃからこそ、その男に同情して、何かええ名案はないかと考えてやっとなるんじゃ」

倉田は急にいかめしく、ぶるぶるとだぶついた頬や顎のひだをふるわせた。

「ごめんなさい。私失礼なこと云って。」

梨子は叱られた子供みたいに、しおれている。

「家内は長いことないんでな、もう少しで我々は正式に結婚出来るんじゃよ。そんなにひがんだようなことを云うてはならん。辛抱も出来んようでは倉田満蔵の妻になる資格はないぞ」

「ごめんなさい、私あなたのおそばにいてご命令に服従するだけが生甲斐なんです。」

私は感心してしまった。倉田は怒りもせず寛大に梨子を、いや私までも心配してくれるのだ。一代でのし上った器量の持主にふさわしいと思った。私は倉田に大変好ましさを覚え、尊敬の念さえ湧き上るのを覚えた。

「よしよし、わしにまかせとけ、倉田満蔵は腹もあるし情もある。わしに従って信頼をよ

せる奴は、とことんまで面倒を見てやる。ハッハッハ」

と又豪傑笑いをしている。

「うれしいわ、頼しいわ、あなたって男の中の男ですわ」

梨子は如何にも嬉しくてならないように倉田の腹に身をすりよせて泣いていた。

12

私は夢中で眺めていて身の不自由さも忘れていたが、流石に身体が疲れ、而ものどが乾いて仕方なかった。煙草も倉田がくわえるとても喫いたくてたまらなかった。早く倉田がトイレへでも行ってくれないかといらいらした。

その間に裏から河原づたいに逃れる自信はあるのだから。その内孝市が呼ばれて二人の布団を敷いている。倉田は梨子に寝巻を着るのを手伝わせ、それから巨体を敷布の上に横たえ、

「孝市、足をもめ」

孝市は満蔵の巨体におじぎをしてからうやうやしく太短い主人の足をもみはじめる。再び満蔵の太い腿や尻などがむき出され、それが孝市のマッサージでゆさゆさと揺れ動くボリウム感に私はくらくらした。孝市がうらや

ましくもなったりした。

「孝市、貴様わしに何年仕えとるッ？」

「ヘイ、あしかけ六年でございます」

「馬鹿野郎、気のきかん奴じゃ、もっとしっかりもめい。」

倉田はどなっている。でも孝市はやはり旦那様に気に入られないと見え、倉田の大きな尻でしたたか顔をふまれ、哀願していた。やっと太った主人の河馬みたいに豪勢な体中のマッサージという勤めから孝市は解放されるのだった。

「勤務ぶりが、もう少しわしのお氣に召すようにならんとくびじゃぞ。」

「旦那様、ご生でございます、そ、そればかりは、……行く所もございませんし、私奴必ず氣をきかせてご奉公致す所存でございますから、ヘイ、是非……」

哀れにも倉田の足にひたすら平伏して孝市は哀願する。

「早う退れ。やせ犬め。夜中に呼鈴をならしたら、まごまごせんとやって来るんじゃぞ、よいか。」

「ヘイ、判りましてございます」

孝市が退出すると梨子は飲物の入ったコップを二つ枕元に置き、倉田の巨体の側ににじ

り寄る。倉田は飲物をストローでちゅうちゅう音をたてて吸い、コップを置くとどきりと巨体を反転させた。私は悩しくなり全く辛くなった。この分じゃまだまだトイレへなど行ってくれそうにもない。のどは乾き、どうやら尿意さえもおして来た。

「あなた、孝市なんかつまらない下男にすぎないのに、どうしてあんなにお叱りになるの。あなたのような偉い人が」

という梨子の言葉もやや上の空だった。

「かわいそうかね？」

「いいえ、少しも。でもおいじめになる値うちあるかしら。いつもあなたの前ではいつくばることしか知らないようなじいさんよ」

「まだ六十じゃよ、身体だって若いもんじゃフッフッフ、面白いわけがないわけじゃない」

「あなた、サジストね、そのわけ教えてよ。」

ねえ、私だって恥かしいことあなたには教えたくないわよ」

「孝市って、わしの昔の主人じゃよ、ハッハッハ」

「まあ！」

梨子におとらず私の驚きは絶大だった。それはすぐにあやしい亢奮に変化し、私は尿意も忘れる位だった。私を子供の頃から人知れ

ず夢中にしてきた、あのめくるめくあやしい主従逆転劇が眼の前で上演されるとは！

「主人ですって？ヘー、あなた、昔の主人を尻ふきにしたの？」

「そうじゃとも。別に悪いことじゃないじゃろ。エッ？お前わしい文句を云いたいのかね。お前がわしに何でも喋れって頼むから話したまでじゃ」

「い、いいえ、そ、そんなこと、あなたの自由ですし、とても名案ですわ。でも……」

「フ、フ、フ、そりゃわしや教養のないおやじじゃよ。成り上り者じゃからむつかしいことは知らん。じゃがわしは金持じゃ、あんな奴を使うてやって食わしてやっとなるんじゃ、孝市奴はわしの尻を拭かんけりゃ生きとれんよ。」

「そうよ、勿論ですわ」

「フッフ、あいつをいじめるのが感じがよくないとお前が云うんなら、これからいじめんよ」

「いじめても構いませんわ、面白い位よ。でもご事情ございますのね」

「奴は昔わしがまだ若い頃、職工にならん前じゃよ、わしが奉公しとった履物屋の主人なんじゃ。若いといっても二人とも三十すぎじ

やったが、随分ひどいことをして、わしをいじめた奴じゃ。わしや生れてから苦しいことばかりじゃったし、ええ所で育った人のようには素直になれんのじゃな、お前のような育ちのええ女をだからとても憧れたものだ。わしや恥かしいが、あいつに復讐することを誓うことで生きとった時もある。それがわしが工場を持って成功した時、わしは奴に会ったのじゃ、

『珍しいじゃないか。さては羽ぶりを利かせてると見えるな。私を一つ使ってくれんか』
 ってぬかしよる。見れば落魄した恰好だが、冗談ぬかしよると思うたから、『そんなに云いなさるんなら、そうしましょう。』といい加減に扱った。腹の中はにえくりかえるようじゃったがな。でも冗談じゃなく本気で奴は云つとることがその内判った。勝手な奴だと思つて益々癪にさわったわい。あんなにわしをいじめてひどいことをしておきながらぬけぬけと昔主人だったのをいいことに、わしに頼むなんて、―でもわしやいい復讐が出来るわいと考えてはくそえみもした。『あんなに出来ることはわしの召使位じゃろう』というと、流石に『そんな馬鹿な』と笑うので『馬鹿なことではない。お前さんはわしに頭を

下げて頼んどるんじゃろ。わしの尻ふきでもするつもりでないと勤らんとしたのじゃ』
 こうして奴はパンにありつきたさに、わしに使われることになったのさ。所がわしは用心棒に奴を見張りさせて逃げ出さん様にして置いて、本当に尻ふきにしてみました。

又暇さえあれば馬にしたり色々情ないことをさせたりして、わしの忠実な召使にしこんだのじゃよ。よくしたものであんな奴は馬にしたり、尻つぺたをねぶらせたり、小便を無理に飲ませたりすると面白い程奴隷になる。ハッハッハ。見い、今の孝市の恰好を、
 …ハッハッハ。』

「まあ、ホ、ホ、ホ、教育がお上手ね」

「ハッハッハ、そうかも知れんな、わしに雷を落され、この三十余貫の巨体でふみつけられるのも余程こわいんじゃよ。じゃが、この頃じゃあ、孝市奴、わしにいじめられるのが存外嬉しいらしいわい。ハッハッハ」

私はもうどきどきしてどうにもならなかった。倉田という男は何という凄い男だろう。これが真実であるのが不思議な位に思った。「どうせ、わしや無教養な男じゃよ。わしや学問などないから、平気でしたいことも出来るのさ。ハッハッハ」

「まあ、すてき、あなたって、本当にすばらしい人ね。何でも思ったことが出来るんですもの。うらやましいわ」

梨子はいよいよ倉田の太鼓腹にとびついた。でも少し前は口を開いて倉田の脂ぎった顔を眺めていたものだ。よほど驚いてもいただらう。がそれは私とて同様だった。こんな所に『主従逆転』がころがっていて、而も河馬そっくりに肥え太った尊大率直な倉田という男がもとの主人を召し使うとは！ 私は押し入れにひそんだ苦心の甲斐のあったことをこの上なく喜んだ。梨子が女らしい直感で倉田のそんな性格を見抜いて私を楽しませてくれようとしたのだと思つてこの上なく梨子に感謝した。でも生理的に私は全く限界点に達していた。奇妙にも尿意はやんでしまったが息苦しく、而も奇怪な倉田の話をきいて身体中がカッカとほてつてもう駄目だと思つた。そのためか私はとうとう大きな音をたててしまった。激しく私の身体がふすまにぶつかっていたのだ。ああ、万事休す！
 「お前、何じゃ、あの音」
 「きつと、ねずみですわ」
 「ねずみにしては音が大きすぎるよ。」
 「そうかしら、へんね、でもこの辺とても静

かですもの、大きく聞えるんじゃないやありません」
私はもう生きた心地もなく、ただ運を天に任すだけだった。生理的な欲求もどこかへ行って、私の身体は中風やみのようにガタガタ震え、またまた壁にぶつかって音を立ててしまったのである。

「泥棒かも知れんぞ」

という太い声と共に乱暴に開けられるふすまの音。そして私は倉田の丸太のような太い腕でつまみ上げられ宙に浮いた。

13

倉田の巨体が私の上にのしかかって来た。

子供の時からこんな光景を思い浮べて陶酔し長じて面映い気分がしてならなかった得がたい感触だったのに、実際遭遇してみると、そんなのんきなものではなかった。私はこのまま倉田の河馬のような凄い巨体にふみ潰されて死んでしまうのではないかと思った。倉田の大尻をのっけられただけでもそうなのに太い腕が私の首筋をしめ上げて苦しくて、やっと悲鳴をあげれるのが関の山だった。

「貴様一体何を盗みに来た。太い奴じゃ。」

尻にはずみをつけて押し潰すので、私は吐気がして半分のびていた。梨子はおろおろしていたが、

「あなた、そんなにしては死んでしまうわ。もうこの男何も出来ないわ。」

「うん、よし。」

倉田は私の背から巨体を離し、私は人心ついたが、とても体中がいたくて足を動かすのがやっとだった。倉田は体を激しく揺って私を見下していた。いくらか恐怖も消え、私は哀願するように倉田の脂ぎった顔を見て、そっと会釈をすると倉田の顔が一寸ほころびかけたのを知ってほっとした。

「お前は一体どうするつもりじゃ、警察へ知らせるがよいか」

「ど、どうかそればかりは、私は泥棒じゃないんです。それより済みませんが、お茶を一杯下さいませんか」

「ウーム、へんな奴じゃ。」

倉田は太った顎で梨子に合図すると、梨子は茶碗を私に渡してくれた。全くこんなうまい茶は始めてだと思った。人心つくとはじめて私は倉田という怪物に対する恐怖が湧き上がって、ぶるぶる慄えて仕方がなかった。孝市に対する倉田の責めを思い出せば尚更のことである。

「ど、どうか命ばかりはお助け下さい。私は決して泥棒じゃありませんので、……ヘイ、こ

の通りです。旦那のご命令とあらば、何でも致します。犬になれとおっしゃったら、その通り喜んで致します。旦那のおなぐさみ用でも何んでも……そ、それはこんな所へ入ったのは、何とおわびしてよいか、ど、どんなおしおきを頂いたって仕方ございません」

私は倉田の太鼓腹に向って哀願した。

「へんな奴じゃの、ハッハッハ、わしの犬になるつもりかね。フーム、一体誰じゃ、貴様は」

梨子が、その時思いきったような表情で口を開いた。

「あなた、ごめんなさい」

「何を云うんじゃ、お前」

「はい、私をお叱り下さい。この人は私の夫なんです。」

倉田がどんなに怒るか、私も梨子ももう全く生きた心地はなかった。

「フーム、けしからん。二人でわしをだましとったな。わしが今しおきをしてやる」

倉田は鞭を持って来てふり上げた。私は観念した。でも鞭は二、三回私の首筋をかすめただけだった。といっても痛さに私は悲鳴をあげた。どうしたわけか倉田は私を足蹴にすると、巨体の背を向け、布団の上に大の字と

なり、煙草を喫いはじめた。私も梨子も全く戸まどいするばかりだ。倉田は悠々と私など眼中にないかの如くドームのような太鼓腹を天井に向けて、その巨体を横たえているだけだからだ。梨子は倉田に向って頭をすりつけて平伏した恰好で

「ごめんなさい、私が悪かったんです。私どんなおしおきでも受けますわ。」

その声はおろおろして、私は梨子に悪くて仕方なかった。私も思わず倉田に近づいてペコペコ平伏した。すると意外にも倉田は「よしよし、君が梨子の夫じゃったのか。」

平然とうそぶくように云った。

「はい、ではお許し下さいますので」

「ハッハッハ、梨子から君の変ったことはきいとるよ。さっきもわしは梨子と約束してしまつた。わしや約束を破るのは嫌いじゃかな。でもな、ただでは許さん。君はわしらの行為をのぞいとったのじゃかな。出歯亀の罪じゃよ。君はわしに心から服従するような誓いをせにゃいかん」

「はい、喜んであなた様に服従致します」

「うむ、それだけじゃいかんよ。そうじゃな。わしの尻っぺたをねぶるとか、小便を飲んでみせるとか、わしをのつける馬となつて

這い廻るとか。ハッハッハ」

「へい、判りました。そうすれば、お許し下さるので……」

「うむ、許してやる。」

「ハッ、有難うございます。喜んでそうさせて頂きます」

私はホッとして倉田の奇妙なおしおきを次々と果していた。

14

私はとうとう倉田の別邸に引越すことになった。倉田も梨子も何の異議はなかった。それのみか倉田は新しい忠実な召使が一人ふえたことを喜んだ。不思議なことにあの孝市のように私もどんどん奴隷的な人間になつて行き、倉田と梨子とが、何をしても殆んど嫉妬も湧かなくなつて行くのだった。そして主従逆転という私を面映くするテーマの主人公の一人である孝市と共に倉田の河馬のようなすばらしい肥満体に臣従し、その脂ぎった四肢や尻や腹などをお洗い申し上げたり、マッサージしたり、厠のお伴をしたりが多忙な夜を一心に働くようになったのである。そして相変わらず河馬のような倉田の肥軀に奉仕して胸をときめかすのだった。こんな私を梨子は少しもあやしまない。倉田の来ない夜、二人で

奇妙な友人振りを発揮するのは、別れない前と同様だった。ただ昔の話題に倉田満蔵の巨体や彼に関することがつけ加えられるようになっただけである。私達はやはり別れられないのだ。案外もの判りのよい倉田は、梨子が少くない遺産をもつていて決して金めあてで自分の囲れ者になつたのではないことを知ったこともあって梨子と私との奇妙な性癖をよく理解してくれた。

でも私だって、こんな毎日にはやりきれない孤絶を感じて仕方ないのだ。こうした陶酔が麻薬のように私をむしばんで行きはしないか。まだ若い私が急にそんな不安にとりつかれて悩む時のあるのも無理とはいえないだろう。それにやはり私にも梨子への未練が少しはあるのだ。時として人並みに倉田への嫉妬が抬頭して狂わしくなることもある。でも、すべては私の奇妙な性向から来ることで、結局どうすることも出来ないのだ。ただ私に出来ることは、甘いこの生活に只管陶酔することだけなのだ。この楽しみに別れを告げたら私に一体何が残るだろう。静かな川べりの別天地で支配者倉田の統率の中に甘い屈従を享樂することより他、私は生甲斐のない人間なのだ。

(おわり)

長篇SM小説

宇宙のどこかで

△或る混血老婦人の話▽

(最終回)

佐 治 麻 造

或る混血老婦人の話 (二十七)

無駄とは知りつつも、エヴァは後手錠から脱しようとして、はかないもがきを繰返した。やがて力つきたエヴァは、脂汗で光る額を鉄格子の冷たさに押当てて忍び泣いた。鋼鉄の戒具から脱し得る筈もなく、所詮無益な努力なのだ。エヴァの足許の二個の鉄丸が鉄板の床を重々しく転って止まり、そしてまた転がり戻ってエヴァの足先に当って止った。

「自由になりたい!!」

エヴァは全身でそう想って喘いだ。この車が停まれば、そこは恐ろしい監獄なのだ。そしてそこで数十年の年月を……。

エヴァは突然身震いしてわなないた。どこの監獄へ連れて行かれるのだろうか。

「まさか、この間まで繋がれていた、あの監獄では？ ずい分遠いんだし、あそこじゃないと思うけど……。もし元の監獄に連れ戻されたら……」

正視するのも恐ろしかった程の婦人看守達のきびしい顔が、エヴァの脳裡に浮んでは消え、考えただけでも、ぞっとする苦しい懲戒の数々が眼前にちらついた。

「あのひと達に、どんな目に会わされるかしら……」

齒の根が合わなくなったエヴァは、恐怖に脅えて絶叫して腰を浮かせた。途端に車がカーブを切って、女囚エヴァは今度は鼻環の痛さに魂切る様な悲鳴を挙げたのだった。

護送車からよめき降りたエヴァは、夕暮の空を灰色に区切ってそびえる建物を見て安堵の吐息を洩らした。恐れていた元の監獄で

はなかったのだ。

翌日から、屈辱と苦痛に満ちた懲役囚の日々が再び初まった。腰から両脚に垂れる脚鎖は、左右それぞれ最高の三十封度をつけられ、苦役の時以外は瞬時たりとも後手錠をはずしては貰えない。そして二十封度の鉄丸を、毎朝左右交互に足首につけられるのだった。見せしめのため、脱獄女囚に対する扱いは一しおきびしく、他の女囚なら黙過して貰える様な些細な反則に対しても、一片の容赦もなく懲戒が加えられた。

大抵はエヴァと同じ鎖に腰を繋がれたシルヴィアも、婦人看守達の冷酷さをエヴァと共に分ち受け、足裏を鞭打たれた両脚を踏みしめて喘ぎ喘ぎ苦吟するのだった。辛い懲役刑を受け終えても、彼女には電気椅子が待っているのであつたが、それでも一縷の希望を抱いて懸命に勤めるシルヴィアの姿は哀れであつた。

齒を喰いしばり血を吐く思いで過した六カ月の後、エヴァの足から鉄丸が漸く除かれた。更に六カ月の後、脚鎖が一段軽いのに替えられ、そして三カ月経つと普通の重さ、十五封度のものにつけ替えられた。二年近く経つたある夕方、苦役から戻ったエヴァは独房の前で後手錠をはずされた。

「今夜から許して上げるわね。辛かっただろ」

エヴァはのろのろと両手を前に持って来て涙ぐんだ。他の女囚達が房の前で後手錠をはずして貰っているのを横目で切なく眺め乍ら、自分はそのままで鉄格子の中へ蹴り込まれるみじめさも終つたのだ。エヴァは婦人看守のスカートの前に跪まずいた。

「あ、ありがとうございます。ほんとにありがとうございました……」

「そんなに嬉しいの？ さ、お入り。ぐずぐずしてると蹴り込むわよ」

食器を手にとって囚人食を啜り乍ら、エヴァは嬉しくて泣いた。床に横たわって両手を体の両側におくと、雲の上にいる様に楽だった。腰枷の後ろにぶら下った手錠が背中と床に挟まれて、捕捉する相手が無いのを口惜しがるかのように微かに音を立てていた。

「よく我慢できたと思うわ。我慢出来ないといつたって、どうとも仕方ないんだけど……。ずい分痩せたこと……」

エヴァはそう思い乍ら首環や腰枷のあたりを両手で撫でて涙ぐむのだった。

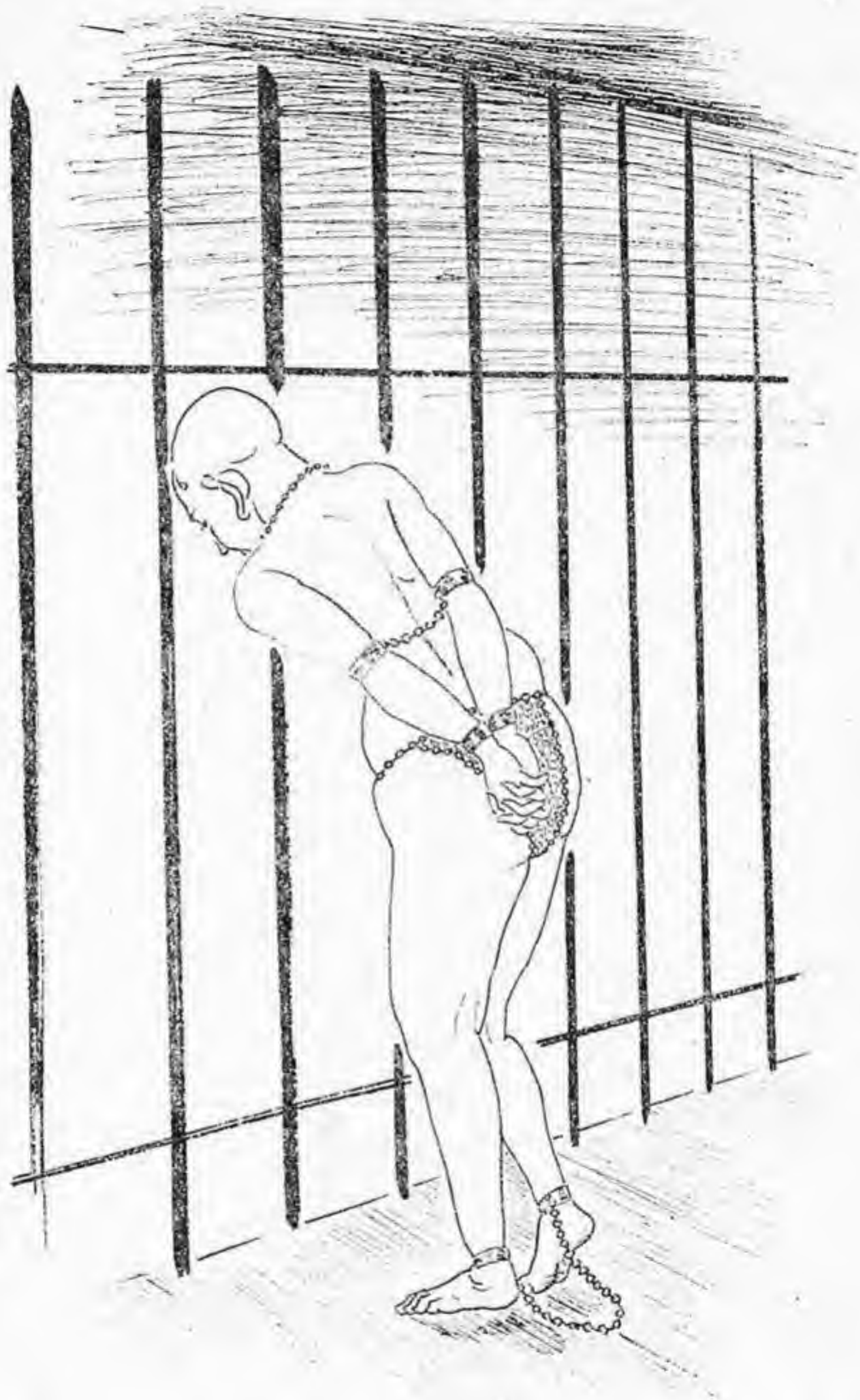
或る混血老婦人の話 (二十八)

四年程経ってエヴァは再び最初の監獄へ送られた。七、八名の女囚と一緒に貨物列車に載せられ、通々と大陸を横断して護送されるのだ。入れられた貨車は家畜用のものと同じ様な構造で、ふだんは牛馬や豚の輸送に使用しているらしく、車内に悪臭がしみついて漂っていた。貨物列車は旅客列車をやり過すためにしょつ中停つてはのろのろと走る。けだもの同然の扱いを受けるのには慣れてはいるものの、駅に停まる度、エヴァの胸はみじめな思いで一杯になった。他の女囚達も矢張り同じと見え、鎖の音を立てない様に身を固くしてうずくまり、そしてガラガラする眼で細い隙間から、ホームの男女の姿を切なく見やるのだった。しかし停車中に与えられる食事の時には、人々の眼に晒されるのは仕方ない事であつた。女囚達は、開け放たれた貨車の中であるいはやけくその様に鎖錠を音高く鳴らし、あるいはすすり泣き乍ら床の食器に口を寄せるのだった。五日間の貨車の旅を終え、汗と汚物にまみれた身をホースの水で

ざっと洗われた女囚達は、濡れそぼったまま護送自動車に押し込められた。

「父や母の住む家は、この近くにあるんだわ」

そう思うとエヴァの胸に熱いものがこみ上げた。一目でいいから外が見たかった。天井近くの細長い窓から見える空を仰いでエヴァは胸一杯になった。自分が生れ育ったこのあたりの景色を立ち上っ



女囚達は再びうなだれた。

その昔、自分が脱獄した監獄の獄庭に降り立ってエヴァはわなないた。灰色の高いコンクリート塀に囲まれたその殺風景な、獄庭はエヴァの胸に屈辱と苦痛の記憶を生々しく甦えらせた。一きわスマートに制服を着こなした見知らぬ若い婦人看守がスラリとしたスカートを蹴し乍ら、きっぱりときびしい足取りで女囚達の一人宛の前

て一目見たかった。しかし折って坐った膝を伸ばすことはおろか、崩すことさえ許されない身なのだった。

「もうじき外して貰えるわねこの手錠……」

「そうね。五日も六日も後手錠のままだと、ほんとにこたえるわ。肩がもげそうよ。今度の監獄は少しはましなんだろうねえ」

「どこへ行っても監獄は監獄よ。しかし前とちがって街から離れてるらしいから、少しは気が楽だろうね」

「街の中を鎖に繋がれて歩くのは、頭に来るからね」

囁き合う女囚に、監視の婦人看守の罵り声が浴びせられ

に立ち止まる。横一列に並ばされた女囚達の全身を鋭い眼で見やり、そして手にした書類にチェックして行った。

「強盗罪、懲役十二年……」

若い女囚がいかけて絶句した。

「番号は？」

書類から眼を上げた婦人看守が鋭くいう。

「ハ、ハイ……二一八号……バーバラ・マックレイン……」

「馬鹿!! 名前なんかいわないでいいの!! その番号は呼称番号よ。登録番号をおい」

「……」

「忘れたの？」

「……十二万……七千……」

つかつかと歩み寄った婦人看守の右手が高く上って若い女囚の頬に鳴った。

「登録番号を忘れたら、どんな罰を受けなきゃならないか知ってるわね？」

「わ、わすれたんですの。体には刷ってあるんですけど。懲罰だけは許して。今度から決して忘れませんから、お願いです」

若い女囚は後手錠をガチャガチャ鳴らして哀願した。

「そう。じゃ一度だけ許したげる。よく覚えとくのよ。えーっと、一二六七〇五号。分ったかい？」

婦人看守は靴を鳴らして次の女囚の前に立ち、きっと見据えた。

「殺人罪。懲役三十五年。一一〇八六三号……」

エヴァの隣りの中年の女囚が、自分の娘の様な年頃の婦人看守の胸許を見やり乍ら悲しげに、しかしスラスラと叫んだ。婦人看守の

恰好の良い脚が動いてエヴァの前に立ち止った。去来する白雲から出た陽射しが制帽の下金の髪にきらりと輝く。

「反逆罪で懲役三十年。脱……脱獄……及び官憲誘拐ほう助罪で懲役十二年を加重。一二二四九〇号……」

婦人看守の眼がキラリと光って鋭くエヴァを見据え、エヴァはもののいて語尾が震えた。

「申訳ございません……。本当に悪うございました。一生懸命に勤めますから、お慈悲を……」

恐怖に堪えかねて、エヴァは膝を地について身をもんで憐れみを乞うた。

「うるさいわね。余計なこというんじゃないの!!」

背後の婦人看守の長い鞭がエヴァの背にびしっと鳴り

「お立ち」

体をくの字に折って、悲鳴と共に背をのた打たせたエヴァは腕を掴まれて立たされ、婦人看守は書類に何かマークして次の女囚に移った。

一室に追い込まれた女囚達は、何日振りかで腰の連鎖を解き離され、裸にされて検査を受け、番号を刷り直され、そして新しい囚衣を身にまとった。倉庫から出されたばかりの真新しい枷や鎖錠が油で薄く光ったまま、金属音を立てて女囚達の体に施されて行く。施し易い様に体を動かして戒具を受け乍ら、エヴァは覚悟を新たにしたのであった。

「九五号はA級。他の者はそのままの級別を引継いで扱われる。分ったね？」

九五号とは自分の新しい呼称番号であることを思い出したエヴァ

は思わず悲しい声で哀訴した。

「何故ですか？ 護送中もずっとおとなしくしてましたわ。死ぬ程の思いでやっと級外からB級にして頂いたのに!! あ、あんまりですわ」

すらりとスマートな婦人看守が、制帽のピンを留め直し乍らエヴァを睨みつけて声を荒げた。

「不服なの？ 級外に落されて鉄丸をつけて欲しいの？ A級だって特別のお慈悲なのよ」

エヴァは黙ってうつむいて唇を噛んだ。又も独房の毎夜を後手錠で呻吟しなければならないのだ。これ以上いえば鞭が飛んで来るのは分っていた。胸に溢れる口惜しさと悲哀をこらえたエヴァは、首環に級別票の鉄片をつけている婦人看守の白手袋を見詰めて一声だけ囁り上げたのだった。

或る混血老婦人の話 (二十九)

数年の歳月を経て再び戻されたこの監獄では、婦人看守達の半ば以上が替っていたし、エヴァがいじらしい程神妙に勤めるせいもあるって、そんなにひどい扱いを受ける事は余りなかった。しかし古顔の婦人看守達の中でも少数の者、特にオールド・ミス達の手にかけると時々ひどい目に会わされた。鼻環で吊るして立たされて放置される辛さ、素肌に股鎖を締め上げられて苦役するみじめさも、又執拗に操くり続けられる死ぬ程の苦しさも、エヴァは週に一度は味わねばならなかった。それ等の懲罰は、女囚に対しては大分以前から行われる事が稀になっていたものではあったが、エヴァ達の脱獄で面目を失墜させられた事を執念深く覚えてる連中は、思い思いの理由をつけてはエヴァを苦しみ痛めつけた。

「脱獄の罪は、刑期を加算されてるんだから、それでいい筈よ。それなのに……」

今日も午後の数時間を窄衣で締め上げられ脂汗を絞り取られたエヴァは、独房の床にボロ切れの様に打ち伏して喘ぎ乍ら口惜しく考えた。手向いしようとは思わなかったが、あの意地悪い連中に一度だけいい度い事をいつて見たかった。

「駄目だわ。そんな事したら……」

エヴァは固く冷い床を涙で濡し乍ら悲しく諦めた。

「どんな事をされたって、唯憐れみを乞うしか仕方ないのよ。この後手錠はいつになったら、はずして貰える様になるのかしら？」

エヴァは弱々しく囁り泣き乍ら、いつしか寝入った。女囚の身には夢の中でしか自由はないのだった。

一年近く経って、古顔の婦人看守達もエヴァを痛めるのに飽きた頃、エヴァは漸くB級にして貰った。A級からB級になるのは比較的容易であって、大抵の女囚なら数カ月で入獄当初のA級からB級にして貰えるのだが、C級になるのは難しかった。最高のD級に至っては五年や六年でなれる筈はなく、この監獄でも数人しかいない。従って大部分の女囚はB級であって、脚鎖を取って貰えるC級を夢見乍ら切々と苦役しているのだ。

鞭音と鎖の音に明け暮れる日々がのろのろと過ぎて週となり、週が積み重って年となり、幾度か四季が巡って去った。

年に一度、クリスマスには粗末ながらも人間並の食事が与えられ一年が過ぎたことを知るのであった。唯一の楽しみであり慰さめである夜毎の夢の中で、エヴァが夢見る父母の顔は老ゆる事なく慈愛に満ちて微笑んでいたし、愛する夫の面影は変わる事ない若々しさ

でエヴァを迎えてくれたが、愛児の姿はエヴァの夢の中で年毎に成長して行った。健やかに育って愛らしい少年となった愛児の姿を、エヴァはその頭の先から手足の指先に至る迄ありありと眼に描くことが出来るのだった。

「写真が欲しいわ。せめて手紙でも貰えたら……」

独房の灰色の壁を見詰めてエヴァは痛切に思った。愛児の手に触れた石ころ一つが与えて貰えるなら死んでもいいと思った。しかし如何に哀訴してもそれは叶わぬ事だった。肉親との文通や面会は、D級囚になって初めて州知事に嘆願出来る事なのだ。切なく狂おしい情念の嵐が吹き過ぎて、エヴァの肩が力なく落ち、巡視の婦人看守の靴音が鉄格子の外で止ってそして行き過ぎた。

最初の入獄の時から十数年が流れ、エヴァは四十半ばの女盛りとなった。ひたすらに勤めた甲斐あって、今はもうC級囚として辛い脚鎖も除いて貰っていた。

「九五号。お前は今日からD級にして上げるわね。今後ともおとなしく刑に服するのよ」

重い首環と腰を締めつけていた腰枷がはずされたエヴァはホロリと涙ぐんだ。独房には固い乍らも壁際に吊ベッドさえあるのだ。

ベッドに身を横たえたエヴァは天にも昇る心地で、それ迄の辛い年月を想い起し、そして指を折って刑期を数えた。いくら数えても残りの刑期の方が長いを知ったエヴァは深い溜息を洩らして顔を両手で掩うのだった。

ある朝エヴァは婦人看守に連れられて獄外に出た。獄外に出る時には、いくらD級女囚とはいえ戒具を施されるのは致方がなかった。出がけに締められた腰枷から右脚だけに脚鎖が垂れ背後に回し

た両手首を冷たく手錠が噛んでいる。腰の革紐を握る若い婦人看守はパトリシアといって、どちらかというと女囚にはやさしい方だった。

「今日はね、お前に家の仕事を少し手伝って貰おうと思って……。おとなしくしてね」

夜間勤務を済まして官舎に戻るパトリシアはそういつて眠そうな眼をこすった。

「ハイ。それはもう……。今日もいいお天気ですねえ」

監獄の裏門から官舎群迄の道は、樹々に囲まれて人影もなく小鳥が時々さえずった。脚鎖を鳴らすエヴァの素足の裏で土や草が気持ちのいい音を立てた。

「お前、痛くないの？」

パトリシアが小砂利の上を歩き難そうにしながらいった。

「もう慣れてますもの」

靴底の様になって久しい自分の足裏を思っただけでエヴァは自嘲して呟いた。

「とても恰好のいいおみ足ですこと……」

並んで歩くパトリシアの足許を見乍ら、エヴァはそう口走り、そして自分の卑屈な言葉をみじめな気持ちで反省して、そっと唇を噛んだ。

官舎群は静かな樹立に囲まれて、ここに二軒、あそこに三軒と建っていた。

「この官舎群の工事に駆り立てられてたのは、もう十年以上前のことだわ……。樹も茂って、いい所になったわねえ……」

『パトリシア・ローウエル』と書かれた古風な標札のつけられた低

い小さな木の門の前に立ってエヴァは思った。

「ここなの。妹と弟と三人暮し。両親は早く亡くなっちゃって、二人共学校に行ってるのよ」

パトリシアはエヴァを庭に引き入れて戒具をはずしてやり

「手足をよく洗っておいで、このサンダルを貸したげるわ」

と庭の水道を示して家の中へ入ってしまった。脚鎖や手錠のぶら下った腰枷を軒下にきちんとおいたエヴァは

「あのひと、私が脱獄したってこと知らないのかしら？」

パトリシアの大胆さに呆れ乍ら水道で手足を洗った。しかし庭に面した居間の窓からはパトリシアが着替え乍ら鋭い監視の眼を注いでいるのだった。厚くなってひび割れた手足にしみついた汚れはなかなか取れなかったが、限られた量の水と時間しか与えられないのが常の女囚の身には、心ゆく迄手足を洗えるのが嬉しかった。エヴァがおそろおそろ家の中に入ると、パトリシアは明るい色のふだん着を着てコーヒーを啜っていた。制服を脱ぐと小柄なパトリシアは一そう若々しく見えた。エヴァを立たせたまま飲み終えたパトリシアは、テキパキと仕事を命じた。

「勤めてると、どうしても溜ってしまふのよ」

五室程の床を磨かされ窓ガラスを拭き、そして溜った物を洗濯させられる。眼を伏せたまま懸命に立ち働くエヴァは、さりげない様子を装ってはいるものの、監視を怠らないパトリシアの視線を肌にかけて、諦めてはいるものの苛立たい様な腹立ちを味わった。「逃げやしないわよ。心配なら腰に革紐でもつけて持ってたらいいのに」

心の中で呟いて手に力を入れると、滑って椅子の脚に当り、物音

を耳にしたパトリシアが眼を光らせた。

「私、おひるの支度するからね。番号をしょつ中大声でいってるのよ」

パトリシアはそういい捨てて台所に入った。

「九十五号ここにおります……。九十五号ここにいます……」

数秒おきに叫び乍らエヴァは情けなさに涙ぐんだ。

「お前も少し休んでいいのよ。ここへきて坐っといで」

パトリシアは小綺麗な食堂のテーブルで昼食を始め、エヴァは椅子の横の床に膝を折って坐った。椅子に掛ける事等は許される筈もなかったし、その様な事をしようとはエヴァも考えもしなかったが、解いた長い金髪を大きく折返した襟元で波打たせて、さもおいしそうに食事の手を動かしているパトリシアの若々しい横顔を見上げてみると、エヴァは自分の娘時代の事や既に失われて過ぎ去ったわが人生の楽しかりし筈の長い歳月を切なく想った。

「お前にも作って上げたわ、残り物だけど。持って来た食物は捨てていいから、これをお食べ」

自分の食事を終えたパトリシアは、テーブルから皿を取って床のエヴァに与えた。あるいはと期待していたエヴァは、嬉しさとみじめさを味わい乍ら皿を押戴いて礼をいった。ナイフもフォークもないのは仕方のないことで、エヴァは手摺みで冷肉を頬張りつつわが身の哀れさに涙ぐむのだった。冷めてはいたがコーヒーも与えられたエヴァの胸にパトリシアの情けが泌み透った。

「あと未だどの位残ってるの？」

パトリシアが熱いコーヒーを啜り乍ら、見下ろして訊ねた。

「ハイ、まだ十八年程……」

「そうお、長いのねえ。脱獄なんかしなけりや、もう五、六年で出られたものをね。可哀想だけど仕方ないわ」

二人きりの静かな食堂にラジオの音楽が小さく流れた。エヴァは何度かためらった後、思い切っておずおずと、しかし必死の思いをこめてパトリシアにいった。

「あの……お願いでございます。教えて下さいまし、もしご存知ないのでしたら、おついでに折に調べて頂いて……」

「何をなの？」

果物をむき乍らパトリシアが少しきびしい声でいう。

「ハイ。あの……両親や夫や、そして子供のことなんですの。父はロス市の山手五番街でセドリック・ローレンスといえば、すぐお分りに……」

「お黙り!!」

向き直って見下ろしたパトリシアが、ピシヤリと叱りつけた。

「そんな事、出来ると思ってるの？ 馬鹿だね、お前は!!」

エヴァは膝に両手をおいてうなだれ、身を固くして後悔した。文通を嘆願してはいたが未だ許しが与えられそうもなく、我慢が出来なかったのだ。

「そりやね、お前の気持はよく分るわ。とても可哀想だと思ってるわ。けど許可が与えられる迄辛抱おし。調べて教えたいのは造作ないけど……。服務規程に触れるしね。私は聞かなかった事にしただけ、他の人にそんな事口走っちゃ駄目よ。許可が貰えなくなるし、事によると降級されるわ。又ぞろC級やB級にされたら辛いでしょう。」

エヴァは黙って唇を噛みしめ、そして涙を一しずく膝に落とし

た。

「シルヴィアは、どうしたかしら？」

暫くしてエヴァは思い出してポツリと呟いた。

「ああ、シルヴィア・バコールね？ お前と一緒に脱獄した……。東部の監獄で大分前に死刑を執行された筈よ」

パトリシアは無表情にそういつてナプキンで手を拭い、床にいたエヴァの皿をスリッパの先で隅へ押しやった。

「さ、ひるからは庭の手入れよ。柵にペンキも塗って欲しいわ」

明るい陽光を浴びているささやかな庭の緑と、樹立の間から見える低い木柵をちらっと眺めてエヴァはいった。

「お願いですから、何かで縛っておいて下さいませんか？」

「おや？ 何故なの？」

パトリシアは皿を持って立ち上がり乍ら不審そうに訊ねた。

「ハイ。こんな風に自由にしておかれますと自分で自分が怖くて、心配で……」

「へーえ、ホホホ。逃げなくなるのね、つまり……」

「ハ、ハイ。そんな事しようとは考えてもいませんし、逃げれるものとは、つゆ思ってもいないのですけど……」

エヴァは口ごもって、やるせない思いに身もだえした。

「見ない振りをなさってますけど、絶えず監視しておられるのは、よく分ってますの。そのスカートのポケットに手錠をお持ちなのも知ってますわ。何か鎖でもつけといて頂ければ、私も却って気が楽ですし、あなたもご心配ないと思うんですけど……」

パトリシアは笑い乍ら、スカートの前に手を入れて手錠を取り出した。

「そんな囚衣を着て鼻環つけられていても未だ落ち着かないの？
ホホホ、じや気の済む様にして上げるわ。手をお出し。左手よ」

パトリシアはそういつて、エヴァの差出した左手首に手錠の環を二個共嵌め、鼻環を指でぴんと弾いて再び笑い声を立てた。

午後の陽射しを背に受けて、エヴァが庭で立ち働いていると、家の前に学校バスが停って二人の弟妹が帰って来た。

「ウワー!! 綺麗になったわねえ。家中ピカピカじゃないの」

「あ、あの女囚がしてくれたんだね。柵のペンキ塗りもやってくれてら」

騒ぐ弟妹達に、おやつを出してやり乍らパトリシアがいった。

「お姉さんはね、これから少し眠るからね。よく番してるのよ。いい？」

「私、怖いわ。大丈夫？」

「大丈夫よ。あの女囚は、とてもおとなしいの。もし何かあったら起してね。仕事はいいつけてあるわ」

「分ったよ。心配せずにお寝みよ。姉さんは、今夜も夜勤なんだから」

少年がケーキを頬張り乍ら、元気よくいった。

「けど、僕のグローブ、いつになったら買ってくれるの？ いつも借り物じゃ、もう嫌なんだ」

「ああ、そうだったわね。今度のお給料日に、きっと買って上げるわ」

パトリシアはそういつて二人の弟妹をいとしそうに見やり、寝室に入って窓からエヴァを一べつし、そしてカーテンを閉めた。

陽がゆっくりと傾いて、エヴァが命じられた仕事を済ませる頃、

パトリシアも起きて来た。

灯のついた食堂で、ささやかな夕食の卓に向う三人の姉妹達を庭に坐って眺め乍ら、エヴァの胸に暖いものが仄かに流れた。エヴァにも食事を分けてやったパトリシアは、制服に着替えて出て来た。

「姉さん、もう出掛けるの？ 未だ早いじゃないか」

「ええ、けどね。この女囚を七時迄に連れて帰らなくちゃいけないのよ」

靴をはいて庭に降り立ったパトリシアは、きびしい声でエヴァを促した。

「さ、帰るのよ」

パトリシアはエヴァの左手から外した手錠をカチャカチャいわせて腰の革サックに納め、鎖のぶら下った腰枷を取り上げて女囚の背後に回った。

「あなた達、よくお勉強して、早く寝るのよ。おやすみ」

エヴァの両手に後手錠を嵌め乍ら二人の弟妹にそういつたパトリシアは、革紐を腰枷につけて握った手で女囚の背を軽く押したのだ。

或る混血老婦人の話 (三十)

それから二週間経って、エヴァが看守休憩室の片隅で婦人看守達の靴を磨いていると、通り掛ったパトリシアが、あたりを素早く見回して囁いた。

「お前の両親も良人も皆達者よ。子供も大きくなって来年は大学へ行くんだって。次郎っていうんだっけ？ お前のご主人は？」

その人もロス市で一緒に住んでるわ。お義父さんの片腕になって会社でバリバリやってるそうよ。独身だって……、教えたげるわ。お

ど黙ってるのよ、いい？」

エヴァの胸は喜びで溢れた。良人も愛児も両親と一緒に暮しているのだ。そして自分から五十哩と離れていない所にいたのだ。愛児も既に大学生に……。そして良人は自分を待って……。パトリシアの情けが胸に込み、エヴァは眼頭を熱くして、立去るパトリシアの姿を感謝のまなざしで見送ったのだった。

「泣いたりして、どうしたのさ？」

意地悪そうな婦人看守が遠くの方のソファから立ち上り、薬指に嵌めた指輪をいじり乍らやって来ていった。

「パトリシアに苛められたのね」

「ハ、ハイ……」

「あのひとでも、たまにはそんな事するのね」

そういつて欠伸した婦人看守は制帽を留め直し、エヴァが押し戴いて差出す靴をじろりと見乍ら足を突込んで紐を結ばせ、壁から鞭を取って出て行った。愛する者の消息を知り得たエヴァは、積年の不安としこりがその胸から溶け去るのを感じた。そして安堵と喜びの涙を独房の夜のベッドで、人知れず心ゆくまで流したのであった。

しかし、パトリシアの折角の慈悲も却って仇となってしまったのだ。ある日、エヴァは事務室に連れて行かれた。連れて行ってくれたのは、パトリシアだった。

「心配しなくていいのよ。多分、いい事だと思うわ。さ、規則だから可哀想だけど……」

事務室の入口でパトリシアは、そういつてエヴァに後手錠を掛けた。

「九十五号。数順により文通を許可して上げる。今ここで書きなさい。宛先は一人だけ。十分以内に書き」

大きなデスクの前に立たされて、課長からそういわれたエヴァは天にも昇る心地がした。パトリシアが笑顔で右手の手錠をはずしてくれた。一枚の紙片とちびた鉛筆を与えられたエヴァは、立ったまま机に身を屈めた。鉛筆を持つ指が震え、万感胸に迫って泣けて泣けて仕方がなかった。左手だけに嵌まった手錠を握るパトリシアが肩を抱く様にして慰め励ましてくれ、エヴァは心を取り直して鉛筆を握り締める。長い年月にわたって筆を持たなかった手の動きはたどたどしくもどかしかった。思いのたけを半分も書かないうちに余白が少なくなり、そして時間が来て紙片は婦人課長の手で無慈悲に取り上げられ再び右手も手錠が噛んだ。

「割と綴りも正確じゃないの？……」

額を寄せて読んでいた課長は、忽ち眉を吊り上げて鋭くエヴァを睨んできびしくいった。

「どうしてこんな事を知ってるの？ 今でも私をお待ちになって下さって何とかかんとか……。まだあるわ。大学はどの大学に入るつもりかって!! え、何とかおいしい。お前が知ってる訳がないじゃないの!!」

エヴァの眼前が昏くなり、背後に立つパトリシアが小声で「アッ……」と叫んだ。

「おいしい!! どうして知ったの？」

エヴァは唇を噛んで黙って立ちすくんだ。自分のボンヤリさ加減が恨めしかった。

「黙ってるのね。いわないならいわないでいいわ。今日からB級

よ。それから、一週間ばかり重屏禁よ。いいのね？」

無念さと悲しさで胸ははち切れんばかりであったがエヴァは心を決めて黙っていた。パトリシアに対して済まない思いで一杯だった。

「あなた、この九十五号をひん剥いて二ダース程鞭を当てておやり。この所、鞭の味も忘れてる様だし……。そして重戒具で暗房に叩き込んでおやりよ。今、何号の暗房が空いてるかしら？」

婦人課長はエヴァを憎々しげに睨み乍らパトリシアに指示した。

パトリシアに鞭打たれるのはエヴァには本望だった。喜びに胸躍らせて書き綴った紙片が、もはや送り出される事もなく課長の机上に投げ出されてあるのを悲哀に満ちた眼で見やって、エヴァは一声だけ嗚咽した。

「さ、連れて行って。事務処理はすぐ済ませるから」

課長はパトリシアを促して低く舌打ちをし、そしてインターフォンのスイッチを入れた。

「ちょ、ちょっと待って下さい」

凝然と立っていたパトリシアが決然といった。

「実は、私が知らせてやったんですの。申訳ございません」

課長が驚いてスイッチから指を離して顔を上げた。

「それほんと？ 一つの事なの？ 九十五号を庇ってるんじゃないでしょうね？」

エヴァが身をもんでオロオロと何かいい掛けるのを制したパトリシアは、しっかりした口調で事情を説明した。

「つい可哀想になったものですから。済みません」

「フーン。あなたは刑務官の資格なしね。しっかりして頂戴よ。服務規程違反だわ、分ってるわね？」

「ハイ」

「上司とも相談するけど、まあかなり減俸されるのは覚悟していてもよ」

姉のパトリシアに物をねだる弟妹の姿がエヴァの胸に浮んだ。

「私が、私が悪いんです。どんな懲罰でも受けますから、このお方を減俸なんかしないで上げて……。私が頼んだのです。ほんとなんです」

エヴァは後手錠をガチガチいわせて必死に叫んだ。

「九十五号はああいつてるけど、あなたは先刻そうはいわなかったわね」

婦人課長は立上ってデスクを回ると、エヴァの頬に平手打ちを喰わせて黙らせ、パトリシアをきびしく見据えた。

「あなたはそんな事を哀願されても、ピンタ一つしなかったんでしょ？ 呆れたものね」

課長は苦々しげにいった。

「九十五号は別のひとにいつて鞭打たせるわ。降級は勘忍してやるけど、もう面会はおるか文通だつてまず見込ないからそのつもりでいるがいいわ」

背の高い赤毛の婦人看守が呼ばれ、エヴァは荒々しく曳き出された。パトリシアは課長の前に立たされて、長いこと叱られていた様子だった。

それからは、エヴァの取扱いからパトリシアは外されてしまい、時折姿を見掛ける事はあっても、自分から口を利くことを禁じられている女囚の身のエヴァは、そっと両手を合わせて感謝のまなざしを向ける事しか出来なかったのだった。一年程してパトリシアの姿

を見掛けなくなったエヴァは氣を揉むうち、婦人看守達の雑談から彼女の消息を知った。思いも寄らなかった莫大な遺産を相続したパトリシア達三人の姉弟は豊かに暮しているのだ。そしてパトリシアも近く結婚するとの事だった。安堵したエヴァは、灰色の牢獄の中



から遙かにその幸福を祈って涙ぐむのであった。

エヴァには遂に文通すら許されず、更に数年の歳月が流れた。そしてある秋の一日、エヴァは事務室の課長の前に立った。デスクは同じだったが、その向うに坐る婦人課長は、嘗てパトリシアを詰問した婦人から数えて三人目だった。

「九十五号。この度、お前を仮出獄させる事になったのよ」

エヴァの眼の前が突然明るくなり耳を疑った。待つて待つて待ち焦れ夢に見た日が遂に来たのだ。夢ではないかとエヴァは背に回した両腕を動かして見た。いつになっても冷やかな硬さで手錠が両手首に喰い込んでいるのを感じたエヴァの胸は、高鳴って息苦しい程だった。

「しかし条件付きよ。終身国外追放。分った？ それを承知なら仮出獄させて貰えるわ。嫌なら刑期一杯いてもいいのよ。ホホホホ。但しいつとくけど刑期が満了しても国外追放が赦されるか、どうかは別問題よ」

暫くしてエヴァはその意味を漸

く理解した。

「そ、そんな……。あ、あんまりですわ。裁判の時には、そんな事は何も……」

課長はマニキュアの屈いた手を挙げてエヴァを制した。

「そんな事いっても駄目。国外追放処分は行政処置なんだから。まあ、そんなにしょげなくてもいいのよ。国外に立去る期限には多分二、三カ月の余裕はあると思うわ。それに、会い度い人があるんなら、呼び寄せる事も出来るじゃないの」

歓喜の絶頂から奈落の底へ、そして再びエヴァの胸に希望が湧いた。

「では、承知なのね？」

内務省発行の書類にエヴァは震える手で署名した。

「それでいいわ。出獄の時に期限を示した命令書を渡すからね。いっとくけど、もし違反したら仮出獄取消しの上、更に刑を加重されるわよ。ではと……。手続きに二週間はかかるわね。ああ、それから出る時に迎えに来て欲しい人がある？ いえ、通知してあげるわ。代弁人は誰だったの？」

エヴァはすぐさま両親と夫と愛児の名を挙げた。彼等の名を口にすると乍ら頬に熱い涙が流れた。突然エヴァはおののいた。愛児は母が牢獄の鉄鎖に繋がれている事を知っているのだろうか？ エヴァの心はこの期に及んで千々に乱れた。知っていたとしても、刑にやつれ果てたわが身の姿を、立派に成人したであろう愛児に見せるに忍びなかった。

「息子だけは迎えに来させないで!! グローリア・ガースンさんにそう言って下さい。お願い……」

課長は頷いて、手真似でエヴァを連れ去る様に命じたのだった。胸ふくらませて二週間を過ごしたエヴァは、半月過ぎても音沙汰ないのに不安の念に駆られた。いても立ってもいられない気持であった。

二十日程の後、事務所に曳かれたエヴァはその日仮出獄させる旨をいい渡されて、全身の力が抜けて行く様だった。窓外は細い秋雨に煙っていたが、エヴァには明るい朝の光がさんと注いでいるかの様に思えた。

独房を綺麗に掃除し獄内を曳き回されて挨拶を終えたエヴァは、事務室の隣りの室に連れ込まれた。エヴァが懲役囚として忌むくもおぞましい囚衣に身を包み戒具を初めて施された室であった。前で嵌められていた手錠がはずされた。エヴァはその手錠が鈍く光って婦人看守の腰の革サックに納められるのを感じて眺めた。もう二度とあんなものを手に嵌められる事はないのだ。囚衣を脱ぎ体に刷られた番号を消された。ひりひりと泌みる薬剤の刺戟が快かった。

鼻環を取り除かれた時には、エヴァは感極まって大声で泣いた。やっと人間に帰えれたのだ。制限なしに心ゆく迄シャワーを浴びさせて貰ったエヴァは、渡された差入れの衣服を抱き締めて暫く泣きじやくった。囚衣を着せられる時に着ていたドレスは、もはや色褪せていただろうし、そうでなくとも今のエヴァの年令では不釣合のものであったに相違なかったが、今与えられたドレスはエヴァの年に似つかわしいものであった。真新しい靴も贈り主の心ずかいを示して踵が低かった。淡いハンドバッグの中には化粧品品々さえ行き届いた配慮を見せていた。身繕いを済ませ、漸く泣きやめること

が出来たエヴァは婦人看守に導かれて事務室に入った。もはや入口の所で手錠を掛けられる事もなかった。

与えられた国外追放命令書をエヴァは震える手で受取った。覚悟していた事乍ら矢張り悲しく情けなかった。示された期限と壁の力レンダーを見たエヴァは、あと六週間でこの国を永久に立ち去らねばならない事を知った。

「じやお行きなさい。ミセス・グローリア・ガースンが向うの部屋で待ってるわ」

ミセス・グローリア・ガースンが待ってるって？ それは分ってるわ、けど両親や夫？ エヴァは早鐘の様な胸を押えて小走りにもどかしげに急いだ。婦人課長はグローリア・ガースン達とはいわなかった。いかにも!! エヴァが夢中で開けた室の中には、ミセス・グローリア・ガースンが唯一人待っていた。

茫々として流れ去った三十有余年の歳月を隔てて、エヴァとグローリアは顔を見詰め合い声もなく立ちつくした。グローリアの聡明そうなその広い額と輝く瞳は、今も変らなかったが、その髪には白いものが混っていた。

「辛かったでしょう？」

エヴァを抱擁したグローリアが背中をやさしく撫で乍ら呟いた。暫くの沈黙の後

「……ええ……」

かすれた声でエヴァが答える。

「私の力が足らなくて……。あなたをこんな目に会わせてしまっ……」

「いいえ、そんなこと……。あなたには感謝してますわ」

グローリアが如何に努力した所で、あの時の社会の声の圧力には抗し切れなかったであろう事をエヴァはどうに悟っていたのだ。

「……で……父母や夫はどうしたんですの？ 息子は元気なんでしょうね？」

グローリアは黙ったままエヴァをソファに坐らせて手を握ってやさしく撫でた。エヴァの胸に黒い雲が湧き起って不安が心臓を締めつける。

「エヴァ。もっと後でいうおうと思ってたんだけど……」

グローリアはエヴァの瞳をひたと覗き込んで口ごもった。

「いって!! いって!! どうしたの？」

蒼白になったエヴァは息を吞んでグローリアを見詰めた。

「ご両親も旦那様も、それはそれは一生懸命になって、あなたの赦免運動に奔走なさったのよ。あなたの脱獄でどんなにショックを受けたことか!! けど諦めないで一生懸命だったわ。そして漸くその努力が実を結んだ訳だけど……」

エヴァの胸を痛烈な悔恨が切り苛んだ。グローリアのあとの言葉を聞くのが恐ろしかった。

「ご両親もご主人も亡くなったのよ……」

エヴァは脳天を一撃されグローリアの膝に崩折れた。気が遠くなりそうだった。エヴァの体をやさしく胸で受け止めてグローリアはいう。

「ご主人は六年程前に自動車事故で、お父様は三年前に心臓麻痺で……。お母様はね、つい半年前迄は待ってらしたのよ。けど、原因はよく分らないんだけど、とても衰弱してしまって、とうとう……」

エヴァの両眼から初めて涙が止め度なく流れてグローリアの膝を

しとど濡らした。

「旦那様もね、死ぬ迄あなたを待ってらしたのよ。お部屋にあなたの写真を何枚も飾って……。私も一生懸命にやっただけ。もう少し早く出して貰えたらねえ……」

グローリアもハンカチで顔を掩った。

「それで……それで、息子は？ 私の子供は？」

グローリアはエヴァの背をやさしく撫でて答えた。

「息子さん迄亡くなって堪まるもんですか。とうに大学を卒業してお祖父さんの会社で活躍してるわ。今は社長じゃないけど、ゆくゆくは社長よ……」

エヴァは身を起して耳を澄ました。

「立派な奥さんを貰ってお嬢さんもあるの。今四才かしら、とても可愛らしいのよ。何という名だと思う？」

グローリアは涙に濡れた頬に微笑を浮べた。

「エヴァちゃんというのよ。あなたの名を取ってつけたのよ」

エヴァの胸にはほのぼのとしたものが流れ、固い塊りが心の深みで温かく溶け去って行き、そして体の隅々に感動が込み渡った。

そう、私はエヴァちゃんのお祖母さんなのね。エヴァの顔が泣き笑いでくしゃくしゃになり、短かい髪に混った白いものがびんの所で小さく震えた。様子を調べに来た婦人看守を、グローリアが黙って睨みつけて追い返し、室の中は静寂が暫く流れた。

「さ、もう行きましょう。こんな所、早く出なくっちゃね」

或る混血老婦人の話 (三十一)

グローリアは世間の眼を避けてエヴァを静かな山中の温泉に連れで行った。

「新聞やなんか捕まらなくてよかったわ。ホラ、もう記事が出るわよ」

グローリアは、かなり大きく扱った記事を示して笑った。

「あなたのいう通り、息子さんには何も知らせないのよ。けど呼び寄せて会ったら？」

グローリアはそういつてくれたが、エヴァは齒を喰いしばってかぶりを振った。既にエヴァの心は決っていたのだ。その父に似て、きっとやさしい心の持主であるに違いない息子は、必ずや暖かく迎えてくれるに相違ない。しかし彼等の家庭を乱すのはエヴァにとつて忍び難かった。自分の腹を痛めた子とはいえ、物心地もつかない中に引き離されたままなのだ。そして直ぐさま国外に立ち去らねばならないこの身なのだ。それに社会は未だ忘れてはくれなかった。反逆の大罪を犯した刑余者の母が暫時にせよ傍らにいては肩身が狭かろう。今迄何十年間もの生き別れに堪えて来たのだ。あと少しの辛抱がどうして出来ない筈があろうか。エヴァはわが胸に悲しいいい聞かせて諦らめていた。

息子達の姿を一目だけひそかに垣間見て、そしてそっとこの国を立ち去るのだ。いつの日か会える日もあるであろう。頑なに、静かにエヴァはもう一度頭を振ってグローリアに淋しく微笑して見せ、そして窓外に眼を転じた。眼下に蛇行する河の水面を吹く秋風が瀟々として峡谷を吹き過ぎる。

「エヴァ。それはひがみというものよ。会いなさいな、きっと喜んでくれるわ。先刻も連絡したんだけど、事務所の方に何度も問い合わせがあったのよ。私がいないのできつと一緒にだと思ってるのね」しかしエヴァは三度かぶりを振った。

「そう。じゃ、身の振り方が決ったら、すぐに呼び寄せて上げなさいな」

エヴァは眼を輝かせてしっかりと頷いた。

「ああ、それからね、エヴァ。あなたのお父上様の遺産を私が預かっているのよ。相当な額だわ。お金には不自由しなくてもいいの」

エヴァは泌々と親の有難さを思った。

数日後グローリアの事務所から届けられた写真を、エヴァは奪う様にして封を切るのもどかしく取出した。両親、夫、愛児、そしてその妻と幼児の各ポートレートを、エヴァは息を詰らせ喰い入る様に見入った。父母は昔に変わらぬ温い慈愛の眼でエヴァに笑い掛けていたし、夫は生けるが如くエヴァに話し掛けて来る様であった。

「つい近くにいながら、死目にも会えなかったのね。ご迷惑を掛けて、ほんとに何とお詫びしたらいいか……」

深い悲しみが胸に溢れ嗚咽が糸を引いて流れた。

「何故もう少し待って下さらなかったの？」

亡き夫の写真を胸に抱き締めて掻き口説くエヴァには、その写真の口許が動いて昔変わらぬ声が聞えて来る様だった。

立派に逞ましく成人した愛児は、その父の面影をそのままに、甘える如く恨むが如く、灼きつく様に見入る母の視線に答えて微笑していた。

「これが私の息子なのね。私の子供なのね。こんなに大きくなつて!!」

息を詰らせて喘ぐ様に叫ぶエヴァの髪をグローリアが、やさしく撫でて長い時間が過ぎた。受児の各時代を撮った十葉近い写真を繰返し見詰め頼ずりしエヴァは、その一枚一枚を机上に立てかけ涙に

かすむ眼で別の写真を取上ぎた。

「それが奥さんよ。ジャネットっていうの」

グローリアの言葉を聞き乍らエヴァは息子の妻の姿を眺めた。賢くそんな清潔な感じの小柄な女性だった。ふとエヴァの心にねたましさが湧いてひろがる。

「私が一緒に暮したよりも長いこと、このひとは息子と一緒に暮してるんだわ、もう……」

エヴァはその写真を静かににおいて、幼女の写真を取り上げた。

「エヴァちゃんね」

「そうよ」

頬に押し当てられたその写真は暖かい涙でしとど濡れた。ロス市の山手に在る落着いた家の写真もあった。両親が住み、エヴァが育ち、そして今は息子とその家族が住むその家のたたずまいを見ると、エヴァの胸には過ぎし日の想い出が走馬灯の様に浮んで消えた。グローリアの部下が隠し撮りしたのも混えて親子三人の家庭生活を撮った数葉を見ると、エヴァの眼には又も熱いものが滲んで来た。しかしその涙は、心の奥で何かが充たされたのを感じた喜びと満足の涙であった。

「グローリア。あなたご迷惑でしょ？ 構わないでお帰りになつてよ。元気になったら知らせるわ」

エヴァはいったが、グローリアは微笑してかぶりを振った。

エヴァは、朝から晩まで繰返し飽きる事なく写真を眺めて日を送り、いでゆの峡谷は、陽に輝き秋雨に煙って三週間程が過ぎた。そして秋も深まったある日、大きなサングラスに顔を隠したエヴァは、グローリアと一緒に山を降りた。行先は父母と夫が眠る墓地で

あった。

「今日は土曜でしょう。土曜には皆揃ってお墓に花を捧げに来るのよ。大抵夕方だわ」

エヴァの胸は期待と喜びにふくれた。

「かち合わない様にして下さいね」

「ええ、大丈夫よ」

二人の初老の婦人は淋しそうに笑い合った。ロス市の郊外の教会の白い壁の所に車を停めたグローリアとエヴァは小径を上って行った。陽は既にかなり傾いて、落葉が風に微かに舞った。牧師服を着た男が微笑し乍らすれ違い、あたりは人影もなく静寂だった。丘の上の広い墓地には、樹々や草花に囲まれて緑の芝生の上に墓碑がちここに点在している。秋の薔薇が咲き乱れる茂みの角を回るとローレンス家の墓があった。土曜の夕暮に家族揃って墓に花を捧げるのはローレンス家の慣わしであった。エヴァはあたりのたたずまいを懐かしく眺めた。白い小石を踏んで墓前に立ったエヴァは、芝生の上に置かれた墓碑の上に刻まれた父母と夫の名を見た。跪ずいて胸に十字を切り一字宛名を辿るエヴァの眼は涙でかすみ、そしてエヴァは音もなくその場に崩折れた。白い雲が漂って来て影を落としそして流れ去り長い時間が過ぎて行った。

「もう息子達が来る頃だわ」

エヴァは静かに立ち上りグローリアも黙って後に従う。薔薇の茂みを曲って戻った所、小径を見下ろす小高い場所に二人は佇んだ。樹々の葉を透して小径の白さが眼に泌みる様だった。

教会のあたりからオルガンの音が風に乘って流れて来る。

「何という曲だったかしら……」

忘れていたその曲の名を、エヴァは忽ち思い出した。

「そう、ロング・ロング・アゴウなのね」

——語れ愛でしまごころ

久しき昔の……

……

語るおもは変らず

久しき昔……

嫋々たるオルガンの調べが消える頃、小径の向うから三つの人影がゆっくりと現われて近づいて来た。

小さな脚でたよりなく歩く少女を真中にして、その両手を取った二人の男女が秋の夕日を背に受けてこちらの方へ歩いて来るのだ。

エヴァの灼きつく様な視線を知ってか知らずしてか、彼等はエヴァの前をゆっくりと通り過ぎて行く。エヴァは男の姿に、自分の夫の倅をありありと見た。若い婦人が片手に抱く花束を少女がせがんで、その小さな胸に重そうに抱いてあどけなく笑う。飛び出したい衝動に駆られたエヴァは、一、二歩走って辛くも自制した。樹の幹に抱きついて肩震わせるエヴァに見送られて、三人の親子は薔薇の茂みを曲って消えた。

「エヴァ。何もいわないで行って会いましょうよ。何を心配してるの？」

グローリアが又もそういつて促したが、エヴァは齒を喰いしばって樹に寄りかかり、彼等が消えた薔薇のあたりを黙って見詰めているのだった。やがて樹の幹を抱いたままエヴァの体が音もなく崩れて膝が地に着いた。その喉は固く閉じられていたが、うっとりとし

た様な表情が顔に漂っていた。エヴァには今、墓の前に立つ三人の姿が見えるのだ。グローリアに髪を撫でられながら、エヴァは墓地の光景をありありと見、愛する人々の声を、はっきりと聞くことが出来たのだ。

幼女が愛らしい仕草で花束を墓碑の上にそっと置き、両親をあどけなく見上げ、そして両親にならって跪ずき、たよりなげな手つきで胸に十字を切るのがエヴァには見える。幼女の父がエヴァの事を祈る途切れ勝ちな低い声がエヴァには聞える。静寂な一刻が流れ、幼女が両側の両親を交る交る眺めて小さな体を動かすのが見える。

幼女の父が顔を上げ、そして彼の父親そっくりの声で口ももり勝ちにやさしくいってきかせるのがエヴァには聞える。

「エヴァちゃん。お祈りは済んだの？ アグネスが仔犬を産んだことを、お祖父ちゃん達に話した？」

幼女が頭を振って再び跪ずくのが見える。

「エヴァちゃん。ずい分長いのね」

幼女の母がドレスの膝を、そっと払い乍ら微笑しているのが聞える。

「パパ。今夜もお祖父ちゃんの事、お話してね。私、会ってないんだもの」

幼女が口をとがらせていうのが聞える。

「エヴァちゃんが、もう少し早く生れて来ればよかったのにねえ。

こうのとりが怠けてたのね。曾祖母ちゃんは知ってるでしょ」

幼女の母がそういってそのふくよかな膝小僧を拭いてやるのがエヴァには見える。

「お祖母ちゃんは、どうしたの？ もうじき帰って来るっていつ

たのに!!」

幼女の言葉がエヴァの胸を抉り、幼女の父の顔を不安の表情と心痛の色が掠めるのが見える。

「ちょっと寄り道してるんだよ。いけないお祖母ちゃんだねえ。遠い所から帰って来るんだからね」

「お義母様は、ほんとにどこへ行ってしまわれたんでしょうねえ？ あなた」

若い母が花束を花瓶に挿し乍ら、夫に呟くのが聞える。

「うん。その中、きつと帰って来て下さるさ。未だ三週間あるんだから。さ、帰ろう。エヴァちゃん、仔犬達の名前をつけてやるんだろ？ そして綺麗にしてやって、お祖母ちゃんに見せて上げるんだろ？」

「ウン」

親子三人が、名残り惜しげに墓を見返りつつ踵を返すのがエヴァには見える。

「エヴァちゃん、疲れたのかい？」

幼女の父がその腕に小さな体を抱き上げ、幼女の睨が眠そうに閉じられるのが見える……。

エヴァが眼を見開くと同時に薔薇の茂みを曲って親子三人が現われた。樹々の葉越しに夕陽を受けて若い夫婦の顔は平和に輝き、幼女は安心して切って父の腕に眠っていた。

「もうすぐ会えるのよ。今は駄目だけど、もう少し待っててね。ジヤネット、息子をお願いするわ」

エヴァは胸の中でそう呼び掛け乍ら、彼等の姿を心に刻みつけようと、喰い入る様なまなざしで見入るのだった。

彼等親子はエヴァの前を再び横切って、そして去って行く。もはや顔は見えなくなった。

グローリアがその時もう一度すすめてくれたら、エヴァは我を忘れて走り寄ったであろう。熱い涙とキスの雨を降らせたことであつたらう。しかし遂にグローリアは何もいかなかった。

三人の姿は向うの角を曲って消え、小径には誰もいなくなった。樹の幹をひしと抱いたエヴァの手から力が抜け、そしてエヴァは声を忍んで泣いた。野末の彼方、山なみの頂きに沈まんとする陽は雲を茜に染め、巢に帰る小鳥がチ、チと囀ずり、落葉を遠く焼く香りが甘く物悲しく漂った。雲が切れて金色の最後の陽光が野を山を、街を道を、そして家々の薈や街を急ぐ人々を照す。しかしその沈む太陽はその時に於て、暮れなずむ墓地の土に泣き伏して慟哭するエヴァよりも深い悲しみを胸に抱く人を照してはいなかった。

「行きましょう」

グローリアはエヴァを扶け起し、ハンカチで涙を拭いてやり、そして土や草を払ってやる。

「ありがとう……」

エヴァの足は再び墓に向った。グローリアが渡す花束を捧げたエヴァは黙然として立った。墓地の傍らには二本の桜の樹が植えてあった。一本は太く大きく枝を張り、一本は細く小さくそれに寄り添う様に……。

「来年の春には綺麗に咲くでしょうね。そして風で散ってお墓の上に……」

エヴァはポツリと呟く。

「ええ……。あなたの旦那様を葬る時、お父様が遥々お取り寄せに

なったのよ」

再び沈黙が流れ、千切れ雲が一つひょうひょうと流れ来て天心の深い蒼さに溶けて消えた。エヴァが身を屈めて小石を二つ三つ拾い、大切そうにポケットに納めた。見ていたグローリアの顔が、くしゃくしゃに崩れる。

「……私も……死んだらここへ埋めて貰えるかしら？」

グローリアが嚙り泣き乍ら答える。

「大丈夫よ。安心して……」

「それだけはお願ひよ」

エヴァは立ち上ってグローリアを見て淋しく笑った。

「行きましょう。ほんとに、いろいろと迷惑ばかり掛けて……」

エヴァとグローリアは薔薇の茂みを曲った。

見返る墓地は静寂が包み、教会からはパイプオルガンが讃美歌の調べを微かに響かせて来た。ゆっくりと歩く二人の足の下で土がしつとりと柔かく鳴った。

「……エヴァ。それで……どこへ行くつもりなの？」

グローリアがぼつんと問い

「ジャプー国」

エヴァは言下に答える。

「そう。矢張りね。あの国は景色もいいし……それに思い出の国だものね」

二人の老婦人は互いに寄り添う様にし乍ら丘の小径を降りて行った。

期限より一週間早い晩秋のある朝、人眼を避けてエヴァは船に乗

り込んだ。送るはグローリア唯一人。もはやいべき言葉もなかった二人は黙って甲板に並んで立った。どらが鳴り『螢の光』の曲が流れ汽笛が尾を引いた。

「さようなら」

「ええ、さようなら……」

再びこの国に帰ることはないエヴァを甲板に乗せて、船はサンフランシスコ港を静かに離れて行った。

……

「もう息子夫婦にも孫達にも心ゆく迄会ったし、心残りはないのよ。死んだら、あのお墓に戻れるし」

混血女性のエヴァ・ローレンスはその数奇な物語を終えて『私』にこういったのでした。

オレンジの花咲きオリーブの実香る生れ故郷のロス市の郊外、その丘の上に眠りながら待っていてくれる父母や夫に遠く思いを駆せているのでしょうか。白樺荘の庭の緑に映えて年老いても美しい彼女の頬に静かな微笑と一しずくの涙が輝きました。

「でも、もう少し生きてなくちゃね。私のエヴァが大学を出て、来春にはこの国へ来るのよ。古代東洋文化の研究だって。そして二、三年一緒に暮すの」

彼女の大きな瞳が喜びに輝き、その声はとろけるばかりの甘い響きでした。

「昔と同じね。そう、私と同じなのね」

(或る混血老婦人の話、終り)

【最新版】女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙 (9×13種) 焼付

一組一枚	五組五枚	十組十枚	二十組二十枚	三十組三十枚	四十組四十枚	五十組五十枚
一五〇円	五〇〇円	九〇〇円	七〇〇円	五〇〇円	三〇〇円	二〇〇円
〇〇〇円	〇〇〇円	〇〇〇円	〇〇〇円	〇〇〇円	〇〇〇円	〇〇〇円

A 5	A 6	A 7	A 8	A 9	A 10	A 11	A 12	A 13	A 14	A 15	A 16
亀甲強烈乳房縛り	全裸手吊りムチ打	豊満乳房いじめ	乳房責め股間縛り	鼻責鼻梁いたぶり	全裸後手高小手	膨隆臀部さらし	全裸正面強烈縛り	うねる緊縛裸身	色禪の開股しほり	正面縛蛙股ひらき	裸自慢縛りヌード
(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(遠藤)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)	(長野)

A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	
正面アグラしほり	正面大の字開股縛	遅ましき裸しほり	荒縄縛豆絞り猿轡	両手前縛り髪首絞	両手吊り股間吊り	両手膝下しほり	瘡れんする裸身像	両股縄掛け開股縛	正面裸身強烈本縄	乳房晒し肉体自慢	責衣にはみ出る肌	投げ出し全裸縛	捕わいの全裸縛	羞らいの全裸縛	猿轡乳房いたぶり	荒縄全身縛り豆絞	
(長野)	(長野)	(長野)	(大塚)	(大塚)	(大塚)	(関谷)	(関谷)	(大塚)	(梨花)	(長野)	(東浦)	(長野)	(梨花)	(梨花)	(大塚)	(大塚)	(大塚)

A 34	A 35	A 36	A 37	A 38	A 39	A 40	A 41	A 42	A 43	A 44	A 45	A 46	A 47	A 48	A 49	A 50
盛り上る乳房縄目	亀甲本縄鼻いじめ	ムチ打悶えポーズ	椅子またぎ汚辱責	縦縄股間縛り正面	ゴム猿ぐつわ全身	くさり乳房責め	強制片足挙げ責め	正面乳房くびり縛	鴨居正面ハリツケ	手吊りパンティ落	白バンド後手吊り	豆絞り高小手呻	裸縛り鼻いじめ	ガンジガラメ立縛	亀甲本縄股間縛	立木縛竹棒責め
(長野)	(大塚)	(関谷)	(東浦)	(関谷)	(大塚)	(長野)	(大塚)	(関谷)	(梨花)	(梨花)	(東浦)	(梨花)	(梨花)	(梨花)	(梨花)	(桜井)

きもの閑話

和装の女のお腹

牧 高 志 文・画

今は、きものを着る機会が少なくなったので、一昔のように二十才前後の若い女性、三十五、六の中年配といった具合に色々な年齢層の角度から、きもの——結局は着付けということになるが、と、女の身体付との関係を安易に眺めることが出来なくなつて淋しくなつたが、それでも注意深く機会をとらえて観察していると結構資料らしいものが集積するものである。今回は奇巧の独壇場である縛りの分野を少しく離れて、極めてスケッチ風に触れ浪漫派的に作文してみたいと思う。

このきものと女体——肉体そして腹部の関係をいち早く絵画化し、名をなしたのは御存知ないかも知れないが漫画家の田中比左良氏が嚆矢であつて戦前「主婦の友」「婦人倶楽部」など婦人雑誌の口絵を大いに賑わしたも

のであつた。この漫画は文字通り氏独特のもので、一いつてよい位女性の腹部を中心とした曲線美の追究であつて、勿論誇張が過ぎると正視にたえないものだといひましてもいい。代物なのだが、それはあたかも乳房の周囲を緊縛すると、乳房がびっくりする位に飛び出るのと同じように胴体のセンターであるところの女性の腹部を片や帯、片や腰紐でその上下を思い切り締めつけると、一体どうなるか——ということに落着する。否独り腹部ばかりでない、諸々の責め紐、細帯類でいわえられた胸のふくらみ、まるいお尻、真白ろなふくら脛といった部分でもほぼ同様である。東京や京都で公開されたミロのビーナスは一体何処の部分がお気に召してあかも殺倒したのかは知らぬが、仮りに生きた女性の腹部を拙

画を以て解析してみると御覧のようなタイプ(型)がどうもあるようである。

まずI型は云うまでもなく十八・九才から二十二、三才前後の若く潑らつとした女性の場合であつて比左良画伯が好んで描きまくつた代表的なタイプである。

実際、現在でも結婚式のお招かれとか新年の挨拶廻りにはひんぱんと見られる姿態であつて、巾広ろの袋帯を胸一杯に巻きつけてふくら雀に結んで背負い上げ、赤い帯揚げを出来るだけ広げて高々と襟に挟み込み太い丸くけ白の帯締めで渾身の力を以て帯の上から締めつけると——嫌やが応でも胸部がつぶれて反作用的に、お腹の部分が前に飛び出そうなものに事實は左に非らずして依然として力には力を以てはね返した形を採っている。

若さがあると云えば、それまでだが、見方を別にすると妊娠前の処女のシンボルをあらわしているとも云えよう。漫画風にくだけた物の云い方で代弁するならば軍艦部の威力堂々と海洋をのし渡るの感である。ただ用心しなければならぬことはそのこと自体非常に不安定であつて一発喰らわば、すぐ沈み——倒れそうな下腹部から脚にかけての線が極めて弱くスマートなことである。

和服のスタイルブックを見るとモデル撮影に当って洗濯ハサミでわざわざ後の裾の部分をつまんで細っそりと見せるあたりだ。比左良画伯はこれのお端折からならかに下腹部に至る線に無上の愛着を感じられたものらしい。正面や斜め横から見た図は大体ご覧の通りではないかと思う。

扱て、ご婦人のお齡が結婚を中心とした頃ともなるとⅡ型に示したようなタイプに変わって行く。つまり皮下脂肪が少し宛貯ってお腹を盛上げ参考図で示したように、たとえ帯の

緩るい芸者衆であつても帯の下方からぶくつとお腹がふくらんだ形、逆に申せばこの頃がご婦人の爛熟期であつて試みに新婚早々の愛妻にお触りになれば即座に成る程とお判りになる筈（愚論御容赦）。最近ではデパートの呉服売場できものを着た（大抵の場合、訪問着や中振袖に限られるようだが）マネキン人形の着付をご覧になるとこのお腹の線で客をひきつけているかのようにイミテーションが一段とうまくなつて来ている。

処が：問題は何かヨーロッパの婦人を曳っ



ぱり出す訳ではないが三十のお齡を越すと正視に耐えないまでも恥も外聞もかなぐり棄ててだらしなく帯の下から太腹の出っ腹がせり出して来るものだ。万事控え目に帯を結び、帯揚げをしまい込んでたとえ水色の蹴出しをしようともお腹はかくす術

が無いのである。私は三十五、六の女将タイプの人がバスや電車の中で坐った私の眼の前に岩のようなお腹を突きつけて来た時には眼をつむって見ないことにしている。嫌なのはなく気の毒だからである。まあⅢ型は愛撫の対象になつても美の対象には程遠いものと思わねばなるまい。

今回は予めお断りしたように彼女らが結んだ帯紐類のほかに新らたに男性が加えた縄紐類はご遠慮する——という意味でお話を進めて来た関係上、寧ろこれから佳境に入る直前でストップ命令が下り、立ち往生をせざるを得ない恰好で筆を折ることにしたが、最終の目的は何んと云つても盛装された女体の緊縛に在る。くどいようだが、ありふれたヌードと全然趣きを異にした雰囲気がかもし出され、その妙なる空氣に思い切り酔いしれんがためである。

幸い引続いて執筆の機会に恵まれればズバリその姿態美と四つに組んでみたいと思つて

× × × × ×

— 完 —

妖

異

女

斗

美

八

景

佐藤健児

第四景 女の決斗

配役 吉川百合子……吉永小百合

船田 淳子……池内 淳子

私の名は吉川百合子。年は十八才。聖心女子大の一年生である。私は華族の生れで、幸福な家庭にわがまま一杯に育ち、しかも自分自身満足し切っているその美貌の故に、中学でも高校でも常に学校一の女王であった。私の美貌は母譲りであったが、華族でありながら軍人である父の血が、更に気品と凛々しさ

を加えて、私に会うすべての男性を魅了せずにおかなかったのである。従って私の気性は烈しく、学科においても同性、異性のいずれにも一位を譲ることを潔しとしなかったし、スポーツ、武術ともにゆくとして可ならざるものはなかったが、特に男性を征服することにはたまらない快感を覚えていた。

その私が恋をした。男の名は船田一男。彼はおよそこの私にふさわしい、勇しい男でも美丈夫でもなかった。自称芸術家というだけに色白の弱々しい、ただ背だけは高い青年で

あった。ところが私はこの男に猟銃の同好会で会ったのである。絵を本業とするといながら絵も書かず、何で生活しているか分からないような男でありながら、不思議に猟銃にかけては天下一品の腕を持っていた。私はその妙技に舌を巻き、さすが負けず嫌いも銃だけではこの男にかなわないと感じてから急速に彼に惹かれたらしい。もちろん前後も考えない火遊びで、私はこの世界の王者でも羨望するであろう肉体をあっさり彼に与えてしまった。彼ももとより嫌な筈はないであろうが、



しかし彼は特別私の美に対して讃辞を与えるでもなかった。またしつこく私を求めるので

もなかった。その淡泊さと少しニヒルなところが気に入って、もう彼との交際は二年近く

なる。私も彼と逢っても翌日は彼のことを忘れるという気楽さに満足していた。

だが最近何も知らない両親からしばしば縁談のことを持ち出されるようになって、私の心境も少しく変化を生じてきた。私を是非嫁にほしいという相手には大金持や高い地位や将来有望な外交官などがあったからである。

私は船田とのが気になりだした。今までは彼と結婚してもかまわないという気軽な考えであったが、流石に現実の生活について熟慮すると、何か急に彼が頼りなく感じて来たのである。(やっぱり私は軽はずみなことをしてしまったのか)そういう思いに日々悩まされるようになった。あ

る時私は何気なく彼に聞いた。

「あなたは私と結婚するつもり？」

彼は別に驚いたといった風もなく、いつて返事も返って来なかった。私はすこし勇気を得て、

「わたしは恋愛と結婚は別だと思っているから、ひよっとすると外の人と結婚してしまうかもしれないわよ。それでいい？」

その言葉に彼は一寸目を挙げて私を見たがその答えは意外であった。

「いいさ、そりゃあ君の自由だよ。」

「へえーいやに、あっさりしているのね。じやあ外に好きな女の人でもいるのね」

私はそれまで考えても見なかったことを口走ったが、彼はしばらくして「ウン」とうなずいた。

「そう、わたしより好きな人がいるというわけ？」

私は癪にさわって怒ったように言うと、彼は急にベッドの上に体を倒して、

「君より好きなわけはないじゃないか。しかし、やっぱり恋愛と結婚は別さ。ぼくは結婚するなら君としたいけど、君がいやだと云えばそれまでさ。」

「……………」

私は絶句してまた複雑な感情がわいて来た。結局その夜は彼と一緒に暮して、朝家へ帰って見ると、そこにはまた驚くべき衝撃が私を待っていた。机の上に女人差し出しの一通の手紙が載っていた。封筒の裏に書かれた名前は船田淳子。あわてて口を切って短い中味を一読した私は、あまりのことに危うく叫び声を上げるところだった。その文面は

『わたしは船田一男の妻です。そういえば後にはくどくどという必要はありますまい。貴女の胸に聞けば分ることです。わたしは貴女に決斗を申し込みます。時は明後日の朝五時、場所は花月公園の入口。武器はピストルにしましょう。わたしは貴女がピストルの名手と聞いています。わたしはピストルを持ったことはありません。しかしほかの方法は野蠻ですから、それでかまいません。わたしは勝つても負けてもどちらでもよいのです。貴女と共に天を同じくしなければ。この事を貴女は誰にどういうふうに話してもかまいません。けれど決斗だけは貴女の責任において逃げないで下さい』。

全く息のつまるような内容であった。今頃決斗だなんて……しかも女同士が……。私はしばらく呆然としたまま、頭の中でまとめよう

もなかったが、やがて手紙を握りしめたまままた一男の所へ戻って見た。

手紙をつきつけられても一男は動じもしなかった。

「あいつの考えそうなことだ。」と壁ぎわに突ったまま、いつもの調子でいった。

「何よ、妻なんて、そんなもの居ないと言ったくせに。」

私は半ば逆上して言ったが、

「あいつが妻なら、君だってぼくの妻さ。」

平然としている。私はすこし無気味になって聞いた。

「その妻同士が決斗しようとしているのよ。」

あなたどうするの？」

「決斗するさ」

彼はうそぶくようにいった。

「決斗すれば貴女が勝つよ」

「私が……勝つ……」

「そうさ、あの女はピストルをいじったこともない。しかし貴女には私が教えた。負ける筈はない。」

それはその通りだった。猟銃で彼を負かそうと私が躍起になっている時、彼は「猟銃は肉体的に女が男に勝つのは無理さ。しかしピストルなら貴女の方がうまくなるかもしれない

い」といって私に教え出したのである。私はすぐ上達した。たしかに腕に自信はある。

「しかしあの人が死んだら、あなた困るじゃない？」

「何故困る？ ぼくに関係はない。あいつは自分から死を求めた。その手紙が証拠になる。殺人罪にはならないよ」

（そう殺人罪にはならない。決斗して相手を殺してしまえば、それで何でもないんだ）

そう思うとかえって私は身体中がガクガクして来て、思わず船田の家を飛び出してしまった。それから何所をどう歩いたか、私は懸命に考えをまとめようとした。

（決斗すれば必ず私が勝つ。その通りだ。そして殺してしまえば後にはどうにでもなる。手紙は私が持っているのだし……）

（そうだ、おち着かなければいけない。それにしてもあの船田という男、何と冷静な、一人死のうというのに、その結果をちゃんと読み切っている。おそろしい男、男ってみんなあんななのか）

私はほんとうに一男を憎み、そして次の考えが閃いた。

（そうだ、この機会に、あの男も消してしまふのだ。あんな男と一緒にいたら、ど



んなことになるか分ったものではない。私の将来の幸福のために、図太くやってしまうのだ。彼もあそこへおびき出して殺してしまえば、理由はどうにでもつく。私は華族の娘なのだし、あの手紙がすべてを助けてくれる。この機会に過去を清算して、私にふさわしい輝かしい未来を作らねば)

そう決心すると私は急に大胆になってゆく自分を意識した。私は一男とも入念の打ち合せをし、決斗の済んだ頃、後始末に来てもらうことを約束した。その時、私は何のためらいもなく一男も射殺してしまうのだ。一人殺そうと二人殺そうと同じことではないか。約束の朝が来たとき、私は至極冷静になっ

ていた。時刻通り公園で淳子に会った。彼女は大きな黒い目を持ったたしかに美人だが、丈は私より低く、小肥りで、紫縞の和服を着ていた。パーの女給と聞いていたが、その通りの風態であった。私は女子大の制服である。淳子と私はろくに口も利かず、決斗の場所を選んだ。その無表情さが、私の気持に同情も起させなかった。もう勝って未来を考え

ることしかない私には朝の冷気も甘く心地良かった。二人はお互いの拳銃を調べ合い、十歩、歩いてからふり返って六発撃つことを決め、互いに背を合せて立った。私は十歩、歩かぬうちに撃つことに決めていた。確実に殺してしまえば正々堂々も何もないのである。誰も見ているものはないのだから。向い合ってからでは万一ということもある。無勝負ということもあり得るしそうなのは面倒だ。一步、二歩、二人が歩き出した。三歩、四歩……五歩、六歩で私は廻れ右をした。七歩目を歩きかけている淳子の後ろ姿が目前にあった。大きな間違いのない的である。八歩、私の右手が上ってその背の真中に狙いをつけた。九歩その時である。クルリと彼女がふり向いた。(アッ) 予期せぬ相手の動きに驚愕した途

端、そのショックで私の引金は引かれていた。ズドン！と上った銃声——淳子は倒れたか？ いな、倒れたのはこの私、吉川百合子であった。氣附いた時には私は草むらに倒れ耐え難い腹部の苦痛に七顛八倒して地上をのたうっていたではないか。

（馬鹿なっ！そんな馬鹿なことが……絶対に勝つはずの私のピストルに手応えがなくて、彼女の拳銃に私が腹を打たれるなんて……）

（苦しい！早く、誰か助けてくれないと、わたしは死んでしまう——）

その時、何ものかが暴れ廻る私をおさえつけ、私の耳元にささやいた。淳子だ。船田淳子、彼女は健在なのだ。

「吉川百合子、よくお聞きなさい。」

その声は地面の下から聞えてくるようであった。

「貴女はやっぱり早く撃ったわね。貴女はそういう女、お父様に似て卑怯な女なのよ。しかし、わたしはその手は喰わないわ。貴女はまんまとわなにかけたと思ったでしょうが、わなを掛けたのは私の方なのよ」

（わな？何を云っているのだろう、この女はそんなことはどうでもよい。愚図々々していたら私が死んでしまう。美の女王であるこの

わたしが……。こんなに美しく、こんな若いままに、私が死んでしまうなんて、そんな不合理なことが……）

「早く医者を呼んで……」

私の頭がそう呼んだ。淳子はフフンと鼻で笑って、

「これは決斗よ。お互いに承知の上での命のやりとりよ。可哀そうに意外な結果に動揺してしまったのね。わたしは貴女の命をとりに来たの、船田一男の妻としてではないの。わたしのほんとうの目的は貴女のお父さんに復讐することにあつたのよ。冥途の土産にお聞きなさい。わたしは朝鮮人、母は……。そんなことはどうでもいいわ。父は兵隊にとられ貴女の父の部下で逃亡の罪で銃殺にされた。それで理由は充分でしょう。わたしは自分の手で仇を討つ以外方法がないのを知って、東京に出てきて吉川大佐を狙った。しかしその機会がないうちに、わたしは娘の貴女を知った。美と健康の女王、おそらく貴女は吉川大佐の掌中の珠に違いない。そうだあいつを殺すより、あいつの最も愛しているものを殺して彼を一生苦しめてやる方がずっといい。そう考えてこの決斗を仕組んだの。分って？」

冷い悪魔の声は続くが、私の頭はそんな言

葉を聞き分けるどころでなく、ただ助かりたいの一念だった。それには……。そうだ、決斗が終った時には船田一男がくるはずだ。彼ならこの結末にびっくりして私を助けてくれるだろう。淳子を殺してでも——。

「一男さんー助けて——」

私は最後の力をふりしぼって叫んだ。しかしその結末はあまりにはかなかった。

「一男ー？ ホホホ、貴女は案外頭がお弱いね。一男は私の弟。姉弟ぐるで貴女を誘い出したまでよ。誰も助けに来てくれるものはありません。さあ観念して恨みの刃を受けなさい。貴女のその美しい首を斬って貴女のお父さんにつきつけてやる」

船田淳子はふところに隠し持っていた短刀をとり出してシュートと、その鞘を払った。

（船田一男が、この女の弟——）

その一言でガックリした私のくびすじに淳子の冷たい手がふれ、私の髪をしっかりと握ると、同時に顎の下に鋭い短刀の刃先があてがわれた。

（昔の一騎打ちもあるまいし、首を取られるなんて、いや！いやっ！）

私は夢中で首を振ったが、もう遅かった。

「往生際のわるい女ね。けれどほんとに滑か

な肌で、美しい顔。惜しいけれど一男も美術家だから、こんなに美しく若い乙女の生首を持っていたら喜ぶはずよ。それをせめてもの慰みに、サ、アーメン」

声と共にグイと引かれた刃が、私の咽喉の

皮膚を切り裂いた。激痛に私の全身はしびれて、真暗になった網膜の中に、血したたる私の生首を誇らかに掲げている船田淳子の姿がありありと映じた。やがてその首は船田一男の目に曝され、父や母の前に据えられる。

そして、蠟人形のように美しい私の生首が、多くの人々の鑑賞に供されるのだ。この美しい私の生首が。――
ああ、神さま――。(第四景終り)

「新版」女体悦虐フオト七十選

Z組七十集 大手札印画紙(9×13種) 焼付各組一枚一組(送料共)

一組	一枚	一〇〇〇円
五組	五枚	四〇〇〇円
十組	十枚	七五〇〇円
二十組	二十枚	一四〇〇〇円
三十組	三十枚	二〇〇〇〇円
四十組	四十枚	二五〇〇〇円
五十組	五十枚	三〇〇〇〇円
六十組	六十枚	三五〇〇〇円
七十組	七十枚	四〇〇〇〇円

Z1	ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z2	囚女第六十三号	(柳)
Z3	猪型手足吊り	(梨花)
Z4	逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z5	ローソク責め	(四浦)
Z6	豊臀への珍責め	(絹川)
Z7	淫らな変型縛り	(愛川)
Z8	ザリガニしばり	(梨花)

Z9	引き回しシーン	(東浦)
Z10	全裸後手高手小手	(加茂)
Z11	豊満な肌の被虐	(大井)
Z12	黒髪いたぶり	(大塚)
Z13	足吊り媚態責め	(絹川)
Z14	黒縄高手小手縛り	(四方)
Z15	強烈荒縄しばり	(梨花)
Z16	肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z17	くの字の足指苦悶	(桜井)
Z18	裸身にいどむ縄	(前本)
Z19	無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z20	ハリツケの女体	(梨花)
Z21	おへソなぶり	(大塚)
Z22	逆手足吊り	(竹野)
Z23	美肌のいたぶり	(絹川)
Z24	仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z25	恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z26	火箸で責める乳房	(梨花)

Z27	全裸の海老責め	(熱海)
Z28	ベッド上の痴態	(絹川)
Z29	足の裏の襪り責め	(大塚)
Z30	闇の女体飾り縛り	(竹野)
Z31	首絞め晒しもの	(大塚)
Z32	鼻孔に加虐	(若原)
Z33	悦虐責放心状態	(梨花)
Z34	手枷足ぐさり	(四方)
Z35	寝室でのプレイ	(花本)
Z36	猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z37	首縄、柱しばり	(絹川)
Z38	巻煙草責め	(大塚)
Z39	尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z40	厳しきエビ責め	(東浦)
Z41	ゴムのカパー縛り	(竹野)
Z42	ワンピースの縛り	(花本)
Z43	荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z44	尻を突っ立てて	(大塚)
Z45	鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z46	苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z47	酔後の淫らしばり	(絹川)
Z48	逆十字エビ縛り	(大塚)

Z49	全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z50	欄間に宙吊り	(梨花)
Z51	全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z52	荒縄のお仕置室	(梨花)
Z53	庭園の惨酷風景	(館)
Z54	被虐の果て	(大塚)
Z55	痛められた裸身	(大塚)
Z56	鏡の中の全裸像	(愛川)
Z57	セーラー服縛り	(梨花)
Z58	檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z59	全裸の股間縛り	(絹川)
Z60	オムツ逆エビ責め	(田中)
Z61	胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z62	ゴム人形の女	(竹野)
Z63	荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z64	女子大生恥態責め	(田中)
Z65	白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z66	強要する開股縛り	(絹川)
Z67	強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z68	亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z69	ベッド上のもだえ	(愛川)
Z70	恥しさに耐えて	(館)

『奴隷を求む』

三 原 寛



私の名は浅香魔美。今度、大阪の郊外に一千万円をかけて邸を新築した。そして私がこの邸内では絶対の権勢を握る主人なのだ。

私は自分の事を女王様とよばせているが、女王様は女王様でも私は大変な暴君だ。この屋敷内で凡そ私の意の儘にならないものはない。思えば或る風俗雑誌の読者通信欄に『奴隷を求む』の一文を出したのが三年前になるが、これ程迄になると実は私も思いがけない事だった。奴隷になりたがるマゾ男が相当居るだろう事は想像して居たのだが、私

の足下に膝まづき度いばかりに、一生を棒に振って迄も私に生血を吸われにやって来るバカな男がこんなに大勢居るとは驚いた。尤も私にはその方が都合がよかったのだが……

この高級住宅地の一角を占める宏壮な敷地も、私の奴隷になりたいばかりに一人の男が献納したものなのだ。一千万の新築の費用も奴隷志望者共が先を争って献金したものだ。『奴隷を求む』の呼びかけに対して、応募者が殺到したが、私はその中で次の条件を承諾して誠意を誓った男だけを選んだ。

一、動産でも不動産でも兎に角財産を処分して、現金に換え、裸一貫で、私の所に一生を投げ出して来る事。

二、私を受取人として生命保険をかける事に異議のない者。

三、その生命は完全に私の自由とする事。

例え私に生命を奪われても、或は私に自殺を命じられても喜んで従う事。

四、私の命令は例えどの様な事でも絶対に服従する事。

五、私にいつ捨てられても異議のない者。

これだけの条件をつけても、バカな男共が次々に私の足下に膝まづきにやって来た。元々私は、私の呼びかけを掲載した雑誌に出て来る様なサディスティンではない。大柄な肢体と強烈な容貌は何か男共に威圧感を与えるらしいが、その様な男共の卑屈な嗜好を満たしてやる為に鞭を揮ってやったり、やれ馬にしてくれだとか、お臀で潰してくれだとか、そんな男共のマゾに迎合してやる気は毛頭ない。私は飽迄も、その様なマゾ男共を利用して、私自身の栄華を求めて居るだけなのだ。それでもいいという男共が意外にも多いのだから世の中はうまく出来て居る。

私に此の土地だけでなく、所持する財産資

産一切をも私に捧げて来たのだが、どうも、

物の役にもたない様な醜い老いぼれだったので、約束通り文句なしに頂くものだけ頂いて追い出してやったら、今迄、何不自由なかった身を一夜にして乞食の身に落されながらも、私を今一目でも拝ませて貰おうとこの辺りをうろついて居るそうだ。私のお目になわないで、全財産を私に取上げられたままおぼり出された男は他にも大分居る。はじめから、いつ捨てられても異議ないという約束なのだから仕方がないだろう。望み通り奴隷にして貰えた男共も、私の気まぐれでいつ捨てられるか戦々兢兢として、私の気分を害わない様必死になっている様だ。採用した奴隷も、私の好みで夫々の役割を当てがわれる。先ず一般の雑役夫。これは、料理、掃除、食料の買い出し、走り使い、庭の手入れ、洗濯等の雑用をやらされる。この役が今三人居るが、たったこれだけの事をやらされる丈に全財産を投入し、生涯を送ろうという男が居るのだから、私にとっては全く便利というものだ。

事務屋が二人。これは、奴隷志望者共の手紙を整理したり、続々と寄せられる献納金や資産を取捌く役だ。

それから、私の手許に五人。これは私の生きた玩具だ。マゾ男共にとってはこれが一番羨しい身分といえるかも知れない。年中全裸で居る事を命じられるし、時には気分が焦々する時は憂さ晴しに鞭の洗礼を浴せてやる事もある。この男共には私は思いつく限りのいたずらをしてやる。サディスティンではないが、生きた人間を思い通りに出事るのだからこんな面白い事はない。足の手入れの仕方が気に入らぬといって、縛り上げた男を顔といわず腹といわず踏みにして快感を覚えるのだから或は私にも少しは嗜虐性があるのかも知れない。

犬の真似をさせたり、気が向けば、私の使用後の便器に男の舌を水洗代りに使ったりもする。何を言いつけても絶対服従なのだからいい気持だ。男の舌もいろいろと使い様があるものだ。私は倦きっぱいので、この玩具役の男共も始終代えられる。気に入らなくなつた奴から順にこの邸の地下室に廻してやる。ここに入れられた男は、自分でありとあらゆる拷問を考え出して私に申し出ねばならない。その中で私の気に入ったやり方があれば望み通り拷問してやるのだ。但し、生命に關する様な事や身体に何時迄も傷の残る拷問は私

はここでもやらない。後の都合があるからだ。その間、この男は私の排泄物以外は与えられない。その度にエサ係の男が私の排泄物を宝物でもあるかの様に捧げ持って地下室に下りて行くのだ。安心するがいい。今にお前もそれを口に出来る身分になれるのだから。そして、も早、お前の考え出す拷問が私の興味を惹かなくなった時、お前は自殺を命じられてこの邸から追い出されるのだ。お前はマゾヒストだから私の命令に結局は従わざるを得まい。そして私に感謝しつつ、私の栄華を祈りながら死んでゆくのだ。アッハッハッハ、バカな奴。

だからお前達のようなマゾヒストがこの世の中に居るといふ事は、私にとってこれ程便利で都合な事はないのだ。私はこれから時々『奴隷を求む』の呼びかけをするだろう。そうして事務屋にお前達からの手紙を仕分けさせるのだ。気に入ったのから順番に調べてみて、役に立ちそうなものから呼び出してやる。そのうちに、お前の順も廻って来るだろう。私はお前達マゾヒストを利用してうんと贅沢したいのだ。お前達も、それが生甲斐なんだだろうから——。

M 男 の 独 白

— 文 津 部 三 郎 —

谷崎文学「**花**」の映画化は撮影進行中ということだが、私は「饒太郎」、「芦刈」等と共に、あれ程感激、亢奮して読んだことは少い、思い出を持つだけに、その映画化はこれなのである。私如きが云うのは潜越だろうが私なりに「**花**」から受けた、素晴らしい感銘、印象をこわされやしないかと思うからだ。Mの私は、かかる作品を読む場合、書いてない部分を色々やたらに勝手に潤色拡大し、それは或いは一人よがりな解釈したくて仕方ない性癖を持つわけで、自分なりのイメージをでっち上げているのである。例えば某紙に「**花**」

いて、この作品の骨子はレスボスにある、なんて書いてあると、何となく反発を覚えたりする。「**花**」ってのはそうだったかなあ、と。勿論「**花**」中二人の女性のレスボス的部分は全く多い。その通りである。だが大切なことを忘れてやしませんかってんだ、といったくもなる。勿論「**花**」の主題はトリオリズムの入ったマゾフィズムにあるのは、云うまでもないのだが、(沼氏の『手帖』によると三者関係と準三者関係と区別されるそうで、私はずっと前の『奇ク』で学んだ。私のようなホモの要素もあるマゾヒストにとっては、これは混同してしまうので、沼氏の『手帖』

で学んで始めて、準三者関係と区別すべきものと知った次第。私のような幾分なりとホモの要素のあるものに、と云ったのは、レスボスの女性二人の一人を男におき代えると、之は三者関係に等しくなる)

かくて我流の考えによると「**花**」の場合どうもレスボスということは第二義的な、又はつけたりの要素のように考えてしまいたくなる。作者にとって一番重要な関心事は、柿内夫人と柿内の三者関係のようにしか、どうしても考えられないのだが、どうであろうか。元来光子と柿内夫人とは、レスボス関係でなくともよく単なる女友達でもよいのである

が、この特殊な関係を強調するため、（つまり、マゾにより深く陶醉させるために）レスボスにする必要があるだろうし、又三者関係という主題を展開するためには、女二人を結合させなければならぬ（所謂沼氏によると、優位結合）。という理由から二人の女性がレスボス関係になっているのであって、決して「正」の最大要素はレスボスにあるのではないと思う。三者関係は優位結合と劣位結合との合成であるが、その内どちらがより重要かと云えば劣位結合に違いない、と云うのは之はマゾの世界の話で元々あるのだし、三者関係というのは二者関係の複雑化したもの、よりマゾ的に（下降）なったものだからであろう。だから「饒太郎」等で優位二人が男女であったものが「正」では女二人に変形したものに過ぎない。



いので、レスボスは筋の必然性から従属して派生した要素だと思えてならない。もっとも終にはサディスティンとなった光子は柿内夫人に対しても柿内に対してもドミナとして君臨するようにはなりはするがそれは後の発展である。

谷崎文学の最大要素がMにあるのは云う迄もないし、MとSとは表裏一体であるが、悪魔派的傾向——つまりサド的——時代の「本牧夜話」、「愛すればこそ」「憂なき人々」「お国と五平」等は、それは勿論文豪の傑作には違いないが、「痴人の愛」のようなM作品よりは私などM的人間にとっては感銘少しいし、一般的に考えても文豪の真骨頂を発揮しているとは考えられないので、私の根拠薄弱な推測にすぎないけれども、この文豪のM派たることを改めて認識させられる。尤も本牧もので

印象に残っているのは、複数の女性を所有している男と、その女群との関係を考えて見ると、例えば男のサディズムは決して単純ではない、おそらく作者好みでないとされるタイプの女性の受難が頻発するが、そのタイプの女性に男はサディズムを発揮するが、その個所では精彩乏しく、もう一つの、作者好みのタイプの優位の女性による、先述の劣位の女性へのサディズムの描写が極めて光彩を放っているとは思えないのは何故だろうか。こうした男は、自分の愛する優位の女性によって、劣位の女性を虐めることを見ることによつて、より一層悦虐を味っているように見えるし、少くとも私にとっては、そうであった。のぞき趣味的な要素が大変多いのである（尤も、うつり気な男性の好みがよく変化して、優位の女性の登場により、最初の女性に劣位へと下降せしめられる）——二号夫人の勢力伸長し、一号夫人の地位は転落、二号夫人のサディズム等により、彼女は一号夫人に残虐行為を発揮する等——作者の逆転趣味がここでも色濃くにじみ出ている。ということもからみ合っている。つまりマゾ傾向の作家のサディズム小説（勿論作者にもサド的要素が存在するだろうが）というものの特質を「

本牧もの」等の悪魔派作品は、よく表しているのではないだろうか。だからS・M小説というものも、Mの方だけをとっても、（今は心理的Mのみについて云うと）二者のみの基本型でなく、三者以上の登場したものになると、極めて複雑となり、（組合せだけでも多数の上これに、逆転が加われば更に複雑化する）その意味で、『奇ク』誌上で近い将来こうした複雑なトリオリズム的M小説が出てくれないかと私は長い間心待ちにしている次第であった。「**正**」の映画化にしても、このM要素を、どう扱っているか、楽しみだし、気のもめる話ではある。

そんな私にとり「女社長様と私」（3月号）は実にすばらしかった。これこそ私の長い間求めて得られなかったものだと思った位だった。すっかり亢奮し、眠れなかった。意気地なしの私には「読者通信」で屢々拝見するよな、すばらしい女王様への呼びかけなど、とても高嶺の花で、全くの情ない空想的マゾフィスト、マゾ文学、記事から私好みの世界に少しづつ変形して空想する他能のないわけだし、勿論谷崎文学にして、そう何もかも好みに合致するものでもない。之も慾深き人間なるものの宿命にすぎないだろうけれども、ともかく「女社長様と私」にはすっかり参っ

てしまい、一体何度読んだことだろうか。おそらく創作とは思わくせに、どうしても私には実録小説だと思えて仕方なかった。それに一一八頁の小さな画が私をいつまでも亢奮させる。ああ、このような立派な巨臀に現実一度でも踏み潰されたら、と私はあやふく卒倒するのではないかと云う程亢奮してしまった。私は元来マンガ的な画が好きで、勿論誇張してある、この女社長様の、白くむっちりとしたお尻の不思議な迫真性には全く狂気してしまつた次第だった。勿論私の巨体、巨臀崇拝にもよるのだが、西洋人の大女増によくある、あのもの凄い位肥満した大女にも大変ヒカレルような、アブな私のこと、奇クも長い間読ませて頂いているが、この画程私を喜ばせてくれるものもなかった位だった。

この作品の素晴らしさの一つは、主従逆転という要素が実に鮮明に画かれていること、女中↓女主人（女社長）、坊ちゃん↓二代目社長、夫↓秘書↓奴隷↓家畜、何という鮮かな変身振りであることよ、そして見事な女社長様の戴冠式！私は冗漫な文が好きなので、この条など余りに簡明で歯切れがよくて物足りない、というせいたく願望は致し方ないがこうした主従逆転のドラマを、くどくど書か

れてあったら、と悠深く思ったりする。例え
ばかかる劇的な時間に、そして次の夜や翌日
はどうであったのか、このM男の心理、感情
は一体どうだったのか、それからこの作の独
創性は、忠実な奴隷、家畜に仕込むための一
方法に、『写真』を見事に使っていることと
思った。

また、すばらしさのもう一つは女社長様の
亡父の先妻の子を、この誇り高き豊満才色兼
備の女ご主人様は、くびにした夫の後任の、
自分の秘書としてこき使い、而も彼は自分の
継母の奴隷にさせて居り、二組の女主人がそ
れぞれの奴隷を、二人の足台にして楽しく喋
ったり、例の写真を見て笑ったりしている、
ということである。最後に準三者関係的な暗
示的な所があり、之が私には大変シゲキ的な
部分であるので、それをもっとくわしく書い
てくれないか、と悠深く思いながらも、色々
想像をめぐらす、又「私の夫としての資格が
ないから」云々、と女から宣告されている所
から見て、この辺りより男は彼女と同衾させ
て貰えないらしいことは想像出来るが、この
女社長様はこの後男を家に連れて来てよろし
くやる、という三者関係のテーマへと下降す
るのか、それとも二者関係に終るのか、気に

なる所で、私にとつては三者関係への移行す
る如き正統派的マゾが何よりも望ましいのは
云う迄もない。もっとも準三者関係的な所は
散見され、女主人の友人がやって来て、例の
写真を見て驚嘆し笑う所があるし、終りの方
に、奴隷貸与の話が出て来る。願くは、女主
人の友人が驚嘆するだけでなく、同席で女主
人と共に男に色々屈辱的な命令を下したり、
虐めたりした描写をしてほしいものである。
所で私のような空想的M男で、気の弱い人間
にとつては、鞭打たれたり縛られたりはとて
も耐えられそうもなく、こわいし、いくらト
リオリスムに興味があると云っても、現実に
自分が劣位の男に下降させられるような場合
とてもその屈辱に耐えられるものでもないだ
ろうし、(そうしたドミナを持ったこともな
い私が、こんなことを云う資格はないかも知
れぬが)又夢に画く、そうした女性というも
のも、適当に残虐である程度でないと快感
を通り越してしまふ。又ドミナと崇めるには
容貌、誇り高き巨臀、才能の他に、主人と崇
めるに足る人格が必要であり、それに大変な
魅力を感じるのである。その意味で、この女
社長様は報恩の念のあつい、とあり、益々魅
力的な女性として思うように思われる。この

場合彼女が才智に溢れ、利口な性格のために
そうするのか、本当に心から父母に感謝して
そうするのか、色々想像出来るが、もう少し
この作品が冗長に書かれてあったら、と残念
に思った次第。それにしても、これは第4章
墓参りの項に書きます、とあるので、それを
実は心待ちにしている次第である。実は私は
前述一一八頁の小さな画をなぞり、画心のな
い私が懸命に顔などつけて画き上げ、子供が
オモチャの灯台に使うオモチャのモーターを
買って来て、これで走馬灯をつくり、あの巨
臀の女社長様と、その巨臀の下に喘ぐM男の
画をはりつけ、深夜放送のモダンジャズのナ
ンセンスをバックとし、私は一人きりの秘密
の甘い城の中に陶醉の場を見出すのだ。マイ
ルスデビイスのジャズのアドリヴの中を、こ
のすばらしきマゾの一つの象徴のような画
が、女社長様の巨大にして神々しく美しい臀
部の移行が天空の雲の徂徠のようにとりとめ
もない筋書の私好みのマゾ世界を展開し、く
りかえしくりかえし、拡大し、画わくの中を
ゆっくりゆっくり出たり入ったり見えかくれ
をいつまでもくりかえし、そして私のマゾの
血をやっと慰めてくれるという、恥しくもわ
びしく甘い、空想的マゾヒストの私の現実。

女装の夫と男装の妻

△ 交替日の夫婦 V

西 村 憲 一

省線の駅を出ると暮色は一際濃く家々の灯が明るく艶かしく感じられた。タクシーと想ったけれど、そう遠い道では無く、此儘の姿で歩いて見たくなり風呂敷包みを胸に抱え、明るい商店街を通り抜け、淋しい住宅地へ小走りの足を運んだ。

立並んだ団地の角を曲った時、黒い大きな影が眼前に覆い迫ると思つた瞬間、右胸に鋭い痛みを感じて悲鳴を上げ乍ら私は崩折れる様に両膝を突いて居た。

斯んな姿を見られては、と思いつつ引き込まれる様に目の前が暗くなり次第に意識を失

つて行つた。

どれほど経つたのか、胸のあたりの冷氣と鼻を突く薬品の匂いに気が付いた私は、病院の手術台の上に居る事を知り反射的に起上ろうとすると看護婦に肩を押えられた。

「動いては不可ません、直ぐ済みますから」とたしなめられた。

「どうしたのでしょうか」

問いかける私に、「物を云わないで――。大した傷じゃありません。通り魔に襲われたんですよ、奥様」

「えっ、通り魔？」

「右のお乳の上を切られたのですよ」

「まあ、お乳を……」

私は自分の胸に眼をやつた。帯は解かれ、着物の襟は開かれて居る。白く豊かに盛り上つた双の乳房の右に真白いガーゼが乗せられ薄く血が滲んで居るのである。

淡紅色の乳首が見える、可愛い乳首が。

ああ、私に乳房がある！そして今看護婦は奥様と云つた。女である看護婦と外科のお医者様が私の体を見て奥様と云つたのだ！

私は女に成つた、完全な女体に。もう乳房のパットなんかいらぬ、私は私を傷付けた

通り魔に感謝したい気持ちであった。のっぺりとして居た私の胸に此んなにも美しい乳房が在る事を教えて呉れた通り魔！

嬉しさに両掌で触ろうとすると、

「今動いては不可ません。傷口が開きます」

看護婦はそう云い乍ら白いふくよかな私の二の腕を皮バンドでベッドへ固定してしまつたのである。私は再び意識を失って行つた。

乳房と二の腕の痛みに眼を覚された私は、柔かいスタンドの明りに照らされた我家の寝室に居り眼前に夫の安らかな寝顔が在る。

枕と肩の間を通つた夫の腕は私の肩を優しく擱んで居る。長襦袢の衿は開き、肩も胸も剥出した肌へ細引が三筋、二の腕諸共後手に縛られた儘、寝て居るのである。

乳房の傷と二の腕の痛みは肌を噛む縄目の疼きであり、通り魔も、看護婦も私のはかない夢でしかなかった。

何時頃であろう。欄間を透して灰白い色が見える。未だ夜明前らしく何の物音も無い。

夫の眼を覚ませぬ様、そうーっと蒲団を転び出た私は、あられも無い姿の儘、畳の上に座つて夫の寝息を伺つて居た。

次第に肩と腕の痺れが取れ、手首を動かして見ると括り目に緩みがある。痛さを堪えて

右手首を抜く事が出来た。縄目を外し衿を合せ、スタンドを消して忍ぶ様に寝室を出ると曉の冷気が寒い程膚に泌みる。

浴室の瓦斯栓を開いて置いて鏡の前で白粉を落した。庭の樹木を渡る朝風が爽やかな葉音を立てて居るのも清々しく、空は次第に明るさを増して行く。

充分暖つた肌へ衿化粧すると浴室を洗い、湯を落した。音のせぬ様水を張り乍ら鏡台に向つて髪を梳き、朝の紅、白粉を刷いて行つた。二枚共お腰を替え紅絹衿の肌襦袢を下着し、真紅地へ小さな五色のもみじを散らしたお召の長襦袢を着る。半衿は藤色の綾織りである。黄八丈の着物へ黒地の名古屋帯を付け錆朱平打の帯をした。帯揚げは萌黄色の総絞りをし帯の中へ深く埋める。

日は未だ上らないが夜は全く明けて霧が流れて居た。時刻は五時半を過ぎた許り。

浴槽の水を止め、瓦斯栓を全開した私は割烹着をして台所へ行き、食事の仕度に掛る。合間を見ては部屋、部屋を掃き雑巾で拭いて行く。廊下を拭き、庭を掃き寄せて居ると、新聞配達に次いで牛乳配達が近付く様子であった。大胆にも私は門を開け二本の牛乳を買つたのである。中年の配達人は私に向い、

「奥さん、毎日お届けしましょうか」と云うのである。

「良いのよ、又頂くわね」

門を閉じる私の胸は高鳴つて居た。彼は私が同性である事には気付かないであろう。

掃き寄せた落葉を片付け、茶の間に入って新聞を開いて見たが何時もの様な興味は少しもない。朝食は出来て居るし掃除も済んだ。

浴槽の湯も熱い位に沸いて居る。七時前であるが夫は未だ起きない筈だ。昨夜は三時に近かつたのである。私は一時間余りしか眠って居ない。抹茶を点てて一服する、高い香りと渋い味が心を引締める様であった。

晒の肌襦袢に白ネルの腰巻、金茶色の羽二重の長襦袢に大島の衿を重ね、兵児帯と一しよに乱れ簞に入れて浴室に運ぶ。夫の着物である。昨日迄の汚れ物を洗濯器に入れ、浴槽の湯を汲んで廻しつつ四辺を整理する。洗ひ絞つて庭へ持ち出し、物干し場の竿に通して置いて居間に入る。割烹着を脱いで寝室の夫を見ると、安らかな寝息を立てて熟睡して居る。覚させぬ様に掛蒲団を直し枕元の物を片付けて出ると鏡台に向つて顔を直す。帯を解き杞椏模様の一越の着物に着替えた私は、昨夜から衣桁に掛けた衣類を畳んで箆笥に納め

茶の間の火鉢の前へ坐る。

煎茶を入れて飲む、私一人の静かな朝であった。菓子器を出して最中を摘む快よい甘さが舌に融けて仄々とした幸福感に包まれて行く。六寸に仕立てた袖の振りが着物の江戸紫の色と長襦袢の赤い色と重って美しく揺れ、帯の模様の色、帯メめの色、半衿の色、先程取り替えた帯揚げの紅鹿の子の色等、複雑な色の調和の点は和服の独壇上であり、女の喜びであり幸せであった。幸せな妻の心で夫の眼覚めを待つ私である。

夫は今日どの様に私を扱う心算であろう。昨夜云った様に庭の樹へ縛るかも知れない。私は立上って縁へ出て見る。ブロッコクの塀が高いから外から見える心配はない。沓脱の近くの楓は未だ低くその向うの木櫛も同様である。敷石の左に有る百日紅か、それとも此前縛られた芝生の向うの私であろうか、右の奥の一番空地の多い所に在るあくらの樹は太過ぎて縁から遠いし、根が隆起して坐る所がない。矢張り正面の松かその左の楓であろう。隣の部屋の姿見を芝生に向け、庭下駄を履いて松の根方へ蹲って見る。鏡が上向き過ぎて写さない。引返して少し俯向け、も一度見ると今度は良く写る。庭土の上へ直ぐ坐らされて

は着物が汚れるかと思ひ、押入れから蓑蓑を一枚出して縁端へ二本の綱と一しよに置いた。

自分の責場を準備する私であった。

薄れた霧を通して朝日が輝き、爽冷の空気が頬を撫でる、秋晴れの好い天気であろう。

茶の間の火鉢の傍で晒木綿を揚げ肌襦袢を裁つ、襦袢位は縫える私であった。夏の浴衣は私が縫上げたのである。夫のも私のもの。

身頃を縫上げた頃、寝室の襖が開いて夫の足音がした。手洗いかから浴室へ入る気配に針を止めて縫物を片付け食卓の用意をする。

八時半であった。生卵、味付海苔、椎茸の甘煮、細根の一夜漬、粒うに、等を並べて行った。味噌汁の実はマッシュルームと玉葱である。鍋を瓦斯にかけた。

間もなく血色の良い笑い顔で大島を着流して現れた夫は食卓の前の座蒲団へ落着き、置かれた湯呑を取り上げて口に含んだ。

「牛乳か、昨日のか」

「今朝のよ、失礼ね」

「買いに行ったの」

「配達して居たのよ、表を開けて買ったの」

「そのなりで?……へえ、大胆なやつ」

「ふふふふ、ねえ、判ったかしら」

「まさか判りやしないだろう、真実の奥さん

だと思っているよ、きっと」

二人は顔を見合せて笑った。

「何時頃起きた?」

「五時前頃かしら」

「寝ては居ないのか?」

箸を止めて私を見る。

「二時間程眠ったわ、だってこんな恰好で眠れるものですか」

「今迄何をして居たの」

「お掃除や洗濯、色々よ」

「眠くないかい?」

「ええ、今の所は」

出された茶碗に御飯を盛り夫の手へ、眠りが足りない故か私は食欲がない。お茶や最中の故でもあるのであろう。でも楽しく食事を終えた私達は寛いで朝の一刻を過して居た。

「交替日には家の中が綺麗になるね」

「そうか知ら」

「お前の方が行き届くんだな」

「斯うして居る時には特に気が付くのね」

「一層の事、毎日替ってうかな」

「あら、ふふふふ」

「近頃は斯うして居る時の方が、真実の家庭の様な気がする」

「まあ」

「真実の自分になった様なんだが、そう見えないか、お前からは」

「まあ、勝手ね」

「お前が段々不自然でなくなって来たし、私の目には当り前だと思えて仕様がな、斯うして居ない時の方が不自然に思えるんだが」

「……」

「家の事や、身の廻りの事をするとな面倒臭いし、食べ物の事なんか重荷で仕様がな」

最近の彼は確にその通りで洗濯物等も溜めっ放しにしたり食物等もその儘食べられるデパートの食品が多い。針なんか絶対持とうとはせず家の掃除も申訳みたいである。庭なんか日曜から日曜迄、掃いてもなく自然私の仕事になる。共に勤める駄だから止むを得ないと思つて居たのであるが万事がこの調子で、一昨年の私達の危機も彼女のらしくなさに原因したのである。男性的要素が多くホルモンのな欠陥があるのかも知れなかった。

「段々男の気持に変わって行く様だよ、会社でも急ぐ時には怒鳴り散らして居る事がある」

「まあ」

「お前と斯うして居ると、気持が安らぐんだよ、自分が女だなんて考えもしない。此れが当り前だと思えて仕様がな」

「家では良いわ、でも外では気を付けてね」

反対に私は家事や料理、衣類に異様な興味を感じて居る、喜びといった方が適切かも知れない。外で斯うした態度や言語を出す事は絶対にないが家へ帰った時は無意識に小さな事が気に付くのである。別にそうする訳ではなく自然にであった。

「一月に二回丈でなく毎日斯うして居たい」
彼は大変な事を云い出した。私が黙つて居ると、

「厭かい？」

と云つて照れた様に煙草をくわえる。彼の喫煙は結婚以前からで最近量は増え、一日にピースを二箱から三箱空にして居る。

「貴方がそう仕度いなら……」

笑い乍ら私が答えると、

「有難う、頼むよ」

彼は私を引寄せて接吻した。その態度は全く男性の力強い行為であり、自然私は女性化せざるを得ないのである。

「条件が有るわ」

「何だい」

「此家で二人だけの場合に限る事」

「勿論だよ」

「お互いの人格を尊重し、自尊心を傷付けな

い事」

「良いよ、それから……」

「好意ある助言と労りを忘れない事」

「それも判った」

「それだけですわ」

夫は再び接吻した。眼を閉じてその抱擁に身を委ねた私の心は妖しく高鳴つて居た。

「ペンと紙を持っておいで——」

夫は私の提案した条件を便箋に記した。

私達夫婦は双方の意志に依り善意と愛情と理性を根幹として本日より家庭に於ける両者の位置を交換して生活を行う。即ち今日迄の夫は妻に、妻は夫となりて互いに尊敬し愛情を尽くし家事を掌握し且つ従事するものとす。行為、言語、衣服性情等總て之に準じ行動す。此の場合一切の羞恥、遠慮、てらい等は抛棄し、仮性に成り切る事を本旨とす。相互の欠点落度、醜態等を指摘して恥かしめ、不快悲哀、厭氣等を感じしめる事を厳禁し知性に基く生活を営む事を約束す。

夫は全幅の愛情を以て妻に接し妻をして悲嘆、恐怖、不信等一切の脊信行為を感じせしめぬ事を誓い、妻は献身の愛情を夫に捧げ家事に従事すると共に夫に対

し絶対の貞節、服従を守る事を両者同意の上茲に誓約す。

昭和 年 月 日

佐伯 政夫
同 啓子

と記入し

「これで良いか」

と私に見せるのであった。

「ええ、良いわ」

私に異存は無く、双方拇印を押した。政子が政夫に、啓子が啓子に変わって夫と私の立場を明らかにして居た。

夫は快心の笑いを泛べ、マッチの軸で耳を搔いて居る。私は耳搔棒を取り出し膝に枕させて取ってやった。

麗かな秋日和であった。

手洗いに立った夫が居間から私を呼ぶ、近づくと抱きすくめ両手を後に捻じ上げた。

「あれ」

廊下に膝付く私を後手に縛った。

「痛いわ」

「当り前だ」

「違ふのよ、此処のとこ綱が捻れて」

縄尻を束ね、私の軀を抱く様にして茶の間へ連れ戻り、火鉢の側へ坐らせ縄尻を柱へ繫

ぐ。横坐りした膝前が割れ赤い襦袢がのぞいて居る。そうした様を眺めてお茶を飲んでいたのである。私は頂垂れて居た。二人共何も言わず、時々眼を合せるだけで時を過した。十時半を時計が打った時、ふと起ち上った夫は茶の間を出て居間で何やらして居たが、その儘玄関を出ると門の鍵を外して表へ出た様子である。外から鍵を掛ける音がする。

私は坐り直した。手首の綱が痛い。

夫は着替えて出たに違いないが何処へ行ったのか私には見当が付かない。

食事の買出しでは無い筈だ、それにお昼のお菓子は勿論、晩のも明日の朝のも、昨日私が買って来て有る。等と思って居る内に私は眠くなって居た。斯んな姿では寝られもしないと思つて居たが、縄の痛さも不自由さも襲いかかる睡魔には勝てず、軀を繋いだ柱に凭れて引込まれる様に眠ってしまった。

どれ程眠つたのか、不図眼覚めた時には、座蒲団を枕に横になつて居り、毛布が掛けられて居た。綱は胸や手にまつわつて居たが、縛しめは解かれて手は自由であった。夫の姿は見えないけれど庭で物音がして居る。

起き上つて衿元を直し裾を締め、髪を撫で付けて時計を見ると十二時半である。食卓の

上は変りがなく昼食を摂った様子はない。毛布を盈んで前掛をし火鉢の炭を足して台所へ立つ、小鍋を瓦斯に掛け食卓を拭いて焼豚とレタス、チーズ、煮豆、里芋の煮付、漬物等を並べて覆いを掛け、大急ぎで居間へ行き化粧を直して戻ると夫は食卓の前へ座つて居る。服装も朝の儘である。

「起して下されば宜かったのに、お腹が空いたでしょう」

「良く寝て居たからな」

私はお茶を入れた。少し眠つた故か食事が美味しい。夫の機嫌も益々良い様である。

「酷い方ね、縛つて置いて出て行くなんて」

「お前も帰つた時、寝て居たじゃないか」

夫は両腕を張つて食べて居る。全く男の態度であった。私は自然肩を落し腕を引く。

「お茶漬なさつたら」

箸を置こうとする夫に奨めたが、

「もう好いよ、充分だ」

と云つて止めて了つた。二杯喰べただけであるが副食は殆ど無くなつて居た。買つて帰つたのであろう雑誌を開いて居る。汚れ物を引き食卓を片付けて茶道具を残し台所へ立つた私は、洗ひ物や夕食の調理に急しく働いた。晩は鶏肉の水炊きである。鶏肉は昨日から



冷蔵庫の中にある。野菜を洗い庖丁を入れ、酢を合せ、もみじ卸しを摺る。各種の調味料を小盆に揃え調理した品を皿へ盛る等、漸く終えて居間で帯を解く。手洗いの序に口を洗い顔を洗ったが、矢張り本性は争えず、若いだけに体臭は胡麻化す事が出来ない。

私は遂々、帯紐を解いて浴室へ入った。手早く洗って流し、お化粧をし直した。着崩れせぬ様下着から確りと紐を締め伊達巻を巻いた。着物を着て、帯は秋の七草を織り出した華やかな袋帯に替えて結ぶ。前を写し後を写し、立って見、坐って見、暫く鏡の前に居た私が、茶の間に入って行っても夫は振り向もせず胡坐の上へ雑誌を開き、熱

心に読み耽って盆の茶道具には手も触れて居ないのだ。

湯呑にお茶を注ぎ、菓子器の蓋を取って膝元へ押しやると、漸く手を伸して来るのであった。私は袂の先を帯メめに挟み、前掛をして流しの前へ立ち、三合程のお米を洗って電気釜に仕掛けた。斯うして置けばスイッチを入れる丈で済むし、私の躰が使えない時には夫でも出来るから。手を拭き前掛を取って坐ると、夫は漸く顔を挙げた。

「済んだ？ ほう綺麗になったね」

「あら、お世辞を云ったって駄目、何か下心が有るんじゃないですか？」

夫の湯呑へ急須の茶を注ぎ又私のへも注いだ。お茶を飲んで居ると、

「いやに絡むんだな」

笑い乍ら湯呑を取り上げて居る。

「ねえ」

「何だね」

「今迄は月の内、三、四日だけだった炊事を此れからは毎日、私が為るんでしよう」

「一寸、気の毒だなあ」

「それは良いの、構わないけど、その替り私に何をして下さる？」

「そうだな、何が良い？」

「云っても良いかしら」

「云えよ、何だ」

「三、四日しかいらなかったお化粧品が毎日要る様になるでしょう、此れを買って来て」

「良いよ、そんな事、訳ない。序でに小間物も引受けるよ」

「嬉しいわ、じゃお願いします」

「良いのを見立てて買ってやるよ、もう外にはないか」

「ええ、それだけして頂ければ結構よ」

私は婉然と微笑して、

「あのね、良い旦那様になってね」

と云った。

「うん」

と返事したかと思うと私の手首を掴んで引寄せる。片手で盆を押しやり、私の膝を膝の上に倒すと背後から抱き締め、

「此奴、何故真実の女に生れなかった」

「だって、貴方と此んなになれないじゃ有りませんか。苦しいわ」

「今日は苛めてやる、良いか」

その儘の姿で私の両手は背後に廻され、先刻の綱で手首を重ねて括られた。肩を掴んで引起した夫は、締めた許りの袋帯をむしる様に解き放し、重ねて括った両手首を一杯に吊

り、胸へ通して二巻、三巻して締め上げる、

「あれっ」

思わず洩れる私の悲鳴にも耳を籍さず、背中でしたっかりと引き縛ったのである。恰も情容赦もあらばこそ、と云う様な強引さであった。そのくせ袖の振りを揃えて両腋に垂らして呉れるかと思えば、着物の片襟を拡げて長襦袢の肩をのぞかせるのである。

縄尻を取って引き起し、廊下から足袋蹴足で庭に下すと自分は庭下駄を突掛けて、百日紅の根方へ坐らせようとした。

「其処の莫塵を敷かせて」

「せいたくだぞ」

と云い乍らも幹に縄尻を預け、莫塵を取って敷いて呉れる。

「済みません」

その上へ横に足を崩して座す私の縄尻を、少し高目に繋いで椽へ腰かけ、

「良い天気だなあ」

空を仰ぎ見るのであった。稍傾いては居るが、午後の明るい太陽に照らされる私の姿は華やかにも無残なものに違いない。

風もなくはらはらと散る葉の一枚が、無残な私の膝に落ちた。何気なくそれを見る、私の頂垂れた姿を、夫が瞋めて居る事を私は感

じて居た。可憐に、哀婉に、優艶に責められる事が今の私の条件である。

廊下へ上った夫が茶の間から煙草をくわえ雑誌を持って来ると座蒲団の上へ寝そべって読み初めた。頁を繰る音と落葉の音が聞えるだけの静けさである。日曜である故か自動車もまれにしか走らない。

十分、二十分。莫塵一枚の上へ坐らされた足の痛さに堪えず、坐り直す度、膝前が割れて下着がのぞく。一度立上って坐れば下着の紅は隠れ、膝前は整うのであるが、綱の長さがそれを許さない。

夫は時々私を見ては直ぐ、雑誌へ眼を落して居る。私も何も言わなかった。

夫がそこに居るだけで良く、一人肌に迫る縄目の痛さを味わって居た。

松の木に縛られたのであれば、無残な自分の姿を姿見の中に見る事が、出来たのであるが、此木では見る事が出来ない。

三十分以上も過ぎたであろう、縄目の痛さは段々、堪え難く私は無意識に悶え初めて居た。手首、二の腕、肩が疼き私を責め苛むのである。時計が三時半を報せて居る。

別に猿轡されて居るのでは無く、口は自由であったが許しも乞わず、悲鳴も口に洩さな

かった。痺れて了えば痛みは無くなるのであるが、それ迄の痛苦の変化する段階は大変であり、局部から片腕全部へ、そして局部へと様々な痛み方をし乍ら、何回でも繰り返すのである。手首に少しでも緩みがあればその苦しみはない、が片手宛括り合せた時と、今の様に重ねて固く縛られた時には最大限に味あわされる。又胸から先に縛られた時は比較的に楽で、手首から縛って胸へ通した時には、胸の苦痛が手首に重加する。

私はのた打ち初めて居た。少しでも縄目が亡れば肉を噛む激痛から逃げられるのであるが緩めばこそ。右に左に身を揉み、軀を捻じたが綱は一層、喰い込む執拗さであった。

膝立ちしかけては綱に引戻され、悶える度に着物は崩れ、膝の割れを隠す為、片膝を立て、片膝を覆おうとすれば、尚割れるのである。早く観念すれば良いのであるが鋭鈍、様々な疼痛がそれを許さない。

そうした私を、夫は気付かない筈は無い、が矢張り無関心を装って雑誌を読み続けて居る。四時が鳴って居る。

指先は力を入れる度針を差す様な感じである。神経が麻痺し初めて居るのである。が手首の痛痒は何うであろう、何時もの括り方で

あれば上下し、又背中から離れる筈なのに、今は一程も動かないのである。下になった左手は未だ良い、が上へ重ねられた右手首が名状する事の出来ない苦痛を告げて居る。普通の後手首の縛りは手先が下向く筈なのに今の場合は逆に上向いて居るのである。此状態に置くには吊上げた小手を、胸へ廻した綱で横一文字に押えなければならぬであろう、がそれでも未だ動く筈なのである。

両方共、拇指、薬指、小指は感覚が失われて了った。残る指も時間の問題である。両手首の疼きに私の限界が破れ相であり、二の腕の苦痛は尚更で有った。三本の綱に依って干切られるのでは無いかと思われた。

少しでもそうした苛嘔から逃げ度くて、前に屈み、後にのり、左に右に、軀を捻り、伸して居るにも不拘ず、夫は見ても知らぬ顔であった。手を下さずして私は七転し八倒して居るのである。恰も夫の態度にそんな事は計算済みだという様子が見えるのであった。

指は残る二本も知覚を失って居た。鈍いだけの痛みだけを残して。

時計が一点を打つ、四時半である。

「ねえ」

私は堪り兼ねて夫に呼びかけた。何か話し

ても居れば、此の地獄から逃れられたかも知れない、と思ったのである。

「何だ」

「何か言って頂戴」

「淋しいのか、未だ昼だよ」

「痛いよ、堪らないわ」

私はくねらせる様に身を揉んだ。

「痛い様に縛って有る」

煙草に火を付けて小面憎く云う。座蒲団を持って椽端へ腰を下し、

「話して居れば痛くないのか」

「気が紛れると思うの」

「そんなお易しい括り方では無い筈だがな」
うそぶく様な言い方であった。

「酷いわ、此んなにきつく縛るなんて」

片膝を立て、膝先を隠し乍ら、流し目に睨む私、惨たる姿を見下す夫の視線に直ぐ眼を外し、顔を伏せる私であった。恥しい姿を隠す事も出来ず、白日の下に晒して。立てた膝にも着物は無く、赤い襦袢の色が斜陽を受けて燃える様であった。その膝を少しでも見せまいと胸を乗せれば、後手が高くなり鋭い苦痛が走るのである。

夫が近付いて来る。未だ解く筈は無い、鞭打つのであろうか、私は眼を閉じて待った。

何処へ鞭が打降される？ 背後に立った夫は木の結び目を解いて居るのであった。体の綱も解かれるのであろうか、私はほっとした様なそして物足りない様な気持であつたが、其の期待は何れも破れて了つたのである。

百日紅の幹を離れた綱は、私の体に巻き付けられた。しかも麻痺して居る後手に夫の手が掛り

「立つんだ」

と引起されたのである。肩先の激痛に悲鳴を挙げて起された私は、夫の手に真新しい、太い糸綱が相当な量、持たれて居るのを見て吃驚したのである。五分の太さであらう其の綱を私の腹へ巻き締めて行くのである。

「ねえ、どうするのよ」

「黙って居れば判る」

「だって」

私は不安であつた。伊達巻が見えない位、幾重にも巻締めた綱は、胸の縄目の上を更に縛って行くのである。

一卷き毎に夫に依つて引締められ、緊縛の上を更に緊縛された私の体は呼吸も出来ない有様であつた。

後手は勿論、腕全体が胸迄麻痺して了つたのである。胸を巻いた綱は又も胸へ巻かれ、

後手の下で括り、背の綱を引絞つて固定された様であつた。

今迄の部分的な鋭い痛みは全く失せ、鈍い息苦しい苦痛に私は喘ぎ乍ら、立って居る事も苦しく膝元から崩れたのである。

「びしっ」

綱の一端が胸を叩いた。

「あれーっ」

悲鳴を洩しても綱の上を叩かれた為、音程痛くは無く、漸く呼吸も慣れた私は

「酷い事をなさるのね、荷物と同じじゃないの」

「酷い事は此れからさ」

「えっ、何うするのよ」

「誰が坐れと言つた」

「だって、苦しいのよ」

「さあ、歩くんだ」

夫の手は容赦しなかつた。足袋はだしで歩かされ、よろめく度に引戻された。

今迄、上を見る事のない私は何が企まれて居るのか知らなかつたのだが、あくらの樹の下に立された後、夫の外出の原因を知る事が出来たのである、が今更知つた所で何になるう。私の体は夫の意志であり私の意志ではないのである。二抱えもあるあくらの木の太枝

に仕掛けられたウインチの滑車が、夫の操るチェーンに依つて、悪魔の爪の様な鉄鉤を垂らして来るのであつた。

私は其場を逃げ出して居た。重心が取れず転び相になり乍ら縄尻を引摺つて廊下の方へと、木櫛の木の所迄来た時、縄尻を強く引かれてたたらを踏んだ、が転びはしなかつた。

夫に捕つたと思つて振返れば、そうではなく綱の端が庭石の下に挟つて居るのであつた。

私はその庭石に凭れて息を弾せて居た。そして逃げる事を止めて了つた。一体何処へ逃げられよう。綱の端も外さず夫を待った。夫はゆっくり近づいて来た。

「何うした？」

「逃げようと思つたの、でも此の石に捕つたわ」

「石に捕つた？」

「綱の端をくわえられたの」

「何んだ」

「でも、あんな酷い事、厭」

「女は男の云う事を諾くものさ」

「でも、いやよ」

「厭でも諾かせる、猿轡するぞ」

私は再び曳かれた。樹の下に立つ私の脊に悪魔の爪はかけられ、チェーンの音と共に、

脊の綱に力が加った。私の体は浮き相になつたが仲々浮かず其の替り、もう締める余地はあるまいと思われた縛しめが、更に締って居るのである、音立てて絞られる綱は私の体を砕くのではないかと思つた時、急に引上げる力が緩んだ。私はへたへたと膝を突いたのである。

もう済んだのかと思つて居る私に夫が近付き脊の鉤を外した、その足に肩を凭れ息を弾ませて居ると、夫は私の脊の伸び緩んだ綱を締め直して居るのであった。

「まだ吊るの」

「痛いかい」

「痛いのは通り越したわ、痺れて了って」

「ならよいじゃないか」

「壊れて了うわ」

「苦しい？」

私を睥める夫の顔も上気して居る。

「ええ、でも未だ大丈夫よ」

微笑む私にかぶさる様にして唇を重ねるのであった。私は仰向くのが苦しかった。

再び鉄鉤が掛けられ、チェーンが鳴り初めた。脊の綱にグッと力が加わると同時に、私の体に卷いた綱にも力が入り、異様な音と共に引起された私の体は間もなく伸びて、呼吸

が詰まると感じた時足が土を離れた。同時に頭は前のめりに下り尻が上ると体が前後に揺れ初めたのである。動揺は廻転に移り、二回三回左へ廻って居たのが右へ変り又左へ移る廻り乍ら尚も吊上げられた私が漸く眼を開くと未だ土を離れた許りであった。

三十糎、五十糎、一米、私は吊上げられて行つた、右へ廻り、左へ返るといふ様な動揺を続け乍ら。廻転が止まつた時、私の足は三米程の高さに吊下つて居た。名状する事の出来ない圧迫が全身を締め上げる。

落ちようとする肉体、吊上げる綱、矛盾し相剋する両者の斗いが私の苛嘖なのである。

体重がその儘、責道具となつて居るのだ。腹を卷いた綱は内臓を圧し、肋骨を締め、胸中が千切れ相である。

胸は刻々に圧し縮められ、垂れた頭に血が下るのか耳が鳴り出して居る。

斯の様な苛嘖に人間の体力はどれ位堪えられるのか、そして私の体は？

吊責めの恐しさを私は今身を以って味あわされて居る。私の口から思わず悲鳴が出る。堪えようにも堪えられないのである。

「どうだ、大丈夫か」

「降して、降して頂戴！」

声を絞って叫んだ、かすれて居る。

右下に立って見上げる夫は、

「馬鹿を云え、今吊上げた許りじゃないか、少しは辛抱しろ」

「でも、でも」

「矢釜しい、彼方へ行くぞ」

取付くしまのない夫であつた。此儘放つて置かれては大変である。腕けば一層苦しく、空しく足が据をけるだけであつた。力を入れた為か、徐ろに体は右へ一廻転し、左へ一廻転する。樹間を洩れる西陽に照らされ、虫の様に枝に吊るされて。

耳鳴りは止んで居た、頭の中は空の様であつた、手首に吊縄はかかつて居ないらしく、腕の加重はない、胸を締め付けるのが堪らなく肩先の疼きと、胸の圧迫は息が止まる様であつた。肱から先の知覚は無い。

そして奇妙な事に腰から下は裸の様な感じなのである。地を踏まないとは何と頼りない心なのか。

私は稍落着いて居た。吊上げられた時、一度に加つた肉体の苦痛が多少治まつたと云うより慣れたのかも知れない。

人間の肉体の微妙さであろう。

夫は口では荒々しく云うものの、同じ姿で

私を見守って居る。矢張り心配して居るのであり、又楽しんで居るのかも知れない。

ぐったりと吊下った私が落着いた様子を見て、離れて見、近寄って見等して居るのであった。歩き廻る夫を私は見下して居た。眼を閉じると余計苦しい気持である。

暫くの後、

「おい」

悲鳴も洩らさなくなった私を、心配になったのか呼びかける。

「はい」

「大丈夫なのか」

「気が遠くなり相だわ、かんにんして頂戴」苦痛は酷いのである。私は一刻も早く降して貰い度かった。

「降すだけだよ、綱は解かないが良いかい」
「ええ」

吊りさえ許されるなら何でも良かった、此の責は骨身に徹するのである。

チェーンの音の度、私は下降した。足が庭土を踏んだけれど、体を支える力がなく、横たわって了った。鉤が外され漸く息が出来る心地であった。着物が汚れる事等念頭に無く此僅で放って置いて貰い度い私であった。

それから間もなく、私達は茶の間に居た。

陽は未だ沈んでは居ない、が物の陰はくらく、黄昏が這い寄って居た。五時を過ぎた許りであるのに。

巻き締めた太い綱は解かれて居たが、此の部屋で縛った綱は其の儘であった。

衣紋は散々で見られた態ではないのだが、縄目の体ではどうする事も出来ない。化粧も崩れて居るに相違なく、直させて呉れと頼んでも諾いては呉れなかった。

吊るされて、せいも根も尽き果てた私を横になる事も許さず、柱の根元に縛り付けて、物差して鬨って居るのである。

至る所を或は叩き、或は突つき、抓り、捻り、搦って。其の度に私は悲鳴し、呻き、悶えて居た。私の姿は惨々であつたらう。

お茶を飲み、菓子を食べ、又私にも飲ませ食べさせ乍ら夫は責め苛なむのであった。

二の腕が疼き、肩が腕げる様だ、手は麻痺した儘である。

連続する責苦に体は綿の様であった。けれど夫の手は容赦もなく、休ませて呉れない。外は暗くなり、電灯の光りは無惨な私の姿を、余す所なく照し出して、悲惨な、華麗な艶かしさを醸し出して居た。

夫の眼は異様に輝やき、手は執拗さを加え

て居る。断続する私の悲鳴と呻吟は夫の加虐心を猛らせ、苦悶する姿態は一層残忍性を昂ぶらせて行く様であった。

伊達巻は解けかかり、着物の衿は落ちて、襦袢の肩を見せて居る。

肉体の苦痛は聊さかの衰えも無かった、が私の心はそれを乗り越え、妖しい喜びに浸り初めて居た。苦痛は歓喜に変じ、歓喜は更に虐待を求めるマゾヒズムの法悦でもあった。

六時が過ぎて、夫の手が止った。煙草を付けて居るのである。ピースの香りが甘くたゆたい、柱に凭れる私の鼻口を搦って居る。喘ぐ息を整え、喘ぐ心を鎮め乍ら、私は其香りを楽しんで居た。

昨日の午後から止めて居る煙草を此の際一切止めて了うつもりで私は居る。

立上った夫は茶の間を出て行った。

私は座り直したが膝前は仲々整わない、二度三度繰り返す内、何とか肌だけは隠す事が出来た。赤い色が艶めいて部屋の中も明るい華やかさであった。

夕刊を持って入った夫は火鉢の傍で開いて居たが、私に向い、

「お菓子はもう無いのか」

と問う。私は項垂れた顔を上げて

「茶簞笥の、上の戸棚にお饅頭があるわ」

と云ってから

「お腹が空いたんでしよう。夕御飯にしまし
ようか」

「買物に行くのか」

「いいえ、買物は無いわ」

「それなら後で良いよ」

「でも御飯も炊かないと……」

「お米は洗って居たじゃないか」

「ええ、仕掛けてあるの、スイッチを入れれば
良いのよ」

「それなら私がするよ」

「おかずの仕度もしないと不可ないわ、一寸
解いて頂戴」

「駄目駄目、有り合せて良い」

私の自由は許され相も無い。取り出した菓子箱を開いて菓子をつまみつつ、夕刊へ眼を
曝す夫であった。

被虐に昇華しかけた私の心は再び抑制されて
持続の状態に置かれた。

燃え上りかけては抑えられ、爆発しかけては消される緩急の妙は、夫の恐る可き手練で
長い日夜を緊張と期待で続けて行くのであった。私は再び苦痛に呻いた。

「ねえ、又縛ったら良いじゃありませんか、

一度ほどいて頂戴」

「うるさい女だな、解かないよ」

「だって痛いよ、堪らないわ」

私は身を揉んだ。動けば動いたで苦痛だし
じっとして居れば尚苦しいのである。

夫は返事もしない。

「ねえ許して頂戴。ねえ、かんにんして」

新聞を離れて近付いた夫は、解けかけて居る伊達巻を締めて呉れた。柱の結び目を解き初める。漸く自由になれる。縛られてから何時間になるだろう。確か二時頃であった筈、今は六時半、四時間半も此の一筋の縄は私を苛み通したのである。

私は解き良い様に身を屈め、後手を夫の方へ向けた。

「あれっ」

肩が脱れたかと思う程、激しい痛さが走った。悲鳴を挙げて私は引起され、肩を突かれて廊下へ押出された。曳き立てられて居間へ入るのかと思うと、夫は庭へ下そうとして居るのであった。私は痛いのも構わず廊下へ坐った。

「いやっ、いやです」

腕いたけれど、所詮無駄であった。素足の体を引降されて居た。足袋は先刻家へ入る時

脱がされて沓脱の横に落ちて居る。

冷たい庭を歩かされて百日紅の下に墓座の上へ押し倒されて居た。

縄尻を繋いで夫は去って了った。

漸く起き上った私は居間の灯も点けない、黒々とした庭へ繋れた自分の姿を見る。

夫を呼んでも無駄であり、声を出せば猿轡を求めると同じであろう。幾ら苦痛であろうと淋しかろうと観念しなければならぬ。

廊下で抗った報いは、縄目が教えて呉れて居る。身に沁む苦痛に心迄苛まれて。

茶の間の窓硝子を通してはのかに明りが差して居る。膝元が冷い、お腰が割れて肌がのぞいて居た。振り返って縄尻の結び目を探すと頭上へ斜めに伸びた幹が一つの枝と岐れる所へ繋いである。私は立って見たが結び目は三十纏も上であった。暫く幹に凭れて居た。

夜の庭は其の中に身を置いて見て、はじめ薄気味の悪い事が知れる。虫の声はして居たが、樹木の下、塀の裾、椽の下は黒々として無気味であり、葉の繁み、植込、底の上等物の隅は、物の怪の棲家の様に思われる。

着物の裾を身を揺って合わせ、足を崩して坐った。覚悟したとは云え、堪らない心地である。夫の心を計りかねて居た。何時迄斯う

して置く気なのであろう。

足音がして夫が廊下に立つ。

「静かで良いだろう」

と云うのである。

「知らない！どうにでもなさい」

怨む私を見棄て、浴室の方へ行ってしまった。間もなく湯を使う音がする。

彼の人は男になり切って居る。此れから毎日がそうだとすれば、もう少し着る物を増えねばならない。羽織は直ぐに必要であり、丹前も要る。袴の着替えも今のだけでは足り無いであろう。私の物は一通り有るから此れからは夫の物を増えよう。家でだけ着るのである。寛ぐ和服が有れば良い。羽織は早速に買って、仕立てに出さなければ等と考えて居るのであった。七時が鳴って居る。

此処へ繋れて未だ三十分、私は一時間も経った思いで居たのに。

縄尻が長いから横になろうか、と思ったけれど、土は冷く固く、夜露も降りるであろうと思えばそれも出来ない。足を替えて坐り続ける私であった。

湯を上った夫は声もかけず、廊下を通過して茶の間へ入った。間もなくテレビを掛けたりして賑やかな音が聞え初めた。

月が出るのか空は可成り明るい。庭にも仄明るさがあり、居間から見れば風情があるであらうが私に取っては淋しいだけである。

七時半になっても夫は姿も見せず、八時のテレビの時報もその儘の姿で聞かされた私である。八時を聞いてから大分して月が昇り、庭も明るくなったが其頃から降り初めた夜露はさける事の出来ない私の体を濡らして行くのであった。袴足から肩はしっとりと冷く濡り、膝も同じ様に濡れて居るに違いないが、着物、襦袢、お腰と重って居る為、肌迄は伝って来ない、けれど時間が過ぎれば同じ事に違いなかった。

唯、今迄存在の判らない、背中の後手が鉄を置いて居る様に冷く感じられたのである。けれど動かして見ても何の反応も無いのであった。縛られた時の記憶では、帯を脱いで邪魔物の無い、伊達巻だけの背へ思い切り吊り上げて、その縄を胸へ廻して締め上げた為、左手は右肩へ、右手は左肩へ向って交叉して居た様であった。二の腕の綱も、胸の綱も来だ緩んでは居ないから、手首も其の時の状態と、同じに違いない、けれど着物へ触れる感じも、綱へ触れる知覚もないのは何とした事であらう？ 私は此の事だけが不安であった

凝脂を持つ、骨格の細い真実の女体なら、未だ身を揉む事に依って縄目の緩むと云う事もある。けれど骨の太い、筋肉質の男の体にはそれは無理で、縛り方に依っては何時間を経ようとも脱ける事は出来ないのである。

八時半も過ぎた。庭は明るく美しい。

月光に照らされて私の姿も悲しく美しかった。太陽や電灯の光りとは違って色彩美は劣るけれど夢幻的な光りは、私の姿を一幅の画の中に置いて居る。責められる女の真実の美しさは此の姿かも知れなかった。

客観的に其の美を味う訳には行かないが、自分に見える範囲に於て、事実その物に成り切る事は可能なのである。が、例えば私が真実の女であらうと責められる本人に客観美を強いる訳には行かない。苦しさや悲しさがあるだけであり、現在の私と何等異なる事はないのである。しかし私は今の自分が可愛いかった。

夫の責苦に甘んじる妻、男に苛責される女に違はなく、無情の縛しめに苦悶し、悲嘆する美女に違いないのである。

九時の時報が聞える。

縛られてから六時間半、此処へ繋れて二時間半を過ぎた私。私は自分がいとおしくて仕

様が無かった。此の庭へ棄てて置かれた様な私の体、未だ責められ叩かれて居る方がましであった。夫は今夜中此処へ繋いでおくつもりなのであるうか。月の光が私の心を悲しみに誘うのか、怒りでは無く悲哀が私を押し包んで居た。身じろぎもせず頂垂れて膝に眼を落して居る視線が、急にばやけ熱い物が込み上げたと感じた時、私の両眼から滴々と涙が溢れ落ちたのである。

私は自分で驚いた、が何の涙であろう。苦痛でか？、悲嘆でか？そう思った時、湧然と私は女の心に成り切り、真実の悲哀の涙が押える事の出来ない力で溢れ出たのであった。

私は鼻を詰らせて夫を呼んで居た。

「貴方、ねえ、貴方」

其の声は悲しい妻の叫びに違いなく、絶叫する女の声に違いなく私の耳にも響き、夫の耳にも聞えて居た。音ならない私の声に何事か、と走り出て廊下へ現れた夫は、先ず居間の電灯を点けて私を見下した。

明るく華やいだ光りが、眩む様であった。

が私が顔を外向けたのは眩しい為ではなく、衝動的に夫を呼んだものの、拭うに拭けず隠そうに隠せぬ、涙の跡を見られ度くなかったのである。が、夫は早くも私の眼に光る滴を

見付けて居た。駆け降りて肩を抱き、

「御免よ、御免よ」

と云い乍ら手首の綱を解こうとした。が、固く括って居る上、夜露に濡れて緩もうとしない。

「厭、厭、解いてなんかいらぬ。放つて——」

私は体を揺って拒んで居た。夫は伸び上って木の結目を解き、逃げようとする私の体をかかえて居間に上ると、私を押え付けて縛しめを外して行った。

半日振りに縄目から放された私であった。

が縛しめは解かれても、私の両手は自由では無く、眩から先は全く麻痺して居た。

直ぐ暖めようとする夫に頼み、湯と同量の水を汲んで、その中で揉んで貰った。

徐々に回復する知覚の疼きが止むのを待つて浴槽に浸ったのである。

二の腕の綱跡は深く縊れてうっ血し、手首も同様であった。私はそれを揉み散らして居た。次第に高まる湯の温度は、若い肌へ浸透して行った。

すっかり元氣を取り戻した私は、お化粧をし直して着衣を取り変える。

自分でも原因の判らない涙を見られて居る

故か、茶の間に入るのが気恥しく、夫の顔が眩しかった。

眼を伏せて入る私の両手は、直ぐ夫に握られて居た。手首に残る綱目の跡の無残さ。

「御免よ、此れからは氣をつける。此れは心配ないかい」

詫びるのであった。真剣なその眼、その顔色、私は又胸が詰り相で顔を外向けた。

「いいえ、いいのよ、思い通りにして頂戴」微笑む私を抱擁し熱い唇を重ねるのであった。又しても喉に溢れる涙、仰向いて閉じた私の眼に滲む滴を見て、夫は戸惑ったらしく

「どうしたの、未だ怒って居るのか」

「いいえ、怒ってなんか居ないわ、でも何うしてなのか、私にも判らないの」

指先で抑える私にも真実に判らないのである。何故此んなに氣弱くなったのか。

何んな事があるうと、涙を流した記憶の且ってない私であった。何うしたのであるう。

涙腺の様子が変わる筈はなく、心情の変化に依るのであるうか。斯うした生活の変化が心の在り方を変転した故か、感情の転移は機能の作用に係るのかも知れない等と思ひ乍ら

食卓に焔炉を運び、材料を運んだ。

夫はぼんやりとして、そうした私を眺めているのであった。

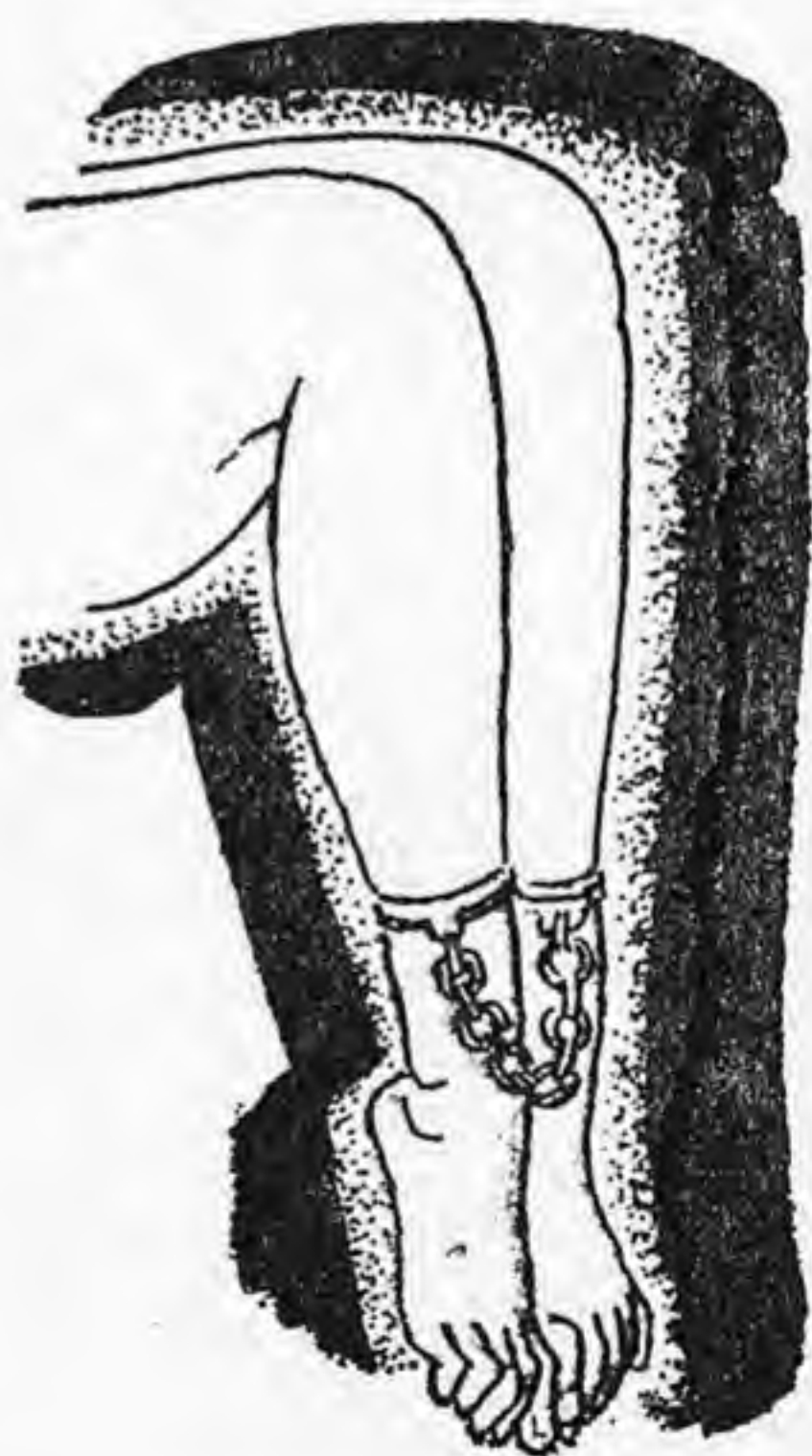
長い秋の夜も更けて、時刻は十時半に、二分钟前である。

(終り)

クロチルド

最後の挨拶

佐 出 須 登



皆さん、わたしを主人公とした物語、およそ幼稚極まる文章で、さぞやウンザリされたことでしょう。でも、ようやく終わりましたから、御安心ください。

わたしは愛称クロー。フランスとイタリアの血をうけており、ポーランドのラドムという町で生まれました。写真をお見せできないのが残念ですが、ちょっとした美人のつもりです。年齢は二十六才と称しています。

わたしは死刑マニヤ、いや殺人マニヤと言った方がよいでしょう。若い女の人をみると

いろいろな処刑方法を考えて楽しみ、実際に死刑になる女性の話をきくと、もう夢中でその執行の様子をみたく新聞雑誌を買い集めます。数年前日本から来たS氏と知りあってからはしばしばわたしも殺される方にまわり、二人でありとあらゆる処刑法を考えました。Sが日本に帰っている間、御誌に投稿したものがそれです。味も香りも何もなく、ただ殺すだけのもの。一人でも二人でも、お気に召した方が居れば幸いなのですが、如何だったでしょう。

ただひとつ、わたしにとって不満なのは、御前試合篇で一回戦の第一試合で敗れ去ったこと。相手が日本一の美女でも、これでは浮かばれませんね。

ところで、わたしが死刑マニヤになったのは、一九三九年九月の事件が影響しています。わたしの住んでいた幸福なラドムの町に突然ドイツ軍が進駐してきて、特別の理由もなしに絞首刑を執行したのです。わたしは当時八才でしたが、その時の悲惨な光景は、昨日のようにはっきり覚えています。

丸太を組み合わせただけの、簡単な絞首台に梯子がかけられ、まず大きなおなかをした女の人が引きあげられました。聞くところによると翌月お産だったのだそうです。ドイツ兵たちはそのおなかをなでながら、いろいろからかったのち、梯子から突きおとし、おなかの赤ちゃんもろとも、生命を奪ってしまいました。

続いて何人かの女性が処刑され、最後に梯子に引きづりあげられたのは、わたしの隣に住み、わたしを妹のようにかわいがってくれた、当時十七才の処女ジャクリーヌだったのです。彼女は泣き叫び、まわりの人の名を次々と、子供だったわたしの名もふくめて、呼びながら助けをもとめました。どうすることもできません。首にロープをまかれ、足場をはずすと、悲鳴はたちまちかき消されました。その断末魔の叫び声は、二十五年もたった今でも、はっきりわたしの耳にのこっています。ダランと宙に浮いたハイヒール。額には捲毛がたれさがり、唇のはしにはじみでた血汐が一滴。ひとりだけほかの人たちと反対側を向いて、翌日も、そのまま次の日も、吊り下げられていた姿……この光景はいまでもはっきり覚えています。

しかもこの処刑は、わたしたちの前に公開されただけでなく、映画にとられ写真となつて、欧州のあちろちらにばらまかれたのです。『自分たちに従がわぬものはこうなるのだ』と。

以後五年余の大戦の間、わたしは数多くの話をききました。抵抗運動の犠牲となった女性たち、収容所内の虐殺、カポーへの復しゅう。しかし実際に見ることができたのは、ペロロ・スタッツの処刑です。

彼女はムッソリーニの愛人で、三十才位の美しいひとでした。それが無造作に銃殺され死体はバルコニーから逆吊りにされて晒しものとなったのです。彼女のスカートがまくれおち、女性として見るに耐えない姿になったのを、親切な男があらわれて、スカートを足首に縛りつけてやったのを覚えています。

第二次世界大戦の始めと終りのこの二つの事件が、わたしをこんな性質にしていましました。現在わたしは、映画関係の仕事をしているので、若く美しい女優さんに接する機会も多いのですが、彼女たちが裸にされて、死刑台にのぼる姿を想像し、ひそかに胸をワクワクさせるのです。彼女らにとってはそれこそ『知らぬが仏』でしょう。

今は映画界から消えましたが、清純さを売物とした当時十七才のJ。わたしたちの殺しも、常に雄々しい最後をとげさせています。

英国生れのD、イタリア産のEなど『優雅そのもの』と言うべき女優たちも、彼女らにふさわしい死に方をさせています。勿論だからといって、ほかのメンバーが『清純』『優雅』でないとは言いません。

わたしに次ぐ主役として活躍したN。美しいブロンドのKやM。そしてP、D、A、Fなど、皆立派な女優さんであり、家庭にあっては良き主婦である人達の名前を、勝手に借用したものです。

ロケに来たビキニ・スタイルの女優さんがプールサイドで日光浴をしているのを見ましたが、そのかわいいオヘソを槍で刺したり、首を斬ったりしたら、どんなに良い気持ちだろう、など考えるのですから、うっかりできませんね。

では、このへんでペンをSにゆずります。窓辺のイスに坐って、悲しそうな表情で外を眺めているのは、たしか千鶴という二十三才の娘。彼女は銃殺の宣告をうけたのだ。ただその執行の時が何時かは、まだ彼女には知らされていない。

間もなくその背後から、黒い銃身が顔をだし、後頭部に狙いをつける。せめてもの情けとして、本人の知らぬうち処刑しようと言うのだ。

千鶴は何かにおびえたように、つと顔をあげる。その瞬間にぶい銃声がひびいた。ちょっとだけ腰を浮かした千鶴の顔に、苦悶の色があらわれ、右手が顔への途中まであがりかけたが、そのままどっとくずれおちた。頭を窓辺にもたれかけ、右手がダランと外にたれている。目は閉じられ、唇のはしから血汐が一滴、ずっと流れおちた……。

これはつい最近、本当に見た夢です。殺人マニヤの私にとって、こんなすばらしい夢はありません。彼女の死体を逆吊りにして晒すか、首を切って獄門に梟けるか、と言うところで目がさめました。

敵地にのこされた美女を救出に行ったが、すでにおそく彼女は首をとられていた。その斬口に手をあててみたら、まだあたたかい血汐がにじみでていた。

二人の敵が足を一本ずつつかんで、死体をズルズルと引きつってゆく。その身体には首がない。しばらくあとを三人目が何か丸いものをぶらさげてゆく。その丸いものこそ、さ

がし求めていた彼女の生首だった……。

こんな夢もみました。今迄私が書いた作品にもいくつか入れられております。

納屋の二階で仕事をしていた娘が、梯子を使っておりようとした時、どうしたことかその梯子がふたつに折れた。不運なことに、彼女のネッカチーフが、二階の床からつきでていた釘にひっかかり、彼女は首吊りになって哀れ十九才の青春を散らしてしまった……。

これは欧州で実際にあった話です。全く災難はどこにころがっているかわかりません。美女の釜うでについては前に書きました。

ところが、ガス風呂に入っていた女性が中毒死し、ほかに誰もいない上にガスがついていたため、死体は三日間も沸きたつ湯のなかで煮つめられ、発見された時は、肉やあぶらや毛髪がドロドロになって、三分の一ほどになった湯の表面に浮び、底には白骨が沈んでいたと、という事件がおきました。私の釜うではせいせいテンプラにする程度ですから、こうなると「事実小説より奇なり」と言うべきでしょう。

輸送船が沈没し、海に投げだされた婦人将校たちは、味方の駆逐艦が救助に近づいてきたのを見て、喜んで手をふった。しかしその

水面下には敵の潜水艦がひそんでいた。

駆逐艦長は大の虫を殺すため小の虫を犠牲にしようと、彼女たちのまんなかに爆雷を投下した。ものすごい水柱があがり、彼女たちは一瞬にしてケシとんだ。

敵潜水艦がどうなったかはわからない。ただひとつ確実なのは、婦人将校全部が死んだことだった。

一応人間の形をしているものがふたつ、拾いあげられた。衣類は何一つつけられていない。しかもひとつは完全にペチャンコで、内臓すべてがはみでていたし、もうひとつは股の間から顎のところまで、きれいにまっぶたつになっていた。

そのほか女体の一部と思われるものが、バケツに二杯分収容された……。

このタネ本は「怒りの海」ですが、実話の方は二十人の婦人将校をのせた船が沈められ救助されたのは四人だけ。その船がまた沈められ、結局遺体をひとつ拾っただけと言うものにもすぎません。

十五人の女性をのせた飛行機が波間に墜落し、辛うじて四人の死体を収容したが、フカに喰い荒らされて、確実に女性と判別できるのは一人だけだった……。

私の空想は、こんな風にどこまでも発展するのです。

逃走中の女死刑囚クローは、ようやくおちついたホテルで、窓をあけると首をつきだして外の様子をうかがった。その時全く想像もつかぬことだったが、彼女の部屋の数階上にあるロビーの大ガラスが、突然落下してきたのだ。先端は鋭く、かなりの重量をもったガラスが、かよいクローの首すじにぶつかったのだから、いかなる悪女といえどもお終いである。彼女の美しい首は、鮮やかに胴体から切断されてしまった。

ガラスは下の歩道で粉々に砕けたが、彼女の首は偶然にも、その傍にあつたくずかごの中にスポリとはまりこんだ。あたかもギロチンで刎ねられた美女の首が、血しぶきと共にバスケットの中におちるように。

彼女を追っていた警官は、この思いがけぬ結果に驚きながら、くずかごのなかから彼女の生首を、血の滴るのもかまわず髪の毛をつかんでぶらさげ、集ってきた群衆にさしめした。あたかもサンソンが、ギロチンで刎ねられた美女の生首をさしめすように……。

これは「宿命」と言う題で書こうとし、とうとうものにならなかつた作品のラスト・シ

ーン。例のメンバーが脱獄には成功したものの、次々と自分の最も忌み嫌っていた方法で事故死してゆく、と言うストーリーです。

一体何を書こうとしているのかわからなくなりまして。これでも挨拶のつもりですからお許し下さい。

五冊のノートに、ぎっしり書いた殺人ゲーム。そうです、ゲームと言った方がよいでしょう。殺すのがお気に召さぬ方もありました。私の場合殺されても、今回は必ず生き帰ってきて、二度も三度も惨殺できるのかミソで、「永遠の死刑囚」と名付けています。結局は「決して殺さぬ」と同じになるのではないのでしょうか。しかも生首も楽しめるのです。

私が再び欧州に参る日も近づきました。最初「ひとつ出してやれ」という軽い気持ちで投稿した作品が採用され、しかも十回も掲載の栄に浴したことは、われながら驚いております。終戦直前の予科練にも落第した程のガクのなさ、誤字だらけで、新かなづかいやら送り仮名やら、メチャメチャで、編集者の方々も読者諸兄姉も、さぞや読みにくかったことでしょう。

自分の書いたものが活字となるだけで満足

し、その上フォートを何枚か送っていただければ感謝感激という素人にとって、読者通信の反響をみるのは楽しみでした。結構喜んでくれる方が居るではありませんか。中屋敷様の如きは特集号にして出版してくれとのこと、まさに過分の至りです。

女斗彦様を始め何人かの方々からも、おほめの言葉をいただきましたし、佐渡耕作様の御意見も有難うございました。お別れにあたり、あつく御礼申し上げ、今後の御健康を祈ります。

ある事情から日本に住みにくくなり、欧州にとびだした私。昨春の五年ぶりの帰国も誰一人喜んでくれるものもない私にとって、奇クを発見したことは、砂漠のなかのオアシス以上のものがありました。僅か一年半のお付き合いに過ぎないのが残念です。

無理解な方面からの圧制は、今後もつづきそうです。しかし少数とは言え、力強い支持者を持つ奇クは決して滅びないでしょう。再びお会いする時が、いつになるかわかりませんが、その時まで、いやその後も永久に続刊されんことを祈っております。

愛する奇クの皆さん。さようなら。

浣腸フェチ・マニヤの告白

僕の白日夢

葉 柿 真 一

僕はある電気会社の独身サラリーマン。
趣味は浣腸フェチです。

最近問題になっている『白日夢』という映画にあやかって、僕のフェチの夢を展開させましょう。それには、まず自分がそういう白日夢を生むにふさわしい状況をつくらなくては――。

独身寮の押入れの片隅には、僕の大切なトランクがある。僕はドアの鍵をきちんと閉めて、僕の孤独な空間の中で、玉手箱のようにそっとそのトランクを開く。

今日は白日夢をなるべく長びかせるためにグリセリンの濃度をうすめよう。いつもは水

で二分の一にうすめるところだが、それでは十分もガマンできなくなるので、今日は三倍にうすめよう。大きなコップの中で、うすめられたグリセリンがもやもやとゆれている。

一〇〇CCの浣腸器にたっぷり吸い込んで僕は四つ這いの姿勢で注入する。二本目、三本目、このくらいにしておこう。今から夢をつくらなくてはならないので――。

ああ、もう何だか下腹が異様に張ってきて気持ち悪い。僕はあわててオシメを当てる。

赤い花模様のオシメを三枚、股の間にとおして、その上から総ゴム張りのピンクカバーをピチリとしめて、その上から黒いブルマー

スを穿く。気分を出すために黒のストッキングも穿こう。赤いガーターをはめると、そうでもなくても下腹の膨満感が一層しめつけられて、今にも粗相しそうな感じになる。

さてさて、これからが大切。下半身すっかり女性化した僕は、フトンの上におおむけになる。念のためシーツの代りに広いビニールをひろげた上に。これで大丈夫。僕はだんだん迫ってくる便意に全身を強直させながら腰を動かすと、バリバリと異常な音のするベットのの中で、白日夢に安心して、ひきこまれてゆく……。



ここはどこだろう。女学校の医務室のようだ。窓越しに校庭が見えて一クラスの女生徒たちが、きちんと四角に整列して徒手体操をやっている。ピッピッという笛にそろえて、白いトレーニングシャツ、白いスカートが一世いにリズムカルに波をうっている。

少女たちのヒタイに軽い汗。この学校では

この前までは、黒のブルマースを用いていたのに、この五月から白のスカートにかえられた。某センイ二次メーカーが新しく発売して今さかんにひろがっている短いスカートとブルマーとコンビネーションになった運動服。花恥しい年頃の女生徒に、ズロースまがいのブルマーというのも品がないし、優美でデ

リケートなプリーツスカートがいいというのが全員の希望で、すぐにそれが採用された。

色も、白、黒、紺とあったのに、白が清潔というので文句なしにえらばれた。短いプリーツスカートでとびまわるとき、腰を深く曲げると、その下から白いブルマーの褶の多い裾口がチラッチラッとのぞく。それが、ブルマーのころより、かえってエロチックにみえたりする……。

とにかく、今、午後の静かな医務室のベッドに一人の女生徒が横になっている。さっきみんなと体操している最中にめまいがして倒れ、ここに連れてこられたのである。もう充分に成熟した肢体をユニホームに包んでいるところが妙に印象的。医師と話をしている。この数日、便秘していて頭が重い。それがめまいの原因と考えられるので、今から浣腸しなくてはならないとすすめられている。

「先生、私恥しいわ」

「そんなこといってたら、又ぶっ倒れるぞ、軽くしてあげるから、さあ、そのままスカートを下げて！」

そばに看護婦がすでに一〇〇CCの浣腸器にたっぷり液をみたくして用意している。医師はスコートの左ワキのチャックをズルズル

と下げる。この少女はパンティを穿いていない。スコートを下げると白いお尻がむっちりとしてシーツの上にむき出されて、少女は観念して横むきになって医師に背をむけている。

馴れた手つきで浣腸液は注入される。

少女の額に汗がにじみ、顔色が少し蒼ざめる。軽くもり上がった乳房が運動シャツの中で、はげしくもだえはじめる。

医師と看護婦は、じっと少女の苦悩のさまをみつめている。窓の外では相かわらず、ピピッと笛の音。のどかな春の午後の体操の時間はつづいている。ただ、医務室のベッドの上で一人の少女の必死の苦しみ、加速度を増してきている。

七分経った。少女の身もだえがハタと止まった。

静粛、そして次の瞬間、しじまを破って、次の段階がはじまった。少女は遂に粗相をしてしまった。みるみる真赤になった顔を両手でおさえる。

「先生！だめ、もう……」

○

この女子寮の一室。

薄暗い六畳の部屋に七人の女子大生が、一人の気の弱そうな二十才ぐらいの青年をとり

囲んで坐っている。男は正坐してかしこまってかたくなっている。

目の前にこういう緊迫したフンイキにそぐわないようなきわめて爽やかな色彩の山がおかれている。赤、青、黄、花模様、その他さまざまなパンティが少くとも十四、五枚。中にはピンクのシュミーズや黒のペチコートもまじっている。要するに、この青年は女子大の寮にしのび込み、物干場から彼女らの下着を失敬しようとして、とっつかまって今つるしあげられているところだ。

かわいそうに青年は額に冷汗をかいて、ふるえている。彼女らのリーダー格の女がかさにかかって説教口調でつづける。

「要するに、この前からちよいちよい干物がなくなっていると思っていたのは、みんなあなたのせいだといって、いいですね」

「いいえ、僕は今度がはじめてです。ほんとうです。信じて下さい」

「ウソおっしゃい。とにかく、あなたは私たちの下着を盗もうとした、この事実を認めますね。これをどうするつもりなの？」

青年はただ益々身体を小さく、両手を畳について平伏するばかりだった。

「できるだけのつぐないは、したいと思いま

すので、それでごかんべんを……」

「いいでしょう。これから私たちの言う通りにしたら、今度のことは、さっぱりと水に流してあげましょう」

そういつて二人の同級生に目くばせした。二人は立ち上って何か用意にとりかかった。青年は裸になることを命じられ、そして一人の女が着ていたピンクのシュミーズを着せられた。変てこな恰好で青年は部屋の真中につっ立っている。

「さあ、その椅子に坐るのよ」

ビニールでカバーされたソファに坐らされ両手両足をイスの脚や肘かけにかたく縛りつけられる。腰の下にザブトンが重ねられて尻が正面に出るようポーズさせられる。青年は女たちの前でマナイタの鯉のような、あきらの表情。一〇〇〇CCのイルリガートルがつけられる。石ケン水が満ちている。

女たちの軽蔑と哄笑のなかで、青年は一リットルの石ケン水を浣腸される。

○

オールドミス、三十三才のBGの下宿。

彼女は十人並みの容貌と姿態の持主なのに不思議に会社の男性たちは相手にしてくれない。どこといて欠点もないし交際も少なく

ないのに、なぜか男を拒否するフニキが彼女のまわりに漂っているからか。

彼女はアルコールをおぼえて毎晩下宿の二階のホームバー（といっても、ウィスキーとブランドーと、その他二、三の安物の洋酒が戸棚に並んでいるだけだが）で一人でチビリチビリ時間をつぶす習慣ができた。

アルコールがまわって陶然となったとき、彼女は満足というよりむしろ逆に淋しさにさいなまれる。いつの頃からか彼女は自分だけ

◎女性モデルを募る◎

○本誌では、口絵写真又は分譲用写真の女性モデルとして出演可能の方、並にプレイご希望の方を募ります。編集部宛て照会下されば、報酬その他詳細お返事の上お打合せいたします。

○緊縛写真希望者は勿論のこと、女相撲女斗美、切腹、浣腸などをはじめとしてMフオートのサジスチンとして出演ご希望の方なども歓迎いたします。

○本誌のグラビア頁並に分譲品を充実するため何卒奮ってご応募あらんことをお待ちいたします。妊婦フोट撮影可能の方、遠近に拘らずご連絡願います。

天星社編集部

の浣腸遊びをおぼえた。その効果を倍加させるために、大きな三面鏡も買い込んだ。全身が三つの角度から、くまなく見える鏡。

グリセリンを二倍にうすめて、二〇〇CC注入するときの快感。もしもこれが（男性によって強制的に行われるものであったら！）彼女は小声で「イヤ、イヤーン、ゆるして」と叫びながら一人で浣腸してしまう。

忽ち襲ってくる便意。あえぎながら、すばやくオシメとオシメカバーがはめられる。特別に注文して作らせた総ゴム張りの二重の花模様のカバーがパチンパチンと締められる。

それから外出の支度。真新しいスーツ、タイトの白いスカート、その間にも悪魔がとび出してきて、何もかも放棄してじーっとうずくまっていたところ。

三面鏡の前でオロオロしながら、しかし手ぎわよくとのえられてゆく一人の女性の外出姿。タイトのスカートの腰のあたりが、オシメカバーのために、不恰好にふくれあがって動くたびにゴボゴボと音がする。

（マニヤが私のこの姿を見たら、きっとスカートの下のものをはっきりと見通すにちがいない）という妙な喜びに、何度となく鏡の前でスカートの上からヒップをなでたり動いて

みたりする。

それから近くの店屋へ買物にゆく。大抵は化粧品店にいった一寸したものを買う。問題はそこの若主人と買物のことで話しあっている最中に、極限状態が襲ってくるこのスリル。化粧水やコールドクリームなどをいろいろ時間をかけて選んでいる間に、ぐんぐんつのってくる破局感。そばの女店員たちの目もとときどき腰の方にむかってくる。

そして遂に、ヘナヘナとその場に坐り込んでしまいそうな気分。代金を払うのもうわの空。歩きにくそうに店を出てゆく彼女の後姿のヒップに、若主人の眼がじっと注がれている……。

○

そろそろ僕の白日夢もおわりに近づいてきた。もうおちついて夢をおっかけてゆくにしては、僕の生理の限界がきている。

ああ、もうたまらない！僕はペンも紙もほり出して畳の上でのたうちまわる。

白日夢が現実にもどる。

もう知らない。人のことなど、どうでもよい。今、この瞬間、僕の場合は僕だけのものとして襲ってくる。そして………

（終）

切腹研究夜話

創作『殉国』前後

中 康 弘 通

一

はや数年前のことになる。

未知の人から書信を頂いた。その書信に同封されて、一人の女性が終戦直後に切腹して果てた事情を詳しく知らせて貰った。その原文を写すと、

時 昭和二十年八月十七日夜。

所 東京某地にて。

人 切腹したのは日本の某スパイ探索機関に居た二〇才の女性。

理由 米軍が進駐すると聞き、すでに前から目標とされていたため、逃れぬところと考え、知人の軍医に立会を頼んで

自決した。

状況 当夜軍医はピストルを用意して約束の基地に赴くと、女はすでに黒装束に紺のハカマをはいて来ており、「切腹に便利ないようにじゅばんの下は一切何も着ていないものですから、苦しんでも見苦しくならないようにハカマにしました」とはにかみながら話した。切腹の作法は祖母に教わり、臍の上を切ると食物が出るから恥づかしがらずに充分腹を露わして切ること、浅く大きく切るのは剣道の心得がないと難かしく、痛くて耐えられないから、幅は少

しでも思い切り深く切るように、と云われていたという。

東に向って正座すると、するりと肌をぬぎ、腹を充分に露わし（腋毛はきれいにそっていた）「もし仕損じたらよろしく介添え下さい」というと、左手で左脇腹をぐっとつかんで、腹壁をぐっと緊張させ、一刀で二寸近くも突入れた。思わず「しっかりして」と叫ぶと、はっきり「大丈夫です」といいながら、ギリギリとゆっくり六、七寸も、臍のかなり下を引廻し、肩で息をして、刀を突入れたまま左手を前につ

いた。はじめ血がシュツとしぶくと、少しして一面にあふれ出し、女は辛うじて刀をぬくと、前において両手をつき、あえぎつつ「苦しい、気が遠くなりそう……お願いします」というので抱き起し、懐剣を左乳下に突刺すと後へ一度のけぞり、バタツと前へ倒れ絶命した。

以上である。この約八百字の文章には人名、地名その他の具体的なものが秘匿されているので、このまま実話として発表するのは些か困難であると感じられた。この少女（二〇才といっても当時のことで、満年齢なら一九才の少女と云えようか）の壮烈な心事を思えば、埋もれさすには忍びない事実であるにしても、一応ためらわれたのである。

二

翌年、東宝映画主催のミス剣豪コンクールがあった。女流剣舞大会である。剣舞では「城山」「白虎隊」と、切腹

の型を含むものが比較的よく演ぜられる。このときも、「白虎隊」を舞った高井静恵さん（現東映女優鈴木由美さん）が二位に入選しているが、サン写真新聞は此の日のニュース写真に、逆手の大刀を腹に刺し前のめりの型になった一少女の舞姿を、右側面から撮って載せていた。美しく整えた黒髪に巾広い白鉢

巻をキリリと締め白い稽古着に棒縞袴といういでたちも、何か清潔で、引き緊った横顔に悲壮感さえ感じられた。写真説明に云う。

朗々たる詩吟に乗って、剣舞はいまや最高潮、ガバと長剣をハラに突きたてウム！その「神技」のほどに審査の先生も思わずツバをのみこむ。

とあり、審査員の稲垣浩氏（映画監督）、妻木正麟氏（剣舞師範）、司葉子さん（映画女優）らが審査員席から注視しておられる状況も写っている。

この印画を後日入手した筆者は、たちまち前記の実話を思い浮かべた。実話として発表するには資料に乏しいこの心事を、創作としてなら、ある程度の肉づけも出来る。

筆者は妙齡の美少女が、心ゆくまで「白虎隊」を舞い納め、やがて白装束に身を正して作法通り割腹して果てる姿を想った。こうして、創作「殉国」のモチーフは持たれた



殉国

のである。

創作はモチーフだけではならない。そこには何らかのテーマが必要である。筆者は思う。特務機関にあったため戦争責任を問われるとすれば、それは要するに日本が敗れたからではないか。戦勝国では賞されることが、敗戦国では咎められるのではないか。その故にこの少女は縄目の恥を厭うて自決する破目に陥ったのである。しかし更に考えてみれば今日この時点で筆者が是を書く急務は、つまり「殉国」という行為のむなしさが、読者の胸に伝わり、しかもむなしければむなしいほどヒロインの心事の清冽さが、純粋さが、読者への一つの感動の呼びかけになるのではなにか。そう思えたのである。作品の中では、従って筆者の解釈は余り必要でない。素材を出来るだけナマに近い形で、しかしナマそのものではないに展開して行く方が、感動は深いと思えた。モチーフそのものが感動的だからである。

ヒロインの名には、かつて奇譚クラブ読者通信に投稿されたことのある、木村悦子さんの名を使わせて頂いた。題の「殉国」は何の躊躇いもなく撰ばれたのである。三十七年八月「殉国」は同人雑誌「三人」創刊号に発表

された。

三

「殉国」の梗概は次の如くである。

昭和二十年八月十七日、東京都内の某陸軍病院に勤務する野村軍医中尉のもとへ、木村悦子から電話がかかって来た。折入って頼みがあるから今夜来てほしい、というのである。そのとき、いつか悦子が、若し敗けたら私は生きてられない、と云ったことを野村は思い出した。

もと在外公館の武官を亡父に持つ悦子と、野村は剣道で知り合った同門の友である。

夜八時木村宅を訪れた野村は、稽古着に義経袴の悦子に離れで迎えられた。やはり自決するという彼女の事情は、彼女が特務機関にあったからである。戦争責任は敗戦国だから問われるもの、しかも万一戦時中の身分が暴露したとき、処罰のみならず女なるがゆえの受難なしとしない。屈辱よりも自刃をと希う悦子の気持は、野村にも理解出来た。彼女を護ろうとしても、個人の力ではどうにもならない壁があった。彼女の判断を早計とは云えなかった。

この世の思い出に、悦子は大刀を執り、野村の吟声に合わせて「白虎隊」を舞いたいとい

う。正月の稽古始めの宴で、隠し芸に悦子が剣舞「白虎隊」を舞ったとき、吟じた野村はその凜然たる舞姿に、深い憧憬と愛着を抱きはじめた。快く野村はこの夜も吟じ進んだ。

社稷亡びぬ 既にやむのみ

十有九士 屠腹して倒る (佐原盛純)

彼女は手早く白布を身に巻きつけ、逆手に握ると見る間に、切先をガッと左の脇腹に当てがい、袴の紐ぎわをジリジリと真一文字にかき切る型を見せた。真刀だけに、刃先は袴に触れるか触れないかでありながらさながら苦痛を憶えて腹かき切る会津の美少年を彷彿せしめる気魂である。その瞬間、ヒタと宙に据えた悦子の瞳は、はるか遠い空間に、何か美しく貴いものを見つめるような、陶醉と敬虔の入りまじった、あえかないろがあった。終わったときこの世で最も美しいものの一つが亡びて行く哀しみに無量の思いを籠めて、上気した悦子の顔を見守る野村と、瞳を合わせた悦子は、さり気なく視線を逸らし、着替えに立ったのである。

白装束に身を包んだ悦子の唇紅の鮮烈さが野村の眼を射た。用意の三宝には切腹刀がおかれ、彼女は「切腹したい」と告げる。「苦しいですよ」と制止した野村に、悦子は、

「お作法のように浅く大きく切るのは痛くて我慢ならないんですってね、お臍の上ですと見苦しいこともあるし、お腹を広く露わして思い切り深く切ればいいって教わりましたの……だから、恥ずかしいけれど……白装束の下は何も着けていませんのよ」

清い微笑を浮かべるのであった。白装束に裸身を包むのみに聞いても、およそ若い女の裸体を連想させる淫らがましさはなかった。

高潔で清浄なもの、そんな何かのすがたが野村の脳裡に、彼女の言葉からの連想として浮かんだ。野村は二十才の女性の潔さに打たれ、稽古始めに見た彼女の美しさを思い出していると感じた。

「しかし何うすることも出来ない、貴女が今ここで」

「何もおっしゃらないで、妾、辛いわ、妾だつて……」

悦子の瞳が潤んだ。妾だつて貴方が……というのか、妾だつて死にたくはない、と云うのか。

「妾の最期を野村さんに見届けて頂きたい。それが唯一の願いなんです。でも切腹以外の方法では見届けるなんて例がありませんわね、だから妾、どんなに苦しくても、切腹し

て見届けて頂く、そう決めたんです」

それは切ない慕情の告白であった。己が身であつて己がままならぬ。祖国の要求に生命は服する時代なのである。悦子の生涯にはもう時間がない。そのとき初めて告げ合う愛の言葉であつた。

「妾の体が今ここで亡びるのは、妾自身を何ものからも、妾からさえも護り通す唯一の手段ですわ」

彼女は頬を紅潮させて云うと、双肌をぬぎ切腹に移った。たとえ自決する羽目になつても、腹を切る気のなかった野村だが、愛する悦子が苦痛と戦っている姿を見まもる辛さは、むしろみずから腹を切るよりも深いと見えた。

ああ、とうとう悦子は腹を切る。野村はとどめ得ない無力さに苦悩し焦燥した。一秒一秒、悦子はみずからの死への傷ましい努力を続ける。その手を動かすものは彼女のきびしい意志である。

「しっかりして」

野村が叫んだとき、悦子は「大丈夫です」とハッキリ云い、一寸、二寸と切り進んだ。六、七寸もかき切つて

「ああ、苦しい、気が遠くなりそう……」

はかない、夢のような口調で呟くと

「おねがい……」

語気が消えた。凄艶な悦子の姿に、やむなく野村は手を添えた。安心し切ったかのように悦子は体を前に倒した。切先は胸を貫ぬき息は絶えた。

おそい月が、縁に射して来た。

四

「殉国」の反響について、まず否定的な意見から引かせて頂こう。

◎まずストーリー的に云つて、現代的に育つた私に取つては、切腹と云う言葉自身反感を抱き、悦子の切腹に対して余りにも無関心すぎる野村の態度に、むしろ齒がゆさを感じるのです。野村の内面をもっと深く掘り下げて見たらもっと、ただきれいな事に終らずに済んだのではないかと思われまふ。(BG・Kさん)

◎全く特殊な素材ですね。部分的な描写は息を呑んで読みました。しかしなぜ自分の身を処するに切腹をえらばねばならなかったのかそれがどうも納得できないのです。あの時代の興奮のさめやらぬ中でしたら或は納得できたかも知れませんが。しかも愛する人の前に自らの断末魔の姿をさらす、ということとはむ

しろ悪趣味の様にさえ思われるのです。あまり印象がなまなましかった為に、大変らんなことを書きました。テーマに賛成するかどうかは別として印象にのこる作品だと思っています。

(歌人・Bさん)

上記に近い意見として、放送関係のF氏は「今更戦争ものでもあるまい」と云われ、また歌人のTさんも「ヒロインが終戦で腹切ったり、特異な作やけど、切腹とかああいうのうちは好かん、女やさかいやろけどな」ということだった。常識的にはこういう意見も多いことだろうと思われる。

◎珍しい試みと存じます。私は血を見る事が昔から大キライで、その聯想も非常にコワサを覚えて困るのですが、貴方のウマサには敬服しました。

(歌人・A氏)

◎描写がキレイ過ぎるのが気になりましたが悲愴美への追求は文芸作品として異色と言えましょう。

(作家・M氏)

◎先ず特異題材であると思います。切腹の場面が非常に鮮やかに描写され、文章もよく整っていて感心しました。只この作品の題材が殉死ということと抜かっている点、作者の殉死に対する批判の眼がもっと鋭くてもよいのではないのでしょうか。勿論作者の意図が殉死

批判にあるとは考えませんが、題材が題材だけに一番眼につくのはその辺りではないかと思っています。野村軍医がもう少し突込んで書かれてあればすぐれた効果が得られただろうと思われるのです。

(会社員・T氏)

◎死を客観的に美的なものに考えているところがモチーフに現われている。切腹自体は死の手段として用いるところに独特の面が表われていると思う。けれど死に直面した人間の心理が純粋なものと過言している様に思われ、愛している女の死を目前にしている男の表現が貧しい。

(女子大生・Kさん)

六

上記の意見に対して、肯定的な批評は、やはり古くからの拙稿を読んで戴いている方々に多かったが、中には、比較的従来の拙稿をご存知ない方々もあった。

◎全編に感動しましたが、特に悦子の切腹の情景がとても美しく、流麗さに打たれました。短編であるのに、とてもよく描写されていると思います。野村の苦悩が分るようです。

(女子大生・Fさん)

◎非常に悲愴の世界を克明に描いていると思います。むしろ描写の一部が生々しすぎて、私には少しキツかった様にも思えますが、冷

静に一言一句、まるで目前に切腹を見たかのように掘り下げた筆の運びは見事だと思っています。

(家事・Kさん)

◎野村がよく書けていて、そのため一層悦子の潔よさが出ているのでしょうか。悦子の切腹のところはさすが迫力があり、女人の切腹なんてちょっと想像も出来ないことが事実あったのですから、一人でも多くの人に知ってほしいものと思います。(歌人・Nさん)

◎女の身でありながら若くして切腹をする：この悦子という女性にはよほど剣の道に魅せられた様でございます。と云うより剣の道を学んだがゆえに切腹ということになったのでしょうか。「切腹」：今日の女性は聞いたただけでも顔をしかめるといふのに、この女性の決意の強さがひしひしと感ぜられて、読んでいるうちにその光景が目に見えてくる思いでございます。やはり自分でも白虎隊を踊るせいでしょうか。何となく胸に感ぜられるものがございました。(剣舞家・Tさん)

◎とてもすばらしかった、感動したのです。あまりに美しく清く厳しいものでしたから：苛酷な美しさ、冷厳で清浄な悲哀……切腹の場面は残酷、目を覆うばかりの無惨さではなく、読んで行く脳裏にも、それは犯すことの

出来ない美—恍惚としてただ見入るばかりの
 艶麗さなのです。そしてその厳しく崇高な美
 の下に冷やかに流れる無常の川……訴える如
 く問いかける如く、嘸り泣きの音の如く、秘

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・
 F等各種の文献、資料を御所持の方で御
 提供可能の方は御連絡願います。誌上発
 表の分につきましては、出来るだけの謝
 礼を差し上げたいと存じますので、文献
 誌としての本誌の価値を高めるためにも
 何卒新古多少に拘らず御提供願います。
 写真、絵画、文章、パンフレット、広
 告、スクラップ・ブック、チラシ等なん
 でも結構です。御希望により使用後資料
 は御返却いたします。

「奇クサロン」 原稿求む

「奇クサロン」は大変好評です。読者の
 皆さまの共通の広場として、読者通信と
 共に発展させてゆきたいと思っておりますので
 マニヤ通信、短信往来、呼びかけ、モデ
 ル通信、文通交際、写真、絵など何ん
 でも構いません。どしどしお寄せ下さるよ
 うお待ちしております。

本誌編集部

やかに流れる細い小川—手の触れるのが惜し
 いような、ふれると即座に砕けて散る珠玉の
 ように……余りにも気高い場面でした。

(女高生・Mさん)

◎自然な心の流れがあり、ことさら切腹に関
 心のない人々でも、感銘を受ける処があるだ
 ろうと思います。文学作品としては、説明で
 も情景描写だけでもない、心情の真実を感銘
 させるものがないといけない。それがこの作
 品にはあると思いました。(主婦・Mさん)

◎剣舞での姉妹編と思われませんが、本当に哀
 愁と悲愴な女性切腹の実感がよく表現されて
 います。素晴らしいと思います。

(主婦・Uさん)

◎あなたの代表作といってもいいものでしょ
 う。

(青山芳樹氏)

意外だったのは、舞台と関連を持たせた批
 評が一、二あったことである。

◎お能の舞台を見ている感じ、それも新作能
 とでも申すべきでしょうか。更に人間的体臭
 を加えられたら一そう素晴らしい作品となり
 ましょう。読者のために、背景の描写を詳し
 く書いて、場所を明確に示せば更に良かった
 と存じますが、作品の性質上フィクション以
 上に事実が生々しくなると、小説ではなく実

話になってしまいう危険もあり、むつかしい所
 だと存じます。(随筆家・S氏)

◎さすがに、息をもつかせぬ哀切物語でし
 た。だが読後に悲痛感だけがあまりにも大き
 く残って、広大な意味の浪漫の残像が、夢
 が、あまりにも微かになって、それでいい、
 とは云えない気がする。しかし力作ではあ
 る。劇化にも十分堪える作品ではある。

(歌人・N氏)

以上、モチーフへの賛否にかかわらず、寄
 せられた批評は今後この種のモチーフを扱
 うかぎり有益であり、指針となるであろう。
 比較的若い方々にも、この作品の美意識が理
 解されたのは、感動があれば思想としては旧
 くとも、世代を超越した美意識に訴えること
 が出来ると、証するかに思えた。

今年もまた八月十五日が近付く。深い虚し
 さと、純粹への回帰とが、筆者の胸奥で相剋
 する季節なのである。

自作を語るほど筆者は心おごりたくな
 い。しかし、こうした内輪ばなしも、引用し
 た諸家の感想を考え合せれば、「切腹」を精
 神文化的に考える上での、一つの示唆ともな
 るであろうかと、敢えて公開した次第であ
 る。

(39・7・22)

讃「鼻」「花」

湯 谷 照 夫

讃 「鼻」 「花」

「花を愛す」——古来戦場に明け暮れた武將達も、花を愛して心の憩いを求めた。世智智辛い現代でもアパートの窓側に、色とりどりの花を飾って、花の美を鑑賞するこの連綿と承けつがれた歴史の中に果した花の役目は計り知れないものがあつたと思われる。

花は心の憩いであり、又新しい情感を掻きたてるエネルギーを秘めている。

美しい花。それは只植物に求めるのみならず、私達人間自身の身体の中にも又それを備えている。凡ての人達が他人から区別して誇る顔の中央に、その存在を誇らしげに示している鼻は、いみじくも愛すべき花に譬えても言いすぎではなからう。

神は人間の顔だけは、衣を着せず四季を通じて露わに人前にさらけ出す運命を与えてい

る。私は万人の鼻に異常なまでの情感を以て接しているが、とりわけ女性の鼻に対してはまるで魔術をかけられたような精神の集中さで、悦楽の日々を送っている。

女性の鼻にとりつかれて、今日も、あの桜色にうっすらと染った鼻翼の柔味を追っている。そよ風にひらひらと散りゆく桜の花びらを思わす鼻翼は、私を夢の世界へと誘っている。指に触れなば程よい肉づきは絨氈のタッチを思わせ、漆黒に覗ける鼻腔のたたえる神秘さは、バラの女王を彷彿させる。

激しい情熱を内に秘めながら、ツンとすましたチューリップのような華鼻。噛みしめればジュースと新鮮な果汁をふきだしそうな豊かな鼻。知らぬ素振りの女性自身は、それと裏腹に、鼻ほど自覚している「花」はない。

鼻筋や鼻孔翼にバランスさせたメーカーキャップと髪形が、その女性の心の中を実証している。ツーンと奇麗な鼻筋に映えたアップの襟足の均衡は、何う説明したらよいであろうか。又、彼女等が鼻頭鼻翼に吹き出た汗を拭くハンカチを当てがう手さばきの美しくも慎重な運びは、どうであろう。町中での突風に舞い上った木の葉の突然のいたずら、混雑した車中で思わず受けた鼻頭の異変に、素早く陶器に触るように、鼻をかばっている瞬間の女性は、その心、全く鼻一点に集中しているのである。鏡に直面した時の女性の鼻に対する心情の神聖味。全く美しい。

男性の鼻も亦、私の関心をそそのかす。私はパイプを好むが、イギリス製のパイプのようにスッキリと鼻筋の通った襟度感あふれる鼻、フランス製パイプのように王朝風な風格に満ちたそれ、ドイツ製パイプに感じられるパリヤ氣質の親密さを示す鼻翼。プロンチャ氣質の侵し難さを一見ただよわしている鼻柱中隔。思い当るのは、只私だけではないと思う。

昔から愛でた花も、何時の頃からか、その花に人工を加えて、より鑑賞感を満し悦ぶようになったのは、各種の花展覧会で御存じの

通りであるが、これは人間の本能であり、本質であると確信を抱いている。人工によってその花の色、大きさ、形、姿を変えらるる私達は先人以来、悦び且つ自ら驚嘆しているのである。人工を加えられて美しさを示す花には、人工の苛酷さの過程が窺える。あるがままを歪められて、今ここに全身を晒している花に接して私は、花の心に抱蔵している美が自分の心の中に甦って、花のマゾ美と己のサド感に酔ってしまいそうである。

私は昨年の初め以来、この華鼻に生気を呼び起していたが、私の鼻を苛めつける一人の女性里子だけでは耐えられず、自らの手で鼻苛めを楽しみ、自ら慰めねば昼も夜も身を持ち続けられない。露出せざるを得ない運命を持った人間の鼻は、私の性癖にとっては一つの救いである。日々接する多くの人々の鼻。美しい鼻の彼女と面して憧れれば、彼女は敏感に応じて誇りの花——鼻筋をして鼻腔を私の眼の前に突きつけて自らも満足の心境である。これを観察し、

その美しさにうっとりとしている私の心の一隅に、この美鼻に人工を加えて苛めみたい幻想にかられる。

加工鼻——加工美の色と形が様々に浮かび、時の過ぎるのも忘れて、何時とはなく対面していた彼女の姿が眼前から消えても、私の網膜には、彼女の鼻の印象

が焼きつけられたままである。砂の中に引きづり込まれる様に、身も心も投げ出して、いつしか倒錯の世界に没入して自分独りの暗黒の中に浮き沈みしながら、激しい衝動に迫られて我を忘れて強く弱く、或は執念深く、自分で自分の鼻を苛むことから脱しきれない。

新しい花を求めて、さ迷いながら孤独な悦楽の泉から泉へと時をつないでゆく自分の姿——それも又、人工的に加工を加えられた人間の姿として、自分を第三者的に見返えすと一種の造られた花——被苛虐の花として鑑賞に値する気がしてくる。自らを加虐してそれを見下すという自慰行為の対象点として、この誇らしげな己の鼻を痛め恥かしめる時の連続は、読者の共感を呼び起すことと思う。執務中のこの行為や、不意に獲えた群衆の中の美鼻に、己を見失って誘い込まれる衝動的な自らの鼻攻め、これ等が周囲の人々の眼に止っている程のこともあり、又自分だけがひそかに感情を昂ぶらせていることであろう。奇クの毎号発行日から発行日の間をつなぐ、私生活の大方の時が、この鼻責行為であることに自ら陶醉したまま丸一年を過してきたのである。私は幸福といえないであろうか、しかし、私は満足している。



美しい鼻、華やかな花に満ちた花園に、たわむれている二人の女性と、一人の男との不思議にも奇妙な世界が実在することを告白して皆様の共感を求めたい。女性の一人は黒バラの様な冷厳さをたたえて鼻筋鮮やかな美鼻を突きつけて私を苛なむ里子であり、もう一人の女性とは、桜の花卉を張ったような粘膜に纖毛が露をふくみ、被虐待望表情の鼻中隔の妖美な子である。私は的子の鼻をあらゆる方法で痛め苛み、その激情を抱いて倒錯の

世界に自らを没入して里子の顔下で、彼女の美鼻に憶れながら自らの鼻を献じて、飽くことなく痛めつけられる。——悦楽に耽溺する一人の男である。

鼻苛めに魅せられ、里子と的子に彩られた世界に迷夢しながら、これからの私は益々深淵に引きづりこまれそうだ。そこに何の不安も抱かない。何となれば、奇ク誌が毎月毎月私を力づけ励ましてくれるではないか。

眼前が走馬灯の様に回転しはじめ、筆先が

ふるえて身体中おこりのように昂ってきた。この告白文も文意不明のそしりを受けると思う。狂人の告白という題名が適当かもしれない。狂人の文章として読み返えし判読願えれば訴えている意味に、必ずや読者諸兄姉の共感を得ると信じている。何故ならば、鼻に就いて一般の人々が潜在的に抱いている生感の最大公約数を、単的に告白したに過ぎないからである。皆様の御批判をお待ちする。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

「モデル」 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございました。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体

緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえないわぬ稀少な文献となっています。皆様のご熱心な要望によりまして、ここ

に限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんでした。直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思います。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを製作いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用する

ためにも、写真面を大きくしました。
加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) V

(一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
(二)、グラマーの縄目……………長野 良子
むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
(三)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
(四)、鼻をいためつける……………長野 良子
指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
(五)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
(六)、黒と白の対照……………大塚 啓子
白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
(七)、責めに疲れて……………大塚 啓子
責め抜かれてぐったりとなった女体。
(八)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
(九)、襲いくる魔手……………新井マリ子
恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。
(一〇)、首締め縛り……………新井マリ子
のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態。
(一一)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
開股しばりの上に非情の猿ぐつわが……………

(一二)、開股棒しばり……………新井マリ子
革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
(一三)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
(一四)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
責められて急所の痛さに思わず呻めく。
(一五)、首縄と足縄……………大塚 啓子
首に掛った縄と足の縄が女体を変えろ。
(一六)、縄に狂う……………大塚 啓子
悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
(一七)、足首の縄目……………大塚 啓子
反りかえった足の指が縄目に可愛い。
(一八)、縄による姿態の変転……………大塚 啓子
二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
(一九)、緊縛美の誇示……………長野 良子
誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
(二〇)、美しき肢足……………長野 良子
投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
(二一)、全裸緊縛の羞らい……………長野 良子
はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
(二二)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
両手両足を縛られて一本棒に晒られる。
(二三)、けがされぬもの……………五月亜紀子
清純な美しさが、この全身に漂っている。
(二四)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締めろ。
(二五)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
(二六)、噛まされた猿轡……………大塚 啓子
珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
(二七)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。
(二八)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
縛りに変化をつけられた女体はどこへ……………

(二九)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
(三〇)、棒責めの序曲……………新井マリ子
両足首の両端に縛られて、さて、
(三一)、答打ちのポーズ……………新井マリ子
さあ、打って、とながし目の艶なこと。
(三二)、素晴しき美身……………長野 良子
輝くような美しい裸身もあらわに。
(三三)、ポリウムを縛る……………長野 良子
縄をはねかえす素晴しい女体の重量感。
(三四)、むくれた双丘……………長野 良子
情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
(三五)、開股しばりの表情……………大塚 啓子
開股しばりになった女の顔のアップ。
(三六)、開股しばりの全貌……………大塚 啓子
両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
(三七)、伸ばされた足の表情……………大塚 啓子
びんと一直線に伸ばして縛られた脚。
(三八)、開股ざらしの表情……………大塚 啓子
放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
(三九)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
押し入った強盗は女を縛って転した。
(四〇)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
(四一)、炊事場の嗜虐場面……………新井マリ子
台所で縛られていたぶられるシーン。
(四二)、美しきトルソ……………大塚 啓子
胸、臍、ウェストが縄によって捕捉。
(四三)、逞ましき臀部……………大塚 啓子
くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
(四四)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
後手高小手の美しさは素晴しい。
(四五)、ビニール・コード……………大塚 啓子
柔肌を喰いちぎるようにくびるコード……………

正常と異常との接点

佐 仲 晴 成

一、ある職場の会話の中から

私はサディストである。といっても、それを自分の心の中で認めるにはやぶさかでないが、公言するとなるといささか躊躇する。私はかつて職場の若く美しい同僚達にかこまれて話はずんでいた時、

「僕もいわゆるサディストと称される人種の一人やで——」

とうかつにもつい口をすべらしたことがある。その時おそいかかってきたケンケンゴウゴウたる非難と攻撃は、口にした本人の私をウロウロさせるに充分なものがあつた。

「いやあ、佐仲さんて顔に似あわない変態やわあ」

「どうりで目がきつい思うたわ、そういうたらドラキュラの目やわ」

「サディストやなんて、Hの中でも最低やわなあ」

とか、これなどはまだおとなしいほうで、きびしいのになると

「そや、そや、最近東淀川でよう痴漢が出るて新聞に載っていたけど、犯人は身近に有りやわなあ」

とか、いやはや、さんざんな目にあつたものである。

そこで、世のサディストを代表して一席ぶってやろうかと、一寸思つてはみたけど、一時は私に口を開かせないほど、可愛い多くの唇から飛び出す攻撃はきびしかったし、それに、

「佐仲さんて、偽善者やから、口で言うほどでないで、女に甘い甘いくせに、よう言うてるわ」

という結論に落ち着いてきたので、ここで妙な屁理屈をふりまわして、せっかく得ている信用を崩すこともないだろうという打算から、あえて口を閉じ、ニヤニヤと笑つていたものである。私は、いつも不思議に思つてい

るのだけど、職場での私に対する女性の信用ぶりは、本人の私が解せないほどのものがある。多分、甘い甘い私の性格と徹底したフェミニストぶりが、その信用を培ってきたのかも知れない。

と書くと、卑怯なやつ鼻もちならぬやつだと諸氏のお叱りをたまわるかも知れないが、若し諸氏が私と同じ立場にあったら、やはり諸氏も、若く美しい女性に嫌われたくないという男性的本能の作用から、口を閉じ、ニヤニヤと笑ってごまかしてしまうに違いないだろうことを想いお許し願いたい。

それにしても、サディストが人間並の顔をしてはいけないという理屈はないし、いわんや、サディストすなはち変態であり、痴漢であるとする飛躍は困ったものである。

サディズムについて、世間一般では、いったいどのように理解しているのだろうか。

一、辞書の表現の中から

試みに、手元にある辞書を繙いてみよう。

サジズム

色欲異常の一種で、男子、殊に変質的の男子に多い。相手に残酷なことをし、その苦しむのをみて、性欲の満足を覚えるのである。

相手を殴ったり、噛んだり、ひっかいたり、

時には刃物で傷つけることもある。単にこういう行為だけで射精することもあり、交接中にこれを行なう者もある。この症状の激しい者は、相手を虐待し、遂に死に至らしめることがある。或いは、好んで交接中に絞め殺したり、殺害した後に姦淫する者がある。これを殺人淫乱症 *Just murder* という。或いは街上で婦人の頭髮を切取ったり、ナイフで臀部を刺したり、顔面に硫酸をふりかけたりする者がある。時には、婦人に精液、大便、尿をふりかけて喜ぶ者もある。サジズムなる名称は、フランスのサード侯爵 *marquis de Sade* がこの症状を有していたことから由来し、精神病学者クラフト・エービング *Krafft-Ebing* により命名されたものである。(児玉)

平凡社出版「大百科事典」

とある。この表現などは、まだ事例に重きをおいたおとなしいほうで、新村出編「広辞苑」には、次のように解説している。

サディズム

(フランスの貴族サードの叙述に基づく) 相手を虐げて満足を得る変態性欲。色情加害狂。虐待淫乱症。クラフト・エービングの命名
↑↓マソヒズム

色情加害狂。虐待淫乱症とは、ずいぶんひ

どい言いかたである。まるで、サディストとは狂人か淫乱かのいずれかに属するような書きかたではないか。これでは職場の愛すべき美しい同僚達のケンケンゴウゴウもむべなるかなと思わざるを得ない。我々でも、ともすれば辞書は正しいという先入観があるため、勤務先での会議でも、又重要文書作成の折にも、表現上の疑義は、すべて辞書の解説に従う習慣が身についている。しかし、私は、このサディズムの解説を読んだ現在、辞書に対する信頼の念が一度に吹き飛んだ思いである。何と一方的な、偏見丸出しの解説であるうか。本来、辞書は語意を正確に伝え、純客観的立場から解説を加え、利用する者の便に役立つ義務を負いながら、「広辞苑」の如きは、色情加害狂、虐待淫乱症の二語をもってサディズムを説明しているなど編者の頭の程度を疑いたくなる。なるほど、色情加害狂も虐待淫乱症もともにサディズムの一分野には含まれるだろう。しかし、それは、あくまでも一分野に過ぎない。その一端をもって全般を律しようとする偏見ぶりにはまったく恐れ入る。

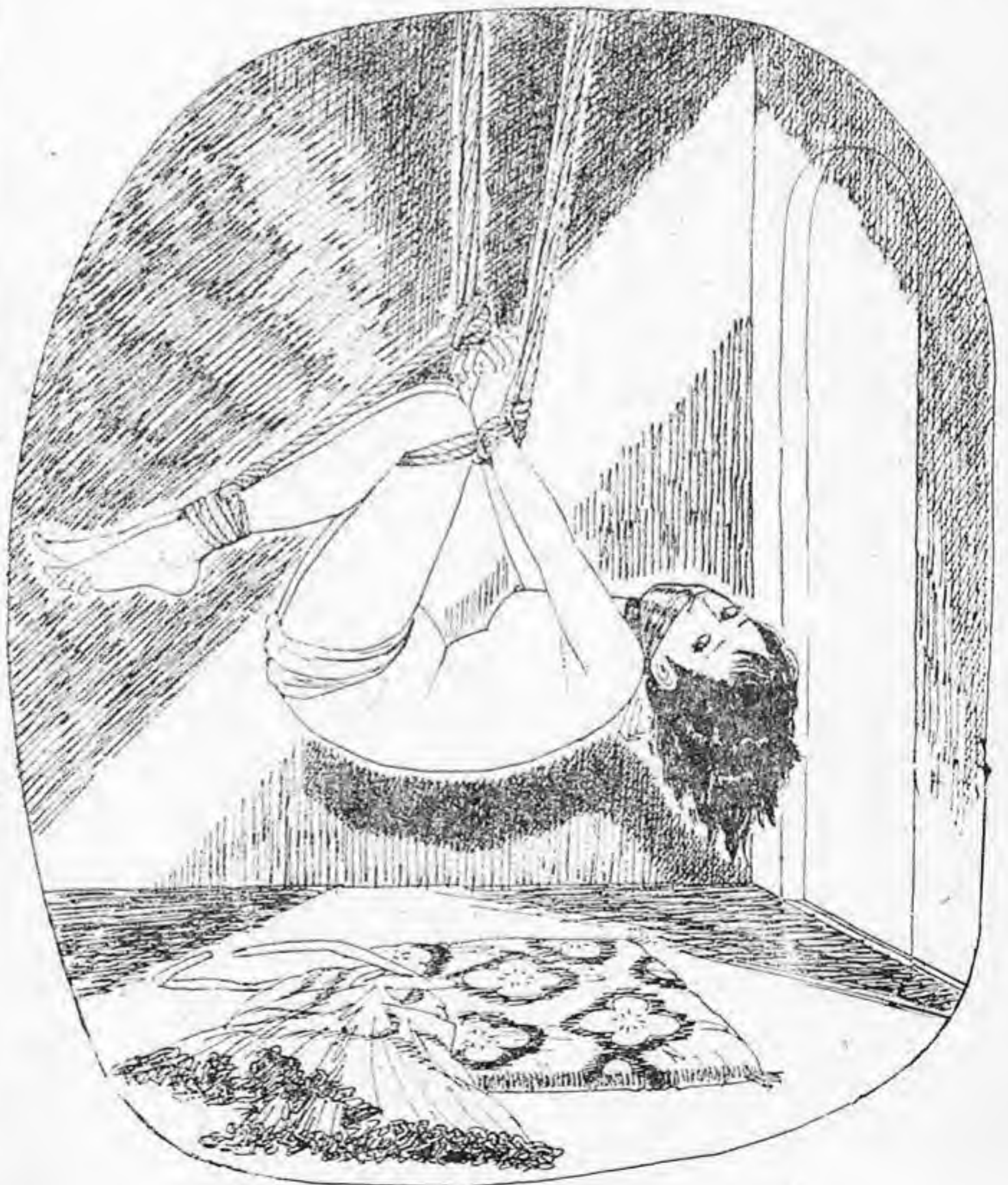
三、心理学の立場から

正常とは何か、異常とは何か、精神における健康と病気をわけける規準はどこにあるか、ということとは、今日までも多くの学者に論じられてきた。その規準の設定は、異常心理学精神医学のとり組む最初の課題であり、終局の目的であるから、長い年月の間に多くの学者が数えきれないほどの学説を樹ててきた。しかし、未だに、その明確な解答は示されていない。

多くの学説の中から類系をまとめ、私なりに大ざっぱに分類してみたところ、だいたい次の三説に整理出来るように思われる。

(イ) 統計による算数平均から判断する規準

一般に、社会の人々が正常か異常かを論じる場合、数の上での平均により判断していることが多い。すなわち、多くの人が正しいと考えることは正常であり、多くの人が正しくないと思うことは異常であるとする。現代の民主主義の根本理念である多数決の考えはこの算数的平均規準から出発している。平均によることは簡単であり、しかも非常に便利である。平均に近い者や近い状態は正常であり、これから離れた者は異常であるとすれば



正常か異常かは、その考え方のデーターを電子計算機にかければ、わずか数秒で答を出してくれるだろう。すなわち、平均概念に従って社会の平均的行動をとり、社会の習慣に従

って生活するのを正常といい、これから離れるのを異常と認めるのである。

(ロ) 行動様式による生理上の自然さから判断する規準

生物学上から、人間という動物はそのようなものであるから、それが人間という動物の生理上からみて自然なら正常であり、それに反すれば異常とみとめる。生理学的に自然なものは環境適応に好都合だから当然正常な価値を持つと考える。例えば、人間の体は頭を上、足を下にして歩くような構造になっているから頭を上、足を下にして歩こうとするのが正常であり、頭を下にし足を上にして歩こうと考へたり試みたりすることは異常であるとする。又毒性のもの（例えばガス等）を吸えば生理上の変調をきたし、或いは生命のストップさえ予想されるだろうことが明らかであるから、それを敢えて侵そうとすること（例えばガス自殺等）は異常行為であると考へる。

(イ) 思想行動が対社会的適応性をもつかどうかから判断する規準

その属する社会の流れに協調し順応出来ることが正常である。すなはち、社会的に非協力であったり、反抗的であったりするのは異常であり、その者は、常に社会的軌道から脱線し軌道上を正常に走っている周囲多数の者と衝突して平安を乱す傾向を持っている。そうしてこういう安定を欠き易い感情、いつ

爆発するかも知れぬ衝動などは、対社会的適応を欠き常に反社会的方向に働こうとするものである。故に正常か異常かの判断は、その思想行動が対社会的適応性をもつかどうかを規準とすることが出来ると考へる。

四、私の反論

前述のうち、第二項の辞書の表現については、余りにも一方的、狹視的偏見であるため反論の価値はないと考へるので、第三項の心理学の立場からの各学説に対する反論を試みてみよう。

(イ) 統計による算数的平均から判断する規準に対する反論

正常すなはち平均的異常すなはち非平均的と定義すれば、なるほど簡単で便利だろう。しかし、よく考へてみよう。国会における多数決、組合中央委員会における多数決、これらはたして正義であると、誰が断定出来るだろう。何十年、何百年の未来に、歴史の反省が、当時の少数意見の正義を認めないとは誰が断言出来るだろうか。

最近のティーン・エージャー間におけるビートルズに対する人気は目をみはるものがある。ヨーロッパ各地におけるビートルズ騒ぎ

は、その姿を寸見したいというだけの理由で集まった数十万の若者達の人波のために重傷者が続出している有様である。ヨーロッパでビートルズを否定ないしは批判する者は現代の若者としての資格がないとさえ云われている。私はビートルズ自体、現物を見たことがないので、その批判は出来かねるが、このブームも恐らく近い将来には下火になり、そして、今までの多くの芸能関係のブームがそうであったように数年後には完全に消え去り、人々の想い出の中でさえ語られることもないようになるのではないだろうか。ビートルズに明けビートルズに暮れている現在のヨーロッパの若者達の中に無関心なものが居たとすると、その若者を平均からはみだしているから、異常であるときめつけていいものだろうか。私には世の風潮に無関心な若者の心にこそ健康を感じ将来を期待出来るような気がしてならないのだが……。

私の職場には、あきれるほど野球狂が集っている。毎週、土曜日には部長以下三十数人がそろってナイター見物に行くし、日本シリーズや高校選抜などがあるときは、仕事を放棄してテレビの前にむらがるのは、今や部長公認となっている。悪いことに私は根っから

の野球嫌いなのである。こと話が野球に及ぶと私は完全に継子であり異端者なのである。

といっても、私は決してスポーツが嫌いなのではない。若い時には、西日本空手道選手権大会に参加したこともあるし、現在では、テニスの職域対抗戦では職場の代表として出場している。しかるに職場の仲間達は私をスポーツマンとは認めないのである。彼等に言わせるとスポーツすなはち野球のことであり、スポーツマンたる資格は、グローブを或いはバットを持つ人へのみ許されるもののようなのである。例えそれが見るに耐えないような下手くそな連中でも、又直接グローブをはめなくてもナイターのベンチに座りスカタンな評論の仲間に加われるのならスポーツ愛好者として認められる。私のように野球に無関心なものは、いくら空手とかテニスとかの分野で社会人大会という公式の場での経験を持ってもスポーツマンとはお認めいただけない。これは職場の外での話であるが、ある日私が近所のめし屋で夕食をとっていたときのことである。その親父がボクシングが好きとみえて、ボクシングがある日はたいいチャンネルをその番組に合わしている。個人競技に興味を持つ私はボクシングも嫌いではない。

私はチョンガーであるため、たいい夕食は外ですますことにしているが、夕食をパクつきながらのテレビ番組にはボクシングなどはちょうど手ごろである。ボクシングには空手と相通じるものがあるし、何よりも個人と個人が対決し、一方の個性が他方の個性を破るという個人競技の魅力は、ともすると責任を他に転嫁しがちな団体競技では持ち得ない強烈さを持っている。この日もめし屋の親父と私がかぶりつくようにテレビにかじりついていたのであるが、その時、四、五人の威勢のいい若い衆がドヤドヤと入って来て、そのうちの一人が、やにわにチャンネルをガチャガチャと切り替えてしまった。そこでは野球をやっていた。

「何をしまんねんな」

と親父がとがめると

「オッさん、今、日本シリーズをやってるねんで」

「何言うてまんねん、わてだけが見ていたのなら、そらお客さんが優先やさかいよろしいで、そやけど、この大将かて、ボクシング楽しんでますんやで」

「オッさんこそ何言うてるねん、この大将かて、今日、日本シリーズやってることを知り

はらなんだんとちがうか。だからボクシングみたいなもん見てはったんや思うわ、そうやなあ大将」

と私に同意を強要するので、いささか、むっとした私は

「そや、わいは野球に関心ないよってな」

と皮肉まじりに答えたところ、他の一人が「へえ、野球が嫌いだよ、スポーツに理解のないやつは困るなあ」

と聞こえよがしに言ったものである。この連中もスポーツすなはち野球のことであり、ボクシングはスポーツとは認めていないのである。私は、この種の発言には職場でなれていたので「またか」と苦笑せざるを得なかった。スポーツすなわち野球以外の何物でもないとする偏見は、サディストすなはち変態とする偏見と心の底辺でつながっていないだろうか。私は、一度職場の連中はじめ野球ファンのかたがたにお聞きしたいと思っている。オリンピックには、いまだかつて、一度も野球が競技種目に加えられたことがないが、ではオリンピックはスポーツの祭典ではないのだろうか。むしろ、野球がこのように大衆スポーツとしての価値を認められているのは、日本とアメリカの二カ国だけではないだろう

か。他の数十の国々では野球をこれほどまでに高く評価してはいないのではないだろうか。否、スポーツとして認めていない国が大半なのではないだろうか。日本では、スポーツの代名詞は野球といっても過言ではないほどスポーツの分野でのさばっているが、野球の価値を余り認めていないヨーロッパの数多い国々でスポーツすなはち野球であると言ったら、その偏見さを嘲笑されるのが落ちであろう。とすると、日本での常識は他の国での非常識である場合もあるのである。私が野球に無関心な理由は、それがショウ的要素を多分に含んでいる団体競技であることに對する嫌悪もあるが、それと同時に、貴重な時間をつぶしてナイター見物に行ったり、テレビをぼんやり見ていたりする気になれないからでもある。第一、私にはそんな時間の余裕などはない。そんな時間が持てる位なら自分の健康のために好きなテニスをやりたいし、まだまだ読みたい本だって無限にあるし、時にはアルサロやバーの美しい女性に御無理をお願いして、緊縛ヌードに御協力いただいたりする。とにかく私は私なりに多忙を極めているため野球にまで心がいたらないのであるが、私がスポーツマンを自認していながら野球に

は無関心であるということは現在の日本の社会平均からはずれているに違いないだろう。だからといって、多数の者と同じ行動同じ考えを持ち得ないという理由だけで異端ないしは異常ときめつけるのはどうであろうか。

(四) 行動様式による生理学上の自然さから判断する規準に對する反論

人間の生理学的立場から自然な行為は正常であり、不自然な行為は異常であるという考えも論理的には成立するだろう。しかし、これも具体例で考えると必ずしも正しいとは断言出来かねるものがある。例えば、私は煙草を吸わない。ガキの頃から生意気であつた私は中学二年の頃から、スパspaと一人前に煙をはいていたものである。それは決して煙草をうまいと思つたからではなく、現代流に言えば、エエカッコをしていると思つたからである。そのエエカッコは高校二年まで、四年間にわたつて続けられたが、一向にうまいという実感を伴なわない。それよりキャラメルでもしゃぶっているほうがよっぽどうまいのである。エエカッコだけのために金を煙に流して体内にニコチンを送ることが馬鹿々々しくなつてきたので、高校二年の時体育の教師に見つかつて謹慎をくつたのを機会にすっぱり

とやめてしまった。三十一歳になつた現在でも友人がスパspaとうまそうに吸っているのを見てみると、本当にうまいのだろうか、エエカッコの延長に過ぎないのではないだろうか。と時々疑問に思うことがある。ところが、私が煙草を吸わないと云うと皆は「三十一にもなつて變つてゐるなあ」と感心している。

三十一にもなつて男が煙草を吸わないということは、平均概念からすると變つてゐる(異常)のである。ところが、人体生理上からいくと百害あつて一利もない煙草などを吸うほうが不自然であり異常であらう。肺癌の恐れさえあるという生命を縮める作用をもつ毒物を好んで体内に送らうとする考えこそ異常といわず何を異常というのだろうか。しかるに社会通念では、これを異常とは認めないのである。

又、生理上自然な行為といへば例えば心に怒りを感じた時には、相手に攻撃を加えるのが自然な行動だろう。しかし、今日の社会では、余りにも斗争的な言動は異常と認められるだろう。と考へてくると、正常か異常かの判断の規準を行動様式による生理学上の自然さに求めるのは危険であらう。

(イ) 思想行動が對社会的適應性をもつかどう

かから判断する規準に対する反論

思想行動が社会環境に適應性をもつかどうかで正常か異常かを判断する規準としようとする考え方は、前述の(イ)および(ロ)の考え方に比べると考え方に進歩が認められる。しかし社会環境に対する適應性の価値となると、いささか疑問が残る。日進月歩或いは後退迂回曲折を目まぐるましくくり返している社会背景の中での適應性は複雑でつかみがたい。当年三十一になる私は、戦時戦後、そして現代と三つの大きな時代の流れをみてきた。戦時中は国家の利益が国民の生命に優先することが当然であり、それに対する疑惑など持ち得べくもなかった。仮に秘かに抱く人がいたとしても、めったに口外はしなかったし、社会は忠君愛国という軌道を歩くことが正常な姿であるとされていた。たまたま個人としての自覚を持つ者があれば、異端者とされ、社会から迫害され追放された。それが終戦と同時に個人の権利と自由が強調され、国家は個人の利益の拡大、福祉の浸透を計り、それらが一部の権威や力によって不当な圧迫を受けることのないよう監視し調整する機関と代った。昨日までは国民の九九パーセントが愛国者であったはずのものが今日はそのほとんど

が社会主義者と変身し、天皇のために死地をもうとわなないはずの者が赤旗の下で天皇制の不当をガナリたてることが出来る。そしてこれらの変身が本人の心の中でも何の矛盾もなくいとも容易に行なわれたのである。まれに愛国心のカケラが残っている者がいたとすれば、それらの人々は社会の異端者とされた。そして今日、再び愛国心の必要が世論を支配し出している。世の中の常識とか、正常とか

異端とかいう考えはかくも頼りなく、不安定な浮動性を本質に内蔵している。一般に、いわゆる常識人或いは知識人と称するやからは常に世の風潮に追従する彼等の弱い不定見な脳味噌の中で「共感」ないしは「追感」或いは「了解」が出来ない事項にぶつかったとき、すぐに、これを異常ときめつけたがるものである。常識とは不安定、不定見な日和見主義を意味してはいないだろうか。

亦、歴史を繙いてみても、社会改革を指導してきた偉大な革命家達は、当時の社会背景の中では社会的適應性をいちじるしく欠いていた。むしろ、彼等が当時の社会組織に対して反抗し、攻撃したからこそ、社会の新しい進展が生れたのである。

右の理論の展開から、思想行動が対社会的

適應性をもつかどうかだけでは正常か異常かの判断の規準とはなり得ないことが明らかである。

五、私の解答案

何をもって正常というか、何をもって異常とするか、その接する点は、きわめて微妙なものであり、その焦点は非常にぼけている。それに対し、定義を設定し、判断の規準を制定しようとすることに無理があるのかも知れない。といっても、異常者を社会に放置すれば、異常者特有の強い個性と自我を表出し、正常者を追放し、傍若無人な暴挙が世の中を支配し、社会は混乱と狂気の巷と化するだろう。例えば、第二次大戦中におけるヒットラーの如く、スターリンの如く、ヤンキーの如く、異常なる者が正常なる者を罰し暴逆の限りをつくした事実と恐怖を想い起してほしい。この混乱と狂気を未然に防ぐためにも、少しでも早く明確な定義と規準を設定し、異常者に対処する方策を国際的規模において講じなければならぬと考える。

私は、正常と異常との判別の規準を次のように定めたい。

「自分および自分の属する社会に害を与える

行為はすべて異常であり、それ以外の行為はすべて正常である。”

例えば、サディズムを例にとると、それが互いの了承の上でなされ、自分およびその対象に精神的にも肉体的にも害を与えることなく、しかも社会に迷惑を及ぼさない範囲での行為であれば、これは正常と断定出来る。その反対に自分の心や体に消え難い傷を残

す行為、又は相手の了承を得ない一方的な行為、ないしは相手の了承を得ても、その了承の範囲を超える行為、或いは相手の了承の範囲でも相手の心か体に消え難い傷を残す行為さらに自分とその対象に害を与えなくても社会に迷惑をおよぼす行為はすべて異常であるか異常の可能性があるととして精神病理の立場から治療を強制的に受けさせるよう法制化する必要がある。

以上で私の愚論を終わりますが、表現の拙劣や例示の不適当から生ずる疑問や、内容に対する反論等があれば、本誌編集部のお許しを得られる範囲で御返事をさし上げたいと思っています。

×

×

×

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13種)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め (竹野)
B 6	おへソいじめ大写真 (関谷)
B 7	剃いだバタフライ (関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身 (大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)
B 10	無防備双手吊り (絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り (水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛り (水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り (関谷)
B 14	足踏付け二つ折り (大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち (関谷)
B 16	手錠にもだえる (竹野)

B 17	尻突出てエビ責め (水本)
B 18	椅子開股鼻責触手 (梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡 (竹野)
B 20	投げ出した全裸 (関谷)
B 21	美しき尻部の露出 (絹川)
B 22	猿ぐつわ悦虐境 (竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美 (竹野)
B 24	強制鼻挟水吞ませ (梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身 (関谷)
B 26	責めに気を失って (関谷)
B 27	さアどうでもして (関谷)
B 28	豊満乳房膨隆縛り (竹野)
B 29	投げだされた女体 (竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄 (梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地 (東浦)

B 34	すべてをさらけて (関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 36	クリップ鼻挟み (絹川)
B 37	台上のマゾポーズ (大塚)
B 38	吊られゆく美体 (絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 40	マゾ女性の表情美 (東浦)
B 41	喰い込む股間縄 (絹川)
B 42	灸責めに悶える (梨花)
B 43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 46	手枷足枷大写真 (四方)
B 47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B 50	女囚菱縄さらし (絹川)

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード

大手札二枚一組 略号「りく」
安原さゆり 三〇〇円

臨月腹アップ

大手札二枚一組 略号「りと」
安原さゆり 三〇〇円

臨月妊婦の全身

大手札二枚一組 略号「りせ」
安原さゆり 三〇〇円

臨月腹の側面

大手札三枚一組 略号「りそ」
安原さゆり 四〇〇円

臨月腹の背面

大手札二枚一組 略号「りも」
安原さゆり 三〇〇円

臨月垂れ腹

大手札三枚一組 略号「りみ」
安原さゆり 四〇〇円

妊婦ヌード

大手札三枚一組 略号「やま」
安原さゆり 三〇〇円

妊婦しぼり

大手札三枚一組 略号「やむ」
安原さゆり 三〇〇円

臨月妊婦三態

大手札三枚一組 略号「よむ」
安原さゆり 三〇〇円

産み月のお腹

大手札三枚一組 略号「よま」
安原さゆり 三〇〇円

動物的な腹部

大手札三枚一組 略号「よま」
安原さゆり 三〇〇円安原さゆり 略号「よみ」
妊婦の股間縛り 大手札三枚一組 略号「よみ」
児玉 昌子 四〇〇円

妊婦八カ月の緊縛

大手札三枚一組 略号「には」
児玉 昌子 四〇〇円

妊娠五カ月の緊縛

大手札三枚一組 略号「にあ」
児玉 昌子 四〇〇円

妊娠前裸縛り

大手札三枚一組 略号「にこ」
児玉 昌子 三〇〇円

妊娠初期の緊縛

大手札三枚一組 略号「まさ」
児玉 昌子 三〇〇円

妊婦の股間縛り

大手札三枚一組 略号「ぬろ」
児玉 昌子 三〇〇円

妊婦の股間縛り

大手札三枚一組 略号「にふ」
児玉 昌子 四〇〇円

分娩後縛り

大手札三枚一組 略号「にと」
児玉 昌子 三〇〇円

分娩後股間縛り

大手札三枚一組 略号「につ」
児玉 昌子 三〇〇円

分娩後股間縛り

大手札三枚一組 略号「にて」
児玉 昌子 三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

全裸緊縛姿態

大手札四枚一組 略号「ゆり」
遠藤百合子 四〇〇円

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号「ゆは」
遠藤百合子 三〇〇円

鼻の穴責め

大手札三枚一組 略号「なく」
大塚 啓子 三〇〇円

鼻なぶり

大手札三枚一組 略号「ない」
大塚 啓子 三〇〇円

鼻責めの陶酔

大手札三枚一組 略号「なは」
大塚 啓子 三〇〇円

苦悶の裸身

大手札四枚一組 略号「くせ」
関谷富佐子 四〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号「わあ」
関谷富佐子 三〇〇円

全裸股間縛り

大手札四枚一組 略号「せら」
関谷富佐子 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号「えり」
大塚 啓子 三〇〇円

蒲団に悶ゆ

大手札三枚一組 略号「なき」
関谷富佐子 三〇〇円

悦虐の果て

大手札三枚一組 略号「なみ」
関谷富佐子 三〇〇円

椅子エビ責め

大手札三枚一組 略号「おき」
東浦ひかる 三〇〇円

六尺縛り

大手札三枚一組 略号「ろは」
東浦ひかる 三〇〇円

弓吊り責め

大手札二枚一組 略号「つき」
梨花悠紀子 二五〇円

手足宙吊り

大手札三枚一組 略号「つた」
梨花悠紀子 三〇〇円

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 略号「むく」
東浦ひかる 四〇〇円

強烈責め、被虐の果

大手札五枚一組 略号「りお」
梨花悠紀子 五〇〇円

乳房いじめ

大手札二枚一組 略号「とお」
大塚 啓子 二五〇円

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 略号「きえ」
大塚 啓子 四〇〇円

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 略号「きん」
絹川 文代 三〇〇円

腰元吊り責め

大手札二枚一組 略号「こり」
村井知可子 二五〇円

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 略号「こく」
村井知可子 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号「もい」
関谷富佐子 三〇〇円

乳房責めの苦悶

大手札二枚一組 略号「もろ」
関谷富佐子 二〇〇円

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号「もた」
関谷富佐子 四〇〇円

強打に泣く裸身

大手札四枚一組 略号「むち」
関谷富佐子 四〇〇円

<p>踊り子 緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川 文代 略号「りこ」</p>	<p>股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川 文代 略号「ぬこ」</p>	<p>吊り打ち 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子 略号「やり」</p>	<p>足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる 略号「うる」</p>	<p>二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる 略号「うら」</p>	<p>後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 関谷富佐子 略号「せや」</p>	<p>夫人の表情 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はん」</p>	<p>バンド責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はこ」</p>	<p>バンド開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本 茂美 略号「みす」</p>	<p>ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本 茂美 略号「えひ」</p>	<p>強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 愛川 悦子 略号「ねい」</p>	<p>狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」 愛川 悦子 略号「ねい」</p>
<p>六尺 緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子 略号「ふは」</p>	<p>変形六尺 緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子 略号「ふい」</p>	<p>相撲陣を締め込む 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子 略号「すい」</p>	<p>黒 禪の女 (背面) 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「くま」</p>	<p>黒 禪の女 (正面) 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「しろ」</p>	<p>白晒 六尺 禪 (背面) 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子 略号「しは」</p>	<p>白晒 六尺 禪 (正面) 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子 略号「しろ」</p>	<p>○フエチ資料の部 ○</p>	<p>緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「むら」</p>	<p>足挙開股責 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子 略号「あけ」</p>	<p>猪 吊り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子 略号「いの」</p>	<p>責め衣 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 大塚 啓子 略号「せめ」</p>
<p>六尺 フンドシ 大手札五枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「ろい」</p>	<p>六尺 禪の女性像 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 関谷富佐子 略号「くろ」</p>	<p>レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「いろ」</p>	<p>ゴムフエチ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 梨花悠紀子 略号「こま」</p>	<p>バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「ゆお」</p>	<p>月経帯縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子 略号「ゆす」</p>	<p>相撲陣着用 大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」 大塚 啓子 略号「すま」</p>	<p>股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「とし」</p>	<p>股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「とひ」</p>	<p>バンド晒し 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はと」</p>	<p>バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はそ」</p>	<p>バンド見せ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「はぬ」</p>
<p>白 フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「ふん」</p>	<p>黒 フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚 啓子 略号「くふ」</p>	<p>ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「こみ」</p>	<p>ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「こは」</p>	<p>ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる 略号「こあ」</p>	<p>パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おい」</p>	<p>パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おは」</p>	<p>携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おか」</p>	<p>サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おた」</p>	<p>パリスSSバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おこ」</p>	<p>パピアバンド 大型替ゴム 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おし」</p>	<p>サカエバンド 百合 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる 略号「おえ」</p>

壳切号続出、在庫僅少、乞至急御申込

○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。昭和29年から30年頃の雑誌の有無につき、よくご照会があります。在庫はございません。

○限定版特別号の第一弾から第四

◎39年5月号誌上に(39年1月号

在庫品及び定価

昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年新年号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号	昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号
(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(売切)	(定価一五〇円)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価一五〇円)	(売切)	(定価一五〇円)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価三〇〇円)	(売切)	(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)

昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年9月号	(売切)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(売切)
昭和37年12月号	(売切)
昭和38年新年号	(売切)
昭和38年2月号	(売切)
昭和38年3月号	(売切)
昭和38年4月号	(売切)
昭和38年5月号	(売切)
昭和38年6月号	(定価二〇〇円)
昭和38年7月号	(売切)
昭和38年8月号	(売切)
昭和38年9月号	(定価二〇〇円)
昭和38年10月号	(定価二〇〇円)
昭和38年11月号	(定価二五〇円)
昭和38年12月号	(定価二五〇円)
昭和39年1月号	(定価二五〇円)
昭和39年2月号	(定価二五〇円)
昭和39年3月号	(定価二五〇円)
昭和39年4月号	(定価二五〇円)
昭和39年5月号	(定価二五〇円)
昭和39年6月号	(定価二五〇円)
昭和39年7月号	(定価三〇〇円)
昭和39年8月号	(定価三〇〇円)
昭和39年9月号	(定価三〇〇円)
悦特第一集	(定価三〇〇円)
悦特第二集	(定価三〇〇円)
悦特第三集	(定価三〇〇円)
悦特第四集	(定価三〇〇円)

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)



九月号の奇クサロンで、新宮明夫様からの「全裸の解剖」という私へのお呼びかけ、ほんとうに身ぶるいするような気持で拝見いたしました。あの新聞記事のようなことが、ほんとうにあったのでしょうか。私の身体が全裸にされて沢山の人の見ている前で解剖される。そう思っただけで、ぞくぞくします。でも、実際には、自分が屍体になってしまったら、何にもわからないのですから皮肉です。だから、私はそんな空想を抱きながら自己愛的になってゆくのを自覚しています。皮下脂肪のついた下腹部や、白い指先。素足などを直接眺めたり、鏡にうつしたりして、この身体が死んで他人、殊に異性の方の好奇の目で眺められている、と考え穴ふんします。特に鏡にうつすと、それが、自分であ

り、見ているのは他人であるという気持ちにうつれますので、スムーズに空想にはいれます。だから、鏡の前でハダカになって、長い時間をすごすことがよくあります。もし、気の許せる方があって、私が屍体となり（お化粧もそのようにします）そして、その方に、料理されたり、生体解剖されたり、処刑されたりしたら、どんな感激でしょう。こんな妙なことを考えている女って、他にあるでしょう。大和川のホステス殺しは、その後皿谷とかいう人が容疑者として挙げたそうですが、証拠がないそうです。読者通信でも、いろいろの方から、お呼びかけいただきうれしく思っております。でも、私は想像されるような積極的な女ではございません。いずれ、告白なんか書かせていただくかと思っております。その節はよろし

く。（大阪市八字野淑子）

冬木尚子様、八月号に載っていたあなたの告白文、たのしく読ませていただきました。私は最近、「奇ク」のある書店にて求めて、一人海辺のうす暗い部屋で読んでいる二十三才の若者です。私にはどうやら小さい頃から、サド傾向があるようです。映画の縛りシーンや小説の中に出てくるSMを見たり、読んだりしますととてもない興奮を覚えます。私は自分が生れてから今まで色んなことを経験してきましたが、一度も女の人を縛って見たことは御座居ません。「ない」というよりは出来なかったのでしょうか。私はひたすらマゾ女性の私の身近への出現を願ひ夢見続けて来ましたが、けれども神様の怒りにふれたのかマゾ女性の出現はなかったようです。私はもうこんなはかない事はあきらめました。もっと明るく豊かに、私はサド傾向のある自分の心を築いてゆきたいと思っております。サドとマゾは確かに性の変形したものでしょう。しかし性質は全く異なるものです。よく似ているようでも……。前者は美と陶醉の世界を追及して人間の極地をさぐり後者

は人間の本望、動物の本望ともいうべき情欲の暴走によって人間の極地にぶち当たるものだと思います。だから人生をただ情欲のために費すのはどうかと思います。

尚子様、あなたのサドマゾに関連した人生観はどうですか。私はこのはかなく、つまらない人生によりどこをを発見しました。それがこの「奇ク」です。最近のS小説ものでは「花と蛇」が心から離れません。自分が静子夫人や京子を責めている張本人のように思われれます。こんな時、ふと自分にかえるとこんな自分がいやになることもありますが、この素晴らしい感激には換えられません。冬木尚子様を始め全国のM傾向の女性の皆さま、どうかお便り下さい。詳しい住所は編集部の方へ問い合わせして下さい。心からお便りをお待ち申して居ります。（和歌山県八サドに悩む青年）

貴社益々御清栄の段、御慶び申し上げます。このたびは、突然に御便り致し、申し訳け御座居ません。毎月貴誌を拝見致しておりますが、文章を読み、写真を見ているだけではじっとしていられなく

なり、貴誌の通信欄におすがりする次第です。女性の方で私を相手にM・Sプレーをして下さる方はいらっしゃるいませんか。私、年は二十五才、一六七cm、六〇kg。商社マン、他の人からは好青年といわれている男性です。女性の方で、特に男をいじめぬきたい趣味をお持ちの方（でもムチ打ちなどはこのみません）、そのかわり私も貴女を十二分に責め、かわいがってさしあげます（くすぐり責めなんか特に貴女はよろこばれるのではないでしようか）。お便り下さい。全国には同好の方が随分多くいらっしゃる事と思います。皆様は一人で、ああも思い、こうも思って悩んでいらっしゃるのではないでしようか。そういう貴女、お互の気持ちを満足させる為にも実行にうつそうではありませんか。勇気を出してお便り下さい。〇「奇ク」の方に住所連絡致しておきます故おたずね下さい。あわれな小羊を飼育してやろうとおっしゃる貴女のお便りを一日千秋の思いでまっております。（大阪市東区八高倉美行V）

〇 奇ク愛読の女性の皆様。私は三十五才独身、美大を出て只今中堅

デザイナーとして社会的には何の屈託もない生活をしている者ですが、影の内面生活では生れついでマゾ性向者として人並みな結婚も望まれず、唯一つ驕り高ぶった美しく若い女性に蔑まれ、なぶり者となり折檻をされ耐え難い凌辱を受ける境遇を得たいと日夜悩んでいるみじめな男の一人です。そのようなマゾ欲求を充されれば図り知れない生活の原動力としてプラスすることと確信し、ひとえに希いを叶えて下さる女神の出現を待ちわびております、広い世間にはマゾ系男性も多いと思います。が、又私共の迎ぎ渴望してやまない高貴にして嗜虐の資質をもたれる女性の方もかなりいられることでしょう。気の趣くまま、遠慮仮借もなく男性をいじめてみたい、辱しめてやろうと心ひそかに希われる方がいられたら、どうか私をお召しになって下さい。個人同志の行為という限度を超さぬ限り他に何の憚りも憶することがありません。勿論貴女様の御迷惑になることや秘密は絶対口外致さないこと申す迄もなく、貴女様の命令には何ごとも服従致す所存です。私は女性からの平手打ち、踏みにじり、鞭打ち、便器代用等を

格別に好みます。奇クは毎月二十五日頃に店頭に出ますからその月末、八月は三十一日、九月は三十日の夜六時半より七時迄、国電水道橋駅西口（飯田橋寄り）の改札口を出た辺りでお待ち致します。私は手にMHと書いたブックを持っていきますから、貴女様から「ハヤノさん」と声をかけて下さい。私は同時に身分証明書をお見せいたします。できれば貴女様も赤いハンカチーフか何かをお持ちになって下されば好都合です。ではサド女性の方々よろしく。（東京八H V）

〇 誌上にはとても載せてもらえないだろうと、思いのままを書きつづったお手紙を差し上げたところ早速八月号誌上に掲載くださいましてありがとうございます。自分の書いた文章が活字になったのを読みかえしてみますと、まるで自分が裸にされて人前にさらされたみたいで、思わず顔を赤らめてしまいました。でも、日が経つにつれて、ここに書かれているのは自分ではない、何か他人のような気がしてくるのが、不思議です。編集部から紹介をいただいた数人の愛読者の中から、文通によって

気の合う方が見つかり、只今楽しい文通交際を続けています。その中、又、彼の許しを得て詳しいいきさつを御報告いたしたいと思っております。九月号の通信で埼玉の荒川様。大阪の大阪亜武男様。布施の中村哲夫様。わざわざお呼びかけを頂きましてありがとうございます。これからも誌上でいろいろお話しあえたら楽しいと思います。直接お便りを頂きました方々も、殆どの方はすぐ逢いたい

新宮明夫氏提供

「処刑」と「生首」写真

絞首刑

略号

生首の晒

磔

略号

晒台の生首

斬首の瞬間

略号

大手札三枚一組

三〇〇円

大手札三枚一組

三〇〇円

大手札三枚一組

三〇〇円

大手札三枚一組

三〇〇円

とおっしゃいます。が、男の方って、せっかちですのね。やはり、ゆっくり文通をかさねてから、二人の気持がびったりした上で、自然のなりゆきのようにお逢いするのだったらロマンチックだと思えます。すぐプレイだなんて、とても考えられません。尚子は好きな青年だったら、ちよっと目で睨まれただけでも、びくっと思います。でも、空想の上だけでしたら「花と蛇」の美津子のようになりたいてすけど、現実になんかにされるのは、やはりいやです。こんな私のデリケートな心理をよみとって下される方っていないかしら。大阪亜武男さんのような野卑なのはきらい。そのうち又お便りします。(大阪府大東市八冬木尚子V)

○ 「花と蛇」、毎号、みぶるいするような感激を味わい乍ら読んでおります。之が来月号で完結になると思うと、さびしくてなりません。然しながら、以後も、より素晴らしい作品が出現する事を信じてやみません。小生、物心つくよりS性を備えた一青年です。特に女性の緊縛姿体に異状な興奮を覚え奇クを始め、U誌、F誌を数年

前より毎月捜し回り乍ら購入して来ましたが、奇クの通信欄でたくさんの方々がよくパートナーを得られていて事にそられ思いきって投稿致しました。写真にも趣味をもっている為D・P・Eを全部自分で出来る様機器を揃えており多くを望むならプレイフォートも撮りたく思います。冬木尚子様等大阪近在のM女性、至急御連絡下さい。貴女の望む交際をし貴女の望む責めをしてあげます。(大阪市八浅丘V)

○ 私はサドの徹底した破壊的な無神論、ボードレールの悪魔的な美等に少なからず共鳴しています。又、此の様な思想と必ずしもつながるとは思いませんが、人間の本能から出発し、最も人間的でありながら、理性だとか、道徳だとかいった名分によって最も抑圧されるセクシアルな行動や表現。それこそ、なにより美しく、芸術的であると思います。私は以前からカメラを趣味の一つに持っております。風景、ポートレートやヌードと、余暇を時々たのしみます。カメラを持っていつも思う事は、それが例え風景であっても、人間の臭のするもの、人生を感動的に

【最新版分譲品】

(解説は旧号に出ています。分譲中ですが、打切りにならないうちにお求め下さい。)

乳房しばり

略号 (うは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

鼻責と緊縛

略号 (うい)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

木馬責三態

略号 (もく)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

椅子責の果

略号 (いす)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

血紅切腹

略号 (るな)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

双胸の縛り

略号 (そつ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

動感海老責

略号 (とう)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

色禪開股縛

略号 (いふ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

感じさせるものを撮りたいと思います。(技術的にもそう思う様には成功しません)すぐれた男性のポートレートは、なんと人生と斗い、そしてさまざまな欲望を表現します。女性のそれに於いても同じにちがいありませんが、女性にはもう一つの顔があります。この顔こそ、人間の本性をむき出しにしてくれます。社会的にこの顔が少しでも、あらわに表現されるとワイセツとされますが、私は女性性の局部に至上の美と人生を感じます。美しい女性ポートレートを数多く撮りたいと思う一方もう一つのポートレートも撮りたい。もし自分が撮れなければ人の撮ったものでも、手に入れたかと思えます。婦人科の医者ならたやすい事にと苦笑して見たりします。私は現在設備の制約から白黒スチールの自家現像しかしておりませんが将来はなんとかカラーそして八ミリの芸術的なものと時々夢にえ

がいております。私は二十九才の会社員で独身のアパートで一人住いです。以上述べて来た様な私の希望が、かなえられる様な方法があるとするれば、お知らせ下されば幸いと存じます。(大阪市八池森淳一)

○ 臨時増刊「花と蛇」は本格的S小説としてまたこの種の刊行物として、空前絶後の最高作といっても過言でないと存じます。よくぞここまでS小説の真髓を探究され熱烈なる読者の要望に応え、その欲求を十二分に満足させて下された作者の団先生、また錦上さらに花を添える麗筆を存分に振って下された画家の四馬先生、さらにはきびしい制約下にありながら、敢然として、しかも廉価で刊行された奇巧の編集長以下御一同の御努力にたいし、一読者として心から厚くお礼を申し上げます。団先生のあとがきにもあります通り、Sに貪欲な私のような読者にとってはそれでいてなおこれでよいという限界がありません。幸い八月号によれば、団先生が続篇を近く発表して下さるとのこと、いまから続「花と蛇」の登場が一日千秋の思いで待たれてなりません。同性

愛の関係になったような静子夫人と京子との華々しい秘密シヨウの光景。鬼源や銀子たちの淫靡きわまる調教ぶり。そしてさらには静子令夫人の初妊娠等々。期待はますます募るばかりです。団先生に重ねてお願いいたします。なにとぞ、あの天女のように美しい貞淑な深窓の令夫人静子を臨月妊婦とするまで筆を進めて下さい。豊満艶麗、絶世の美女静子令夫人が、鬼畜にひとしい好色な悪魔の子をその胎内に宿し、すでに着衣ですら人目にふれるのを消え入るほど恥かしがる臨月妊婦となって、後生ですからそれだけは許してと、泣いて必死に哀願しているというのに、それを淫虐あくことを知らぬ銀子達は、あろうことか一糸も許さぬ全裸に剥いて、衆人環視の中に、その神々しいまでに美しい全裸の臨月妊婦静子令夫人を曝し想像も及ばないほど淫らな責め折檻によって骨の髄までなぶり辱かしめる……こんな光景があったならといまから楽しみにしています。(東京八佐土良志)

○ 九月号拝見致しました。私、「奇ク」は毎月書店で一応目をとおしますが、めったに買った事が

ありません。しかし九月号をめくったとたん、すぐ買入してしまいました。それは、栗本嬢の「マスケをした女」のあまりにも、すばらしさのためです。こんなすばらしい写真は見た事ありません。感げきです。最近の「奇ク」をみますと、サルグツワが大変少なくなっています。あってもたいてい一葉か二葉、それもほんの申しわけ程度に口をおおったものです。これはどういうわけでしょうか大変残念です。世論に従って自しゅくすると云う意見には賛成ですが

だからサルグツワも少なくすると云うのはなっとくが行きません。「奇ク」は性雑誌ではないといながら、全ラでしばってみたり、パンティをくり下げてみたり、誤解されそうなのがいったいあります。「奇ク」は、マニアの雑誌です。いやマニアの雑誌であるなら読者ののぞむものをのせるべきです。「奇ク」愛読者は、モデル嬢をはだかにしてしばる事をのぞんでいるでしょうか？ 私はMとかSのマニヤは、しばらくとかサルグツワに強い関心を示すのだと思う

鼻責めのアツプ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(はす)

膨満正面の縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ちた)

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(むね)

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(つん)

マニヤ全裸緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(いな)

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号(くし)

女相撲と女斗美

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

のですが。とに角、編集者の方々は「奇ク」の一番良い所はサルグツワにあると云う事を忘れないでいてほしいと思います。例えば「奇ク」以外に、あんなすばらしいサルグツワやマスクの写真をのせる雑誌はあるでしょうか。残念ながらありません。そこに「奇ク」の価値があるのです。自しゅくも結構ですが、毎月一葉位は本格的なサルグツワ(目のすぐ下から口もはなもすっぽりおおうきつもの)や、マスク(9月号のもいいですが、もっとひもをゴムにして耳にかけるようにして、大きく、そしてきついもの)をのせてもらいたいものです。八月号の大塚嬢の写真なども、革のサルグツワで口だけをおおただけでしたが、あれでなく、冬オートバイに乗る人がよくかける革のマスクをかけさせていたら……(やはりこれは私の夢として終るか、実現は無理なのかも……)最後に私のおねがいとして、「夏とマスク」という題で、①看護婦の姿(マスクしている所、②ふつうのB・Gが夏カゼか、それともMの境地か、鏡の前でマスクしようとしている所、又マスクしおわってじっと鏡をみ

ている所、③毎朝そうじする中年の主婦が、マスクして掃除機のそばにしばらくおられておられる所(主人のいたずらか、それとも?)以上ですが実現は……?どうか宜しくお願いします。(愛媛県喜多郡八根来節一〇)

編集部並びに、愛読者の方々、大暑の候お見舞い申し上げます。先月号「奇クサロン」(M女性への手紙)を掲載して頂きました。小生がお灸に興味関心をもった動機は、26・27年頃の奇ク、告白、体験、小説等で発表しましたが、学友に美都江(仮名)と言う灸療院の家の女生徒が居りました。独りっ子で父亡き後、親の後を継ぎましたが、自分では一点のお灸も据えた事も又据えられた事もなくもっぱら据える側にあり、小生も何かと手伝ったものです。医専を出て女医を志して居た関係、美人を造るお灸、若返りのお灸を研究瘡身、肥身、短身の方々にお灸の刺戟によるホルモンの分泌を促したバランスをとり非常に効を奏したものです。痕は判りません。何と言っても女性の施灸者が多い事は言う迄もく、心頭滅却すれば火も亦涼し、で土用中毎日据えに來た

22、23才の女性も居りました。彼女とは10年前北海道へ移住してしまつてから音信不通となりました。捉えてお灸を据えるような狂暴な事はもつての他です。すべて理性あるディスカッションでS・Mの桃源境のムードにもって行かれれば、之に優る悦びはまずないと言つて過言ではありません。残酷極まりない責は好みません。切腹も嫌いです。お互いの意思が通じあうS・Mプレイは実に素晴らしいものと言えましょう。緊縛、鞭打、浣腸等々、各々の嗜好に合った責の追求をお便りなりとお話出来ますればと文通交際勧誘致した次第です。お便り鶴首して筆を擱きます。(東京都八松原良〇)

貴社益々御発展お慶び申し上げます。初めてお便りします。小生奇クを購読してから数年になります。毎月、首を長くして二十五日をまっています。奇クは好きな雑誌です。特に良い点は、さしえが非常に巧みで、実感がよく出ていることです。これ程よく出ている雑誌は日本には外にはないと思います。僕は、M的傾向で、特にのせてもらいたい記事は、かよわい男性が女性に恥しめを受けている

所です。数年前、ある社長が、女王の奴れいになった記事がありました。今迄で一番良い記事でした。何回も読みました。(自分がいじめられていた様な気がして)写真は余り、しぼりすぎるのは嫌いで、僕の好みは、やせすぎの女が髪を長くし少しの縄でしばられているのが好き。九月号の57頁の写真が好き。ですが、もっとやせていると特に好きになります。

(好みですから、悪しからず御諒承下さい) もうひとつ私は、フェチシストで、下着も集めるのに苦勞しています。一年前デパート、でピンクのパンティを買った時は心臓が早がねを打ち困りました。先日は、ブラジャーとストッキングを買いました。妻子のある身ですが、いい留守に一人で楽しんであります。まだ書きたいことがあります。又、後の便りで致します。編集部の皆様、お元気で、どしどし新作を発表して下さい。さようなら。(静岡A・M・F生V)

○ 高砂市の浣好生様。誌上のお呼び掛け有難う。大阪の浣好生です。独りでよく悩んでいても仕方無い事です。「奇ク」と云う私達にとっては全く「助けの神」

を「縁結びの神」として、同好の者同志で、お互いに語り合い慰め合い度いと思っています。私、最近一〇〇C・C・Cと五〇C・C・Cのガラス・シリンドラーを数本求めました。お分けしてもよいと思います。そして貴方の一生の夢(各種浣腸プレイ。二〇C・C・C。三〇C・C・C。五〇C・C・C。一〇〇C・Cのガラス・シリンドラー、そしてエネマシリンジ、イルリガートル等によるグリセリン・石鹼、空気牛乳等の浣腸)を果たして差上げたいと思います。連絡方法をお知らせ下さい。又、京都の「飢えたる者」様始めエネマ・マニアの諸兄弟の皆様のお便りをお待ちしています。(大阪A浣好生V)

○ 宇野淑子さま。突然このような手紙を差し上げる無礼をお許し下さい。僕は京都に住む一青年ですが、ふとした機会から街の書店で見つけた一冊の雑誌に貴女のお名前を見つけました。勿論、一面識もない貴女と僕、名前も偽名でしょう。おそらく。お互に本名も顔も知らない同志、このままの方がいいでしょう。僕も貴女の本名やお顔を知りたくありません。自分の本名と顔を知られることはそれ

以上に嫌です。いや恐れさえ伴うに違いありません。あの本を書店で見つけた時、僕は世の中に僕と同じ性癖を持った人がこんなにも多いのかと少からず驚きました。そして今迄漠然としていたものが何であるかが、はっきり判りました。お願いします。二冊目の雑誌を購入するさえ躊躇している僕ではあります。……僕の願いをどうか聞き入れてやって下さい。貴女以外には、僕の願いをかなえてくれる女性はないように思いますから。僕は決して本能をむき出しにするような獣同然の愚劣な人間や残酷なサディストではありません。理性と抑制力は誰にもまして備えているつもりです。私立ではありませんが一流大学を卒業しております。そんな僕が貴女だからこのような人でもない、恥しいお願いをするのです。貴女なら僕のような気持、精神状態を理解して下さるものと信じてこんなお便りを差し上げたのです。僕は今、何の面識もない貴女の裸体を想像しています。そして縄をかける夢を見ております。恥しきにもだえる貴女の体から最後の一枚であるパンティを無理矢理脱がせ、今は貴女のパンティーを両手でいただき

貴女の目の前で、そう貴女はきつと恥しさに死ぬ程の苦しみを味わうでしょう。僕が両手の中にある貴女のパンティーに自分の顔を沈めるのですから……。現実にそんなことをやってみたくはありませんし、そんなこと僕に出来っこないのです。なのに夢中で想像するのは。この手紙を真面目に読んでくださった貴女ならきつとわかつ

女性禪マニヤ(愛読者)

禪美フォト 分譲

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふな)

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふに)

て戴けると思っています。僕はあなたが今はいってらっしゃる貴女の体臭がいったいのパンティーが欲しいのです。ここまで書くのに僕は汗びっしょりです。暑さの折お体に気をつけて元氣にお過ごし下さい。見もしらない淑子様に。(京都市八伊勢凡一)

○ 愛読者の皆さん、如何お暮しですか。私をはじめてお便りをさしあげたのは、やっと春らしくなってきた頃でしたのに、いつの間にかやら一年中で一番暑い季節になってしまいました。編集部からは是非モデルに、という有難いお言葉にも、自分の身体に自信がないためお断りしてしまいましたのに、編集部では気を悪くなさらずに、よい読者の方を御紹介下さいまして、本当に有難く思っております。もっと早く御礼状を出さなければいけないのですが、望みがかなってしまえば、ついつい筆不精になってしまつて申訳ございません。七月号では、T・H生様のお呼びかけを頂き有難うございました。丁度あの頃は、紹介して頂いた方とのデイトに忙しくて、八月号にも九月号にも、間にあうようお返事を差し上げることができなくて失

礼いたしました。氣になっていたのですが、私の性質としまして、何人もの方と御つきあいするといふ氣持に耐えきれませんので、なにとぞお許し下さいませ。取りいそぎお礼をかねてお詫びまで。かしこ。(布施市八森田峯子)

○ 私は貴誌の愛読者ですが、中でも女相撲や女斗美に関心を持っています。今まで女性の浣腸の写真を相当集めておりましたが、これからは女相撲や女斗美の写真もだんだん集めていこうと思っております。女相撲、女斗美で私の好みは負けている方の女の姿態です。ころんと転がされた時爪先を上ピンと足の先をはねあげたように仰向けにころがった女に、こよく美しさを感じます。負ける女に興味を持つというのは、やはりSの傾向でしょうか。それかといつて、私は自分から手を下して、女をいじめたいとか責めたいとかは一向に考えません。二人の女性が力のかぎり戦い、力尽きた方が、仰向けに倒れるときの姿態が好きなのです。私は女性の足に興味を持ちますが、それは、負かされて倒れた女のピンとはねあがった足に限ります。このような分譲品は

他になにかございせんか。あればお知らせ下さい。(和歌山市八新田和文)

○ 酷暑の候となりました。読者の皆様御元氣ですか、私はこのたび始めて便りを出した次第ですが、KK誌を愛読以来早や三年になります。私は25才になる独身の男です。趣味はふんどし、特に女性のふんどし姿に取りつかれ、自分でも日常フンドシをしめております。ふんどしは、何んといつても六尺(サラシの)フンドシが一番です。最初は家の者にもパンツをやめて六尺フンドシをしめるのはずかしく、内緒でしたが、今では、洗濯等で下着を取りかえる時でも、ちゃんとフンドシを持って来てくれる様になりました。八月から会社の都合で、一人アパートに住む事になりましたが、ふんどし姿には変わりません。女性でふんどしの好きな方又は同好の方御便り下さい。お待ちします。(大阪八笠原努)

○ 勇をふるって読者通信に投稿しました。二十三才の男性です。奇クを愛読して、もう二年になります。縛られた女性の美にひかれ毎

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になつて演ずるそれであるといふことは、切腹マニアの若き女性、例えば信太蓉子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によつて裏づけられていきます。三宝を前にして、衣服をきちんとつけ、腹巻に身を固めて切腹プレイに演じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまざまポーズによつて柔肌を白刃によつて切りさばいてゆく。

月、グラビアを楽しみにしています。自分でも縛ってみたいといつも思いながら、機会にめぐまれず空想の世界で満足するのみです。奇ク愛読の女性の中で縛られる事に興味をお持ちの方お便り下さい。年令等問わず誠実な文通

新作マゾ・フォト

(新人モデル)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まて)

首を太股にて絞あげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)

交際をしたいと思います。(北九州市小倉区八木森茂)

奇クを読み始めて半年、奇クの発売が楽しみな今日この頃です。半年前、店先で手にとって読んでみたのが、愛読するキッカケになったのだと思います。本の内容は豊富で、雑誌の中では一番だと思えます。でも、本ばかり読んでみても、何となく物足りません。実際にプレイしてみたくありません。た。そうそう私の趣向はMなのですが、Sの方も興味があります。奇クを読まれているみなさんの中にも、SMのプレイをしてみたいと思っている方も多数いることと思います。私もその一人で、とうとう我慢できず筆をとったわけです。プレイの方法はどんなものでもかまいません。一リットル食塩水の浣腸責め、鼻及び鼻毛責め、袋縛り、汚物責め等何でも結構です。女性の方で『男なんか憎らしいから、うんときき使って責めぬいてやりたい』と思っている方がいましたら、どうぞ、この私はどんな事にも服従しますからドレイにして下さい。私はまだ青二才の弱輩ですが、必ず貴女様の満意いただける様に服従することを約束

します。私は神奈川県に住んでいますが、通信欄を拝見しますと、神奈川県や東京都在住の方の投稿者が少い様で残念に思います。愛読者が少いのでしょうか。神奈川県又は東京都に在住の四十才ぐらいまでの女性の方。容姿など一切気にしません。私とプレイをして下さいませんか。私は美男子とまではいきませんが、男らしい顔をしていいる事は確かです。では、神奈川県、東京の奇クの愛読者の女性のみなさん。良識あるプレイをして意義深い人生を互いに送ろうではありませんか。(神奈川県八木森M男)

K誌を愛読してから七年になるベテランです。初めのうちは本屋で買うのにも、家に帰ってそっと読むのにも、顔赤らめて、どきどきしたものでしたが、今では大抵の事には平気で一年輪を重ねしサデストの、この世に恐るる何者もなしといった心境です。モデルさんでは、やはり関谷富佐子夫人がライク・ザ・ベストで、夫人とプレイを許される方を心からうらやましく、ねたましく思っております。彼女に関する記事は、他のモデルさんに比べてこれまで皆

無の状態で、いたずらに私の想像を逞ましくさせます。何かいわくのある事は察しますが、いかがでしょう。花の素顔?、の一部でもお見せになつては……。嗚呼、彼女よ、関谷富佐子よ、ぼくはあなたに浣腸がしてみたい。いや、失礼!。でも本心ですよ。御健斗を祈ります。(憂斗生、横浜)

毎月貴誌を愛読しておりますが特に浣腸に興味を持っております。先般県内新湊市で或る奥さんが浣腸するため、浣腸薬を薬局で

「今月の新版分譲品」

オシメ・フォト

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しま)

第二集

前開き布製防水カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しな)

買ったところ、薬局が間違つてクレゾール液を売ったので大火傷し、同封切り抜きに裁判沙汰となりました。珍しい事件と思ひますので参考までに送ります。クラブを兼ねた会館設立準備中とのことですが、実現の暁は、貴誌愛読の同好の女性とお互いに浣腸プレイが何の気がねなく出来たらと楽しみにしています。貴誌の益々の御発展を祈ります。(山田マサオ)

△新聞切抜き▽ お客様と薬局が「かん腸論争」地裁高岡支部「消毒液でヤケド」——「薬局で薬を間違えて売ったから体にやけどを負った」「買った人があやまって使用したことで責任はもてない」と損害賠償の訴えをめぐって地裁高岡支部で争っている事件がある。訴えたのは新湊市放生津、Aさんで、同市、薬品販売業、Yさん(五八)と息子のKさん(三七)に損害補償十九万四千円を支払えというものの訴によるとYさんの夫Bさん(昨年十二月死亡)がAさんからかん腸薬を売ってほしいという注文をあやまってクレゾール原液を売ったため。これを使ったAさんが直腸、下腹部がただれ、

昨年十二月九日から十八日まで新湊市民病院に入院、治療を受けた。これはよって使った入院費用六千六百八十四円をはじめ、休業による賃金の損失補償および慰謝料をBさんの相続人であるY、Kさんに要求したが応じないので訴えたという。これに対しY、Kさんは第一回の口頭弁論で「Aさんに消毒薬としてクレゾール液を売ったことは間違いない。しかし、これはかん腸用として売ったものでない。それをBさんが使ったやけどをしたというが、損害もはつきりせず補償請求に応ずることはできない」と反論している。

九月号は又々前川様の「女の首級」を嬉しく拝見しました。やはりこの種のもものは私の好みから云って時代物が最もよろしい。前川様の存在は、今や私にとって他にかげがえのないものになっていきます。何とか直接文通してみたいと思っておりますので、よろしければ何らかの方法を通信欄で御指示下さい。九月号は又、倉敷の上山様の嬉しい通信に接して、同好諸氏が次第に増えて行くのを喜んで

います。八月号の中尾駿様が「寒椿抄」で女のふんどし姿を讚美されたように、私も女のふんどしをしめた時の美しさ、それも日本髪を結っている時のその美しさは表わす言葉も知らぬ位あこがれているのです。娘ならば水もしたたる島田雷、もえるような緋縮緬のふんどしをしめた姿、芸妓ならば江戸紫のものをきりりと粋にしめた姿、それに上山様好みの姐御肌の鉄火な女の場合は、櫛巻き髪にさんごのかんざしを一本粋にさし黒緋子のふんどしをきゅっとしめて、抜身の長脇差か、匕首を手に持った姿、奥女中ならばふんどし一つで手にはやはり薙刀を持っていざなぐり込み、或は斬り合いへと向わんとする姿は私にとって全く筆舌につくされぬ美しさを感じております。ふんどしをしめた女がかくまでりりしく、美しく感ずることは、やはり争闘の場面でしょう。女相撲しかり、それに命的の立ち廻りの場面でしょう。

「大奥裸女血斗」にみられる奥女中達の集団の血斗場面は特に胸がうずきます。きびしくしつけられたものの静かな起居振舞も今はかなぐりすて、ふんどし一丁の裸身でここを先途と斬り結ぶ奥女中達、血飛沫をあげてのけぞるもの、首をかき落とされるもの、累々と山

を築くふんどし一つの奥女中の死屍。死屍累々、死山血河の中で、猶生き残ったふんどし一丁の奥女中達の血斗の姿を想像しては興奮の渦の中にいます。前川様にこのような場面も大幅に描いていただきたいものです。又、ふんどし一つの姐御がこれもふんどし一つの裸の女子分をひきつれて、同じふんどし一つの女やくざ達との立ち廻りも、楽しい図柄となるでしょう。同好諸兄弟の通信を待つことや切。(女斗彦)

まさかと思った関谷夫人の鼻責め写真が八月号に、アラッと言声(これは一寸オーバーですが)が挙りました。こうして時にふれ、我々鼻責ファンに慈雨を恵んで下さるKK編集部の方々の心憎くさ。でも、グラビヤでないのも物足りない。こいねがわくば、次号にグラビヤ又は分譲写真で御願ひ出来ないでしょうか。ついでは梨花、絹川両嬢の鼻責写真も、お添え下されんことを。ホラ、又ゼイ沢を言う。(東京都墨堤△Y・K生▽)

○ 東雪枝さん。貴女こそ私の理想(私にとっては容貌、年令等には

理想はありません。の人はです。しほり、足なめ、むち打ち、人間トイレ、凡て素晴らしいプレーばかりです。更に一つ是非とも希望したいのは、雪枝さんのメンス・バンドにして頂きたいのです。昼間は無理ですが、夜間お休みの間はメンスのことは一切私におまかせ下さい。徹夜にて御奉仕するのです。雪枝さんが人間のメンス・バンドがどうしても嫌でしたならあきらめます。一人でなく三、四人で私をベッドにしほりつけ、充分満足のいくまでオモチャにして下さい。私には何も(条件)はありません。東さんの云う通り豚にも犬にも喜んでなります。どうか

ドレイとして採用下さいますよう伏してお願い致します。東京八森重治

我々マニヤ各傾向の者にとって風俗雑誌程嬉しい読物はまたないが、日常注意していると往々偶然から、生半可な風俗雑誌以上の作品に接する機会がある。嘗て映画化された富田常雄著風来物語など、さしずめそれで、前、後篇のポリウムを通じて興味の尽くる所を知らずと云った有様だ。挿画は有名な岩田専太郎であるが、これも予想に反して、たとえば自転車と元禄模様の項では、俚に自転車をおぶっつけて路上に転がっている

女学生の、えび茶の裾がめくられて白い足が膝の上まで露わになった絵が実にうまく且大胆に画かれている。当然の結果余り女の曝された肌の部分が美しく目に映じたので、つい男性の欲望から件の女学生を素っ裸に剥きたい期待を抱いた。その他著しいものに女体責めの絵並びに文がある。一方風俗文獻史的に見ると、明治時代においては男女仲睦じく歩いても風俗壊乱罪を適用された程だから、昭和の今日、進歩的な風俗雑誌が反民主的な輩から悪書呼ばわりされるのも故あるかなと思われる。その代り当時は志気の吐け口として遊廓の存在が立派に認められたのだ

から、遊廓のない現在乃至将来の風俗変遷は靈的にストリップから全ストへの移行が自然と察するのだが、果してどうだろう。(京都市八高橋秋良)

「奇妙なる育児室」と題した私のイメージをもとにしたさし絵お送りいたします。四馬孝氏の画は観念的で、もう少し研究していただきたいと常々思っております。以前活躍していたらしゃった北原純子さん、最近誌上に見られないのが残念です。「捕われの令嬢」など麗筆は是非誌上でアンコールをして再録していただきたいのも一つです。北原純子さんのファン

四馬孝画廊

浣腸美媚態

大中判 (13×19) 印画紙焼付
三枚一組 六〇〇円
略号 (のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写した女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に両

腕をとられて身動きできぬようにつかまえられ、真白な逞ましいお尻をあらわにされて、百CCの巨大なガラス製浣腸器が医師の手によって迫ってくる。美に対する汚辱のスリル。

二、BGの浣腸

診療所の治療室にて、花恥しきビジネスガールが、羞らいながら、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポイズをとるという、医療という目的のために、やむにやまれぬ受縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかつて浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

処刑場面写真

新宮明夫氏提供

絞首刑

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

略号 (るく)

前を僅かに掩う越中褌一本の美女が嚴重に後手高手小手に縛しめられて目かくしをされた上、首吊りの刑にされようとしている。

引廻しと晒

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

略号 (るに)

首繩後手高手小手にきびしく固められた裸身を縄尻をとられて、引廻される美女の哀れさと、前手縛り目かくしのまま、放置されて晒される裸身の心もとなさ。

としてユカタ着かネグリジエの裾をはだけた若いお嬢さんのオシメカバー姿を是非描いていただきたいと希望します。(原由貴子)

〔編集部より〕 お送り下さったさし絵は流石にマニヤの方の筆になるだけあって、ツボを心得たものだと感心させられました。折を見て、この絵を参考に口絵でも描いて貰いましょう。北原純子さんは御主人と京都にお住いでしたがその後面を依頼するチャンスがなく残念に思っています。

近頃は本屋ではKK誌が見られなくなりました。予約して買うこともできるが、家へ送ってもらうのが都合がわるいので、果さないでいる。うまい方法を考えて下さい。

僕は女角力の大ファンです。いまから十年前のお彼岸に、女角力的小屋がけがきてから大ファンになった。それから一度もきません。町のテキヤの人にききますと、この女角力はなくなったと云っていました。KK誌の皆さん、お願いしますから、女角力大会をやして下さい。どんな遠くへでもまいります。考えて下さい。またKK誌でも、どんどん女角力の記事や意

見をのせて下さい。写真ものせてほしいし、分譲フォトでもよいです。組写真でまわしは黒でなければ駄目です。髪をふり乱し気合の入ったもので本式の土俵でなければ駄目です。写真の技術も発達しているのですから考えて下さい。それから僕のこの読者通信が一番好きですが、それは女角力ファンやいろいろのニュースがでているからです。女角力は別に悪いものではないです。たくさんのファンがいるのですから興業師の方も考えて下さい。この読者通信にニュースを発表して下さい。(埼玉県川越市八松尾弘)

〔営業部より〕雑誌の御注文は、郵便局留で受取る方法がありますから御利用下さい。

貴誌を愛読する様になってから早いもので、もう三年になりました。その間私のS的傾向も順当に成長して愈々本格的となり、近頃ではいささか物足りなく感じています。矢先でしたが、小説「花と蛇」を得て、久方ぶりに心の渇きをいやしたと思いました。今度一度にまとめた特集号を拝見し一層の満足を得ました。殊に写真と口絵が本文と同じくらいに豊富でうれ

新しい分譲品

女子斗争場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子 略号(のわ)

フンドシー丁の二女が豊麗な裸身を惜しげもなくむき出しにして組んずはぐれつの大格闘。若々しい肉体の躍動が手にとるように眺められる快心のフォト。

二女格闘場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子 略号(のわ)

全身汗みどろとなつて、お互いに相手の乳房や鞭を掴みあつて必死になつて戦う女斗美のシーン。

全裸正面切腹姿態

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(のわ)

今や身にまとう何ものもかなく、柱にもたせかけて、壮絶なる女体切腹を敢行する啓子の正面像。

切腹に悶える裸身

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚啓子 略号(のそ)

柔肌をキリキリと切りさばく女体切腹の壮絶な雰囲気。苦痛に悶える裸身の美しい曲線。全裸になつて演ずる啓子の切腹シーン。

浣腸と便意の苦悶

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 遠藤百合子 略号(のけ)

一〇〇CCの浣腸器でパンティを押さげた百合子が自らの手で浣腸を施し、やがて押し寄せてくる激しい便意に、身をくねらし腹をおさえて苦しむ有様。

強烈エビ責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子 略号(ねむ)

足の指が全部反りかえつてしまふほど激しく縛りあげた足首を背中との後手首と連結して、ぐいぐいと締め上げれば、全裸の美佐子はう、う、うう、と思わずうめいて全身を疼れんさすのだった。

後手首の高縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子 略号(ねへ)

きっちり合せて括りあげられた後手首が首筋近くへ高々と吊られ

ます。又貴女が望みなら、排便ポーズに縛り浣腸致します。そして最後の一点までがまんさせ、やっと解放してあげます、又、異性を縛り鞭打ちなどにも少し興味を持っておりませんが、少しマゾの傾向もある様です。東京の中山梨津子様、都内にエネマクラブがある様ですが、是非入会させて頂きたく思っております。浣腸マニヤの諸兄弟の御活躍を祈りながらペンをおきます。誰か小生の願いを聞きとどけて下さる方は非お便り下さい。(東京都八清水岩夫)

○ 横溝とみ子様、七月号の奇クラブ読者通信に貴女のお便り拝見し御手紙する失礼御許し下さい。私はM傾向の男子ですがM傾向も軽度のものを好みムチ打緊縛等は好みません。女性のふくらはぎで顔を押え込まれたり貴女と組打ごっこのプレイをして首投げで倒され仰向きにされて胸の馬乗りから首のおさえ込み、顔乗り等のプレイをして見たくてたまりません。又足裏からふくらはぎ、ふとももと足なめと接吻が出来たら幸です。そして貴女の最も魅力の中心たる太ももで顔をはさまれギューとしめられたら幸です。どうか若い女

性の魅力の全部で此のか弱い男性の一人を思いきり征服して其の快感に酔って下さい。私は戸塚の中小企業の会社に勤めて居ります。第一、第三の土曜日は、三時の終業、日曜は全部休みです。私は体格も貧弱ですから、貴女にこわさを覚えさせる様な男ではありません。どうか私を少年か従順な少女と思いい二人で思い切りきままなプレイをしようではありませんか。でも奴隷云々と人間性を無視したプレイよりもっと御互に温い気持ちで民主的に研究して話し合っ御互の快感をデイトの度に倍増すると云う様な方向に持って行きたいと思ひます。又汗のにじむパンティを、顔にかぶせていただけたら、私は其の物を宝物の様に大切に持ち帰り何時も思い出にひたるでしょう。でも、しう恥心の強い女性の貴女にとっても全部を望むのは無理ですね、貴女に其の興味がなければあきらめる次第です。又貴女がオテンバな少女時代男の子を泣かした様に平手打を食ったらさぞ素敵だと思ひます。それも貴女の豊満な太ももで首や肩を押え込まれ、身の自由をうばわれた上のははへの平手打や足へのつねり等考えただけでぞくぞくする様な

思ひです。どうか貴女も泣かした男の子や牛乳屋の少年を思い交際して下さいたら最大の幸だと思います。どうか貴女の考えて居る事空想でも結構御手紙に御返事下されれば幸福だと思います。(横浜市八山崎繁夫)

○ 東雪枝様、貴女様に終生献身的にお仕え出来ます光栄をひたすらお願い致します。私は強度のマゾヒストで御座います。年四十歳、いささか社会的地位もある私ですが、それだけに私は随分悩みました。が所せんマゾの血はたえがたく女王様におすがりする次第です。女王様、何卒この私奴を奴隷としてお使用下さいます様伏してお願ひ致します。女王様の意のまま私のむくままの折かんが奴隷の私奴には何よりの御褒美で御座います。経済的にもいささかの御負担出来ます事を御約束致します。何卒面接のつもりで一度御呼び出し下さいませ。伏してお願ひ致します。(千葉市八山崎文男)

○ 今日登映治様、貴男の7月号誌上で名古屋に居住と知り？ 書かせて貰います。勿論6月号でも私はM七〇生でして多分一回位は

下手な文章を見られたかと思ひます。五、六年前から他人の同趣味の方にスチールか8ミリで責めをと思ひてました。貴男の記事で心が躍りました。スタイルは零に等しく中年過ぎで奴隷5、6年経たスタイルなので種々の責めでスタイルを埋め合せていたのです。特別出演させて頂けませんか。特徴は既に奇クにて御存知と思ひますが鼻穴は8ミリ最大器具挿し込み可能12ミリ最大ですと口を塞がれますと器具で鼻孔を塞がれ呼吸困難です。少し乳首を利用する為に高さ5ミリ乳首は約5ミリです故クリップで責めるに素晴しく、特に鼻と乳首を極端に短かく連結しますと、又乳首のクリップに紐を結び、先端にペンチを吊しますと乳房？ が天幕の様に伸びます。舌を口外に出し1/3位の個処を血管に注意して気胸用か他の針を下部より貫通させます。針の長さは6、7センチ、するとヨダレが出て喋べっても言葉にもなりません。又唇の先端から舌を経由し上唇の先端を縫い付けます。又背伸びして柱に鼻穴に5寸釘等を打ち付けて十分以上経ます両手足を結び両端を柱に結び緩く、そして鼻に紐を通し引いたりする。逆さ吊りし

鼻に錘りを吊す。両手足を背中
結び吊す。鼻を柱に打ち付け迄は
実験済みです。一度面接でもとお
考えでしたら勝手ですが中日朝刊
の尋ね人の欄に、M七〇生と呼び
かけて下さい。(名古屋M七〇
生V)

○ 長年の「奇ク」の愛読者です。
高木嬢の「女子寮の押え込み」を
興味深く読ませて貰いました。サ
ド的女性でさえ、体力的には一般
男性に劣るものと思えますが、マ
ゾ的傾向の弱々しい男性と、スポ
ーティなS的女性とのレスリング
を、プレイにすれば、何と素晴し
いことでしょう。あらゆるテクニ
ックと、サド女性独特の手腕にて
相手男性を攻め立て、最後に完全
にフォールしてしまふプレイは、
きつときつとS女性M男性の望む
ところですよ。小生は必ず良きパ
トナーとなって、刺激あるプレイ
を演じます。尚、阪神地区に在住
のサド女性の方、あらゆるプレイ
に、お一人でもチームでも応じま
す。連絡は封書にて編集部に願
います。(大阪八津島夕起男V)

器になり(小用だけ)、下着のよ
れものを一切洗濯し、お食事の
仕度をし、裸身に首輪をつけ、柱
に一日中クサリにつなかれ、女主

人様がお帰りになると、犬は昨夜
のお仕置など一切忘れ、尻を振り
クサリをチギれんばかりに、引ッ
張り、お勤めからお帰りの女王の

おほめをいただこうと、チンチン
をし、お食事中はおこぼれを貰う
ため、舌の御奉仕でその切ない生
命をもやすでしよう。一日御使用

〔代理部新版分譲品一覽〕

全裸 脚拳 姿態 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	全裸 アグラ縛り 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	全裸 屈伸縛り 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	六尺 鞭の変形姿態 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	蹲踞と拍手 大手札二枚一組 略号 二〇〇円 長野良子	鬼面と接吻する 大手札二枚一組 略号 二〇〇円 長野良子	強烈 エビ責め 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 松本アサ子	裸身に羞らう 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 松本アサ子	女 賊 捕縛 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子	女 賊 処刑 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子
全裸 緊縛 姿態 開陳 大手札四枚一組 略号 四〇〇円 遠藤百合子	鼻をいたぶる 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 遠藤百合子	浣腸をする女 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 遠藤百合子	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 遠藤百合子	月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 遠藤百合子	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 三〇〇円 愛川悦子、田中芳代	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 三〇〇円 愛川悦子、田中芳代	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 七〇〇円 絹川文代	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 東浦ひかる
妻んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 五〇〇円 東浦ひかる	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子	淫らな長髪の流れ 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	ふり乱す長髪の流れ 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 長野良子	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 関谷富佐子	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 関谷富佐子	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 三〇〇円 大塚啓子

のパンティを口でおめがし、きままな女主人様のあらゆるいたづらに犬は只尻を振り、明日のお勤めにおそなえになる高貴なる御主人（女王）の安眠をさまたげる事なく、首のクサリを、静かにひきづり足元にうづくまり、お休みの一時をお身足の先迄、舌でやさしくおなぐさめいたし、犬はその裸身をつつむなにもものなくてあわれ女主人の足の隅の板の間にかりの寝につくのです。金は一銭もかからず、しかも、お住居がキレイになり、お友達（女性）に恰好のアクセサリー、此の様な犬を飼育したいとお思いになる、東京にお住いの美しい（心やさしい？）女性の方々、バーなどにお勤めの方、御主人様は複数の方が飼育される犬にとっては無上の光榮です。東京の三原康子さん、御姉妹外、皆様、どうか、こんなに忠実で珍しい血統書付の犬を飼いたいお方は毎日曜日渋谷駅ハチ公まん前に午後十二時から一時迄三十分間、右手にハンカチ（白）左手に女性自身をお持ちになってお待ち下さい。犬は必ず黄色のスポーツシャツを着てズボンは茶色で御主人様にこう尋ねます。「貴女が飼主ですか」と。川田幸子さんもどうぞ

お願いいたします。（東京人犬仁成造）

東雪枝様私を女王様の豚として採用して頂けませんでしょうか。今迄は異国の方の豚として奉仕致して参りましたが、此の度本国に帰られました。絶対服従で命令に違反したと云って体罰が加えられ口にパンティを押し込まれたり、足蹴にされたり、足なめから始まって答奉仕によるクリーニング浣腸による人間トイレ等豚としての生活に堪えて参りました。忍耐又苦痛に泣いた事はありません。今迄の女王様は体重のある体力の凄じい方でした。それでも豚として最高のプレーを致しました。如何ですか、女王様にお願出来ますならば、幸福を感じます。どんなプレーでもアイデアにも応じます。時間は何時でもよろしいです。駅と日時を指定して下さい。必ず参ります。小生の体重六十キロ、身長一米六十四センチ、年令は三十六歳です。女王様何卒豚として呼びかけて下さい。（東京都世田谷区八清水二丁目）

以前機関誌や同好会誌を心掛けたり、編集部の皆様方の御

苦勞の程推察に余る思いです。八月号も早々にお送り戴きどうも有難うございました。今月号は特に内容が充実しているかと思われま。但し未だ未だ見受けられま。す挿絵と内容のアンバランス、少々残念に思えてなりません。一例を申し上げますと黒木節夫氏の、「危険な実験」なかなかの細かな描写に満足しましたものの、序文の美少女・美少年がどうもイメージを壊され感心致しません。美少年は醜男でしかもメスが平刃庖丁では……。私は挿絵の基本課をある美術学園にて終了致しましたが挿絵の難しさと同情致したくも、もう少し原文に忠実であって戴き度い。さて近号私の好きなクリスターマニアの活躍が余り見受けられませんが、アイディアが不足勝の様ですが、はなはだ心配でなりません。ご健在の事と思ひますが同好の士よ、大いにマニアを喜ばせて、下さる様陰乍ら念じて居ります。もう一言述べさせて戴きますと、最近元氣の良しい女王様達のご活躍に頼もしく思っておりますが、どうも私の趣味に合いません。クリスターマニアであると共に熱烈なSMファンであります私の期待は四六時中感ず

「今月の新版」

写真の中に悶える

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子、略号（けよ）

貴写真、縛り写真の中に悶えて全裸のまま悶える大塚啓子の縛られポーズ。きりきりと厳しく縛しめられた苦痛の表情は、最近益々円熟してきた同嬢の真に迫った素晴らしいもの。その姿態と表情はきつとSマニアの琴線に触れることでしょう。

写真に埋れた女

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚啓子、略号（けお）

前集と同じくこれ又一糸まとわぬ大塚啓子嬢が、前集は苦痛の表情を主とした対して、これは哀婉の肢体を中心として、責写真の中に縛られた女の感情を描き出しました。今月発表のこの二集は、特にライトの配光を変えて、写真としての効果を発揮することに努めました。

る屈辱よりも、プレイの時間のみ屈辱にまみれ歓喜する時、それが最大の喜びです。ノーマルな理性の活動に対し一瞬感ずる理性の抵抗、己れの理性を誇り、社会的地位を常に感じている人間が一瞬それ等を投げ出して得るそれ等に対する懸念、そして屈辱、唯空想す

るのみで終る空虚さに心の奥で日夜、その日の訪ずれん事を願っているのです。横浜市の和田様是非お会い致し度いと思います。弱冠二十三歳の会社員です。身長が一六四である外は自分に大いに自信を持っております。一度お会いしてお話し致せばプレイに関し私を信用して戴けるものと信じております。尚都内にお住いのS・M・クリスターマニアの方々、是非勇気を出して下さい。大阪勢の女性の勇しさを、羨しく思っております。東京の山辺まゆみ様、山越民子様是非御一報下さい。貴重な人生の一頁を同好の結束を固め交歓しようではありませんか、全くフエアでプレイする事は保証致します。こ田様、山辺様、山越様、吉

報をお待ち致し居ります。(東京都八安達雄竜)

○

暑さ一段と厳しき折柄編集部の方の御苦労、誠に感謝に堪えぬところでございます。最近、事情があり、漸く貴誌を見ることなく過ぎてまいりましたが、相変らぬ御努力により増々素晴らしいものが、出来上っているものと思えます。一つ所感をのべさせて頂きませんが、私達、このような性向を持つものは、常に自分が社会の一員たること、そして、あくまでも一個の人間であることを忘れてはならぬと思います。そして、現在、我々の中の幾人かは、まったく人間から駆け離れ、社会通念を越え社会に害を与えるものと化しています。

木村洋子 完全逆さ吊りフォト 分譲

大中判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

樟の枝にとりつけた滑車に、綿ロープをきりきりと巻きつけ、引き上げられた木村洋子は、両足を上に頭を下にした完全な逆さ吊りだ。足先が滑車につくと、頭から地面まで一米はあいた。引き縄を樹の幹に止めると、逆さ吊りになった女体は、一本の縄を中心として、ゆっくりと回転を続ける。

るのではないのでしょうか。私は貴誌編集部の方々が、なさらないければならない仕事に、これらの傾向にある人を戒め、防いでいくことが必要なのだと思います。例えば毎月の初めに、巻頭言とでもして、我々の進むべき道を論じ合うべきではないでしょうか。貴誌が一般に認められ、我々の行為が、社会通念的に、認められるようになる為には、これらの努力が必要だと思えます。私は「奇ク」が不健全なものとは思いませんが、誰が見ても真剣に取り組む姿として受け取れ、中途半端な考えの人に再考をうながすとともに、ふざけている人に対しては、無言のうちに離遠なるものにするような、そういうものにしていただきたいと思います。私は今後さらに「奇ク」が発展し、永遠なるものになることを願っているものです。その次に、奇ク愛読者が実際に会って話しが出来る場所、組織が欲しいことです。最も心配なのは、不真面目な人が来たり、秘密がバレたりすることでしょう。これらのものを除く為には、かなり思い切った策が必要であると思えます。例えば、まず、会員になりたいと思うものは、編集部連絡し、自

己紹介的なものをする。勿論文面でよいと思う。それに対し、地方別に、編集部から、誰かに御足労願ひ、編集部より「どこどこに来るように」という通知をうける。来て下さった部の方が直接私達を尋問なさってこれでよしと判断されるものだけに、会員たることを許し、目印のバッジなり、合言葉なりを教える。その編集部の方に対しては、皆で金を出し合えばいいと思う。いかがなものでしょう。そうすれば、バスや電車の中でもバッジを見つけて、親しく話しかけることが出来たりするのはないでしょうか。でも、これでもうまいかないこともあります。これが「奇ク」のバッジだなどと広まってしまう可能性は充分ですから。でも、このようなところは、考えていけばうまくいくのではないのでしょうか。どうか、これらのことが実現されますように。これから、気がついたことを、お知らせしたいと思えます。(東京都練馬区八向井生)

○ 愛読者の皆様へ、僕は「奇ク」ファンの二十一歳の学生、奇クに出てくるものなら、何でも興味を持っています。女性に責め

られ、又、女性を責めること、洗腸プレイ、その他、なんでも興味を感じています。それに、一つお願いがあるのですが――、どうか、東京、或いはその近辺にお住まいの女性の方で、数は少ないのですが、奇クを預ってほしいのですが、二十冊程度です、場合によっては、差し上げてもらおうです。住所、氏名は編集部にあります。封筒の裏には、あなたの名前を書かずに、中の便りの中に書いておいて下さい。そして、待ち合わせの場所、日時をお知らせ下さい。こちらの都合の悪い場合には、改めて、返事を差し上げます。手のこんだこととお思いますが、なるかもしれませんが、やはり、我々にとって、秘密ということが今の段階では必要なのです。お便りをお待ちしています。僕は、一七五センチ、七〇キロと、ガッチリした体つきの方であり、顔も十人並であると思っています。僕達にとって、友達を得ることは、本当にむづかしいことです。それだけに、友達が欲しくてたまらないのです。お互いの性向を語り合い、新しいプレイを考え出し、自分達が、これからいかなる道を進むべき

かなのかを、一緒に話すことが出来たら――、僕の考えるプレイは、あくまでもプレイであって、それも肉体的苦痛はある程度まで、精神的苦痛を与え、与えられるものを好みます。真面目な方、どんなか友達になって下さい、心から――。
(東京△泰▽)

東雪枝女王様。奇ク誌記載の御主人様の素晴らしい玉章を拝読致し、思わず日ごろのもやもやがふつとんで、奴隷、家畜、道具に御使用して戴ける事を考えただけで身体はしびれ、狂喜感激しております。自分は生来お美しいお方に情容赦なく凌辱され、さげすまれ軽蔑され醜態と薫る女王様の御神水の飛沫を浴びせかけられる時、随喜の涙にむせびつつ颯爽とした御英姿を伏し拝み、素晴らしい御足の芳香を嗅ぎ舐めさせて戴き、尊くも畏れおおい御臀部で、奴隷の醜い顔を踏み躪って戴き、人格誇りの一片すら残さないまで剥ぎとられ、賤しい蛆虫として弄ばされたい悲願にとり憑かれて居る哀れな奴で御座います。女王様、決して、冗談や出鱈目を申し立てるのでは御座いません。いくらさげすまれても、嘔われても真剣な

「今月の新版分譲品」

待望の女相撲

女斗美

モデル……木村 啓子

玉田美佐子対大塚啓子の第一回女相撲と女斗美の写真を発表いたしましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き、且つ御意見御批判を賜り厚く感謝しております。ここに、それらの御意見を参考にして第二回の作品を作成の上分譲品として発表いたします。

女相撲四十八手

その一

大手札六枚一組 八〇〇円

略号(すは)

雲斎の相撲権を着けた二人の若い女性が、蹲踞の姿勢から、互いに上手下手まわし充分にとり合って四つに組んで、下手投げ、上手投げ、外掛けと力のかぎりをつくして術をかけようとするとところを次々とキャッチした動きのある連続フット。但しフラッシュやストロボを使用せず、動感を持たせるためフラッド・ランプ数灯使用によるスピード・シャッターを用いました。

女相撲四十八手

その二

大手札六枚一組 八〇〇円

略号(すむ)

(その一)に引続いて、手四つの争や吊り出し、強烈な上手出し投げなどの術を掛ける瞬間瞬間をキャッチした動感と力量の溢れる場面の中で、ポーズの素晴らしいものばかりを選び出しました。同じ術の中でも、以上の点に欠けたものは惜しげもなくオミットして数倍の不適格品を出しました。

黒禪対白禪女斗美

女闘立術の応酬

大手札六枚一組 八〇〇円

略号(すち)

黒禪と白禪の二人の若い女が、何のためらいもなく必死の女斗を展開する。立ったままの互いの首絞め、一本背負い、激しい首投げ腰の入った背負い投げなど、遠慮会釈なく、相手を好き放題に攻撃させて、その中できまり手の素晴らしいものだけを選びました。

立術の攻撃場面

大手札六枚一組 八〇〇円

略号(すた)

テレビに於ける大のプロレス・ファンであるという二人が、ここ

願いなのです。決して途中で弱音を上げませんから、奴隷の望みをお咎めなく、お汲み取りの上、御自身の享樂的生活、お美しさを増す為に必要な道具、玩具としてお氣のまま如何ようにも御使用下さいませ。かかる没常識、没人格の奴です。少しも対人意識（遠慮、踏い、羞恥心）なさることなく大胆かつ手加減なく恣いままに御使用下さい。女王様の御命令は、神の声として絶対に服従致します。決して女王様にお腹立ちをさせる様な勿体ない事は致しません。万が一にも、女王様に対し家畜以上の狎々しい態度、言葉遣いをしたり、奉仕に、お氣にめさぬことをやった時は、お氣のすむ様なさいまして決して否応申しません。どうぞ女王様、煩らわしい奴だと御咎めなく、家畜の念願を実現して、飼ってやって下さいませ、お願い申し上げます。（東京都京橋局区内八秀崎利幸）

貴誌8月号買いましたが、9月号は書店で見た処、切腹マニヤとして余りパツとせぬ様なので買うのを控えました。9月号は奇譚クラブの題字がはっきりせず損な表紙配色です。8月号の感想を述べ

ますと、巻頭口絵に切腹物がなく物足りない感じがです。「妖異女斗美八景」及び、「女学生の生体解剖」等一部に小説の内容と挿絵の異なるものがありますが、とても変な感じです。「十三人の女死刑囚」や「女学生の生体解剖」で全裸となつてゐるのが、腰に布をつけてゐるのは風紀上やむを得ぬとしても「妖異女斗美八景」は中国風の服装でなく、一人は明らかに西洋風ですし、「女学生の生体解剖」では男の方は、美少年となつてゐるのに、まるでゴリラの様に醜惡な顔です。「十三人の女死刑囚」は店頭で題名を見た時は、大して期待していませんでしたが、仲々面白いものでした。ナタリーが指名したビキニを引裂くところなど迫力があります。しかし挿絵が貧弱でいけません。文章をもう少し詳しくして挿絵を豊富につけたら、と思います。9月号の「十三人の女死刑囚」は大した事ない様です。9月号の切腹小説は小姓らしいですが、やはり女性でなくては感じが出ません。それから、「奇クサロン」の紫刷りは、字は兎も角、写真版の絵は大変見づらい様です。黒刷りが良いと思ひます。又口絵はグラビヤ頁の末尾に

を先途と、互いに相手をプロレスの決め術でフォールしようと争うところを、次々とシャッターをきってゆきました。この写真を撮るときは実際に自由に相手を攻撃させましたので、カメラマンの足の上に二人が重つて転がってくることも度々でした。

寝業の女レス

大手札六枚一組 八〇〇円
略号（すほ）

黒輝と白輝のあられもない裸身の二人が、組んずはぐれつゝの女だてらの取っ組み合い。四肢から胸

移して関連文を「サロン」の冒頭に持つてくると参照しながら読めると思ひます。（北海道八桐原紫門）

初めておたより致します。小生は二十二才になる生れながらのマゾ青年です。長年女王様の出現にあこがれていました。女王様に縛られたり、人間犬として調教せられるのを想像するだけでも胸がドキドキ致します。絶えず主導権をにぎり、大の男を犬馬の如く酷使する女性の方、広い屋敷内で奴隷の如く日常の雑事に使用したい人、これらの女性の方が、自分の目の前に現れてくる日を心から望

女闘連続場面

大手札九枚一組 一〇〇〇円
略号（すく）

二人の輝一本の女性が互いに立って組み合い、激しい投げ業の応酬から、やがて力勝った方の投げがきまった瞬間。それからますます寝業にうつり、どちらも自分が優位に立とうと懸命の奮闘。遂に一人が押さえ込まれるまでの、連続

む。尚当方は五尺三寸、五十キロの非力な男性。女王様には絶対忠実で秘密は死守します。（群馬県八赤城晴男）

先日下呂温泉旅行中旅館に於てニュースの時間にて悪書追放の中に奇クも含まれておるとか心痛致しております。本日も書店に立寄り八月号奇クを見ました所、読者通信にも批評少ないのは大多数の読者が満足されていると思われる長篇SM小説「宇宙のどこかで」が掲載されず、少からず失望貴誌も定価値上された機会でも有り三十八年七月号の編集者論の様に頁数を増加されたく存じます。此の

様に不掲載月も有りますので読者と致しましては、御社に対し長期購読の予約が出来ない怨が有りま

す。九月号よりは確実に掲載御願

い致します。文中挿絵少なく幼稚

で、なんとかならんものでしょう

か。佐治麻造氏、日本奴隷娘は如

何になるのでしょうか。期待する

事大であります。「花と蛇」単行

本発刊御慶び申上ると共に此の

「宇宙のどこかで」も豪華単行本

として発刊される様切に御願申

上げる次第です。モデル嬢本誌一

番のM女性水本、美麗梨花、新星

五月三人は御誌グラビア女性とし

ても抜群で分譲写真として現在発

売以外のS写真一枚でも多く分譲

されば幸と存じます。厚顔にも読

者一同に代り編集部に御注文致し

ます。何日かサロン欄に有りました

様に奇クラブ創立案大賛成で、

私としては入会金一人五万円より

十万円程度で安価な土地を購入。

まずクラブハウスを建築、我々同

好者の憩の家として発足する日が

一日も早からん事を祈り貴誌の発

展大なる事を期待致し、編集者の

箕田氏、あつかましい注文で有り

ますが私の希望が一つでも叶えら

れます様愚文乱筆失礼。(大阪市

北区八佐藤明夫V)

○ 毎号鼻責めについて貴重な記録

を掲載して下さる編集部の方々の

御配慮有難感謝致して居ります。

でも此の上の御願いには梨花嬢其

他新進スターのそれを是非御願

致します。以前梨花嬢の印象深い

鼻責めグラビアを発表なさってセ

ンセーションを巻きおこした頃と

違つて、色々な圧迫を避けながら

発表せざるを得ない昨今では、御

苦勞の程もさる事ながら雑誌上で

御無理なれば分譲写真なりとも新

版作品を御願ひ致します。又、眼

球、歯牙検査などは未開拓に等し

い分野で御座います。「無理を云

うナ」と云う御願をなさらないで

切なる愛好者の希望をかなえて下

さいませ。近頃は鼻責ファンの御

投書もメッキリ影をひそめて本

に寂しさを感じます。鼻責写真の

交換なども、望ましいのですけれ

ど。(東京都八Y・K生V)

○ 七月号は、たしかに三百円に値

上げただけの手応えがありまし

た。いくらか増頁になったらしい

ですね。われわれ愛読者にとって

は、なによりも嬉しいことです

これでは貴社の赤字をうめるため

の値上げも、依然として貴社に赤

字をもたらすのではないでしょう

か。三百円の他誌の、値上げして

も少しも変りばえがせず、それが

編集者たちのフトコロを温かくす

るだけの値上げにくらべて、貴社

はなんと良心的なのでしょう。一

銭でももうけようというがめつい

世の中に、実に貴社にうるわしい

存在です。しかも大阪商人なのに

……。いや、これは失礼。とにかく

く、七月号によって、百パーセン

ト、貴社を信頼する気になりました

た。そしてただただ貴社の編集者

の方々の御健康をいのります。ま

すますわれわれの心のモヤモヤを

洗いおとして下さるようならば

しい雑誌をおつくり下さい。七月

号で一番心のうたれたフォトは、

第二グラビアの「美しい鼻の荒療

治」でした。やはり絹川さんが貴

社のモデルの中では一番ですね。

絹川さんに結婚を申込みたくなり

ました。ここで一つ提案がありま

す。毎月二頁位、読者のフォトの

ページをもうけてはいかがです

か。新鮮な味がいいと思います

が。(東京都八文川常夫V)

○ 立秋の候、吹く風もめっきり秋

めいてまいりました今日此の頃、

編集部の皆様には、益々御壮健

のことに存じます。私方以前より

十数年来の奇クの愛読者です。と

ころで今日お便りしましたのは、

私方所有している貴誌を処分しよ

うと思ったのですが、捨てるのも

惜しく、この際同じ奇クの愛読者

仲間にお譲りしたいと思ひます。

つきましては、何かとお忙しいで

しょうが、誰か愛読者でその様な

御希望の方(女性に限る)居られ

ましたら、御知らせ下さいませ

か。所有号。27年12。28年4、7

9、10、11、12。29年1から12ま

で。30年1、2、3、4、5。31

年4。32年8。33年8。34年5、

9。35年2、5、6、7、9、10

11、12。36年3、5、7、10、12

。37年1から12まで。38年2、3

5、7、8、9、10、11、12。39

年1、4。以上です。(大阪市八

住吉留吉V)

○ 編集部の皆様、お元気で御活躍

の事と存じます。私はKK誌を愛

読しはじめまして二年程になりま

すが、地方都市のため貴誌の入手

もなかなか困難です。都会の方が

うらやましい限りです。さて私は

現在、SM両方の傾向がある様で

す。ですから、縛り、鞭打ち等に

もS的にM的にもお相手できる

と思います。近隣で同好の女性の方がおられましたら、御一報を待ち致しております。(香川県高松市八一愛読者徳野正)

愛する奇クの発展は全く吾が事のように喜んで居ります。早速私達マゾ派の願いを聞きとどけていただき感謝の念にたえません。マゾフォト再開第一作に続き第二作の発表を七月号で拝見、取急ぎ新作を注文致します。前作(ませ)が今迄の中で最高にリアルさが感じられ一作毎に私達マニアの描く夢の構図に近づきつつある現実を大いに期待し此の申込を書きながら一日千秋の思いで入手の日を待ち望んでおります。先日地方の町で閑のつれずれに映画を見に行きましたが、此の中で、国映プロ作の「激しい女たち」と言う映画を見はからずも此の映画の中で、私の胸を騒がせる場面がありました。即ち女たち「ズベ公グループ」を裏切った男を、寄ってたかってリソチする状景です。仰向けに押し倒された男の胸の上に、股を大きく拡げてまたがり股責めをするシーンが大写しに出、此の間、他の女達が色々と責め、最後は失心した男が大の字にのびているシーン

です。あばれる様子など、動きのある写真だけに大変リアルでした。此の様な場面ばかりのマニア向専門の映画が作られれば良いかなーと嘆息しながら映画館を出ました。(松本市本町八雪本生)

○ 先便の医学書の抄訳をつけ加えた通信が、没? になりましたので、要件のみを記します。吉本様つまらぬ小品に関心をもって下さってありがとうございます。既婚者としての僕へのアドバイス、本当に、心から嬉しく拝見致しました。また、貴女方夫婦のくわしいプレイのご様子、横浜の木村昌子様によく似ていらっしやいます。そのうち折を見て、適当にアレンジして、誌上に公開させて頂く心算故、差支えなければ連絡先お知らせ下さい。次に吉村英子様、ずっと以前の投稿が、七月号で掲載されましたので、ご心配おかけしましたが、お手紙二通とも、無事落手しておりますのでご安心下さい。御指定の日、局に参りましたが、その後届いて居りませんので、あとお手紙頂けますならば、前と同じく十日と二十日にお願いします。終りになりましたけど、編集部の皆様にお願ひ。これは没になさらず、

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。

れば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御送金は、現金書留(封筒は一枚三円にて局が売っています)小為替、定額小為替(小額のときは御便利です)振替(用紙は郵便局にあります)切手代用(十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないで送り下さい)等を御利用願います。

○御注文の宛先は大坂阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。(私書函番号を明記するように依頼されましたので右の通りお願い致します)

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フォトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○尚、御注文の際、もし代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一分譲中止、品切などのとき迅速に処理できて助かります。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます。但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で「新版案内」として発表しております。又、古くなりましものは漸次打ち切りにします。

○御注文の宛先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それも忘れなくお書き添え願います。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りになりたいた郵便局名(特定局でも結構)とお名前(仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい)とを当方へ御連絡下さい。

○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

○御注文の際、お受取りになりたいた郵便局名(特定局でも結構)とお名前(仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい)とを当方へ御連絡下さい。

○金額にして五千円以上のフォトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フォトのサービス品を贈呈させていただきます。

大至急載せて下さいませんか。
(小林薫)

初めてお便りします。会社の夏季休暇をのんびり過ごそうと思いい帰郷しています。そしてこちらで書店を歩いておりまして見つけたのが奇クでございます。一度ハンサムな青年に、手も足もが感じがらめに縛りあげられ、口には一杯の猿ぐつわをはめられ、身動き一つ出来ないようにされてみたいと思っていました矢先、この本を見つけた私のうれしさは、言いようもありません。芦屋附近の方でどなたか私を思いきり泣かせて下さる方いらっしやいませんか。でも全裸になったり肌に傷のつくようなことはいやです。申しおくれましたが、私は尼崎の大手メーカーに勤めるB.G.勤めて三年になる者です。芦屋のアパートに一人住んでおります。私の身体は、身長一五九、バスト八三、ウエスト五三、ヒップ八三・五で高校時代某化粧品会社のミス・コンクールに出て準ミスに選ばれたことがあります。どうか二十五歳から三十五歳までのハンサムで優しい男性の方、私をいじめて下さい。只今は播州の田舎へ帰っていますが、

八月の終りには芦屋へ帰ります。御都合を本誌読者通信欄にておまちしております。最近の写真一枚同封しておきます。(芦屋市八小島寿子V22歳)

暑さきびしき折柄、みなさまお元気にお暮しですか。私は物心ついた時から人に云えない思いで悩んでまいりました。御誌を拝見しだしてから、早くも数年たちましたが、お便りをするのは今度が初めてです。私は大阪市内の或る中小企業に勤める三十三歳になる母と二人暮らしの一人娘です。私の悩みといえますのは、異性の方に縛られたり、いじめられたりということなんです。こんな私と交際して下さる方って、いらっしやらないでしょう。貴方のお好きなように飼育されたいと思います。好きな方のためなら、どんな恥しいことでもいたしますわ。さらし者にされてもかまいません。貴方のお好みのアイデアで、私を教育して下さい。私は身も心も捧げてお好きになようになります。どんなきびしいいじめ方やしつけでも、貴方の手でなさるのでしたら、私は喜んでお受けします。私は余り経験がございませんので、今のうちでし

たら、どのようにでも飼育下さってかまいません。やさしい言葉でなくきつい言葉で命令して下さい。私はどんなことでも従います。貴方のアイデア誌上でお知らせ願います。私の連絡場所は追ってお知らせいたします。(大阪市旭区大宮町八中川芳子V)

7・8・9号及び臨時増刊「花と蛇」拝見しました。前3冊は従来に比べ、グラビヤが増頁され、「乳、臍、臀部を隠蔽」しなくなり、四馬孝の挿絵が載るようになりました。7月号のグラビヤは縄の非情さをリアルに表現した作品が成功しています。その意味では「麻縄と荒縄のタッチ」の二段が圧巻です。非情な麻縄にくびれる胴部の柔肌に乱れかかる黒髪が素晴らしい効果をあげ見る者を蕩然とさせます。同様に「手摺に責められる美女」が美しい。殊に右頁は乳房と瞳を生かし梨花さんの美しさを充分表しています。他に縄を扱ったものとして大塚さんの「縄に喘ぐ黒い下着」「布に嵌口された表情」スプレイを使って効果をあげた梨花さんの「受縄の愛情と法悦境」が良かった。同じ縛りでも「カメラに囲れた麗人」は

ムード派で麗人、絹川さんを美しく捉えている。「手足並行吊りの表情変化」は奇クの「全身露出宣言」でしょうか。「新着外国SMフォト」は迫力がありません。口絵は四馬孝氏の「柔肌をくびる」一点をとります。これは表情・腕の美しさに残酷味があります。他の作品は上の要素を欠くマンネリです。記事は、「花と蛇」は別として近藤一氏の二作品、「悦虐の美女を懐く」の主張に、「可愛い啓子を求めて」の夢に共感しました。「奇クサロン」の松永景子さん。同性とは云えこんなに可愛いS子さんを縛れるあなたを羨しく思います。最後に裏表紙の四馬孝の作品は口絵にない斬新な美があります。8月号のグラビヤでは一連の「貞操帯」ものが目を惹きました。が折角のアイデアも薄手な感じの貞操帯、ゆるい嵌口具と手錠のかけかた、それに白布の前で立っているだけのルーズでは生かされません。手錠も手首ばかりでなく、二の腕の肉に食い込むようにかけて下さい。この作品群の中では最後の頁の後向きのが好きです。後につながれた二本の腕、右腕から少しのぞかせた乳房、背から腰、そして尻に流れる美しい

線を見せて呉れます。第一グラビヤでは、「美しき晒し人形」が上半身に女の哀れさが感じられて良い、下半身のもたつきを避けるに着衣は着物だけで良かったろう。他に「荒縄に責められる女」が残酷味を出している。口絵の四馬孝氏の作品は、美しい絵だが責が甘い。最近被害者の顔が加賀まり子に似てきたようです。第2グラビヤでは、梨花さんの「緊縛による脚の表情美」。「責めに陶酔する一瞬間」が良い。前者は正に「脚の表情美」だし後者上段の太股と縄の間から覗かせた乳房の美しさ。下段の表情の素晴らしさ、顎から胸元への線の美しさ、形の良い乳房、梨花さんだけの良さです。「新着外国SMフォト」は実感に乏しい。これだけのモデルを辻村氏か塚本氏に使わせれば傑作を生み出すことでしょう。「板の間に縛られたワン・ポーズ」の二作品、各々良いものです。サジスチック・ストーリーと題する「貞女」はこの種の在来のもものと全く同じで設定・責に新味がなく致命的な欠陥は美しさを全然表現していない

次号(十一月号)は九月二十五日に発売いたします

ことです。数少ないS小説の短編に「花と蛇」のように秀れた水準の作品を望みます。近藤一氏の「KKグラビア悦虐フォト回顧」には二作品だけが再録されていますが、今後は出来るだけ多く再録されることを願います。9月号では「マゾヒスチンのポートとレート」。「全身緊縛の表と裏の表情」が弾力的な肉感を見せて楽しい作品。「肌に伝う小蛇の妖美四態」は梨花さんだけで美しい、小蛇はむしろ邪魔。「縄に狂う美女」は濃艶な姿にこちらが狂っちゃいそう。パンティは不要。「蒲団蒸しの構想」はアイデア倒れ。口絵は「革紐の嵌口」が残酷。凄いの嵌口具ばかりでなく、このまま逆さに吊られたらどうなるのかと思う。表情が良く肩や首の線も美しい。「鳴け鳴け蟬」も良い。既に打たれた跡があるのが嬉しい。もっと衣類も剥ぎ、腕や首や尻にも鞭跡をつけて下さい。他に「俗世解脱の洗礼」が楽しめる作品。第2グラビヤ、新人木村洋子さんの今後に期待します。「35ミリ映画のワンカット」は失敗。影の少な

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評！注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献

直接お申込を 定価一部五〇〇円(送共) 略号(文献)

いフィルム一ぱいにモデルの写っているのを使用すべきでした。「マスクをした女」の栗本ミチさんは柔らかい線で強く縛れば縄が体にめりこんで見えなくなるような人。縄の见えない、緊縛美を見た。「花と蛇」が終わりました。長い間、ありがとうございます。10月号から「花と蛇」を拝見できないことは淋しいかぎりです。続篇を期待しております。「花と蛇」を掲載中、多くの読者が静子夫人達を責めるアイデアを発表されました。そこで読者が作る責小説と云うのはどうでしょう。発端を発表し続きを募集するのです。応募された作品の一つを選び隔月に発表する。全ゆる職業や経歴を有する読者の応募作は変化があり面白いものになると思います。臨時増刊「花と蛇」一気に読みました。四美女に対する悪辣な凌辱を主題とするこの作品は、ロボットがロボットを責めているような殺

風景な責小説が多いなかで、人間味を取り戻しただけでなく、それ以上の水水しい情感を読む者に与えます。ここに羞恥責め小説の金塔字が打ち立てられたのです。更に四馬孝の流麗な挿絵・口絵が錦上添花を添えてSの私にとって生涯手離せないものになっています。欲を云えば写真も口絵のように小説に合せてモデルを定め、各場面を撮影してほしかった。今後本誌で「花と蛇」フォト・シリーズと云ったものを企画されんことを希望します。7月号の誌上で「今後発行部数を漸次減らしてゆく」とのこと。良いと思います。と同時に頁数も減してはどうでしょうか。内容の充実と云うことは量の増大と比例しないと思います。その上でカラー頁の新設、挿絵の改善、(何の関連性もなく四馬氏の作品が挿絵に使われていたのは改善とは云えませんが、新人を養成すべきでしょう)をされたら如何でしょう。A39・8・6V(佐渡耕作)

五十万円懸賞原稿募集

先月号で五十万円懸賞の原稿を募集しましたところ、いち早く数篇の応募原稿が送稿されてまいりましたが、残念ながら入選作品として掲載するに耐えるものは見当りませんでした。引続いて募集を継続いたします故、秋の増刊にふさわしい佳作をお寄せ下さるようお願いいたします。

賞　金

一	席	各	拾	万	円	一	名
二	席	各	五	万	円	二	名
三	席	各	参	万	円	五	名
四	席	各	壹	万	円	十	名
五	席	各	五	千	円	十	名

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

規　定

- 一、本誌の読者に提供するに適當したS・Mを中心とした創作、小説などのフィクション。告白、体験、手記、或は論説、意見など形式は問いません。S・Mの他、フェチ切腹、浣腸その他特異な趣向のものも大いに歡迎いたします。
- 一、すべて未発表の自作に限ります。
- 一、枚数は原稿用紙五十枚以上のこと。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は翌月号に発表の上、賞金を呈します。
- 一、応募原稿には「懸賞作品」と赤エンピツにて肩書きして下さい。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

△読者通信△

稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△奇クサロン△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の葉 ☆

- 一月分(1冊) 三〇〇円△送共△
- 三月分(3冊) 九〇〇円△送共△
- 半年分(6冊) 一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

十月号

(第十八巻第十一号)
(通刊第一九五号)

昭和三十九年九月二十日 印刷
昭和三十九年十月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。